

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(59)

— 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ —

たけ
武 A・B・C 遺跡

鹿児島市武一丁目

とり こえ びら まつ が さこ
鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡

出水市境町・出水市武本

2003年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



西鹿児島駅と武遺跡

序 文

本報告書は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って、県教育委員会が平成5年度に武遺跡を、平成8年度に鳥越平遺跡と松ヶ迫遺跡について埋蔵文化財の発掘調査を実施した記録です。

九州新幹線建設事業では、平成5年度に西鹿児島駅整備事業が始まり、武遺跡の発掘調査はその事業の一環で開始されました。なお、この発掘調査は、九州新幹線建設関係で最初に実施されたものです。

武遺跡は東西に分かれ、東側は武A・B・C遺跡として調査しました。面積は約4,200㎡あり、縄文時代前期から中期の遺跡で土器や石器などとともに珍しい装飾品である大珠も出土しました。一方、本遺跡を代表する弥生時代終末から古墳時代にかけての集落遺跡には、日向地方に多く発見される花弁状をした住居跡や、球磨地方が中心と考えられる長頸壺に弧状の文様を描く免田式土器が出土し、球磨地方や日向南部を含めた南九州一帯の文化的繋がりを示す資料が得られました。

また、西側は武D遺跡として平成11・12年度に約4,900㎡の発掘調査を実施しました。平成13年度に整理作業を実施し、近世の寺院跡であったため「寿国寺跡」として報告書を刊行しました。

なお、鳥越平遺跡と松ヶ迫遺跡は確認調査の結果、遺跡は存在しませんでした。

本報告書が南九州の歴史研究に寄与し、併せて文化財保護の一役を担うことができれば幸いです。

終わりに、この発掘調査及び報告書作成に協力していただいた日本鉄道建設公団九州新幹線建設局をはじめ関係各位の皆様から心から感謝いたします。

平成15年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

報告書抄録

ふりがな	たけえーびーしーいせき							
書名	武A・B・C遺跡							
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	59							
編著者名	彌 榮 久 志							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4661 鹿児島県国分市上之段1175番地1 TEL0995-48-5811							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査起因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
たけいせき 武遺跡(ABC地点)	かこしましたけ 鹿児島市武 いちちようめ 一丁目	46208	1-205	31° 34' 51"	130° 32' 35"	H5.4.12~ 5.25 H5.5.21~ 7.2 H5.12.6~ H6.2.21 H6.3.9~ 30	4,204	きゅうしゅう 九州 しんかんせん 新幹線 けんせつ 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
武遺跡(ABC地点)	集落 散布地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 明治時代		集石 竪穴住居跡 大型土坑 土坑 ピット 溝		深浦式土器 大平式土器 並木式土器 阿高式土器 成川式土器 土師器・須恵器 陶磁器 石鏃・石斧・ 敲石・凹石・ 石皿・大珠・ 石包丁・砥石		



武遺跡の位置図

例 言

- 1 本報告書は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本報告書に綴った遺跡は、平成5年度に調査した武A・B・C遺跡と平成8年度に調査した鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡の記録である。
- 3 本遺跡は、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局の委託を受けて作成したものである。
- 4 本報告書は、平成14年度の報告書作成として実施したものである。
- 5 遺物番号は時代ごとに付している。
- 6 挿図と図版の遺物番号は、一致する。
- 7 挿図の縮尺は、各図ごとに示している。
- 8 本報告書に記載した高さは、海拔絶対高である。
- 9 本報告書の整理作業は、鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員笑喜ミチ子・竹ノ内礼子・谷山寛子・砂田せつ子・坂元真由美・谷村志乃恵・徳重貴子と彌榮が実施し、執筆・編集は彌榮が行った。
- 10 出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する計画である。

本文目次

武A・B・C遺跡の調査	シ 第11号竪穴住居跡及び
第I章 調査の経過…………… 1	大型土坑5・29…………… 64
第1節 調査に至るまでの経過…………… 1	ス 第12号竪穴住居跡…………… 65
第2節 調査の組織…………… 1	セ 第13号竪穴住居跡及び大型
第3節 調査の経過…………… 2	土坑11・集石土坑・ピット群…………… 67
1 発掘調査…………… 2	ソ 第14・15号竪穴住居跡
2 整理作業…………… 4	及びピット群…………… 76
3 調査全体の経過と成果…………… 4	タ 第16号竪穴住居跡及び
第II章 遺跡の位置と環境…………… 7	土坑33・34…………… 78
第1節 遺跡の位置及び立地…………… 7	チ 第17号竪穴住居跡…………… 80
第2節 周辺遺跡…………… 7	ツ 大型土坑7及びピット群…………… 83
第III章 調査の概要…………… 10	テ 大型土坑8・9・10及びピット群…………… 84
第1節 調査の基本計画…………… 10	ト 第18号竪穴住居跡…………… 86
第2節 遺跡の層序…………… 10	ナ ピット群及び土坑32…………… 88
第3節 遺構と遺物…………… 17	ニ 第19号竪穴住居跡…………… 89
1 縄文時代…………… 17	ヌ 第20号竪穴住居跡及び
(1) 土器…………… 18	土坑35…………… 90
(2) 石器…………… 31	ネ 第21号竪穴住居跡及び大型
2 弥生時代…………… 36	土坑12・土坑36…………… 92
(1) 土器…………… 36	ノ 第22・23号竪穴住居跡及び
(2) 石器…………… 39	土坑36…………… 94
3 古墳時代の遺構と出土遺物…………… 40	ハ 溝1・2・4・5…………… 99
(1) A遺跡(AB-6~11区)…………… 40	ヒ 包含層の出土遺物…………… 127
ア 第1号竪穴住居跡…………… 42	(3) B遺跡(AB-1・2区)…………… 134
イ 第2号竪穴住居跡…………… 43	4 平安時代…………… 139
ウ 土坑群…………… 45	(1) 溝5の出土遺物…………… 139
(2) C遺跡(AB-3~5区)…………… 49	(2) 包含層の遺物…………… 141
ア 第3号竪穴住居跡…………… 49	5 近世…………… 146
イ 第4号竪穴住居跡…………… 49	(1) 井戸跡 (2) 溝3…………… 146
ウ 土坑15・16…………… 49	(3) 出土遺物…………… 146
エ 大型土坑2及び土坑17・18…………… 54	第IV章 まとめ…………… 150
オ 第5号竪穴住居跡…………… 54	第1節 縄文・弥生時代…………… 150
カ 第6号竪穴住居跡…………… 57	第2節 古墳時代…………… 150
キ 第7号竪穴住居跡…………… 57	1 遺構…………… 150
ク 土坑24・25…………… 57	2 遺物…………… 152
ケ 大型土坑4・6及びピット群…………… 57	第3節 平安時代と近世…………… 153
コ 第8号竪穴住居跡及び	鳥越平・松ヶ迫遺跡…………… 229
大型土坑3・土坑28…………… 57	第I章 調査の経過…………… 229
サ 第9・10号竪穴住居跡及び	第II章 鳥越平遺跡の調査…………… 230
土坑26・27・30・ピット群…………… 61	第III章 松ヶ迫遺跡の調査…………… 233

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡…………… 9	第39図 武C遺跡の遺構内出土状況(2) …… 52
第2図 遺跡の基本的層序…………… 10	第40図 第3・4号竪穴住居跡と土坑15・16… 53
第3図 武A・B・Cの調査範囲…………… 11	第41図 第3・4号竪穴住居跡と出土遺物… 54
第4図 武A・B・C遺跡のグリッド…………… 12	第42図 大型土坑2及び土坑17・18と その出土遺物…………… 55
第5図 11～9区の地層…………… 13	第43図 第5号竪穴住居跡とその出土遺物… 56
第6図 7～6区の地層…………… 14	第44図 第6・7号竪穴住居跡及び土坑24・ 25とその出土遺物…………… 58
第7図 5～3区の地層…………… 15	第45図 大型土坑4・6及びピット群と その出土遺物…………… 59
第8図 3～2区の地層…………… 16	第46図 第8号竪穴住居跡及び大型土坑3 土坑28とピット群…………… 60
第9図 集石の位置…………… 17	第47図 第8号竪穴住居跡とピット群の出土 遺物…………… 61
第10図 集石…………… 17	第48図 第9・10号竪穴住居跡及び土坑 26・27・30とピット群…………… 62
第11図 縄文土器(1)…………… 18	第49図 第9号竪穴住居跡の出土遺物… 63
第12図 縄文土器(2)…………… 19	第50図 第10号竪穴住居跡・大型土坑5・ 土坑29の出土遺物…………… 64
第13図 縄文土器(3)…………… 20	第51図 第11号竪穴住居跡の出土遺物… 65
第14図 縄文土器(4)…………… 21	第52図 第12号竪穴住居跡とその出土遺物… 66
第15図 縄文土器(5)…………… 22	第53図 第13号竪穴住居跡及び大型土坑11・ 集石土坑・ピット群…………… 68
第16図 縄文土器(6)…………… 23	第54図 集石のある土坑と住居内土坑の 遺物出土状況…………… 69
第17図 縄文土器(7)…………… 24	第55図 第13号竪穴住居跡の出土遺物(1)… 70
第18図 縄文土器(8)…………… 26	第56図 第13号竪穴住居跡の出土遺物(2)… 71
第19図 縄文土器(9)…………… 27	第57図 大型土坑11の遺物出土状況… 71
第20図 縄文土器(10)…………… 28	第58図 大型土坑11の出土遺物(1)… 72
第21図 縄文土器(11)…………… 29	第59図 大型土坑11の出土遺物(2)… 73
第22図 縄文土器(12)…………… 30	第60図 大型土坑11の出土遺物(3)… 75
第23図 縄文時代の石器(1)…………… 32	第61図 第14・15号竪穴住居跡…………… 77
第24図 縄文時代の石器(2)…………… 33	第62図 第14・15号竪穴住居跡の出土遺物… 78
第25図 縄文時代の石器(3)…………… 34	第63図 第16号竪穴住居跡及び土坑33・34 とその出土遺物(1)…………… 79
第26図 縄文時代の石器(4)大珠…………… 35	第64図 第16号竪穴住居跡の出土遺物(2)… 80
第27図 弥生土器(1)…………… 37	第65図 第17号竪穴住居跡…………… 81
第28図 弥生土器(2)…………… 38	第66図 第17号竪穴住居跡の出土遺物… 82
第29図 弥生時代の石器…………… 39	
第30図 武A遺跡の遺構配置(1)…………… 40	
第31図 武A遺跡の遺構配置(2)…………… 41	
第32図 第1号竪穴住居跡と出土遺物… 42	
第33図 第2号竪穴住居跡と出土遺物… 44	
第34図 第2号竪穴住居跡の出土遺物… 45	
第35図 武A遺跡土坑1～14とその出土遺物… 47	
第36図 武A遺跡の出土遺物…………… 48	
第37図 武C遺跡の遺構配置…………… 50	
第38図 武C遺跡の遺構内出土状況(1)… 51	

第67図	大型土坑7及びピット群とその出土遺物……………	83	第100図	溝4の出土遺物(19) 高坏…	123
第68図	大型土坑8・9・10及びピット群とその出土遺物……………	85	第101図	溝4の出土遺物(20) 高坏…	124
第69図	第18号竪穴住居跡とその出土遺物…	86	第102図	溝4の出土遺物(21) 高坏・蓋……………	125
第70図	ピット群及び土坑32とその出土遺物……………	87	第103図	溝4の出土遺物(22) 手づくね・ふいごの羽口……	126
第71図	第19号竪穴住居跡とその出土遺物…	89	第104図	C遺跡包含層出土遺物(1) 甕……………	128
第72図	第20号竪穴住居跡及び土坑35とその出土遺物……………	91	第105図	C遺跡包含層出土遺物(2) 甕……………	129
第73図	第21号竪穴住居跡及び大型土坑12・土坑36とその出土遺物……………	93	第106図	C遺跡包含層出土遺物(3) 甕……………	130
第74図	大型土坑12・土坑36の出土遺物…	94	第107図	C遺跡包含層出土遺物(4) 壺……………	131
第75図	第22・23号竪穴住居跡と土坑36…	95	第108図	C遺跡包含層出土遺物(5) 壺・高坏・蓋……………	132
第76図	第22号竪穴住居跡の出土遺物..	96	第109図	C遺跡包含層出土遺物(6) 長頸壺・鉢……………	133
第77図	第23号竪穴住居跡の出土遺物..	97	第110図	B遺跡包含層出土遺物(1) 甕……………	135
第78図	大型土坑1と土坑20の出土遺物…	98	第111図	B遺跡包含層出土遺物(2) 甕・壺……………	136
第79図	溝1・2・5……………	100	第112図	B遺跡包含層出土遺物(3) 壺……………	137
第80図	溝4及び大型土坑1と土坑19・20・21並びにその遺物出土状況(1)…	101	第113図	B遺跡包含層出土遺物(4) 小壺・手づくね・鉢・高坏…	138
第81図	溝4とその出土状況(2)……………	102	第114図	溝5の出土遺物(1)……………	140
第82図	溝4の出土遺物(1) 甕……………	105	第115図	溝5の出土遺物(2)……………	141
第83図	溝4の出土遺物(2) 甕……………	106	第116図	平安時代の出土遺物(1)……	142
第84図	溝4の出土遺物(3) 甕……………	107	第117図	平安時代の出土遺物(2)……	143
第85図	溝4の出土遺物(4) 甕……………	108	第118図	平安時代の出土遺物(3)……	144
第86図	溝4の出土遺物(5) 甕……………	109	第119図	平安時代の出土遺物(4)……	145
第87図	溝4の出土遺物(6) 甕……………	110	第120図	近世井戸跡……………	147
第88図	溝4の出土遺物(7) 甕……………	111	第121図	溝3(近世水路跡)……………	148
第89図	溝4の出土遺物(8) 甕……………	112	第122図	近世の出土遺物……………	149
第90図	溝4の出土遺物(9) 甕……………	113	第1図	鳥越平遺跡の位置及び周辺遺跡…	231
第91図	溝4の出土遺物(10) 甕……………	114	第2図	鳥越平遺跡のトレンチ配置……………	232
第92図	溝4の出土遺物(11) 甕……………	115	第3図	松ヶ迫遺跡の位置及び周辺遺跡…	234
第93図	溝4の出土遺物(12) 壺……………	116	第4図	松ヶ迫遺跡の地形とトレンチ配置…	235
第94図	溝4の出土遺物(13) 壺……………	117			
第95図	溝4の出土遺物(14) 壺……………	118			
第96図	溝4の出土遺物(15) 壺……………	119			
第97図	溝4の出土遺物(16) 壺……………	120			
第98図	溝4の出土遺物(17) 壺……………	121			
第99図	溝4の出土遺物(18) 壺・長頸壺・鉢……………	122			

表 目 次

第1表	武遺跡の周辺遺跡一覧……………	8	第7表	縄文時代石器一覧……………	177
第2表	縄文時代土器一覧……………	154	第8表	弥生時代石器一覧……………	178
第3表	弥生時代土器一覧……………	157	第1表	鳥越平遺跡と周辺遺跡の一覧…	230
第4表	古墳時代土器一覧……………	158	第2表	鳥越平遺跡のトレンチ調査…	230
第5表	平安時代土器一覧……………	174	第3表	松ヶ迫遺跡と周辺遺跡一覧…	233
第6表	近世遺物一覧……………	176			

図 版 目 次

図版1	武遺跡調査前遠景・調査開始…	179	図版27	縄文時代の石器(3)……………	205
図版2	武A遺跡の遺物出土状況……………	180	図版28	弥生土器(1)……………	206
図版3	武A遺跡の層位・遺構検出状況…	181	図版29	弥生土器(2)……………	207
図版4	第1・2号竪穴住居跡の検出状況…	182	図版30	弥生時代石器, 第1号竪穴住居跡 の出土遺物……………	208
図版5	井戸跡検出状況……………	183	図版31	第2号竪穴住居跡の出土遺物…	209
図版6	武B遺跡の遺物出土状況……………	184	図版32	第8・15号竪穴住居跡の出土遺物…	210
図版7	武C遺跡の近世溝検出状況……………	185	図版33	第9号竪穴住居跡の出土遺物…	211
図版8	武C遺跡の遺物出土状況……………	186	図版34	第13号竪穴住居跡の出土遺物…	212
図版9	武C遺跡の遺物出土状況……………	187	図版35	第16号竪穴住居跡の出土遺物…	213
図版10	第5・13号竪穴住居跡の検出状況…	188	図版36	第17号竪穴住居跡の出土遺物…	214
図版11	第9・15号竪穴住居跡の検出状況…	189	図版37	第18号竪穴住居跡の出土遺物…	215
図版12	溝4・5検出状況……………	190	図版38	第21号竪穴住居跡, 大型土坑12・ 土坑36の出土遺物……………	216
図版13	武C遺跡の層位・BC遺跡全景…	191	図版39	大型土坑11の出土遺物(1)…	217
図版14	全体・部分遺構空中写真……………	192	図版40	大型土坑11の出土遺物(2), 土坑32, ピットの出土遺物…	218
図版15	部分遺構空中写真……………	193	図版41	第23号竪穴住居跡の出土遺物…	219
図版16	部分遺構空中写真……………	194	図版42	第2・13号竪穴住居跡の出土遺物 溝4の出土遺物……………	220
図版17	発掘体験他遺構・遺物出土状況…	195	図版43	溝4の出土遺物……………	221
図版18	免田式土器・大珠出土状況他と 井戸跡検出状況……………	196	図版44	蓋・免田式土器……………	222
図版19	縄文土器第1～4類……………	197	図版45	土師器・須恵器……………	223
図版20	縄文土器第6・7類……………	198	図版46	近世の出土遺物……………	224
図版21	縄文土器第8類……………	199			
図版22	縄文土器第9・10類……………	200			
図版23	縄文土器第11～14類……………	201			
図版24	縄文土器第5・15類, 底部…	202			
図版25	縄文時代の石器(1)……………	203			
図版26	縄文時代の石器(2)……………	204			

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について、平成4年6月16日鹿児島県教育委員会文化課（当時、平成8年4月以降文化財課）に照会した。平成4年12月、建設予定地内の分布調査が実施され、平成5年1月に詳細分布調査を実施し、鹿児島市武一丁目・二丁目内において武遺跡の所在が確認された。

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と県教育庁文化課は、西鹿児島駅整備事業において武遺跡の取り扱いについて協議を行い、平成5年度に緊急調査を実施することにした。

第 2 節 調査の組織

事業主体者 日本鉄道建設公団九州新幹線建設局
調査主体者 鹿児島県教育委員会
企画調整 鹿児島県教育庁文化財課

平成5年度の発掘調査体制

発掘調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	大久保忠昭
調査企画	〃	次長兼総務課長	水口 俊雄
〃	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
調査担当	〃	文化財主事	彌榮 久志
〃	〃	〃	倉元 良文
〃	〃	〃	鶴田 静彦
〃	〃	〃	堂込 秀人
事務担当	〃	主 査	成尾 雅明
〃	〃	主 事	中村 和代

平成14年度の整理報告書作成体制

整理作業責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
整理作業企画	〃	次長兼総務課長	田中 文雄
〃	〃	調査課長	新東 晃一
〃	〃	課長補佐	立神 次郎
整理作業企画・担当	〃	第二調査係長	彌榮 久志
事務担当	〃	総務係長	前田 昭信
〃	〃	主 査	脇田 清幸
〃	〃	主 事	池 珠美

第3節 調査の経過

平成5年1月26日の詳細分布調査結果を受けて、平成6年6月から始まる西鹿児島駅整備事業区内の発掘調査を鹿児島県教育委員会が調査主体となって緊急調査を実施することとなった。

発掘調査は、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と鹿児島県教育庁文化財課と協議し、西鹿児島駅整備事業の計画上3次に分けて実施することとなった。以下、経過については日誌抄で略述する。

1 発掘調査

第1次の全面調査は、平成5年4月12日～5月25日に武一丁目7番にあたる1,100㎡を実施した。この調査を武A遺跡とした。

日誌抄（第1次）

平成5年4月12日(月)～16日(金)

プレハブ設置。AB-9～11区の表土剥ぎ。AB-10区掘り下げ。

4月19日(月)～23日(金)

AB-9～11区の掘り下げ及び遺物検出。AB-6・7区表土剥ぎ後2層から3層へ掘り下げ。

4月26日(月)～4月30日(木)

AB-6・7区掘り下げ及び遺物検出。

5月6日(木)・7日(金)

AB-6・7のⅡ層遺物取り上げ。Ⅲ層掘り下げ。

5月10日(月)～14日(金)

AB-6～11区Ⅲ層掘り下げ。写真撮影。平板・遺物取り上げ。

5月17日(月)～21日(金)

AB-6～11区Ⅲ層の整地・平板・遺物取り上げ。9・10区に竪穴住居跡検出。6～9区遺構検出。A-10近世井戸検出、掘り下げ終了。A9第2号竪穴住居跡掘り下げ終了。第1号竪穴住居跡実測。コンタ作成。作業員での作業終了。

5月24日(月)・5月25日(火)

第2号竪穴住居跡実測。北側断面実測。溝2断面実測。

第2次の全面調査は、平成5年6月21日～7月2日に武一丁目1番にあたる380㎡を実施した。この調査を武B遺跡とした。

日誌抄（第2次）

6月21日(月)～6月24日(木)

AB-1・2区の矢板打ち及び表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ遺物検出。

6月28日(月)～7月2日(金)

AB-1・2区Ⅱ層掘り下げ。竪穴住居跡らしき遺構を検出するが、最終判断で幅広い包含層の遺物集中部分と判断する。

第3次の全面調査は、平成5年12月6日～平成6年2月21日、3月9日～30日に武一丁目1・2番にあたる2,724㎡を実施した。この調査を武C遺跡とした。

なお、整理報告書作成時点で武一丁目1番の調査した面積384㎡はB遺跡に変更した。よって、武C遺跡は武一丁目2番の地域とした。

日誌抄 (第3次)

平成5年12月6日(月)～12月10日(金)

AB-3～5区の矢板打ち及び表土剥ぎ。一部遺物検出。

12月13日(月)～12月16日(木)

表土剥ぎ。B2・3区溝検出。

12月20日(月)～12月24日(金)・12月27日(月)

表土剥ぎ及びガラ出し。調査面検出。

平成6年1月5日(水)～1月7日(金)

全体の清掃後写真撮影。AB-3・4区近世遺構溝(水田水路)検出。AB-4・5区包含層掘り下げ。

1月10日(月)～1月14日(金)

AB-2・3区掘り下げ。AB-3区水田盤の掘り下げ。AB-4・5区Ⅲ層掘り下げ。

1月18日(火)～21日(金)

水田水路跡実測。AB-3～5区Ⅲ層掘り下げ。AB-5出土状況撮影。B5平板実測後遺物取り上げ。

1月24日(月)～1月27日(木)

AB-3・4区掘り下げ後清掃写真撮影。AB-4・5平板実測後遺物取り上げ。縄文土器出土。

1月31日(月)～2月4日(金)

AB-3～5区のⅢ・Ⅳ層掘り下げ。同区平板実測後遺物取り上げ。

2月7日(月)～2月10日(木)

B-3区公園部表土剥ぎ。AB-3～5区のⅣ層掘り下げ。溝4検出後掘り下げ。

2月14日(月)～2月18日(金)・2月21日(月)

AB-3・5区の遺物取り上げ。AB-3～5区の竪穴住居跡掘り下げ。遺構の写真撮影。

3月1日(火)～3月11日(金)

AB-3～5区の遺構掘り下げ後実測。遺物取り上げ。竪穴住居跡、溝、土坑検出。A-1・2掘り下げ。

3月15日(火)～3月17日(木)

AB-3～5区の遺構掘り下げ後実測。遺物取り上げ。A-1・2区掘り下げ流れ込み。全体清掃後空中写真撮影。

3月22日(火)～3月25日(金)

A-1・2区の掘り下げ。AB-3～5区の遺構実測後遺物取り上げ。集石実測。職員の応援多し。

3月28日(月)～3月30日(水)

AB-3～5区の遺構実測遺物取り上げ。発掘調査終了。

2 整理作業

整理作業は、新幹線工事が優先したため発掘調査が22遺跡全て終了した平成13年度から始めた。計画は、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と協議し、全遺跡を3年間で整理しその都度報告書刊行することとした。なお、最終年度の刊行は平成16年度に実施することとした。

武A・B・C遺跡の整理作業及び報告書作成は平成14年度に計画し、刊行も実施した。

整理作業は作業員7名と下記の通り実施した。

- 4・5月 土器の接合、分類
- 6・7・8月 土器の実測、石器実測・トレース
- 9・10月 土器・遺構トレース、土器拓本
- 11・12月 レイアウト・写真撮影・原稿執筆
- 1月15日 入札
- 2・3月 校正

3 発掘調査全体の経過と成果

九州新幹線鹿児島ルートでの発掘調査は、西鹿児島駅整備事業に伴う武遺跡の調査を平成5年5月12日より開始し、平成13年5月30日に川内市の京田遺跡を調査して全てを終了した。

平成5年度後の発掘調査は、北陸新幹線の一部である長野行新幹線建設が優先され九州新幹線鹿児島ルートでの発掘調査は2年間中断となった。再開したのは、平成8年8月の鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡であった。しかも、その調査は短期間であった。

平成9年度は11月から大原野遺跡の調査を開始し、前畑遺跡の一部全面調査を実施した。平成11年度からは、調査体制を充実し、2年2か月間で対象遺跡全21カ所の内、14カ所の発掘調査を終了した。なお、その成果は次の表で示した通りである。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物 備考
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2~3 H11.3.2~4 計5日	240㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文早・前期	塞ノ神式、轟式磨製石斧、黒曜石
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計1日	55㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
3	鏡・安原	出水市安原町	H11.2.17・18 H11.2.24・25 H11.3.9 計5日	60㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器、黒曜石土師器
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5~3.9 H11.5.6~ 12.3.31 H12.5.1~ 13.3.27 計420日	27,247㎡	彌榮久志 前田 誠 濱崎一富 東 和幸 高岡和也 上床 真 森田裕之	縄文晩期 平安・鎌倉 時代	縄文晩期埋設土器38基、平安期竈付竪穴住居跡1基、掘立柱建物跡9棟、焼土遺構3基、溝状遺構30条、波板状遺構27条、上加世田式、入佐式、黒川式、土師器、須恵器、玉縁白磁、滑石製石鍋、刻書土器、鉄製品、石鏃、磨製石斧、打製土掘り具、石匙・石皿、磨石、凹石、玉類(勾玉6、管玉25、丸玉5、平玉3、垂飾品1、剥片46、未製品30)、異形石器。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物 備考
5	宮野脇	出水市上鯖淵	H11.2.19 H12.2 計2日間	48㎡	彌榮久志 前田 誠 東 和幸	時代不明	包含層確認されず。
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計1日間	12,5㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層確認されず。
7	小松	出水市武本	H10.7.8～10 計3日間	108㎡	彌榮久志 前田 誠	縄文早期	土器, 黒曜石
8	前畑	川内市城上町	H9.11.1～ H10.3.31 H10.5.6～ H12.12.24 H11.12.13～ H12.2.24 計195日	11,800㎡	長野眞一 上床 真 彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀夫	旧石器時代 縄文早・前 ・後期, 中 ・近世	土坑25(陥穴含)基, 集石4基, 竪穴状遺構1基, 五輪塔, 大型掘立建物跡7棟。 ナイフ形石器, 細石刃核, 吉田・石坂・轟式石鏃, 石斧, 石皿, 磨石, 敲石。土師器, 青磁, 白磁, 染付, 薩摩焼き。
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1～8.27 H12.5.23～ H13.3.26 計218日	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀夫 樋渡将太郎	縄文早・後 ・晩期, 弥 生時代, 古 墳時代, 平 安時代, 中 世。	竪穴住居1軒, 掘立柱建物跡5棟, 土杭墓3基, 円形周溝状遺構1基, 土坑5基, 中世掘立柱建物跡2棟, 古道, 溝状遺構。早期押型文土器, 後期の土器, 磨製石鏃, 打製石斧, 錐, ビエスエスキュウ, スクレイパー, 磨石, 石皿, 石匙, 石鏃, 砥石, 土師器, 須恵器, 瓦, 青磁, 白磁, 滑石製品, 刀子, 青銅製品, 紡錘車。
10	京田 (薩摩国分 寺下)	川内市中郷町	H11.6.1～20 H12.5.8～6.6 H12.9.4～ H13.3.24 H13.4.9～5.31 計191日	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀夫 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期, 平安時代, 中・近世	弥生期水田跡, 土留め状遺構, 杭列, ウケ跡, ドングリピット, 古代水田跡。弥生土器, 三又鍬, 二又鍬, 大足, 一本梯子, 横架材, 網杵, 土師器, 須恵器, 瓦, 曲物。
11	原田・大島	川内市東大小 路町	H10.11.26 H11.5.6～ H12.3.24 H12.5.7～ H13.3.19 計275日	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀夫 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡4軒, 土坑1基 古墳期竪穴住居跡1軒 平安期竪穴住居跡31軒(竈付2軒), 掘立建物跡2棟, 土坑墓1 中世竪穴建物跡1軒, 掘立柱建物跡1棟, 畠跡。弥生期甕・壺, 石包丁, 磨製石鏃。 古墳期成川式, 須恵器 大刀, 劍, 鉄鏃。 平安期土師器, 須恵器, 瓦, 越州窯青磁, 緑釉, 陶器, 転用硯, 帯金具 石製丸鞆, 玉類, 土錘, 金環, 青銅製鈴, 鉄製品。
12	鍛冶屋馬場 春田	川内市平佐町	H10.11.25 H11.9.1～9.27 H12.5.9～6.15 H12.9.1～12.27 計103日	2,850㎡	彌榮久志 前田 誠 宮田栄二 平木場秀夫 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉6基, 土坑2基, 竪穴住居跡1軒, 掘立柱建物跡4棟, 炉跡7基, 畠跡。 越州窯系青磁, 陶器壺, 土師器, 鉄滓, 鉄製品(鎌, 鋤先, 紡錘車, 鉄鏃) 中世青磁, 古銭 近世薩摩焼, 平佐焼, 伊万里焼, 土師器, 羽口, 鉄滓。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物 備考
1 3	楠元 城下	川内市百次町	H10.9.17～30 H10.11.4～24 H11.9.2～12.6 H11.5.6～11.8 計 2 0 9 日	1,800㎡	彌榮久志 前田 誠 川口雅之	縄文後期 弥生～古墳	弥生～古墳期竪穴住居跡 2軒、炉跡2基、土坑12 基、溝7条（杭列を伴う 溝1条）。 縄文期押形文・市来式・ 西平式・北久根山式、弥 生～古墳期土器、木製平 鍬、又鍬、横鍬、鍬の柄、 掘り棒、丸木弓、容器（未 製品）、櫛状木製品。
1 4	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1～3.24 H12.5.1～ H13.3.29 計 3 1 6 日	19,400㎡	前田 誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡30棟、 土坑墓3基、方形竪穴建 物跡5軒、溝4条、古道 1条、畠跡。 剥片先頭器、ナイフ形石器、 押形文、石坂式、阿高式、 土師器、石皿、敲石、凹 石、石鍬、土師器、須恵 器、白磁、青磁、短刀、 古銭、滑石製石鍋、中世 陶器、鉄鍬。
1 5	大原野	川内市百次町 浦田	H8.10.1～29 H9.11.1～ H10.3.31 計 1 7 1 日	2,815㎡	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生 誠 上床 真	旧石器 縄文早・前 期	ナイフ形石器、細石器吉 田式、石坂式、条痕土器、 轟式、石鍬、石皿、磨石、 敲石、石斧
1 6	東下原	日置郡東市来 町養母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計 2 0 日	248㎡	彌榮久志 前田 誠	旧石器 縄文早期 古墳 古代	古代焼土付土坑 細石刃核 成川式、土師器。
1 7	上ノ平	日置郡伊集院 町下神殿4区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14～ H13.3.29 計 9 2 日	2,328㎡	彌榮久志 前田 誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡5軒、集 石4基、中世溝1条細石 刃核、指宿式、磨製石斧、 石鍬。
1 8	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院 町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1～ H12.3.24 H12.5.1～11.13 計 1 8 4 日	15,900㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創・ 早・中期 古墳、中世	集石（早期3基、中期3 基。） 中世溝、農具埋納土坑、 掘立柱建物跡12棟 縄文早期土器、船元式、 成川式、土師器、陶磁器 （中国南部）、滑石製石鍋。
1 9	梅落	日置郡伊集院 町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19～7.14 計 2 4 日	340㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石、塞之神式、スクレ ーパー。
2 0	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残
2 1	武ABCD	鹿児島市	H5.4.12～5.25 H5.5.21～7.2 H5.12.6～ H6.2.21 H6.3.9～30 H11.5.24～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計 1 7 5 日	9,104㎡	彌榮久志 倉元良文 鶴田静彦 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文前・中 期、弥生中 期、近世	古墳竪穴住居跡23基、 大型土坑11基、土坑37、 溝4条、近世溝9条、 轟式、深浦式、春日式、 船元式、山之口式、成 川式。陶器・磁器、瓦、 木製品、金属製品。寿 国寺跡のはん池（門前 池）跡。
2 2	前市野原	串木野市	H10.12.15 計 1 日	22㎡	彌榮久志 前田 誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び立地

武A・B・C遺跡は鹿児島市武一丁目に所在し、A遺跡は7番、B遺跡は1番、C遺跡は2番にあたる。また、武D遺跡は武二丁目に位置している。この遺跡は、平成11・12年度の発掘調査を実施し、近世の寿国寺跡と判明したため、跡名を「寿国寺跡」に変更して平成13年度に報告書を刊行した。

武遺跡のある鹿児島市の位置は、薩摩半島の北東部にあたり、東側の錦江湾（鹿児島湾）を挟み、桜島を臨む。この錦江湾は鹿児島県本土の中央まで入り込み食や交通等海の恵みを南九州にもたらしている。遺跡が立地した縄文時代の頃も今と同じ利用方法が考えられる。

現在、桜島は錦江湾中央の海面に1,100mそびえ立ち、南岳が活火山として鹿児島観光の中心をなしている。本遺跡の縄文期の頃は北岳が活発であったと言われ、当時は、火山が生活にいろいろな影響を与えていたと思われる。

武A・B・C遺跡は、鹿児島市の中央に位置し、鹿児島独特のシラス台地より約700m海側の沖積地に立地している。シラス台地は、鹿児島湾奥より約24,000年前に吹き上げられた火砕流でできたと考えられている。シラスは標高約250mの台地を形成し、鹿児島県の本土をほぼ覆っているが高い山地や低い低地には堆積していない。武遺跡の北西のシラス台地は、119.4mの崖が直にみられ、字「武」の岡にあるため「武岡」と呼ばれている。

鹿児島市内は、北から稲荷川、甲突川、田上川、永田川等の中小河川があり、中でも甲突川は最も大きく、約30km離れた郡山町の山地を源にシラス台地を削りながら鹿児島湾に流れ込んでいる。田上川は下流が新川と呼ばれ、鹿児島市の隣町である松元町の奥地からシラス台地を削り鹿児島湾に流れ込んでいる。このことから、鹿児島市内の沖積地は中小河川が氾濫を起こしながら標高5～9mの自然堤防などを形成したことが裏付けられる。

武遺跡の所在する微高地はシラス台地から約700m付近で、標高は9～7mである。ここは甲突川の南側であり、田上川の北側に位置している。なお、この微高地の東南には、標高が3mで東西1km、南北2kmある鹿児島大学の広い敷地も沖積地として形成されている。

これらから考察すると、武遺跡の沖積地の微高地は甲突川の右岸にあたる自然堤防と判断される。

第2節 周辺遺跡

鹿児島市の市街地を中心とした周辺は、シラス台地にある遺跡と、武遺跡等が立地する低地にある遺跡とに大きく分けられる。

シラス台地にある遺跡は、縄文早期の代表遺跡である雀ヶ宮の前平遺跡や南州神社遺跡が北部にある。さらにその北部には、旧石器時代と縄文時代早期の集落の加栗山遺跡や細石器文化の中に土器が出現した加治屋園遺跡がある。また、シラス台地の先端を利用した鹿児島城の山城もある。

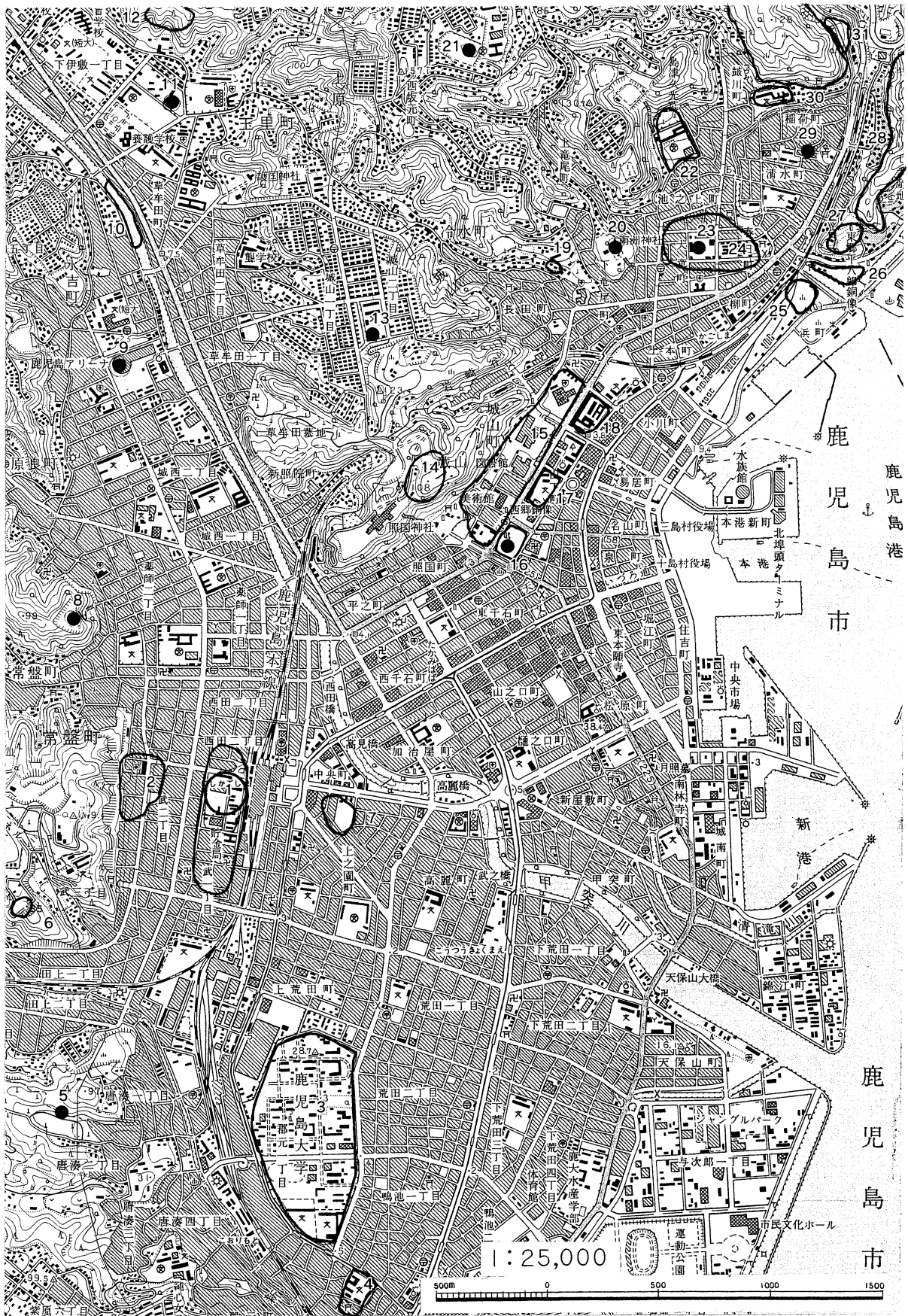
低地部には、標高7mの大竜遺跡、春日町遺跡等が北部にあり、本遺跡の縄文前期にあたる遺跡がみられる。南部には、弥生中期の集落遺跡である一ノ宮神社遺跡や古墳時代の集落遺跡である鹿児島大学構内遺跡群がみられる。また、鹿児島城本丸跡や二ノ丸跡である近世の遺跡もみられる。

これらの遺跡の立地は、台地とその周辺に限られている。低地の遺跡は第1節でもあげたが河川の河口形成過程で鹿児島湾が少しずつ陸化した所に立地していることが把握できる。

次の遺跡地名図と地名表は武遺跡を中心としたものである。

第1表 武遺跡の周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	新番号	旧番号
1	武	武一丁目	縄文～近世	83	Ⅱ-27
2	寿国寺跡	武二丁目	近世		
3	鹿大構内	郡元一丁目鹿大構内	弥生～古墳	95	Ⅱ-12
4	一之宮	郡元二丁目一之宮神社周辺	弥生～古墳	96	Ⅱ-13
5	唐湊城跡	唐湊一丁目方切	中世	95	②-1
6	茶磨壘跡	武三丁目三重尾崎	中世	81	②-7
7	共研公園	中央町11-5	弥生・平安	156	
8	原良宮跡	原良町源六ヶ入り口	中世	80	②-4
9	刑務所跡	永吉町鹿児島アリーナ内	古墳	71	Ⅱ-4
10	甲突川川底	永吉町	縄文～古墳	56	I-34
11	玉里	玉里町(旧練兵場跡)	弥生	55	I-27
12	伴椽館跡	伊敷町中福良	中世	50	①-4
13	夏蔭城跡	草牟田町夏蔭	中世	70	①-9
14	上山城跡	城山町	中世	65	①-10
15	鶴丸城跡	城山町5	近世	66	①-11
16	造士館・演武館	山下町中央公園内	近世	69	I-33
17	名山	山下町名山小学校庭	近世	68	I-32
18	垂水・宮之城 島津家屋敷跡			67	新規
19	堅野冷水窯跡	冷水町堅野	近世	57	新規
20	南州神社	上竜尾町南州神社境内	縄文	58	I-31
21	催馬楽城跡	坂元町矢上	中世	39	①-3
22	福昌寺跡	池之上町玉龍高校一帯	近世	53	新規
23	内城	大竜町11-4(大竜小校庭)	中世	59	①-8
24	大龍遺跡群	大竜町・池之上町・春日町	縄文～近世	60	I-30
25	浜町	浜町1	近世	64	新規
26	祇園之砲台跡	清水町祇園之州	近世	63	新規
27	浜崎城跡	清水町田之浦	中世	62	①-6
28	東福寺城跡	清水町田之浦	中世	61	①-7
29	尾頸小城跡	稲荷町字後迫	中世	54	①-13
30	清水城跡	清水町大興寺岡	中世	43	①-6
31	滝ノ上火薬製造所跡	吉野町滝ノ上	近世	47	I-35



第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の基本計画

武遺跡の発掘調査は、西鹿児島駅整備事業工事施行の都合上3次に分けて実施されることになり、その調査範囲は第2図で示した地域であった。

第1次は武一丁目7番で西部にあたり、鹿児島県工業試験場が立ち退いた更地の部分の場所であった。第2次は武一丁目1番で東部にあたり、現西鹿児島駅構内への工事用進入道路部分で鉄道共済組合鹿児島ストアのある場所である。第3次は、中央部にあたり、九州旅客鉄道株式会社鹿児島支店の建物撤去後に入った。

全体のグリッド配置は、第3図で示したように当初に工事最終地点より北に向けて設定した。グリッドは建設杭の中心杭を結んだ線を境線にし、幅に対し20mを計り北側をA、南側をBとした。そして、八代起点の方に20mを計り11の区画を組みグリッドを設定した。

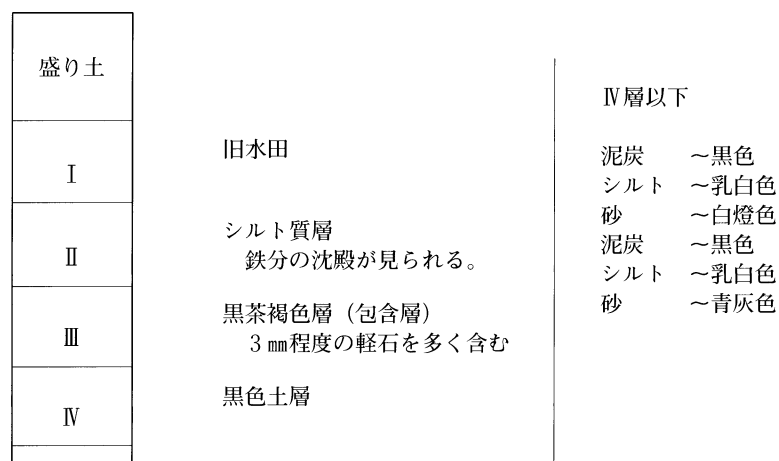
よって遺跡の名称は、第1次を武A遺跡、第2次を武B遺跡、第3次を武C遺跡とした。

第2節 遺跡の層序

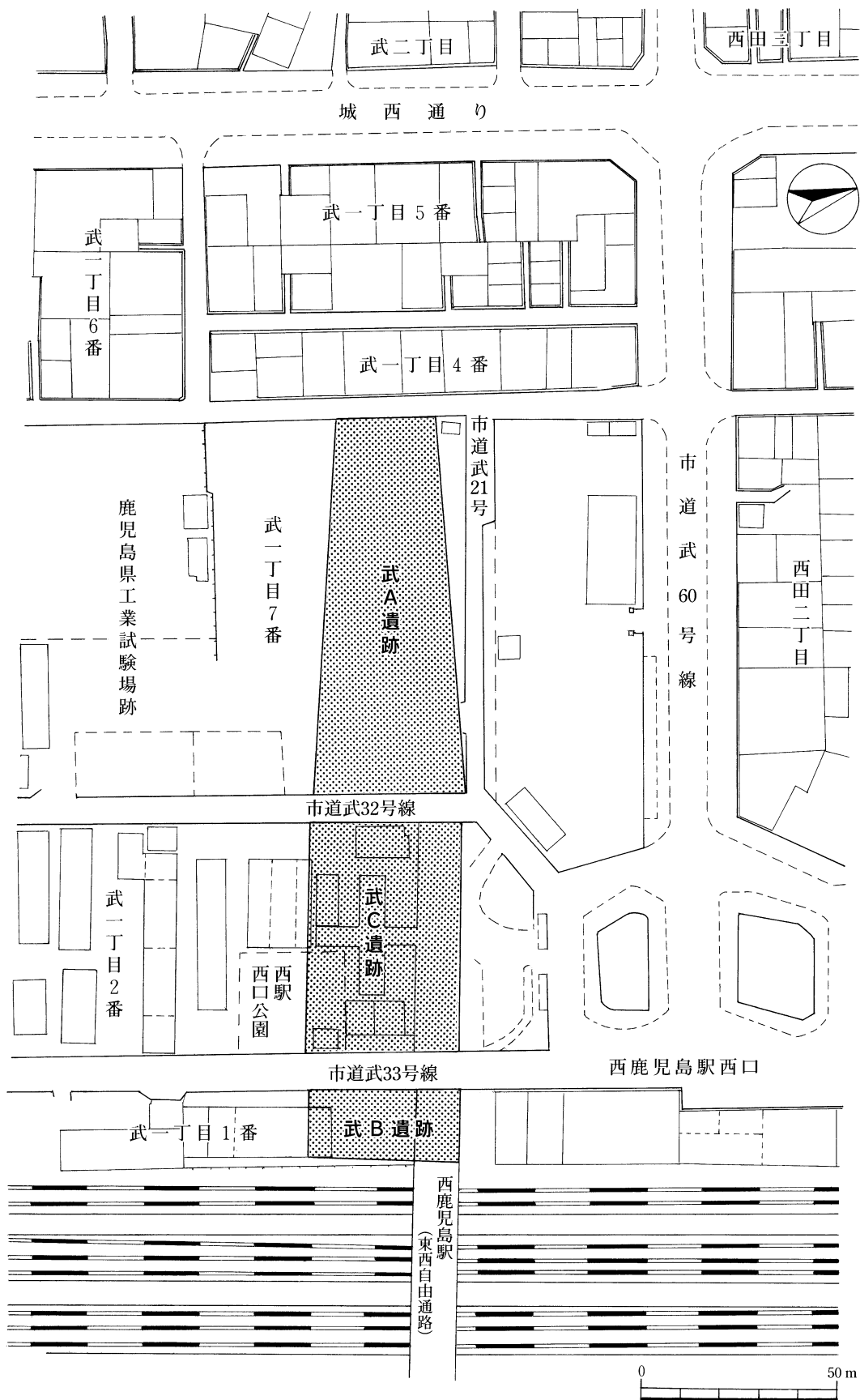
第4図は、遺跡の基本的層序である。

地表面は、シラスの軽石や石等が含まれた盛り土で、現在の生活面を形成している。第Ⅰ層は旧水田層でグライ化した灰色の層で、近世の包含層である。第Ⅱ層は、シルト質層で赤茶褐色の鉄分が沈殿しているため硬い盤になっている。第Ⅲ層は黒茶褐色層で、3mm程度から2cmの軽石を含む層である。この層は古代・古墳・弥生時代の包含層である。第Ⅳ層は粒子が細かい黒色土層である。この層は縄文期の包含層である。第Ⅳ層以下は部分部分で黒色の泥炭層、乳白色のシルト層、白橙色の砂層、黒色の泥炭層、乳白色のシルト層、青灰色の砂層が形成され、河川での自然堤防形成が考えられる状況がみられる。

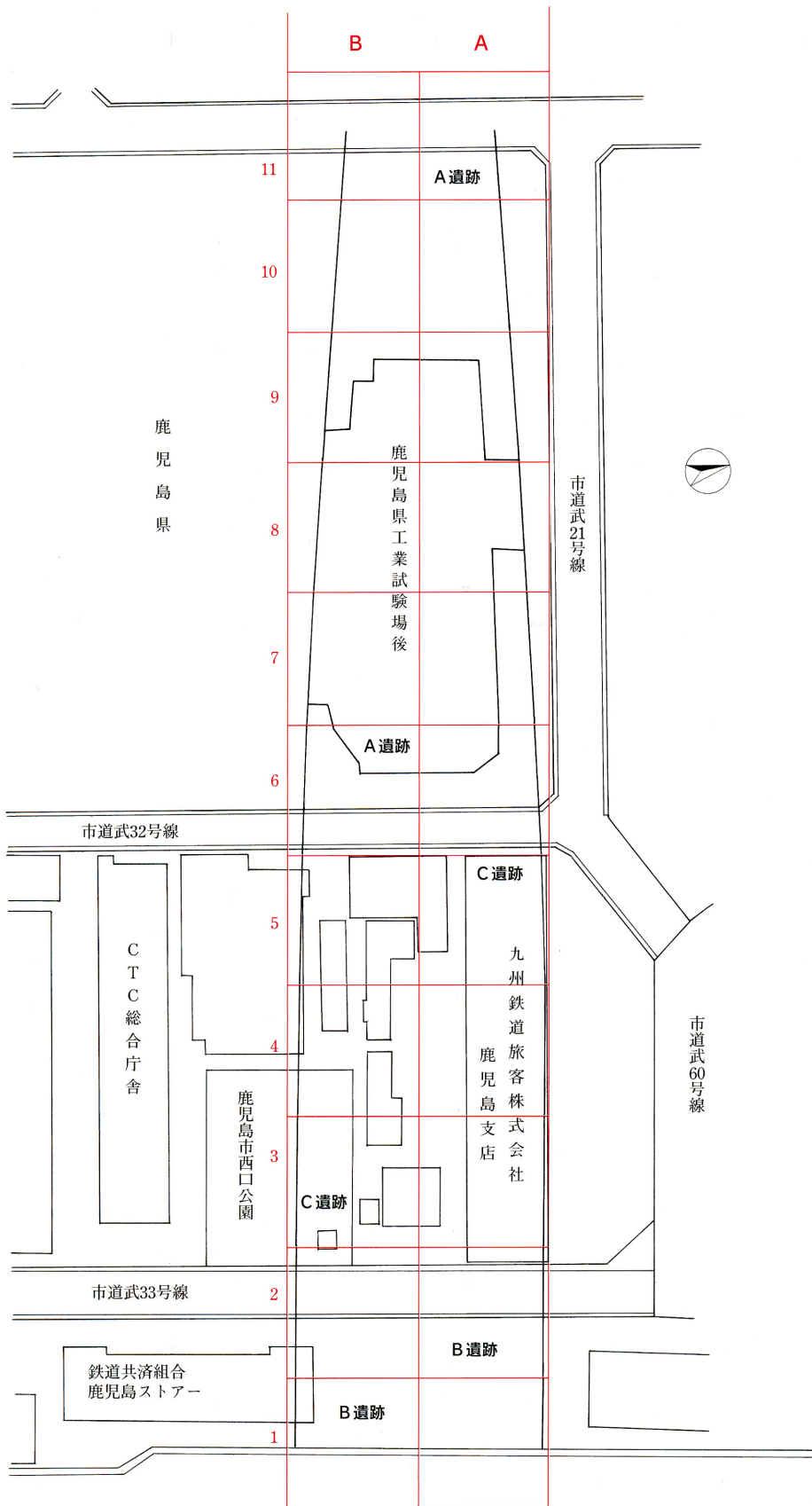
第5図・第6図・第7図は第11～3区の北面の地層図である。地形は全体的に11区が低く、西の方へ傾斜し、5区が高い。遺跡の生活跡は高くなった9区からみられる。なお、第6図には9区南面溝2の断面も掲載している。第8図は武C遺跡の北面地層で上が溝4で下が溝5である。標高はこの地区が最も高く、武B遺跡側へはなだらかに傾斜し、武B遺跡では段差を有し傾斜している。



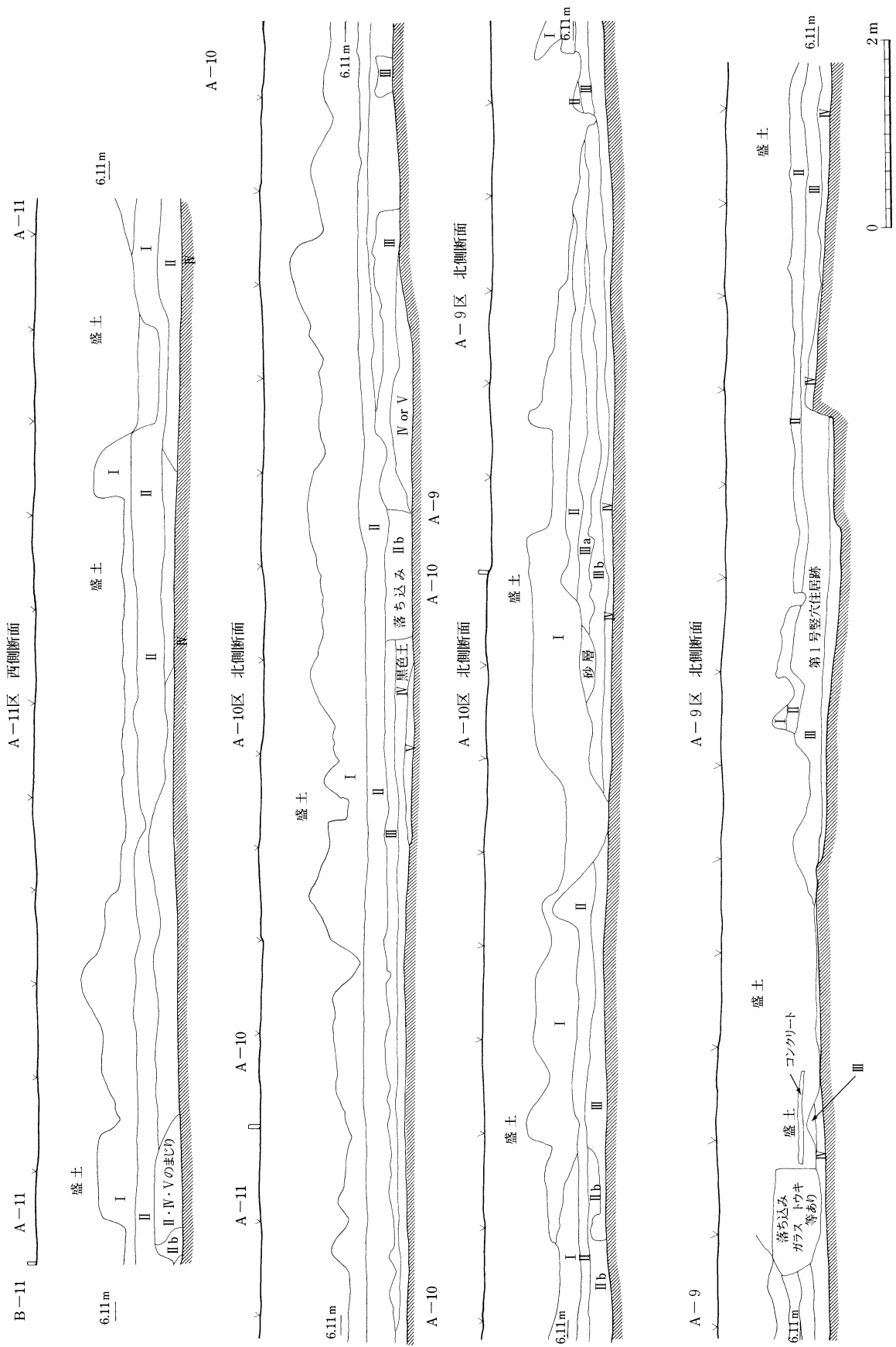
第2図 遺跡の基本的層序



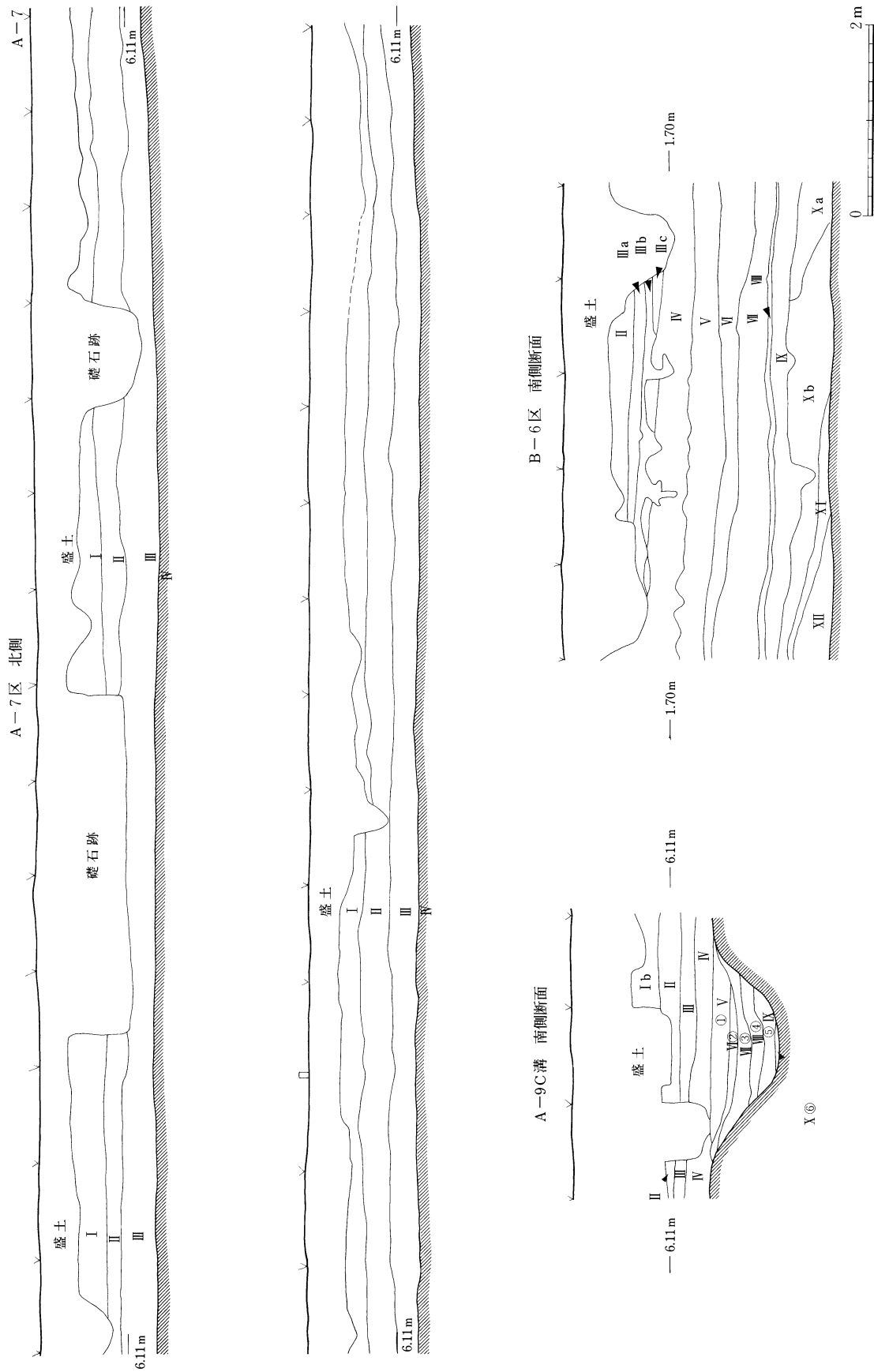
第3図 武A・B・Cの調査範囲



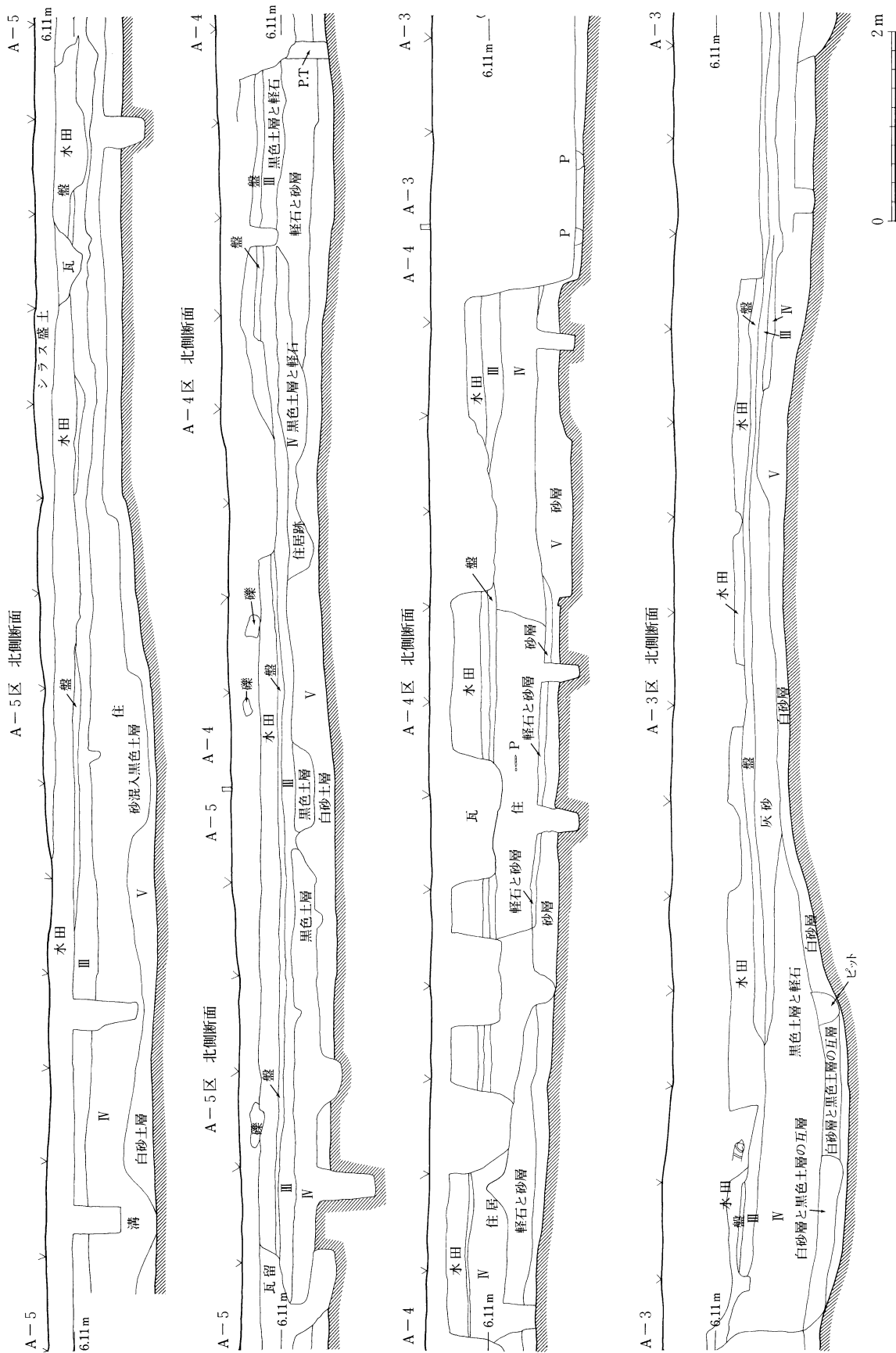
第4図 武A・B・C遺跡のグリッド



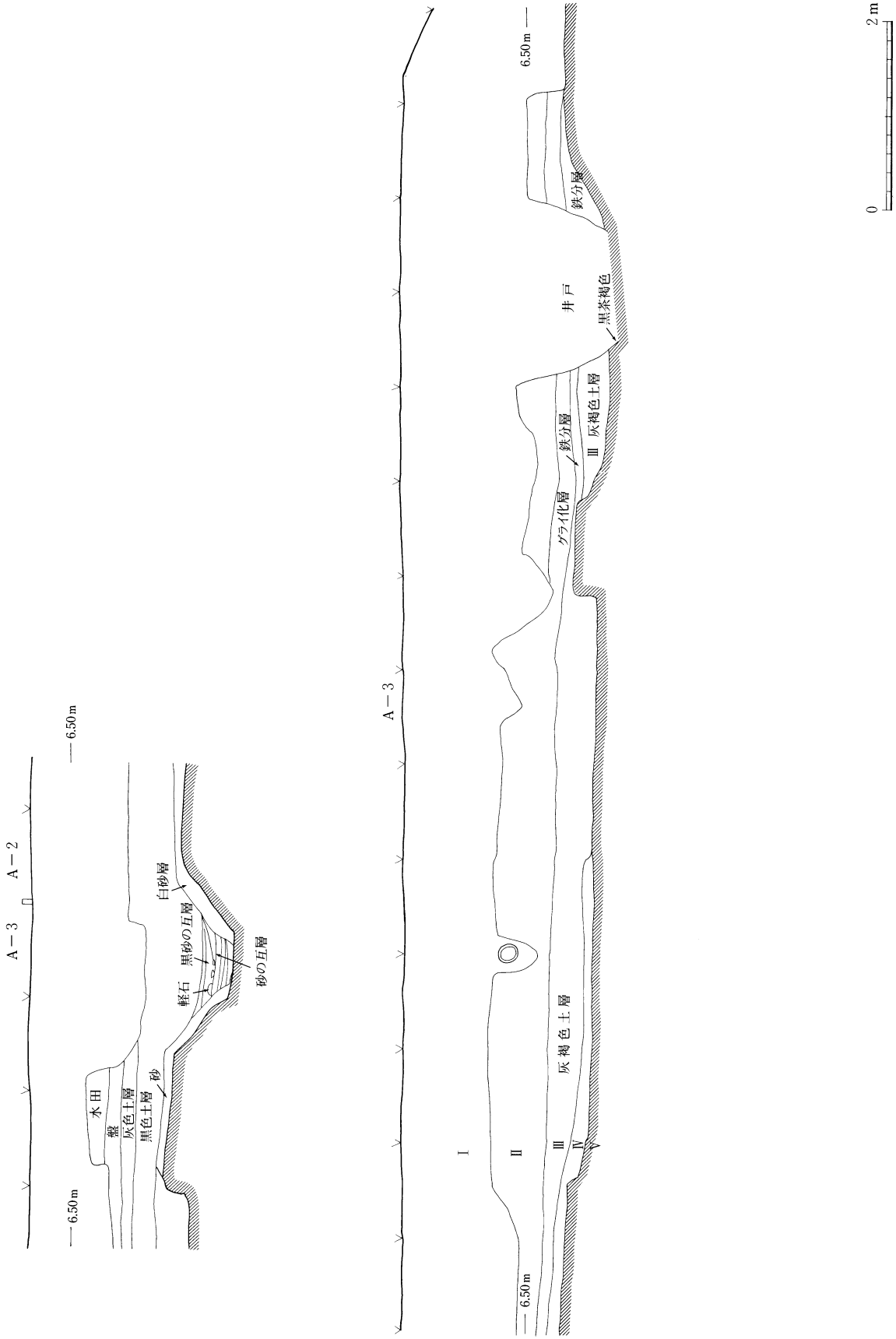
第5図 11～9区の地層



第6図 7～6区の地層



第7図 5～3区の地層



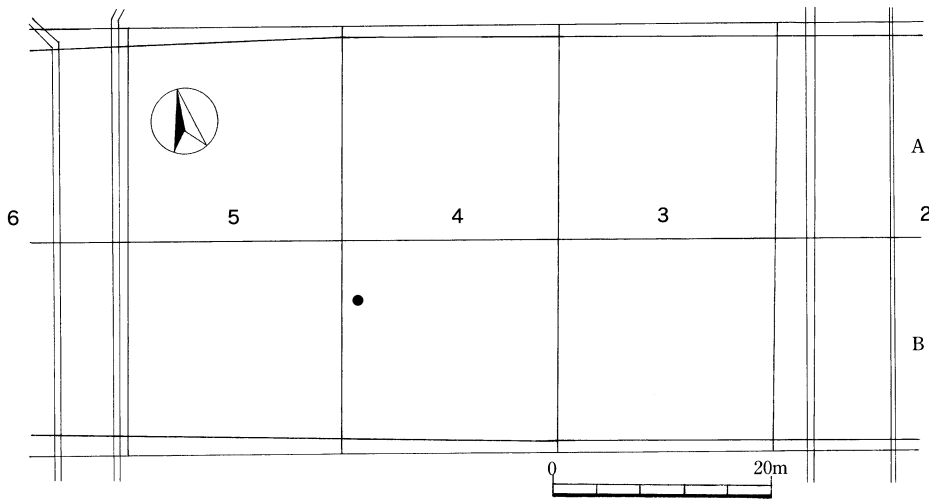
第8図 3~2区の地層

第3節 遺構と遺物

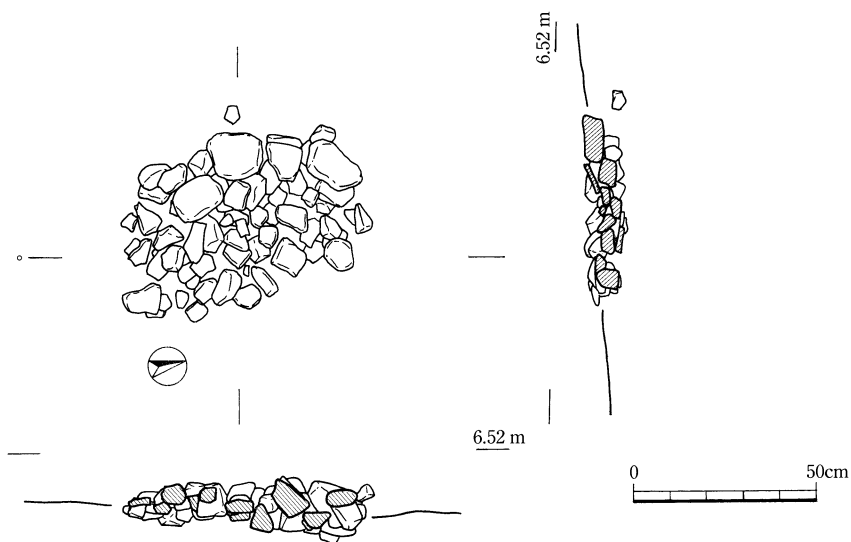
1 縄文時代

縄文時代の包含層は第IV・V層が中心である。遺構の検出は、縄文時代の包含層である第IV層の落ち込みが不明であったため確認できなかった。ただ一基の集石が縄文時代の土器と共に検出された。また、遺物は古墳時代の竪穴住居跡や大型土坑・土坑や溝4の中に、古墳時代の遺物と混在して出土している。

集石は第9図に示しているようにB4区の西側に検出した。規模は東西55cm、南北68cm、厚み18cmである。礫は16cmから5cmの大きさのものを71個が集められていた。礫質は安山岩が主体で一部堆積岩が含まれていた。明瞭な掘り込みはなく、炭化粒が多くみられ、縄文土器（第3類）2点が含まれていた。



第9図 集石の位置



第10図 集石

出土遺物は次のとおりである。

(1) 土器

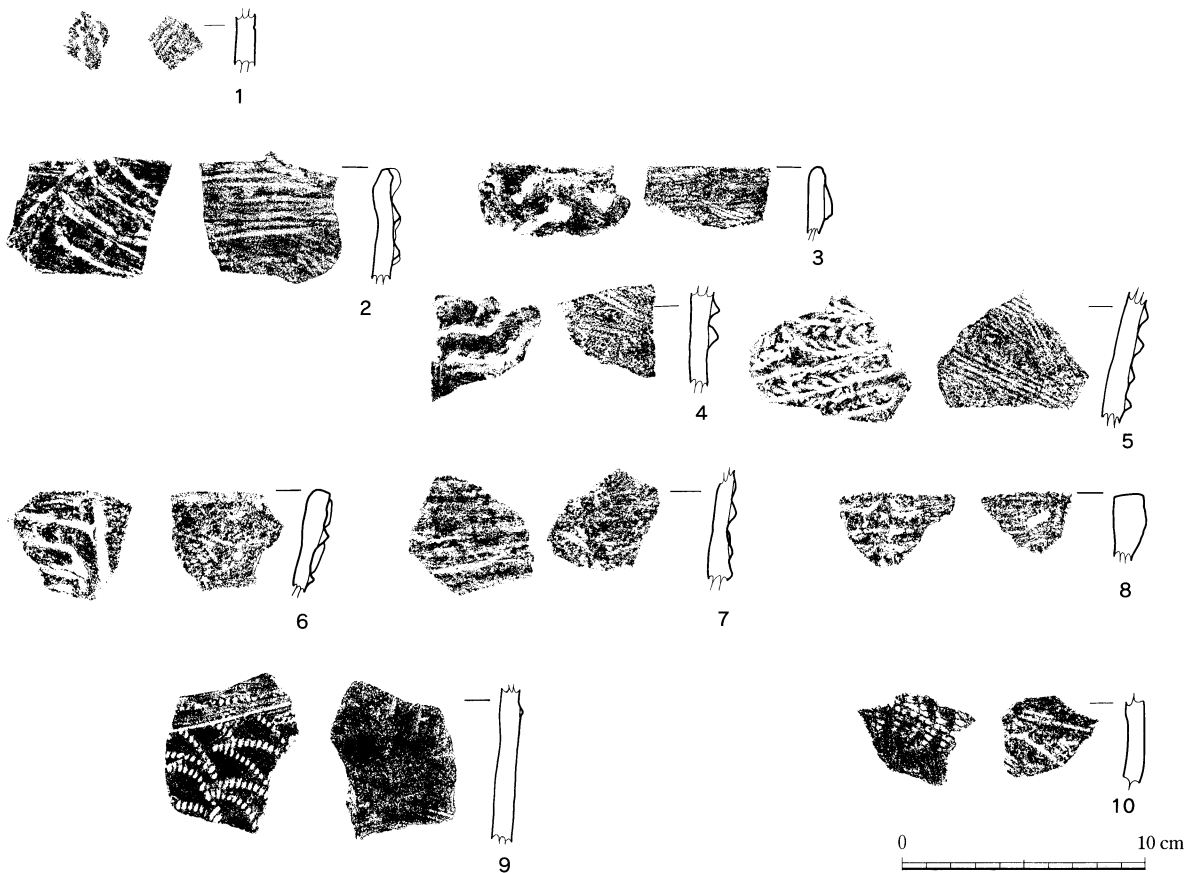
第1類 (1)

1が1点である。外側は丁寧に仕上げた面に貝殻縁を縦と斜めに刺突文がみられ、内面はヘラ掻き上げで調整している。早期の前平式土器に比定される。竪穴住居跡内出土していることから古墳時代に紛れ込んだものと考えられる。

第2類 (2~8)

2は深鉢の口縁部で、貝殻条痕調整がある外面に太い隆起突帯を山形に貼り付けたものである。内面は貝殻条痕の調整が明瞭にみられる。3は深鉢の口縁部で、外面に太い隆起突帯を波状に施したもので、内面は貝殻状痕の調整がみられる。4は外面に太い隆起突帯を波状に施し、内面には貝殻状条痕の調整がみられる。5は貝殻条痕調整の外面に上段に波状の太い隆起突帯を施し、内面には貝殻条痕の調整がみられる。6は深鉢の口縁部で貝殻条痕調整の外面に太い隆起突帯を縦と横に貼り付けたものである。内面には貝殻条痕が若干みられる。7は外面に隆起突帯を貼り付けたものである。内面には貝殻条痕調整がみられる。8は深鉢の口縁部で平坦な口唇部を持ち、隆起突帯を縦位に貼り付け、さらに横位に突帯を貼り付けている。内面には貝殻条痕が若干みられる。

この類は、隆起線文土器系で器面に貝殻条痕がみられることから縄文前期の轟式土器に比定される。



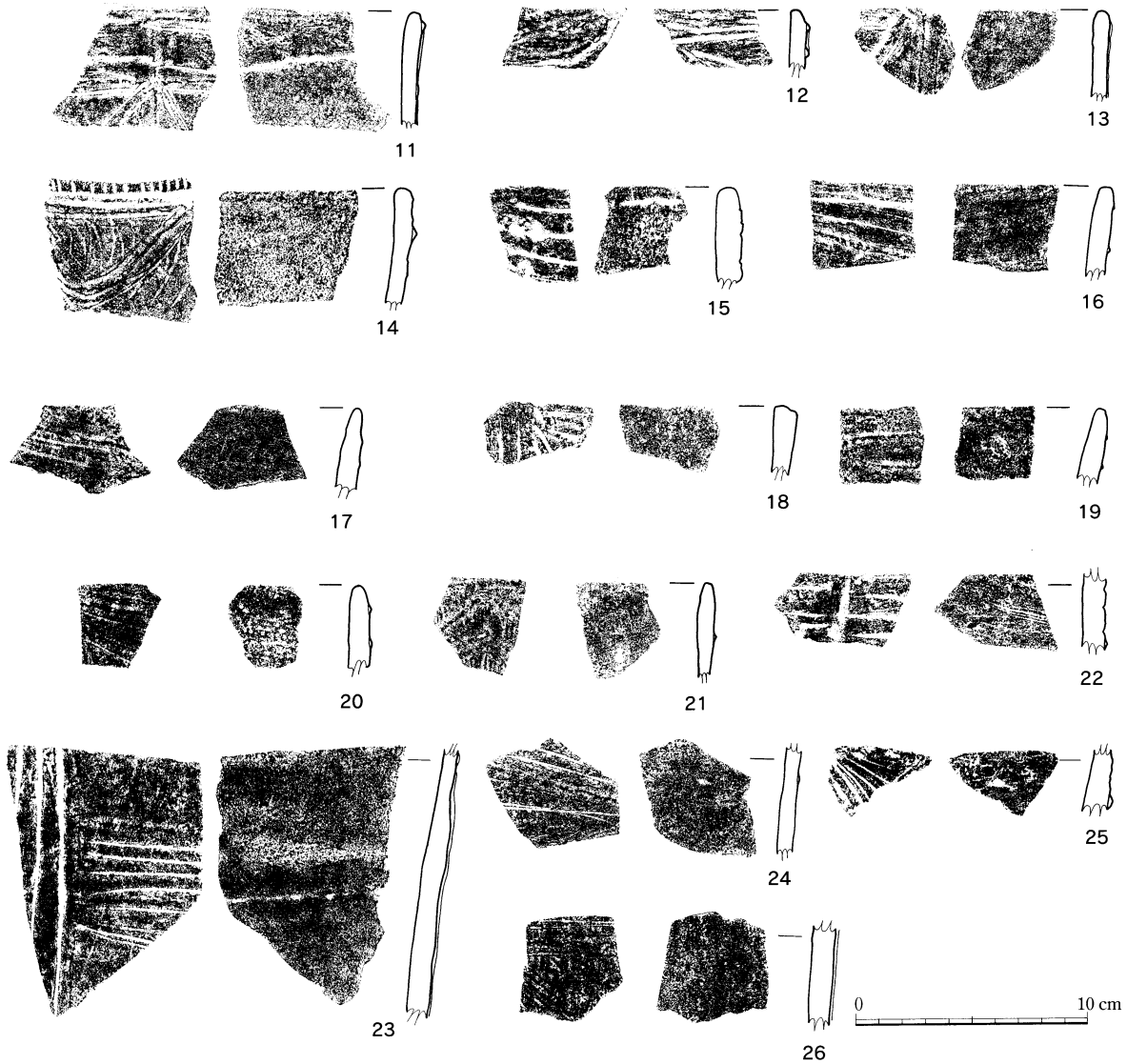
第11図 縄文土器 (1)

第3類 (9・10)

9は外面に刻みのある微隆起線文に、細い沈線と貝殻復縁部での相交弧文を施している。内面はヘラ調整である。10は外面に貝殻復縁部による相交弧文が施され、内面には貝殻条痕が若干みられる。この類は轟系の土器と比定される。

第4類 (11~26)

11は直行する口縁部で薄手である。外面は微隆起突帯を縦位と横位に貼り付け、横位の突帯に沿って細い沈線を施し、口縁部途中から2本の細い沈線を斜めに施している。内面は丁寧なヘラナデである。12は直行する口縁部で薄手の土器で、外面には微隆起線文が施され、内面には貝殻条痕がみられる。13は直行する口縁部で薄手の土器で、外面には微隆起線文と細い沈線が施されている。内面は丁寧なナデ調整をしている。14は波状気味の口縁部で薄手の土器である。口唇部に刻目、外面は微隆起突帯に細い沈線を施している。内面は丁寧なナデであるが下部は器面が粗くなっている。



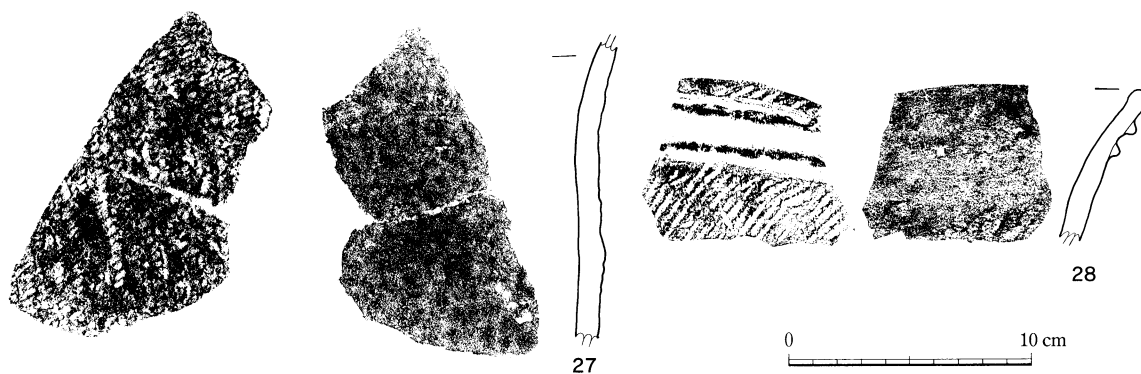
第12図 縄文土器 (2)

15は直行する厚手の口縁部で、微隆起突帯と横位の沈線が施されている。内面は粗い調整である。16はやや波状気味の直行する口縁部で、外面には微隆起突帯と極細沈線を施している。内面は研磨気味のナデ調整である。17は直行する薄手の口縁部で、外面に微隆起突帯と横位に沈線がみられる。18は直行する口縁部で外面に微隆起突帯と沈線を施している。内面は丁寧なナデ調整をしている。19は直行する口縁部で、外面に微隆起突帯を横位に施している。内面には貝殻条痕が斜めに施している。20は直行する口縁部で、外面に斜めの微隆起突帯と細い沈線を施している。内面には貝殻条痕がみられる。21は直行する薄手の口縁部で、口唇下に横位と斜位の微隆起突帯を施している。内面はヨコナデである。22は外面に縦位と横位に微隆起突帯と細い沈線を横に施したもので、内面に貝殻条痕がみられる。23は外面に縦位と横位に微隆起突帯を施した胴部で、器形は円筒状である。内面は丁寧なナデ調整である。24は薄手の土器で外面に微隆起突帯と細い沈線を施している。25は外面に微隆起突帯と沈線を斜位に施している。26は外面に微隆起突帯と極細沈線を施している。

この類は深浦式に比定される。

第5類 (27・28)

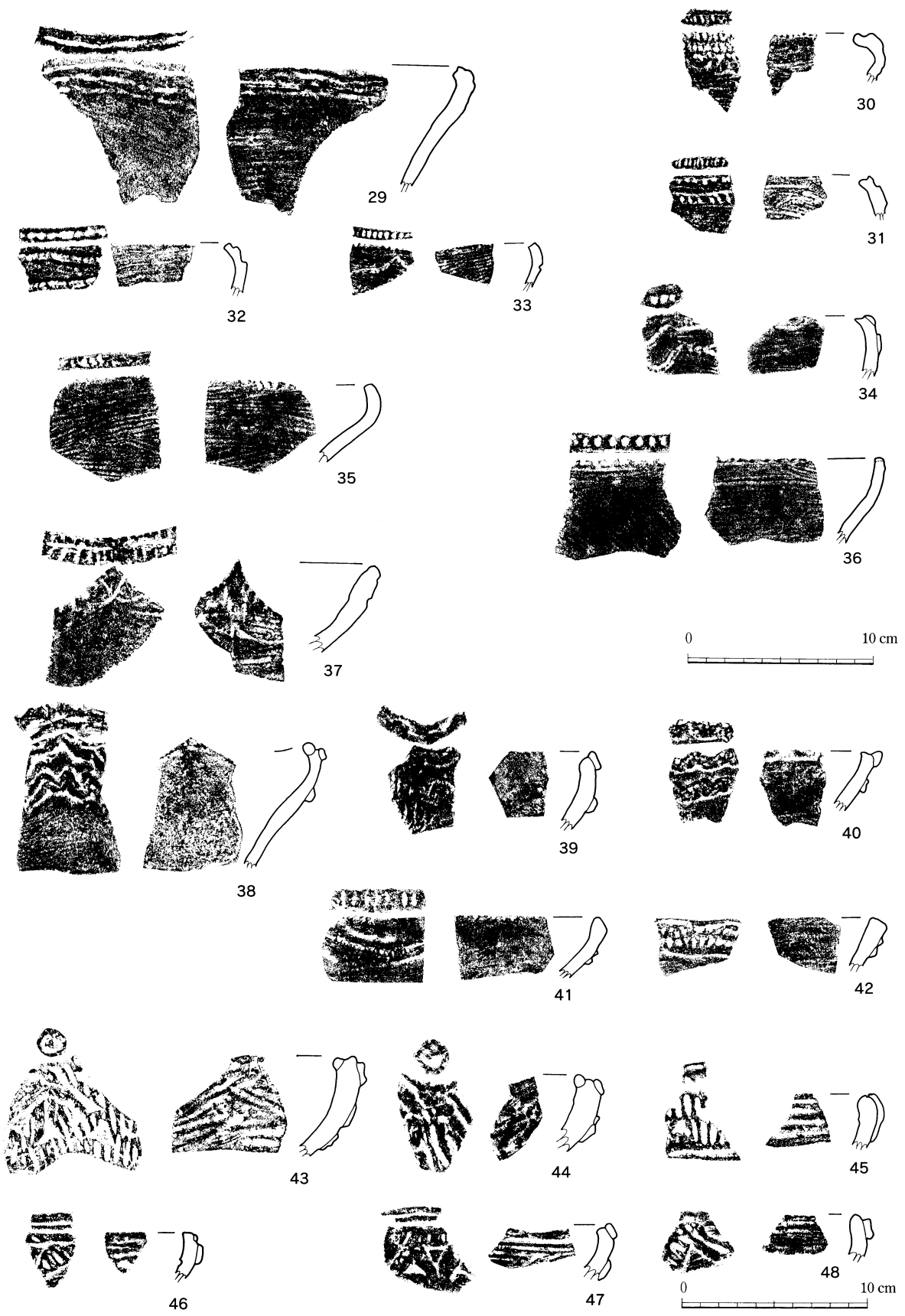
27は頸部が若干縮まり、口縁部が外反し、胴部が膨らむ深鉢である。胎土及び器面の色調は青灰色で、小石や雲母が混入されている。外面全体には、目の太い縄文を縦位に施し、内面は丁寧なナデ調整をしている。この土器は、南九州の器形と文様と胎土で比較すると、移入土器の可能性が高く瀬戸内地方の船元式土器と考えられる。28は口縁端部で若干内湾し、口縁部は外反するものである。外面には細かい縄文を施し2条の突帯を貼り付けている。船元系の土器と思われる。



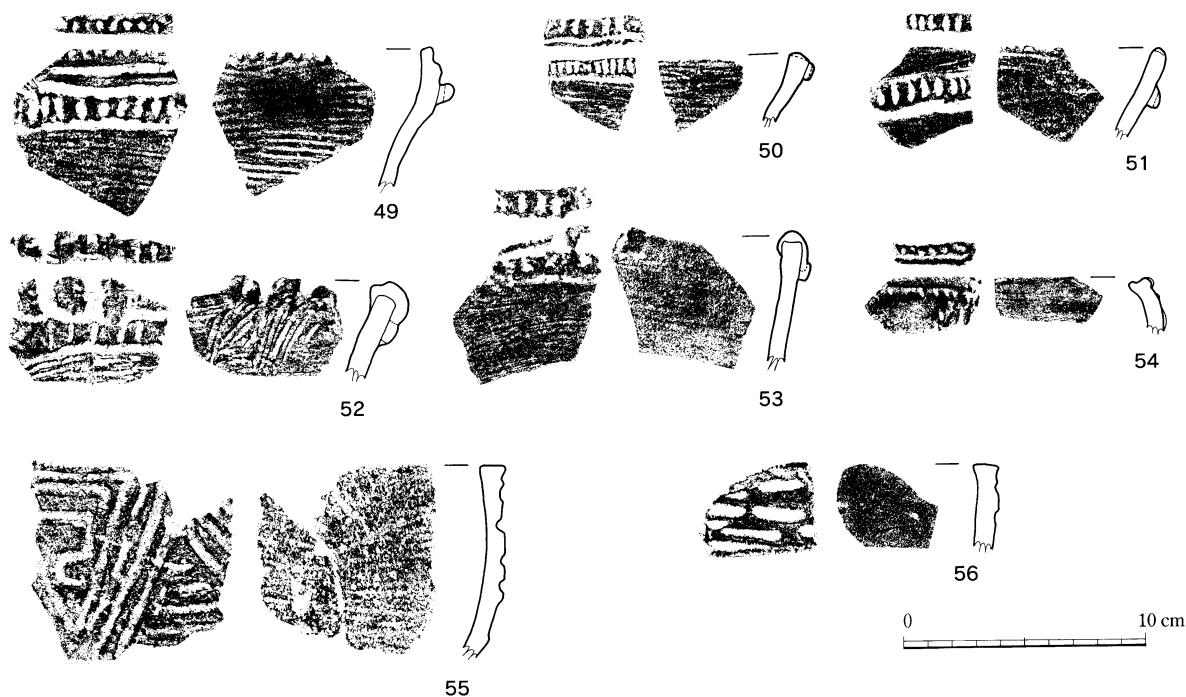
第13図 縄文土器 (3)

第6類 (29~54)

29~54は口縁部がキャリッパー状に内湾する深鉢である。29は口縁部がキャリッパー状に内湾し、頸部から外反する深鉢である。器面は貝殻条痕調整で口縁部に貝殻復縁部による刺突文がみられる。30の器面は貝殻条痕調整で口唇部に刻み目があり、口縁部に貝殻復縁部による刺突文と波状突帯がみられる。31の器面は貝殻条痕調整で、口唇部に刻み目があり、口縁部に貝殻復縁部による刺突文と沈線がみられる。32・33の器面は貝殻条痕調整で、口唇部に刻み目があり、口縁部に貝殻復縁部による沈線状の刺突文がみられる。34の器面は貝殻条痕調整で、口唇部に刻み目があり、口縁部に貝殻復縁部による波状の刺突文がみられる。35・36・37の器面は貝殻条痕調整で、口唇部に刻み目がある。この中で、36は山形の口縁部で沈線がみられる。38・39・40は山形の口縁部で小刻みに



第14図 縄文土器 (4)



第15図 縄文土器 (5)

波状を呈し、横位に貝殻刺突を施した突帯を貼り付けている。なお、40は平坦口縁である。41・42はナデ調整の器面に横位の貝殻腹縁部で刺突を施した突帯を貼り付けている。41には口唇部に刻みがみられる。43～48は幅広い突帯に沈線状の刻みを施している。内面には貝殻条痕がみられる。内43・44は山形口縁部で先端に円形の突帯を施している。これらは同一個体の可能性が高い。49・50は口縁部がキャリッパー状になり、器面は貝殻条痕で口縁部に刻目突帯を施している。口唇部・口縁部には貝殻復縁部による押し引き文がみられる。51は外反する口縁部に刻み目突帯、52・53は外反する口縁部に横位の刻目突帯並びに口唇部まで縦位の突帯を施している。器面は貝殻腹縁部による調整である。54はキャリッパー状になり、突帯の下位及び横位に刺突文を施している。

これらは、器形及び貝殻条痕の器面調整と突帯のセットで考えると春日式に比定される。

第7類 (55・56)

この類の器形は内湾気味の直行の口縁部で、口唇部はフラットである。文様は幅の狭い沈線を施している。器面調整は55の内面に貝殻腹縁部の調整痕がみられ、56にはみられない。この型式は北手牧式に比定されよう。

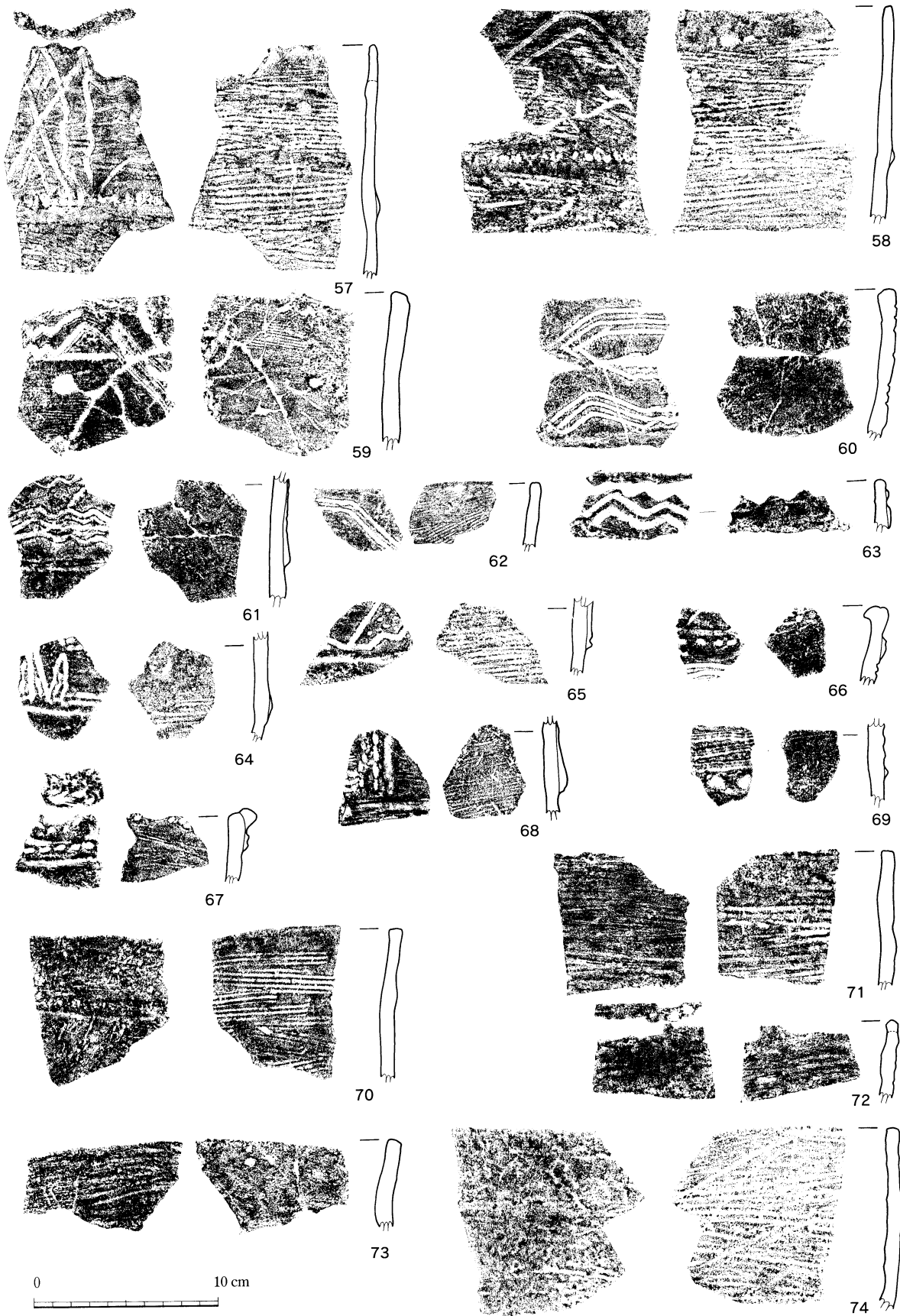
第8類 (57～74)

この類は、口縁部が直行し、口縁部の下位に突帯ないし段を施す肥厚口縁タイプの土器である。57・58は波状の突起を口唇部に付け、文様は筋がある沈線を刻み目突帯並びに口唇部に直線や曲線で組み合わせて施している。器壁は薄手であるが硬質に焼け、器面の貝殻条痕は深めである。

59は口唇部の突起部は欠損し、下位の突帯まではない。条痕による波状・山形文様を施している。器面には貝殻条痕がみられる。また、焼成が良くなかったため補修孔がみられる。60は3～4本の沈線を波状等に施したもので、その文様帯は下位には段がみられるもので、肥厚口縁部にある。

胎土は細砂を使用している。61は口縁部下位に突帯で肥厚部をつくり、波状の沈線文を施している。

胎土は細砂を使用している。62は2本の沈線を施したもので、内面には貝殻条痕がみられる口縁部



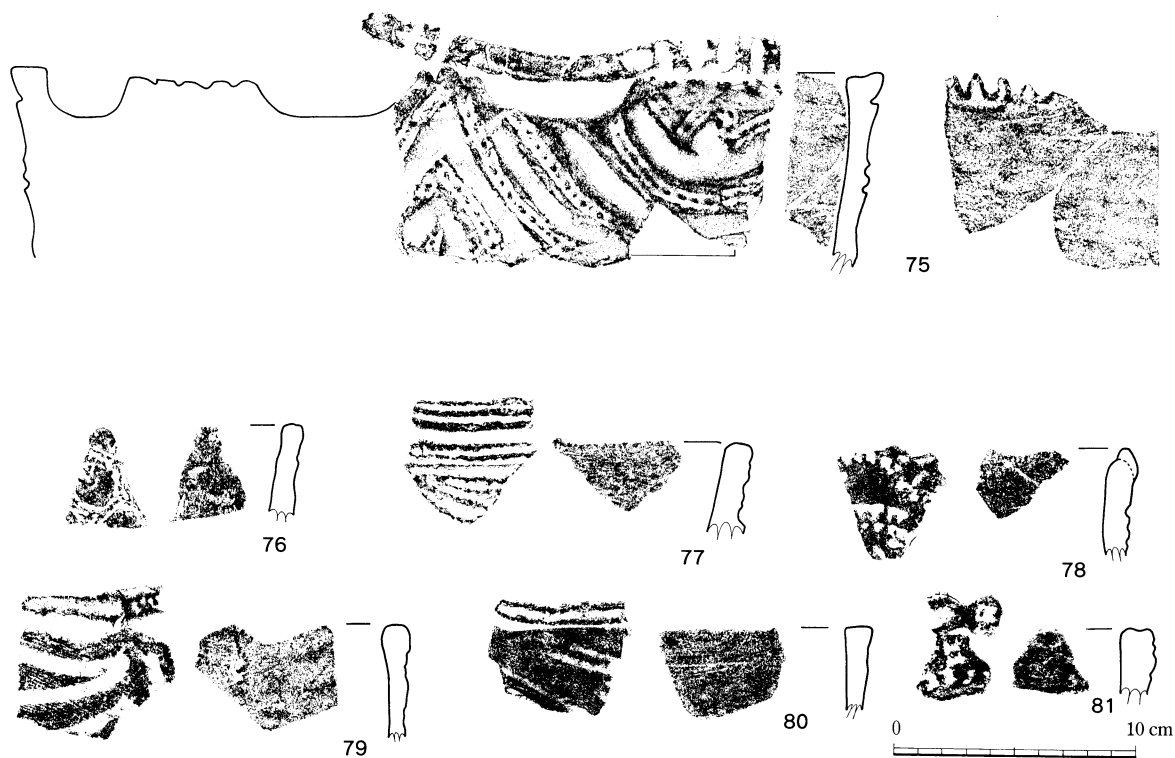
第16図 繩文土器 (6)

である。胎土は細砂を使用している。63は波状口縁で、押し引き沈線を波状に施している。内面には貝殻条痕調整がみられる。64は肥厚口縁部を示す突帯があり、その上位に押し引き状の沈線を縦位と横位に施している。内面には貝殻条痕がみられる。65は肥厚口縁に沈線と刺突を施した土器である。内面には深い貝殻条痕の調整がみられる。66・67は口唇部を広くし連点刺突を施し波状を呈し、外面に刺突突帯と沈線を施している。内面は貝殻条痕の調整がみられる。胎土は細砂を使っている。68は66・67と同じ刺突突帯と沈線の文様で同じ個体と思われる。下位の横突帯は肥厚口縁の部分を示していると考えられる。69の文様は筋のある沈線と指で押した刻み目突帯を施し、内面には貝殻条痕の調整がみられる。70は平坦な口唇部で口縁下位に刺突のある突帯を横位に施し、内面には貝殻条痕の調整がみられる。焼成は薄手で硬質である。71は口縁下位に突帯を施し、全面に貝殻条痕の調整がみられる。72は3連鋸歯状の突起を口唇部に付け、貝殻条痕の器面調整がみられる。焼成は硬質である。73は若干外反する口縁部で、器面は貝殻条痕調整である。74は73と同じグループで、口縁下位が若干張り出し、突帯状の器形をなしている。器面は貝殻条痕調整である。焼成は硬質である。

この類は、口縁下位に突帯を施し、その上位にそのまま沈線文を描くものと、肥厚口縁を作って施文するものがある。これらは大平式土器として比定した。

第9類 (75~81)

この類は、凹線文と貝殻刺突を組み合わせた文様をもつものである。75は口唇部に刻みを入れた波状突起をもち、文様は幅広い凹線文と二叉の貝殻刺突押し引き文を施したもので、器形は直行する厚みのある深鉢である。胎土には滑石が混入されている。76は75と類似しているが口唇部に二叉の貝殻刺突がみられる。77も75と類似しているが胎土に滑石が多く含んでいるためつるつるし



第17図 縄文土器 (7)

ている。78は口唇部に撚り状の突起をもつもので、器面に二叉状押し引き文を施している。滑石は混入されていない。79は口唇部に台形突起をもつ深鉢である。文様は二叉刺突連続押し引き文を形状に施している。滑石の混入はない。80は平坦口唇部と外面に二叉刺突連続文を施したもので、器面には貝殻条痕の調整がみられる。焼成が良く硬質である。81は台形突起に刻みを入れた口縁部で、二叉刺突文を口唇部と口縁部に施している。

この類は凹線文と刺突文の組み合わせの文様から判断して並木式土器に比定される。

第10類 (82~102)

この類は凹線文を施した土器である。

82は口唇部に指圧の刻みがあり、口縁部には併行並びにX状の凹線文が施されている。内面は貝殻条痕がみられる。焼成は良く硬質に焼けている。83は口唇部に台形突起をもつ器面に凹線文がみられる厚手の土器である。内面には貝殻条痕がみられる。84は口唇部に台形突起をもつ凹線文が施されている厚手の土器である。85は口唇部が厚手の凹線文を施している土器である。86は口唇部が平坦で厚みがあり、台形突起の一部で、外面に深い凹線文がみられる。87は口唇部に指圧刻みがあり、外面に凹線文がみられる。内面は貝殻条痕がみられる。88は平坦面の広い口唇部で外面に凹線文が施されている。89は口唇部で突起の一部で、口縁上位に竹管の刺突を施し、凹線文を施している。

90は外面にやや細い凹線文を渦状に巻いた文様を施した口縁部である。口唇部は平坦で突起の一部がある。91は口唇部で突起の一部にあたり、外面には凹線文を施している。内面は貝殻状痕がみられる。92はやや細い凹線文を施した平坦口唇部をもつ土器である。93は口唇部に凹線刻みをもつやや細い凹線文をもつ土器である。94はやや細い凹線文を施した平坦口唇部をもつ土器である。内面には貝殻条痕が残っている。95は沈線を横位に施し、口唇部は平坦をもつ土器である。内面は貝殻条痕がみられる。96は沈線が縦位にみられる深鉢で、滑石が多く混入されている土器である。97は沈線が曲線状に巻き込まれた文様を施した深鉢で、口唇部に台形突起が付けられている。98は凹線文を略渦状に施したものである。焼成は薄手で硬質である。99は凹線文を横に廻らしたもので、胎土に若干滑石が混入されている。100は凹線を三菱状に施し、器面には貝殻条痕がみられる。101は口唇部が平坦で、貝殻条痕調整の上にやや幅の狭い凹線を鋭く施している。102は口唇部に刻みをもつ台形突起が付き、器面にはやや幅の狭い凹線を鋭く施している。

この類は、凹線文が特徴で阿高式土器に比定できる。

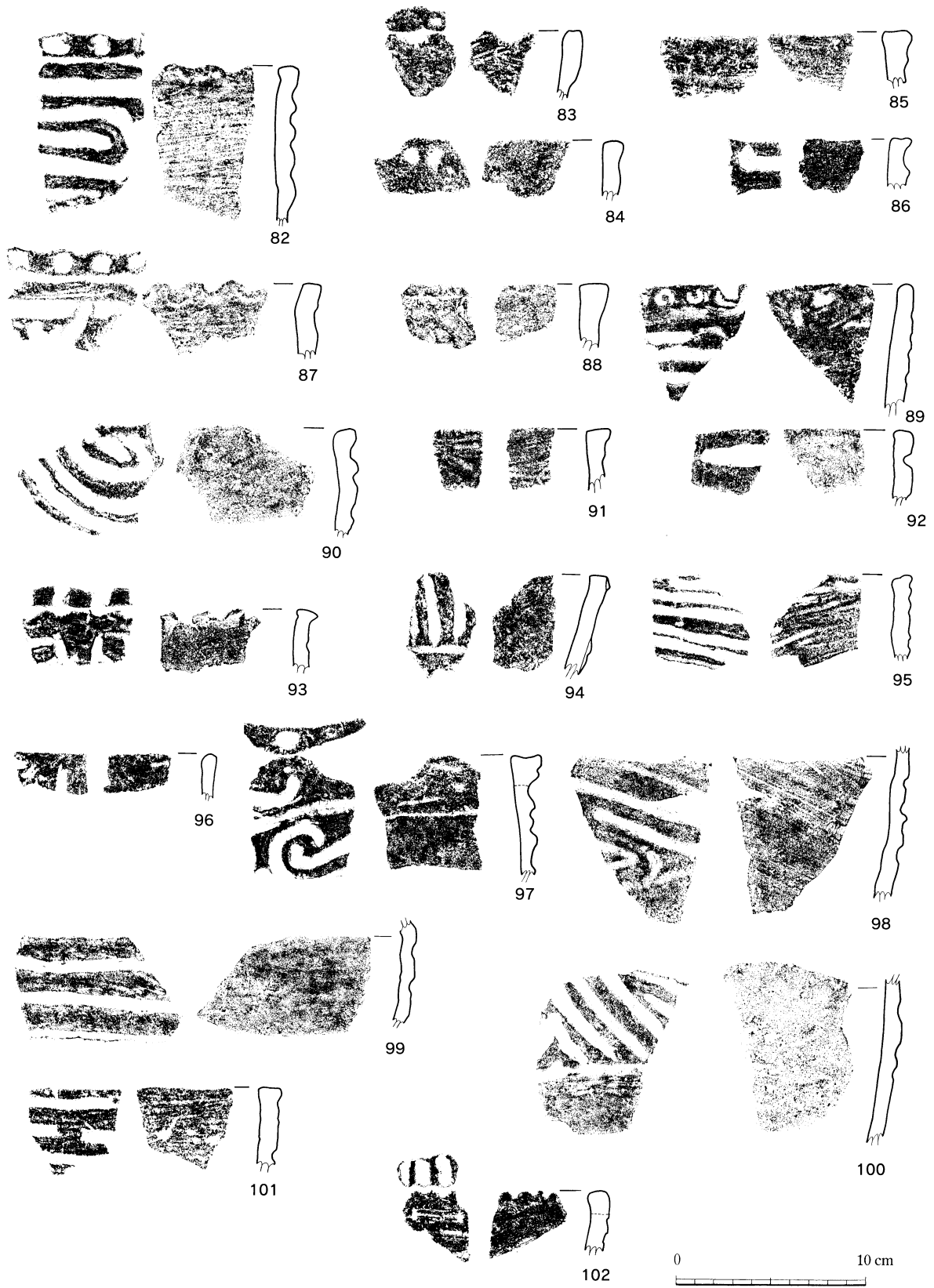
第11類 (103)

この類は口唇部に粘土紐の撚り突起をもち、口縁部に文様が集中するタイプである。

103は撚り粘土紐を口唇部に貼り付け、口唇部には指圧痕で刻んでいる。口縁部の文様は凹線文を箱形に施文、その間を指圧状の凹点文を施している。これは文様の位置等から南福寺式土器に比定される。

第12類 (104・105)

104は無文土器である。口唇部に粘土紐の撚り突起を貼り付けている。105は無文土器である口唇部に刻みのある台形突起を貼り付けている。特徴を示す文様がないがこれは8~10類に位置すると考えられる。



第18図 縄文土器 (8)



第19図 縄文土器 (9)

第13類 (106~110)

この類は貼り付け突帯の上に刻みを施すタイプである。

106の突帯は、口唇部に接する所は高い突帯で、下位の突帯は低い。それぞれ二叉押し引き文を施している。107は口縁部に高い幅の広い突帯に二叉押し引きを施文したのである。108は口唇部に刻みを付け、口縁部の突帯と重なり二叉の連点と凹線の一部がみられる。109・110は口縁の突帯は口唇部と重なり、凹線の刻みを付け、下位に幅の狭い凹線を施している。

これらは9~10類の文様をもつものでありバリエーションの可能性が高い。

第14類 (111~116)

この類は、文様が沈線で構成されている土器である。

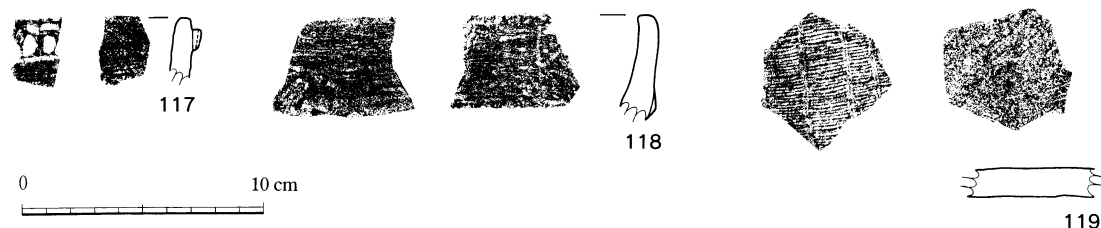
111は器形が山形口縁で若干胴が張る深鉢である。文様は口唇部縁に刻み目を付け、その下位に沈線の打ち込み始点と離し始点に強調を付けた短線を横位に構成している。112は口唇部と口縁部に鋭い短沈線を横に施している土器である。113は平坦口唇部に粘土紐の撚り突起を付け、外面には横の沈線文を短線で連続して施している。114は厚みのある口唇部に連点があり、外面には沈線をほどこしている。115は平坦な口唇部をもち、外面には沈線と点の文様を構成している。116は平坦な口唇部をもち、深い沈線を横に施している。

これらは、沈線で構成しているが文様構成や突起のある口唇部からみて第9~11類のバリエーションと考えられる。

第15類 (117~119)

この類は、縄文晩期の遺物である。

117は刻目突帯土器の口縁部である。突帯は口唇部より下位に施したものである。118は口縁下位に張り出し状に突帯を付けたボール状の浅鉢とおもわれる。器面は横にヘラナデ調整をしている。胎土は粒の粗い土を使っている。119はボール状浅鉢の底部で、筵目の組織痕がみられる。



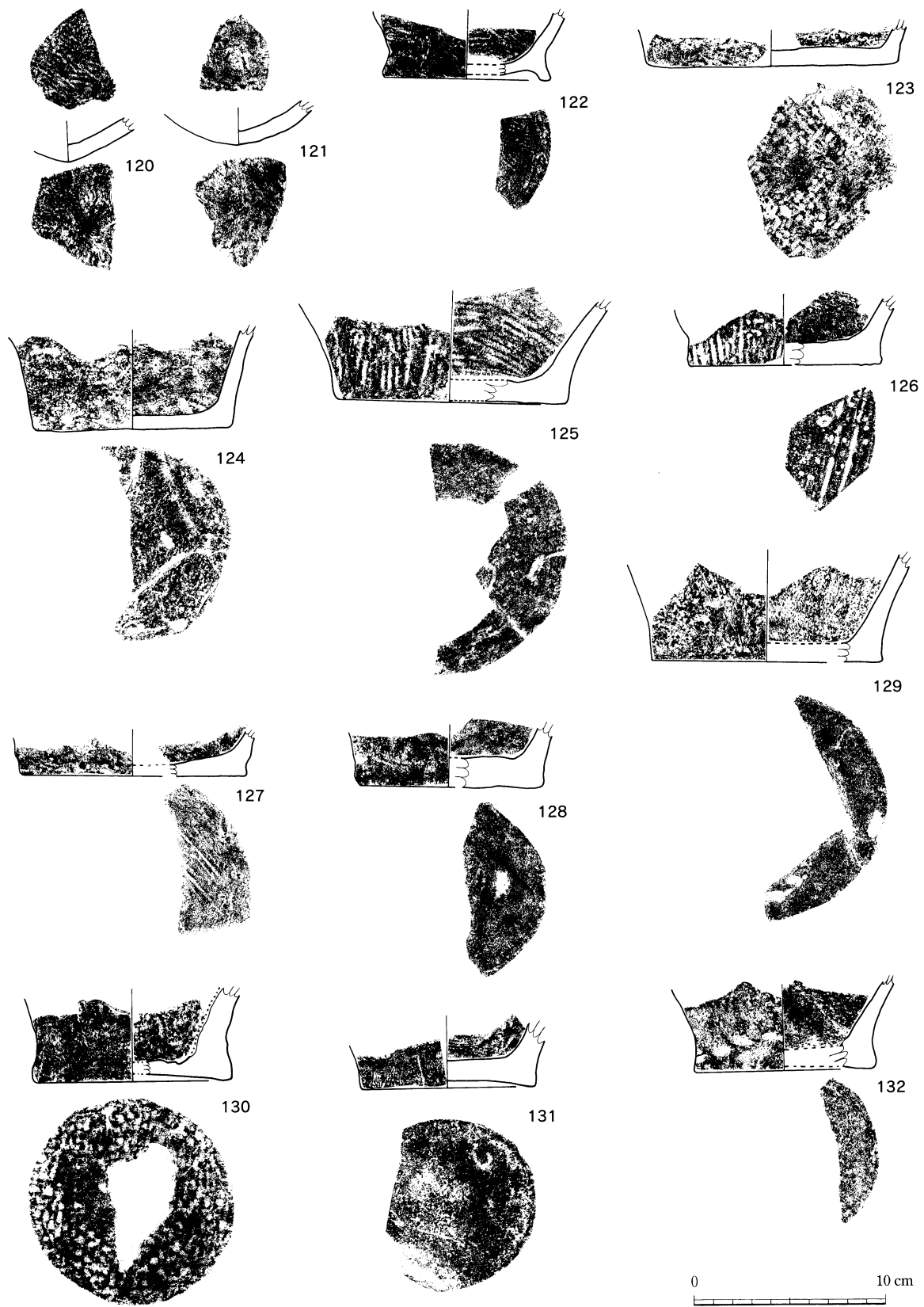
第20図 縄文土器 (10)

底部 (120~136)

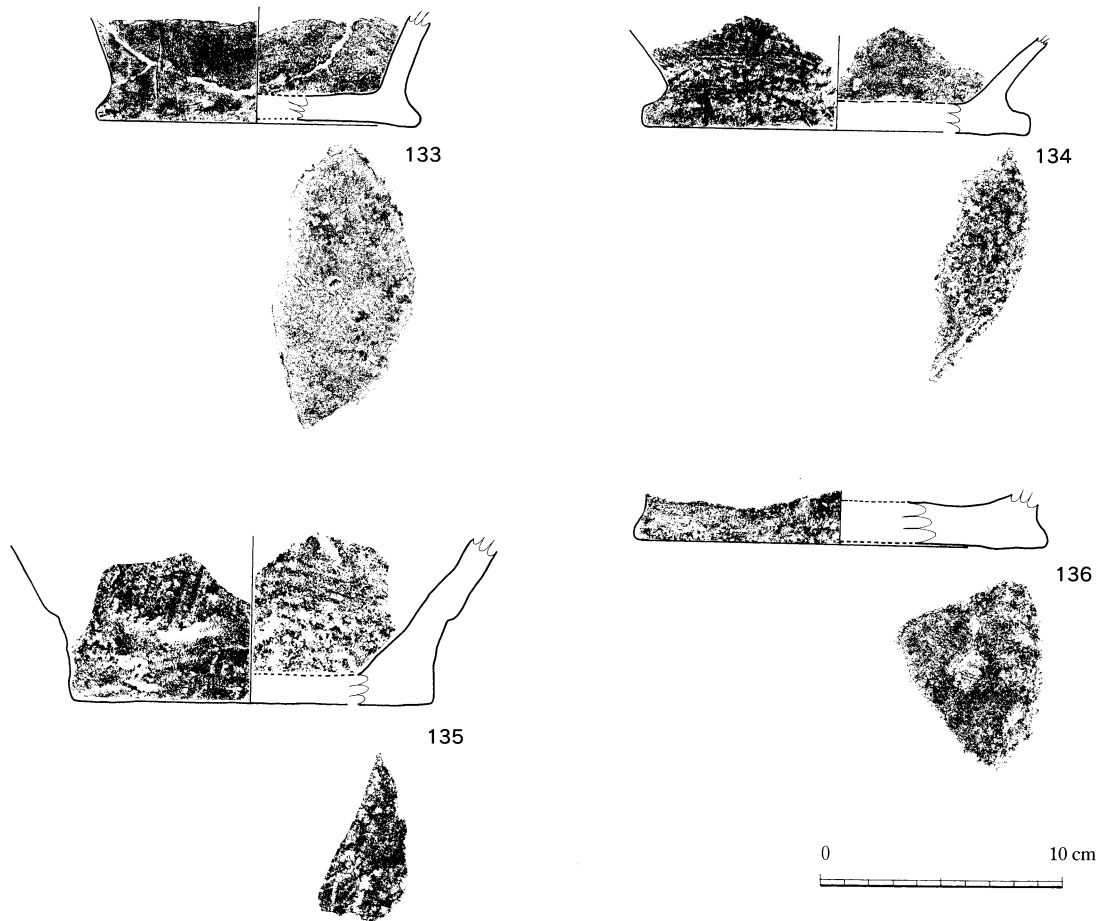
120は薄手の尖底である。器面は貝殻条痕の調整で、硬質焼成されている。121は薄手の丸底であり、器面は研磨状に調整されている。これらは第3・4類の底部と考えられる。

122は突帯を貼り付けた状態の高い上げ底である。内外面は貝殻条痕で調整されている。123は薄手の平底で、底の外面に網代痕がみられる。124は薄手の平底で、底の外面に木葉痕がみられる。これらは、器形的に第5類が比定される。

125・126は立ち上がり部が少し厚手で、外面に貝殻条痕が縦に施されている。特徴は底面縁に



第21図 縄文土器 (11)



第22図 縄文土器 (12)

若干張り出しをもっている。126には木葉痕がみられる。127は若干張り出しがみられ底外面に貝殻条痕がみられる。128・129は厚手の土器で、若干張り出しをもっている。130～132は厚手の土器で、若干上げ底である。130には網代痕がみられる。これらは、器形的に第6類が考えられる。

131・132は厚手の土器で、低い張り出しが広くつくられている。胎土には滑石が混入し、底面は丁寧に調整されている。これらは第7・8類が考えられる。

135は器壁が厚く作られた土器である。器面には貝殻条痕が施されている。136は丸味がある大きい張り出しがある平底である。これらは第15類に比定される。

(2) 石器 (137~171)

137~142は石鏃である。137は、丁寧につくられた凹基式でやや小形である。石材は気泡の少ない黒色の黒曜石である。138は曲がった剥片を粗雑につくられたもので、主要剥離面が残っている。型式は凹基式である。石材は不純物が少し混ざり、少し透き通るアメ色の黒曜石である。桑ノ木水流産と思われる。139は粗雑につくられたもので一部欠損している。型式は凹基式である。石材は不純物が少し混ざり、少し透き通るアメ色の黒曜石である。140は丁寧につくられた凹基式でやや小形である。石材は気泡の少ない黒色の黒曜石である。頭部は一部欠損している。141は丁寧につくられた長めのもので、基部は欠損している。石材は不純物が少し混ざり、若干透き通るアメ色の黒曜石である。142は一部主要剥離面が残る形の調整剥離をしている。基部は欠損している。石材は鉄石英である。

143は錐である。この石器は厚みのある剥片を利用し、両面加工で刃部をつくっている。石材は頁岩と思われる。

144は剥片を加工し始めたもので、主要剥離面が残った石鏃の未製品である。石材は不純物が多い黒曜石である。

145は一部が欠損した横型石匙である。加工は材質の性格のため、粗めの剥離調整になっている。材質は白い大きめの不純物が混ざっている黒色の強い黒曜石である。原産地は上牛鼻の可能性が高い。146は横型石匙である。加工は丁寧な両面剥離で直線状の刃部をつくっている。石材は、鈍い光がある灰黒色で少し不純物が混入している。玉髓の可能性が高い。

147は横型石匙で白い淡白石の石材である。石材の性格状やや粗い両面加工がみられる。

148はスクレイパーである。石材は白い不純物を含む特徴である上牛鼻産の黒曜石と思われる。

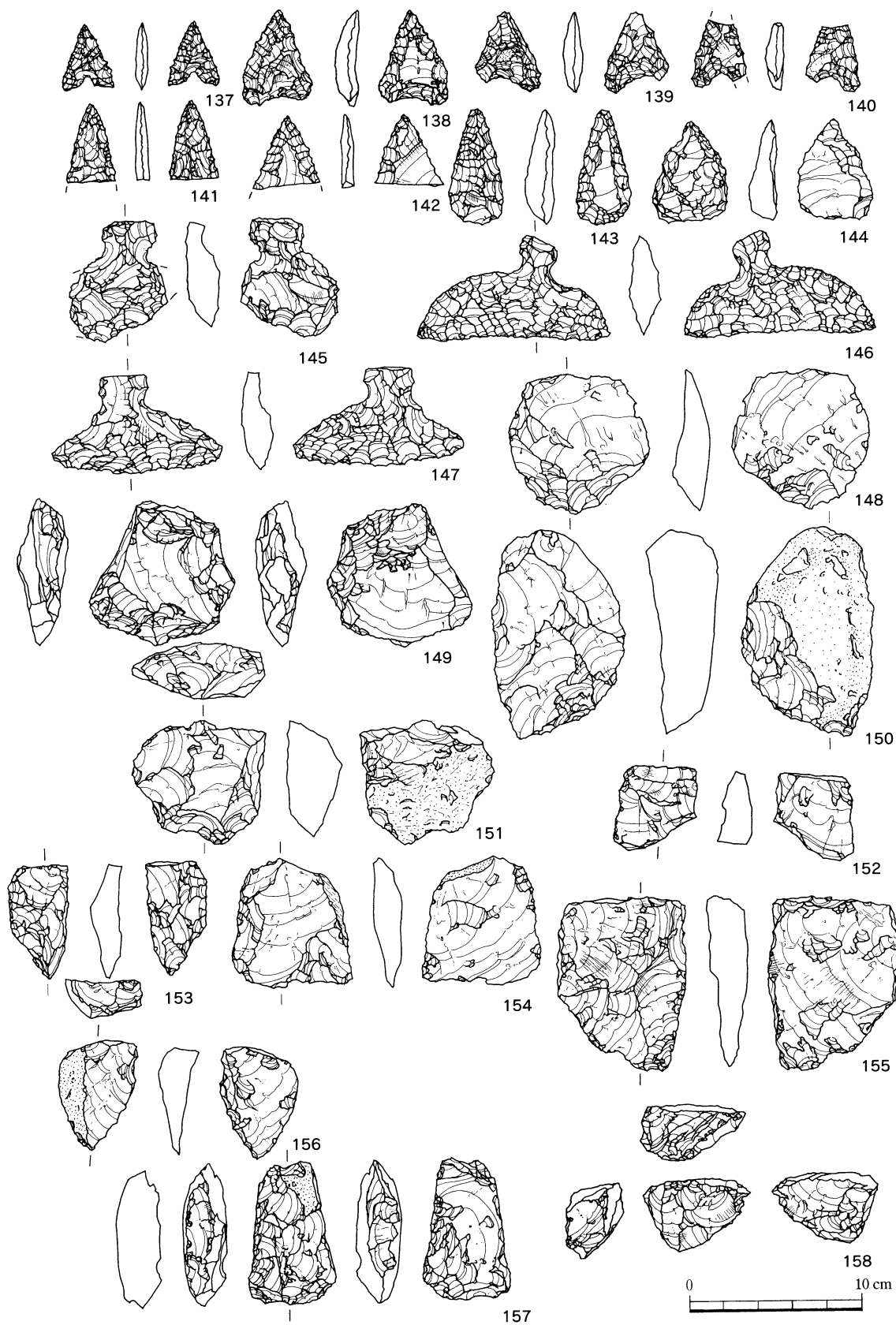
149は上下を両面加工した楔形石器と思われる。石材は、気泡や不純物が多い三船産と思われる。

150は自然面が残した剥片を両面加工したスクレイパーである。刃部は若干潰れている。石材は三船産と思われる。151は自然面を残した剥片を片面加工したスクレイパーである。石材は三船産黒曜石と思われる。152は片面加工をしたスクレイパーである。材質は白い大きめの不純物が混ざっている黒色の強い黒曜石である。原産地は上牛鼻の可能性が高い。153はサイドを使用した片面加工のスクレイパーである。石材は三船産黒曜石と思われる。154は薄手の剥片を利用したスクレイパーとおもわれる。石材は三船産黒曜石と思われる。155は使用痕のある剥片である。石材は三船産黒曜石と思われる。156は自然面を残した剥片を片面加工したスクレイパーである。

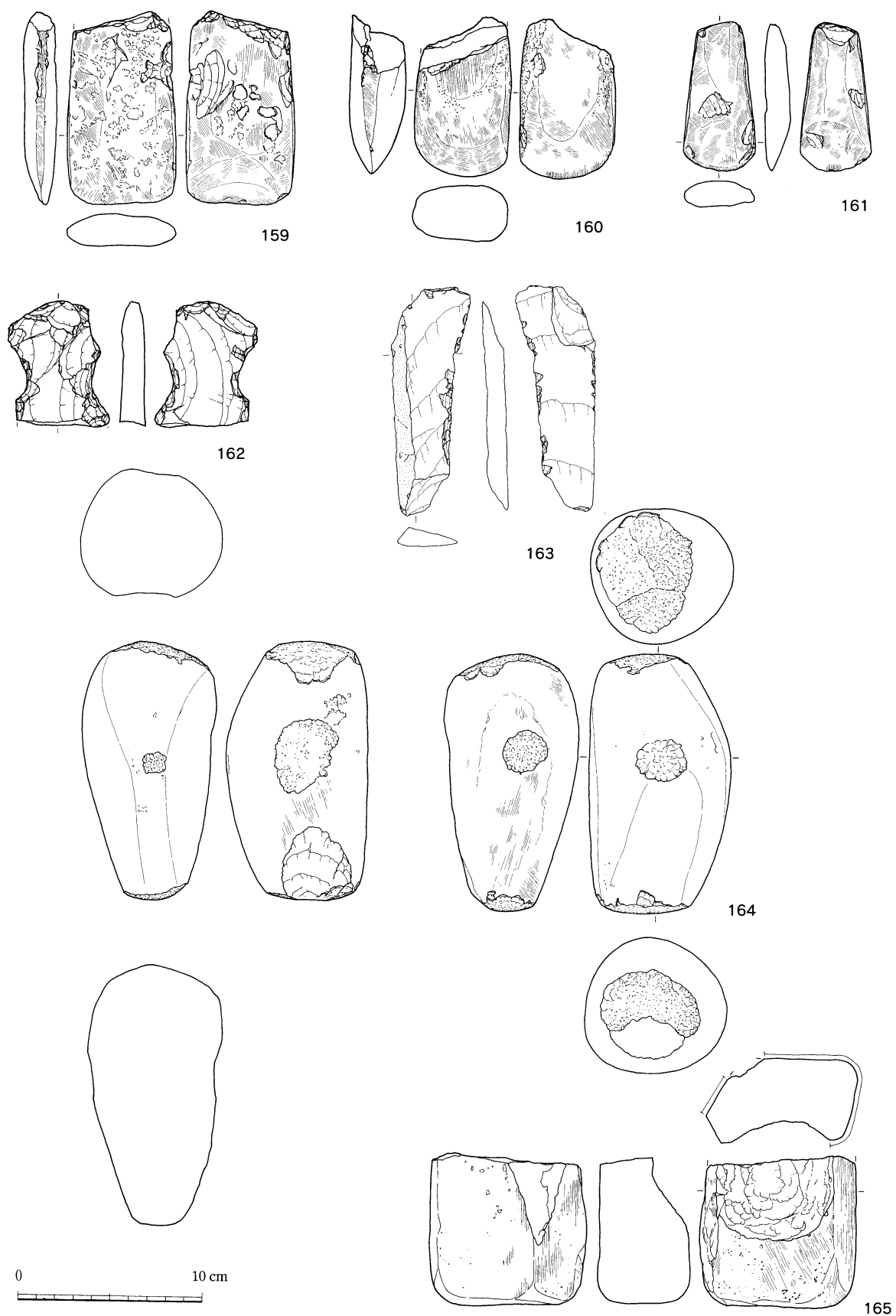
157は両端を両面加工した楔形石器と思われる。石材は白い大きめの不純物が混ざっている黒色の強い黒曜石である。原産地は上牛鼻の可能性が高い。

158は残核である。石材は白い大きめの不純物が混ざっている黒色の強い黒曜石である。原産地は上牛鼻の可能性が高い。

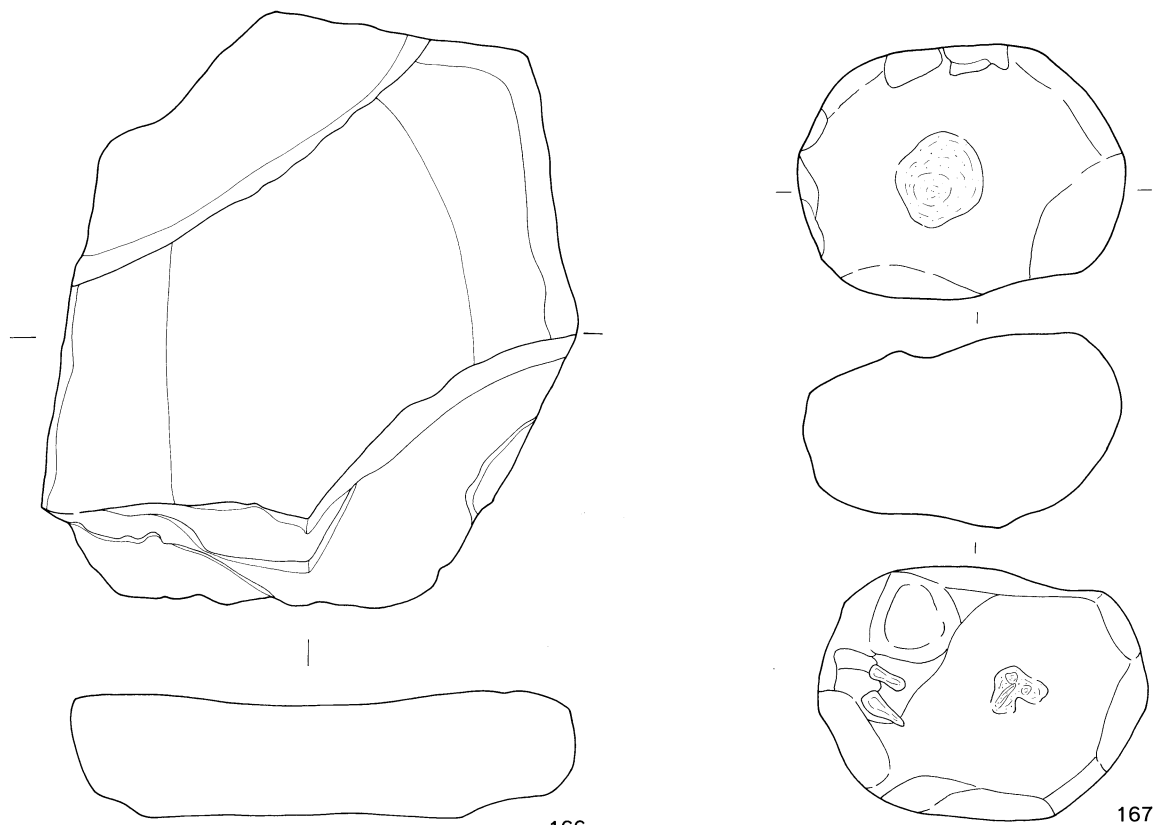
159は扁平な磨製石斧である。形状は短冊形で、頭部は欠損しているが10×6×1.7cmの大きさである。刃部は片刃状で鋭利につくっている。中部より若干上部に柄の装着部と思われる抉りが両部にみられる。使用痕は刃部中央に刃こぼれ状にみられる。石材は安山岩である。160は厚みのある磨製石斧である。形状は頭部が欠損しているが大きさは8.8×5.1×3.1cmも蛤刃状である。調整は丁寧につくられている。石材は堆積の摂理がみられる安山岩質頁岩である。161は小形の磨製石斧である。形状は頭部が狭く刃部が広い8.0×4.9×1.4cmである。刃部は片刃状になり、側部は面



第23図 縄文時代の石器 (1)

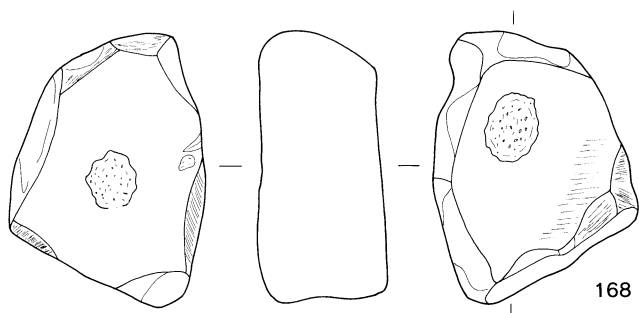


第24図 縄文時代の石器（2）

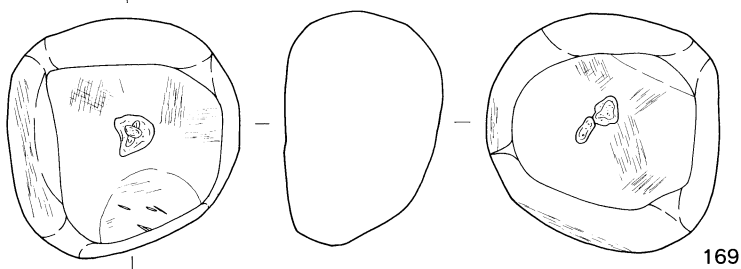


166

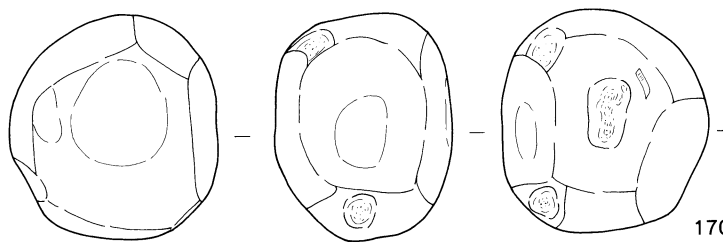
167



168



169



170



第25図 縄文時代の石器 (3)

取りした研磨である。石材は頁岩である。162は両方から抉り込みを施した打製石斧である。片面は母岩から剥いた後の自然面を残してつくっており、刃部側が欠損している。石材は頁岩である。

163は10×3.0×1.1cmの大ききで刃部調整痕があり、スクレイパーと考えられる。石材は安山岩である。

164は両端が敲石使用、4面が凹石使用の石器である。形状は、13.8×7.7×7.2cmで自然円礫を使用している。石材は安山岩である。165は大きく窪ませた凹石である。現状は約3割が欠損していると思われる。大きき及び形状は8.0×8.2×5.3cmで、窪み部は5.4cmの角丸方形で1.1cmの深きがある。調整面等は表の面と側面は研磨があり、下面は敲石に使用した痕跡がある。石材は安山岩である。

166は両端の一部欠損している石皿である。大ききは23.5×21×5.0cmである。石材は安山岩である。

167は形状が凹凸した2面に窪みがみられる凹石である。大ききは13×9.5×7.5cmである。石材は安山岩である。168は石皿の破損した部分を凹石に使用しているものである。大ききは11.5×8.2×5.0cmである。石材は安山岩である。169は凹石使用と磨石使用の石器である。大ききは10×9.5×6.0cmの円礫で平坦な両面を使用面としている。石材は安山岩である。170は9.5×9.0×7.2cmの円礫を利用した凹石使用と磨石使用の石器である。石材は安山岩である。

171は大珠である。現状は半分欠損したもので縦3.5cm、幅2.0cm、厚み1.3cmを計る。形状は中に約9mmの円孔を通し、表面は蒲鉾状に、裏面は上面幅が5mm、底面幅が2mmの溝を設けている。また、復元形状は長楕円形をなしていると思われる。石器の表面は丁寧に磨き、つるつる感の手触りがある。石材の色は、表面が灰黒茶褐色で濃淡がみられるが、欠損面は灰黒色である。欠損面を顕微鏡で見ると石英質に類似したきらきら光る物質が凝縮している。ヒスイと比較するとヒスイがより細かい。蛇紋岩と比較すると類似性がある。また、光沢及び手触り感は滑石に類似している。しかし、つるつる感は滑石にも類似しているが、欠損面は類似していなく硬質である。よって、この石材は、詳細の分析が必要となるが、現在の判断は、顕微鏡観察による蛇紋岩と思われる。



第26図 縄文時代の石器（4）大珠

2 弥生時代 (172~194)

この時代の遺構は確認できなかった。

ここでは、A・B・Cの弥生時代の遺物をまとめて紹介する。内訳は、土器が172~194で、石器は195~198である。

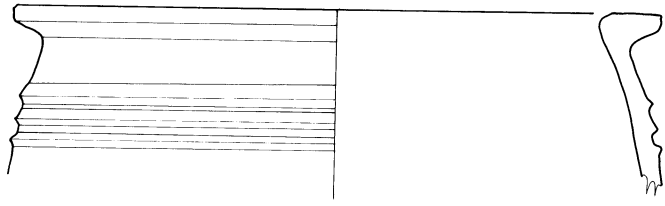
(1) 土器 (172~194)

172はL字口縁の甕形土器である。口唇端部には沈線、外面には波状文の上に3条の絡状突帯が施されている。時期は中期前半で、系統は瀬戸内系と思われる。173はL字口縁の甕形土器である。この土器は口唇端部に沈線を施し、内外面は横位の刷毛目調整をしている。時期は中期中葉とおもわれる。174はやや立つL字口縁をもつ甕形土器である。器面にはハケ目調整がみられる。胎土には金雲母が混入され大隅半島でつくられた可能性が高く山ノ口式に比定される。175は口縁部の内側に舌状の張り出しがみられる甕形土器である。外側の口縁端部には沈線がみられ、口縁部の形態から山ノ口式に比定される。176は大型甕の口縁部である。器形は頸部で「く」の字状に折れ、頸部に台形突帯を施している。器面調整はハケ目である。後期の三津永田式に比定される。177は甕形土器である。器形は頸部で「く」の字状に折れ、頸部に粗い三角突帯を施している。器面調整はハケ目である。後期の三津永田式に比定される。178は大型甕の口縁部である。器形は頸部で「く」の字状に折れ、頸部に丁寧な三角突帯を施している。器面調整はハケ目である。後期の三津永田式に比定される。179は甕形土器の底部で、中期特有の充実高台である。底面は平坦に調整している。180は甕形土器の低い充実高台である。底面は若干上げ底である。181は甕形土器の底部で、高台部を上底にしている。時期は後期に比定される。182は甕形土器の高台底部で、高台部を上げ底にし脚状になっている。時期は後期に比定される。183は甕形土器の脚状にした底部である。時期は弥生後期に比定される。

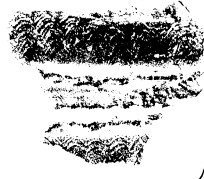
184は広口壺の口縁部である。口唇部には沈線を施し、器面は丁寧にハケ目調整をしている。185は口縁部が大きく外開きをする壺の口縁部である。口唇部には沈線を施し、器面は丁寧にハケ目調整をしている。186は直行する口縁をもつ壺形土器の口縁部である。口縁端部の形態はL字口縁である。器面調整はハケ目である。187は断面M字突帯をもつ壺形土器である。器面はハケ目調整で、胎土には金雲母が混入されている。188は壺形土器の胴部に三角突帯を3条廻らしている土器である。器面は研磨気味に調整している。184~188は中期に比定される。189は壺形土器の底部で、底面は広く平坦になっている。190は壺形土器の底部で、底面は若干上げ底になっている。191は壺形土器の底部で、底面は上げ底になっている。191は壺形土器の底部で、底面は狭く平坦になっている。189~192は丁寧な器面調整で、中期・後期相当のものと思われる。

193・194は高坏である。193は口縁部を平坦につくり、頸部が外反し、肩部で「く」の字状になり、胴部は丸味をおびた形態の坏部である。なお、内面の口縁部には稜線が認められる。器面調整は、外面が研磨気味で内面はハケ目調整である。194は口縁部が肩部から内側に丸味をもち外反する坏部で、内面は直角気味に折れている。器面調整は丁寧なハケ目である。これらの時期は中期相当のものに比定される。

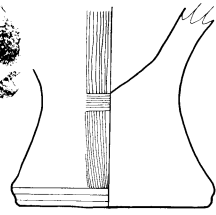
以上、弥生時代の遺物は中期前半から後期まで出土している。なお、出土状況は古墳時代の遺構からもみられた。



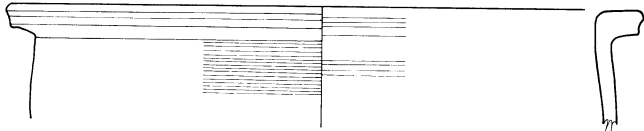
172



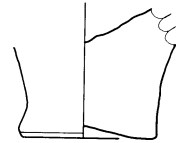
表面



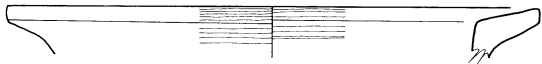
179



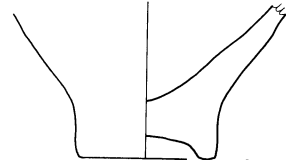
173



180



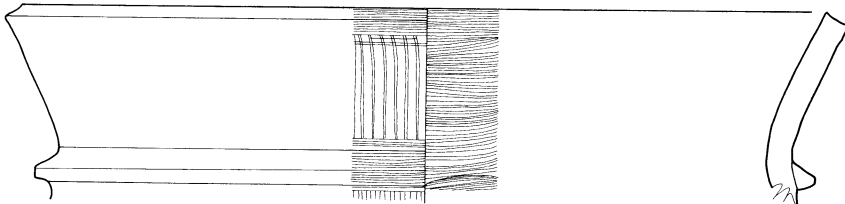
174



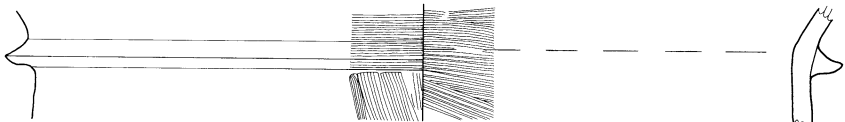
181



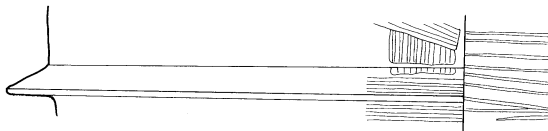
175



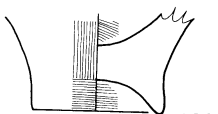
176



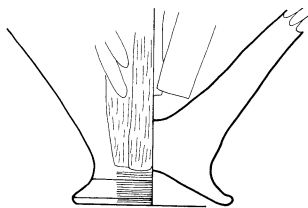
177



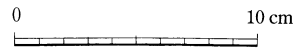
178



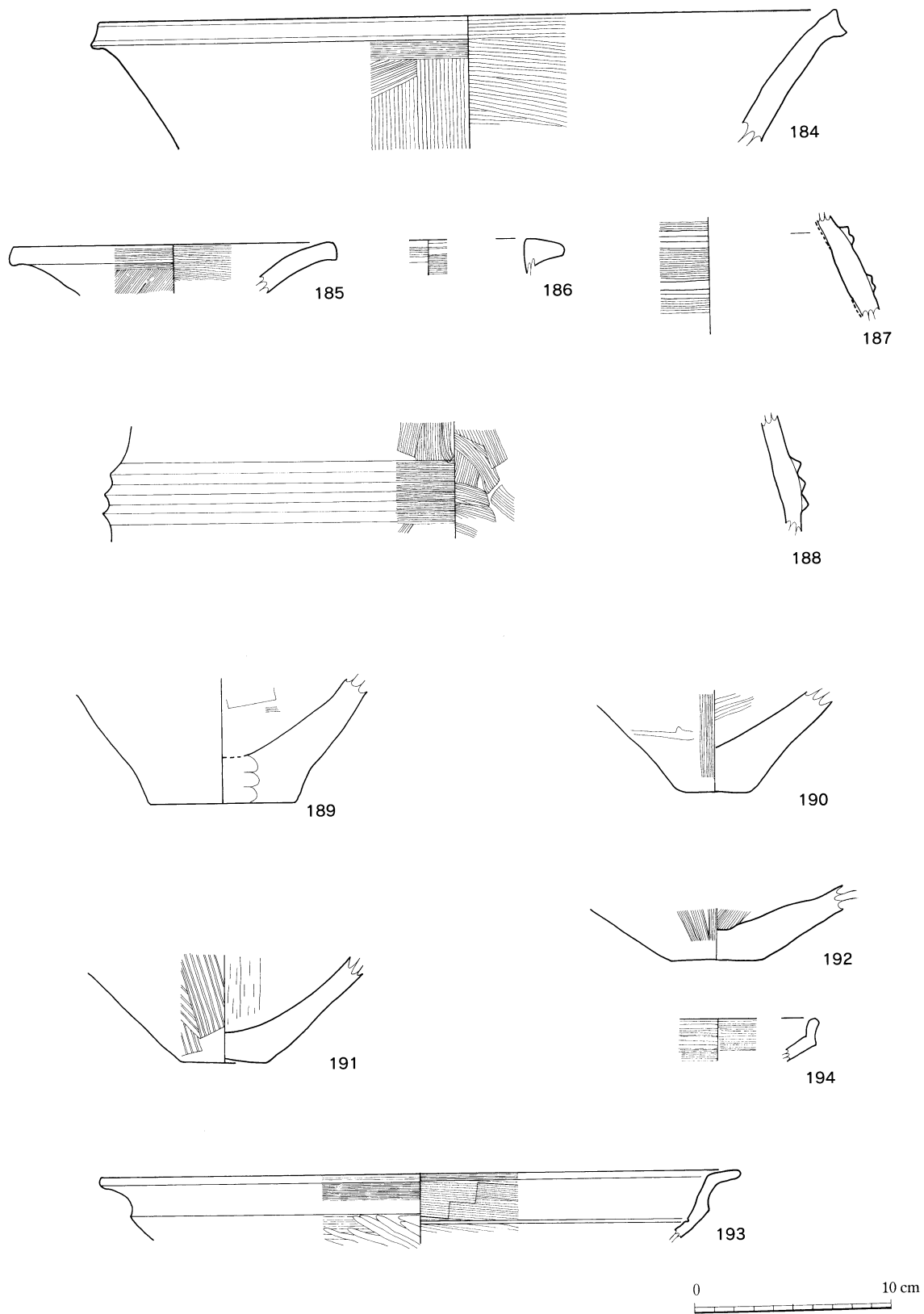
182



183



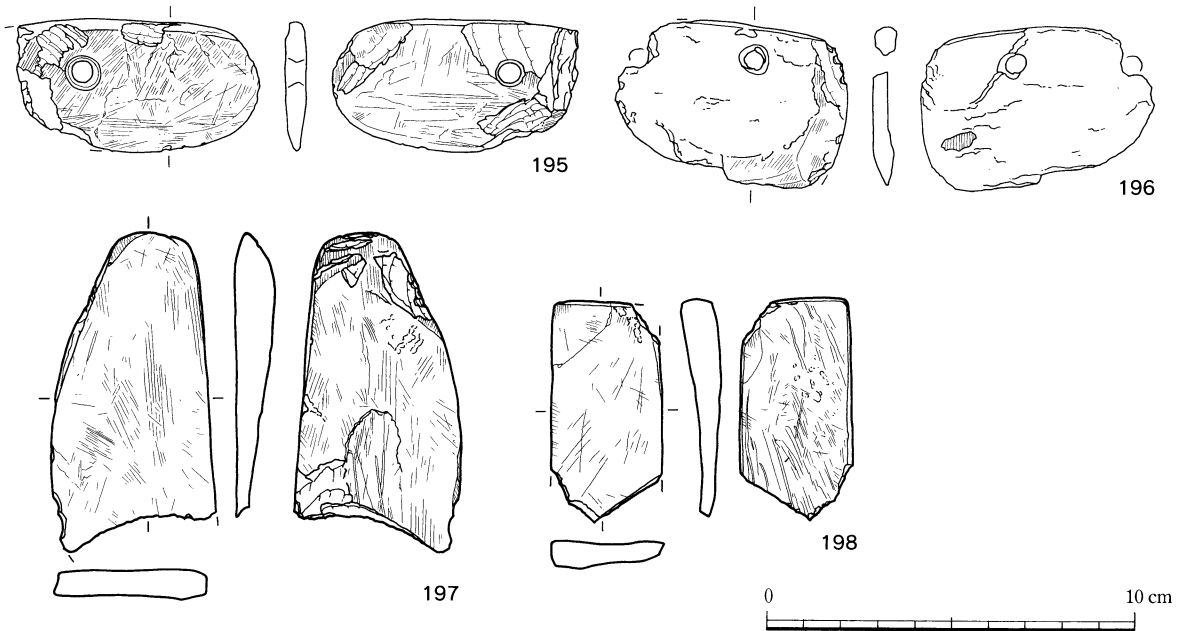
第27图 弥生土器 (1)



第28图 弥生土器 (2)

(2) 石器 (195~198)

195は5.5cmに半分欠損した石包丁である。形状は上下の幅が3cm、厚み5mmである。紐通し孔は外面が8mmと6mmで中位は5mmを計る。刃部は側部から下部にかけて鋭利につくり、背部は角を研磨し丸味を作り出している。石材は頁岩である。196は6.3cmに半分欠損した石包丁である。形状計測は上下の幅が3.5cm、厚み5mmである。紐通し孔は外面が8mmと6mmで中位は5mmを計る。刃部は側部から下部にかけて鋭利につくり、背部は角を研磨している。石材は頁岩である。197は欠損した砥石である。形状計測は8.8×4.5×1.1cmで厚い部分は細くなっている。使用部は両面であり擦り切れた状態である。石材は頁岩である。198は欠損した砥石である。形状計測は6.0×4.0×0.9cmで角張っている。使用部は両面である。石材は頁岩である。

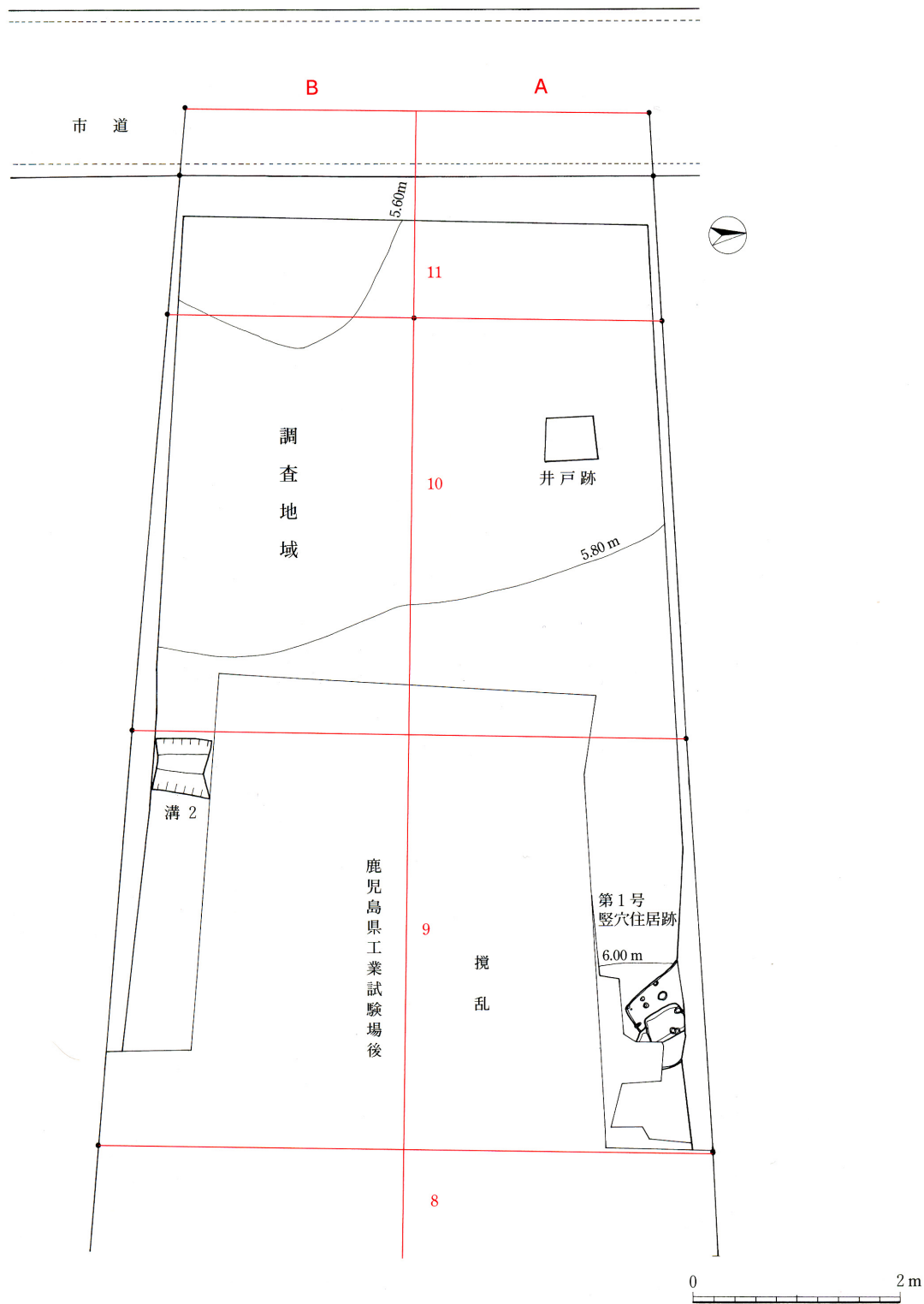


第29図 弥生時代の石器

3 古墳時代の遺構と出土遺物

(1) A遺跡 (AB-6~11区)

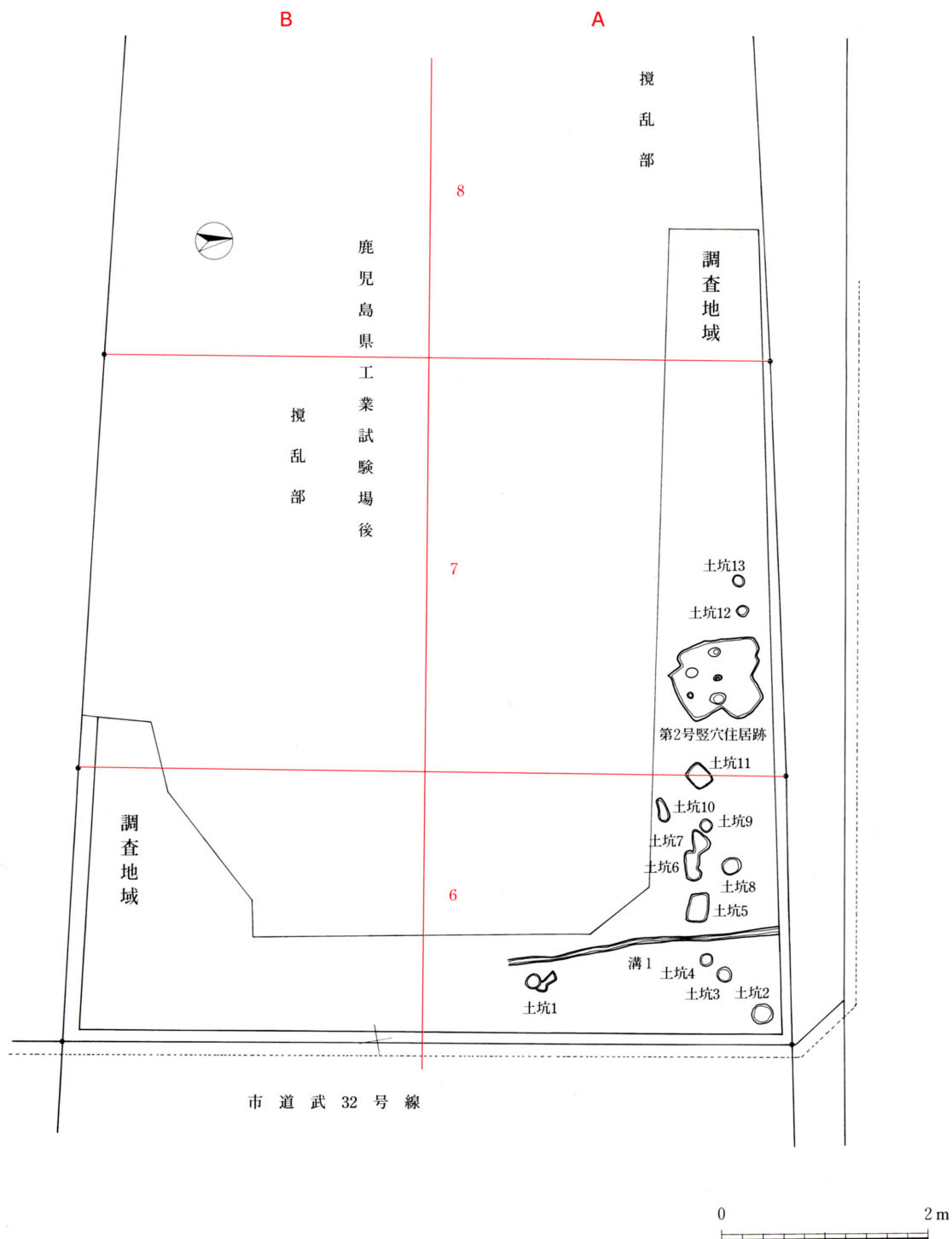
この地区は第30・31図武A遺跡の遺構配置 (1)・(2) で示しているがごとく、鹿児島県工業



第30図 武A遺跡の遺構配置 (1)

試験場跡地のため、6～9区の大半が壊されていた。地形は11区が最も低く標高5 m60cmで、9区が標高6 mであった。

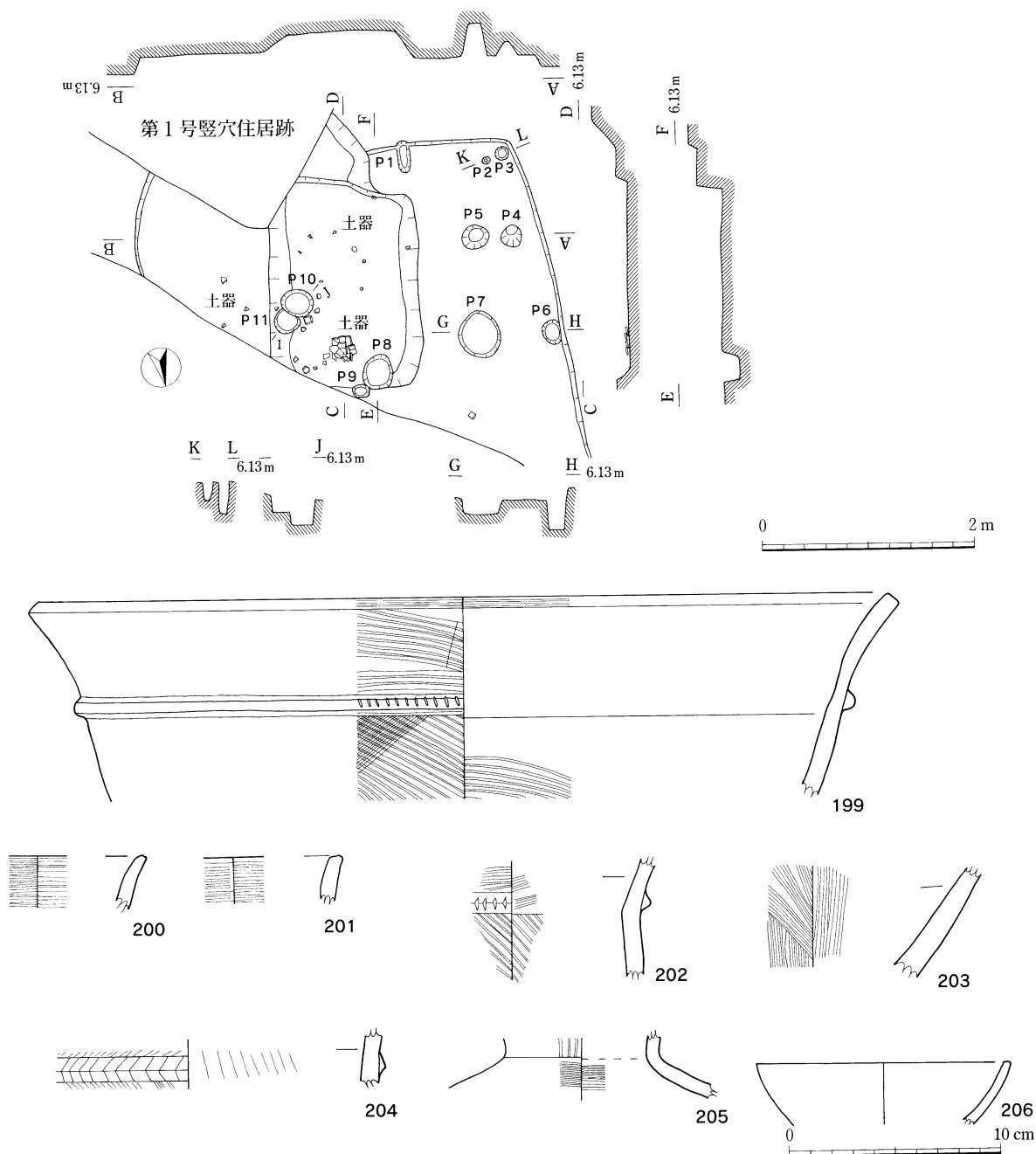
古墳時代はA 9に第1号竪穴住居跡、B 9に溝が1本、A 7に第2号竪穴住居跡と土坑が2基、A 6に溝が1本と土坑が11基検出した。



第31図 武A遺跡の遺構配置 (2)

ア 第1号竪穴住居跡とその出土遺物 (第32図)

A6区の中央部で標高6mの所に検出している。調査は2/3の検出で1/3は新幹線用地外にある。この竪穴住居跡の規模は東西3.85m・南北3m+α、深さ40cmでベッド状遺構を持つものである。中央部に南北1.9m・東西1.4m深さ30cmの方形の落ち込みがある。ピットは11本あるがP6とP10が深く柱穴としては使えたと考えられる。他のピットは深さや大きさを柱穴としては



第32図 第1号竪穴住居跡と出土遺物

難点がある。特にP7は浅く広いので土坑的なものであろう。なお、P6は径20cm深さ30cm、P

10は径30cm深さ20cmである。

遺物は方形落ち込みの中に集中ヶ所が見られるほかベッド状遺構に散乱して出土している。

第1号竪穴住居跡とその出土遺物（第32図199～206）

遺物は甕形土器、小形壺、高坏が出土している。

199は甕である。器形は直線的に外に開き頸部で若干締まり、そこに刻目を付けた蒲鉾状の突帯を施している。器面調整痕はハケ目である。200・201は甕形土器の口縁部で横方向のハケ目調整痕がある。202は三角突帯に刻み目がある甕形土器の頸部である。器面調整痕は内外面ハケ目である。203は甕形土器の底部近い胴部である。器面調整痕は内外面ハケ目である。204は三角突帯に摘み目がある絡状突帯の甕形土器の頸部である。器面調整痕は内外面ハケ目である。205は小形壺で、坩の類に含まれる。口縁部は直に立ち上がり、頸部より肩部が張る器形である。器面調整はハケ目である。206は丸味の強い小形高坏の坏部である。器面調整は丁寧なナデ調整で研磨気味である。胎土は細砂を使用している。

イ 第2号竪穴住居跡（第33図）

第2号竪穴住居跡はA6区に位置する。形状は4面に方形の張り出しをもつもので、南北4.2m東西4.7m、竪穴の深さが25cmである。竪穴内にはピットが5本あるが、柱穴にあたるものは中央のP3（径35cm深さ45cm）である。他は土坑的なものでP1には207の甕形土器が検出した。また、竪穴内には土器が散在して出土した。

第2号竪穴住居跡の出土遺物（第33・34図207～223）

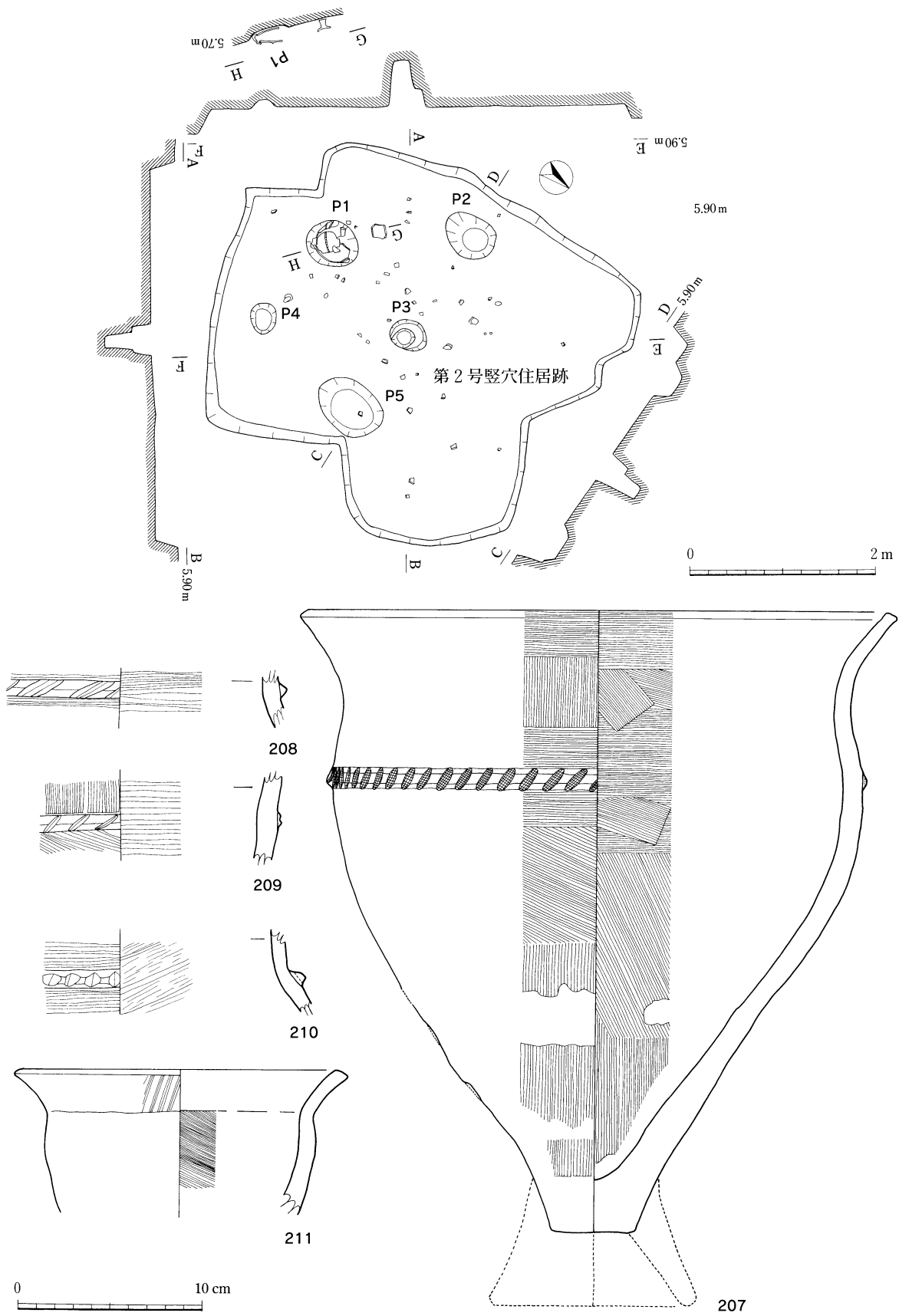
207は甕形土器である。器形は口縁部が大きく外反し、頸部が締まり、肩部が若干張り、胴部が直線的に底部に延びている。底部は平坦で底面に脚部をつけた痕跡がみられる。突帯は三角突帯で、その突帯には布で巻いたヘラで斜めに刻みを施している。器面調整はハケ目が内外面ともみられる。208・209・210は頸部の三角突帯に刻みを施している甕形土器である。この中の210は幅の広い刻み目がある。211は口縁部が大きく外反した甕形土器である。器面調整はハケ目である。212は口縁部が上部で外反し、下部に細い三角突帯を施す甕形土器である。器面調整は内外面ハケ目である。213～215は口縁部が外反する甕形土器である。器面調整は内外面ハケ目である。214以外は白色粘土系統の細砂粘土で錦江湾周辺にみられる赤色系統の成川式土器とは異なる。

216～220はハケ目調整痕のある底部である。底部の作り方が二種類あり、217・218は平坦の底に脚部を付け、219・220は尖り底に脚部を付けている。221はハケ目調整痕のある甕形土器の脚部である。これらはヒビが入り二度焼成された状況がうかがえられ、煮炊き用の器であることが証明されている。

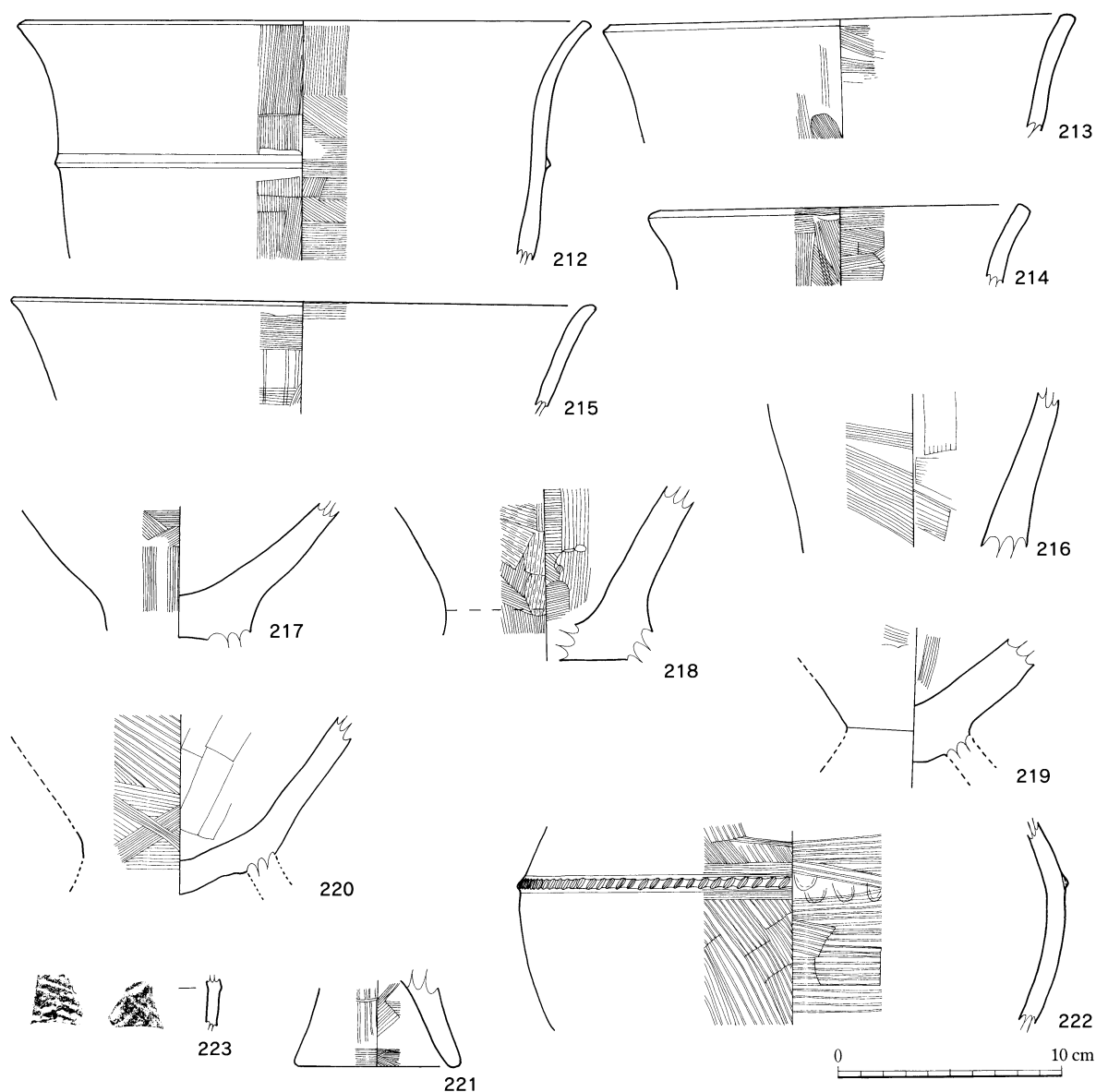
222は壺形土器の胴部である。器形は球状で、胴部のやや上位に蒲鉾形でやや細身の突帯を貼り付け、細かく刻みを施している。器面調整は外面が丁寧なハケ目で、内面がやや粗いハケ目調整をしている。

223は須恵器の小形の甕である。内面は青海波、外面は格子の敲き目がある。小破片のため部位は判断できない。

以上が第2号竪穴住居跡の出土遺物である。



第33图 第2号竖穴住居跡と出土遺物



第34図 第2号竪穴住居跡の出土遺物

ウ 土坑群とその出土遺物 (第35図) (A6区1~11, A7区12・13)

土坑群はA6に11基A7に2基, 計13基が検出された(土坑1を分けると15基)。

土坑1はa・b・cに分かれている。aは70×40×15cmで台形をしている。bは直径が50cmの円形で深さ15cmである。cは直径が70cmの円形で深さ29cmである。これらには遺物が出土していない。

土坑2は直径が1mの円形で深さ23cmである。遺物は224が出土している。

土坑3は直径が70cmの円形で深さ20cmである。遺物は出土していない。

土坑4は直径が60cmの円形で深さ20cmである。遺物は225~227が出土している。

土坑5は東西1m30cm,南北92cmの方形で深さ30cmである。遺物は228・229が出土している。

土坑6は東西1m45cm,南北70cmの方形で深さ30cmである。遺物は230~232が出土している。

土坑7は長径が1m15cm短径80cmの変則円形で深さ15cmである。遺物は出土していない。

土坑8は直径が85cmの円形で深さ20cmである。遺物は**233**が出土している。

土坑9は直径が60cmの円形で深さ15cmである。遺物は**234・235**が出土している。

土坑10は東西1 m 15cm,南北50cmの隅丸方形で深さ30cmである。遺物は**236**が出土している。

土坑11は東西1 m 15cm,南北95cmの方形で深さ30cmである。遺物は**237~240**が出土している。

土坑12は直径が55cmの円形で深さ8cmである。遺物は出土していない。

土坑13は直径が60cmの円形で深さ8cmである。遺物は出土していない。

土坑群の出土遺物 (第35図224~240)

224・225は甕形土器である。前者は大きく外反し後者は直行する口縁部である。器面調整はハケ目である。**226**は鉢形土器である。口縁部の内側が細くなっている。器面調整はハケ目である。**227**は甕形土器の脚部で器面調整はハケ目である。**228~230**は甕形土器の胴部である。器面調整はハケ目である。**230**は細砂の粘土を使用した白色系の胎土である。**231**は大きく開いた甕形土器の脚部である。**232**は鉢形土器で外面の調整が丁寧なハケ目である。調整面から考えれば蓋の可能性が高い。**233**は甕形土器で外反する口縁部である。器面調整はハケ目である。**234~236**は甕形土器の胴部である。器面調整はハケ目である。**237**は高坏の口縁部である。胎土は細砂を使用している。器面調整はハケ目である。**238**は壺形土器の胴部である。三角突帯がみられ、細砂粘土を使用している。器面調整はハケ目である。**239**は高坏の口縁部である。胎土は細砂を使用した白色系である。器面調整はハケ目である。**240**は高坏の坏部である。厚手で赤く、胎土は粗い粘土が使用されている。内面は丁寧に仕上げ、外面は粗いハケ目である。

オ 包含層の出土遺物 (第36図241~252)

包含層は6から9区は建物跡の脇を調査した範囲のためトレンチ調査の状況であった。遺構は6~9区に検出し、10・11区は発見されなかった。

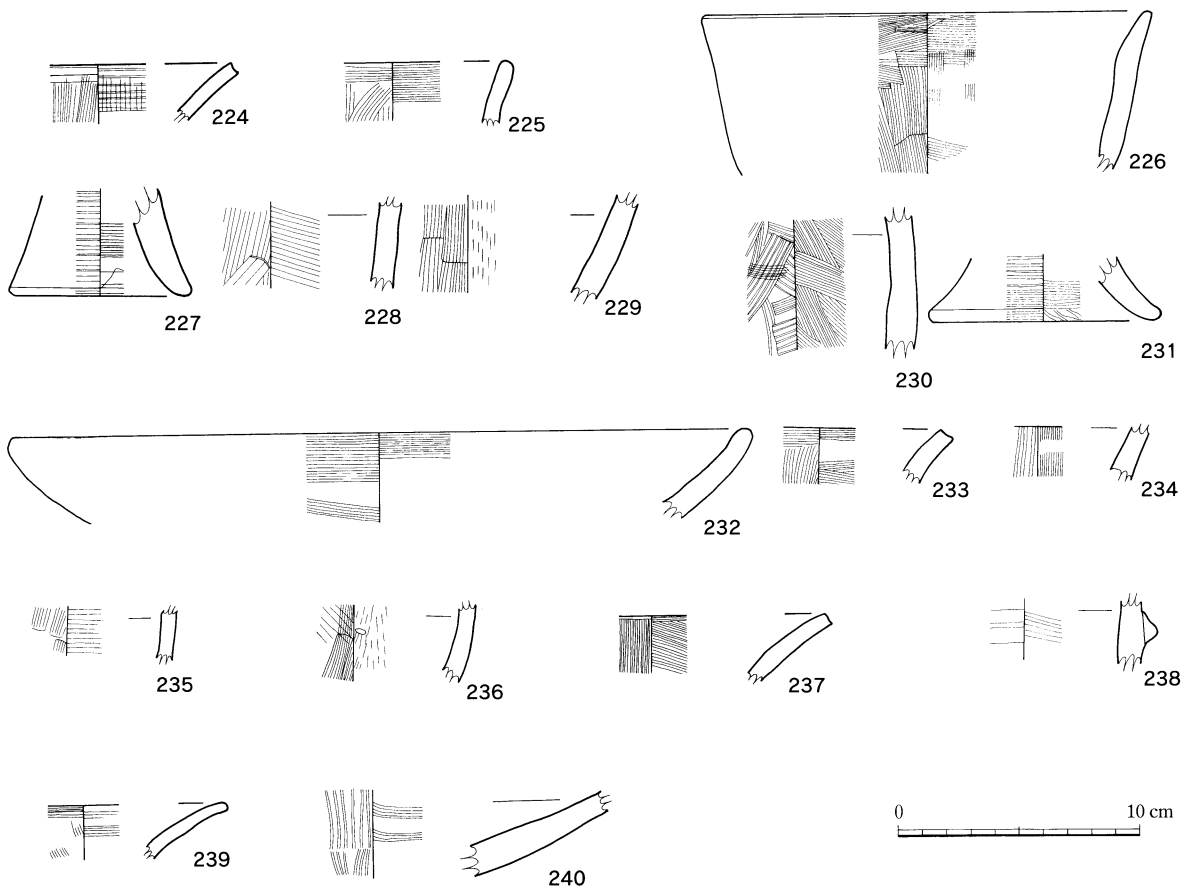
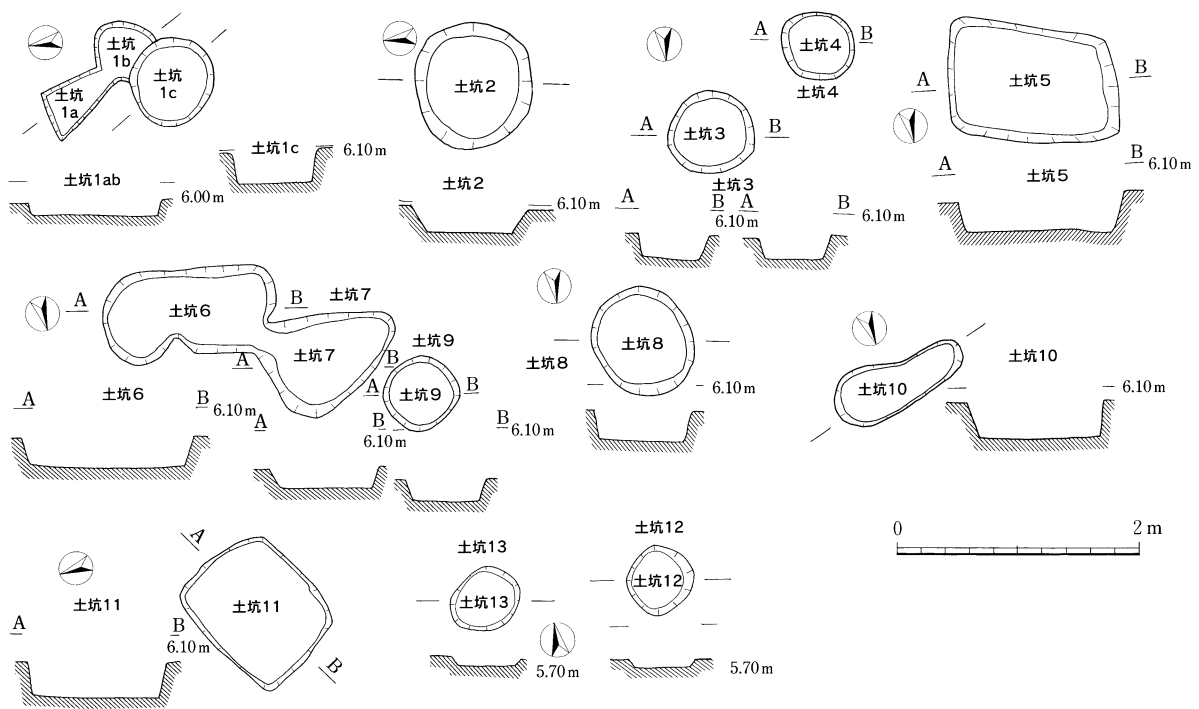
地形は西に向かって低くなり、湿地に近くなっていた。最低の標高は5 m 60cmであった。遺物は散布状態で標高の高いA 6~9区に出土した。

241・242は「く」字に開く口縁部をもつ無突帯の甕形土器である。器面調整は丁寧なハケ目である。**243**はやや厚みのある土器で頸部が「く」に外反する小形の甕形土器である。器面調整は丁寧なハケ目である。**244**は厚手で指整形の跡がある甕形土器の脚部である。器面調整はハケ目である。**245**は大きく広がる脚部が付いた甕形土器の底部である。器面調整はハケ目である。

246は口唇部の面取が良い大きく外反した壺形土器の口縁部である。器面調整は丁寧なハケ目で横位に施している。**247~249**は壺形土器の底部である。**247・248**は小壺で丸底を呈する。手づくね土器の可能性もある。**249**は尖り底で内側の中心部はへら削りとハケ目調整である。

250は小型高坏の脚部である。この高坏は薄手であり、器面調整は丁寧な研磨状のナデ調整である。胎土は細砂粘土を使用している。**251**は筒形高坏の脚部である。脚は碗を反対に被した形状である。器面調整は縦位に丁寧に施している。脚部と筒部の境は円形透かしがみられる。円形透かしの孔は表面が狭く裏面が広い。

252は甕形土器や鉢の形状をもった蓋である。大きさは下部径21cm, 上部径10cm, 器高21.3cmである。形状は掴み部の径は6.5cmで絞られ上部と下部に外反している。掴み部は外面縁に丹塗りがあり、見込縁に黒色の塗料が横位に施されている。掴み部の見込及び外面は研磨状にしたハケ目を横位に施している。形状はかぶせ部にあたる下部が若干膨らみを持ちながらラッパ状に開き、

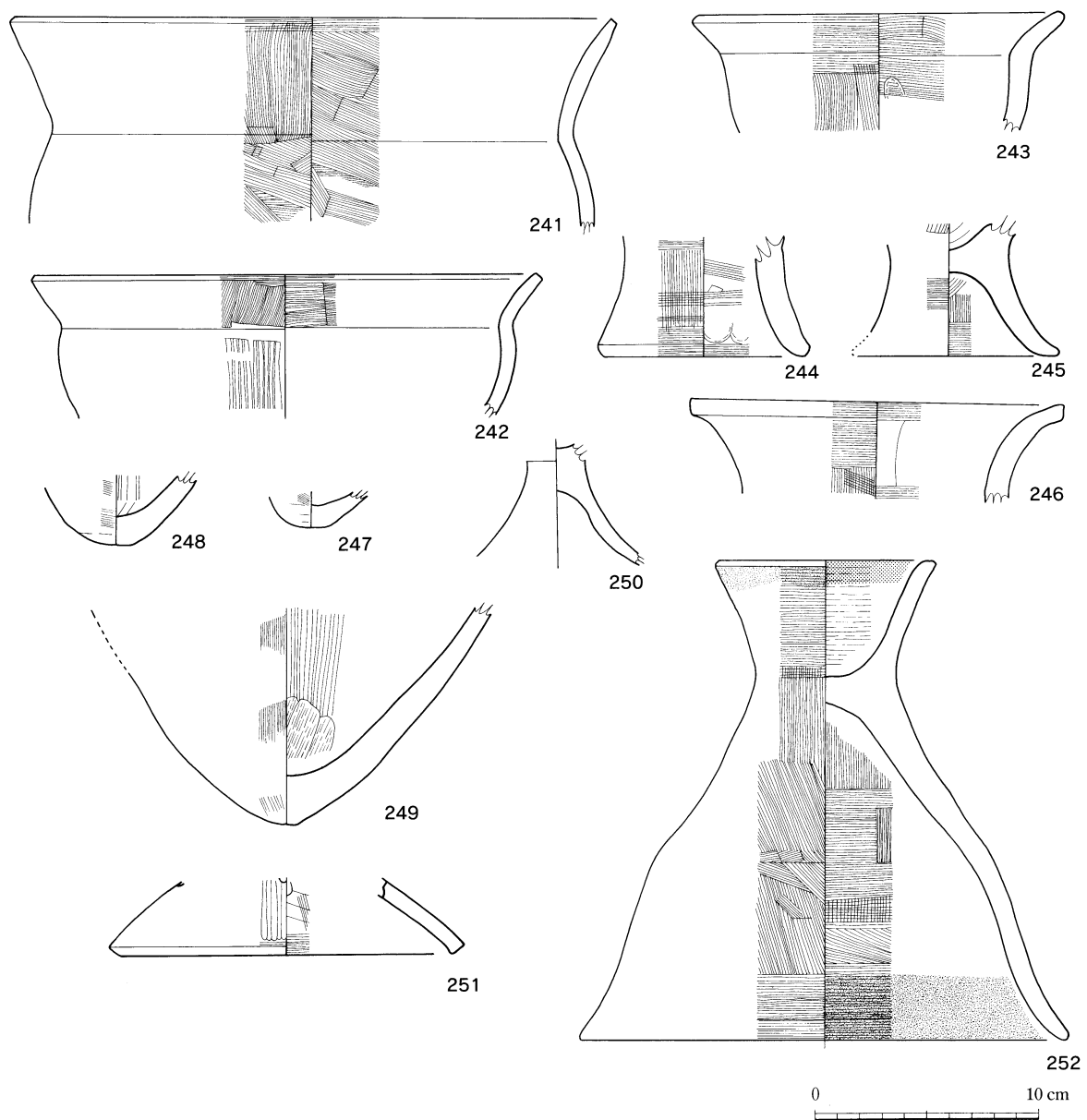


第35図 武A遺跡土坑1～14とその出土遺物

下縁部は少し縮まりながら下縁近くよりさらに開く。器面調整は研磨状にしたハケ目を横位と縦位に施している。内面見込は下縁部の縁に内面に丹塗りが帯状に廻らしている。器面調整は横位のハケ目が主で、中心部は縦位のハケ目である。また、調整状態は見込の内面よりも外面がより丁寧に仕上げている。

よって、この土器を蓋とした理由は、形状は鉢の形状をもっているが、形状、器面調整仕上げ、丹塗りの部位等から判断した。

以上がA遺跡で出土した主な遺物である。他にも小破片などが出土したが、同時期の同様な器種がみられた。



第36図 武A遺跡の出土遺物

(2) 武C遺跡 (AB-3～5区)

この遺跡の調査範囲は、AB-3～5区を中心とする地区である。遺構は竪穴住居跡、大型土坑、土坑、ピット、溝に大別した。

竪穴住居跡とした遺構は、大型の規模で、大きな円形遺構、張り出し等のある変形遺構、土坑が花卉状に付く遺構、ベッド状の張り出しをもつ遺構、方形の遺構のものを上げた。計23基検出した。概ね標高は7mであった。

大型土坑とした遺構は、竪穴住居跡と土坑の中間規模で、方形、円形のものを上げた。計11基検出した。

土坑とした遺構は、小型の規模で細い長方形や楕円形の遺構のものを上げた。計36基検出した。

ピットとした遺構は小規模の円形遺構を上げた。計60を数える。

竪穴住居跡や土坑の遺構検出はB3～A5に幅約30mのベルト状にみられる特徴がある。

部分的にみると溝4はA遺跡との間に検出し、その溝は大型土坑1や土坑19・20・21・31を切り、第6・7竪穴住居跡や大型土坑8・9・10も切り合いがみられる。また、第3・4竪穴住居跡や第8・9・10竪穴住居跡、第13竪穴住居跡と大型土坑11、第16・17竪穴住居跡、第14・15竪穴住居跡、第19・20・21竪穴住居跡、第22・23竪穴住居跡は隣接して検出されている。

そして、溝4は大量の成川式土器が破棄された状態で検出した。

このことから最低3時期が考えられる。

また、溝5は成川式土器と土師器が混入されていたもので古代のものと考えられる。

ア 第3号竪穴住居跡とその出土遺物 (第37・39図253～255)

この住居跡はA5区に検出したが、北側は工事敷地外のため未調査である。形状は方形で、東西が3m10cm、南北が2m60cmである。中央南側に1m×1.4m、深さ18cmの楕円形土坑がある。柱穴は3本あり、P1(径35cm深45cm)とP2(径30cm深さ30cm)が中心柱になる。周辺は建物の基礎のため攪乱部がみられる。遺物の出土状態は第37図に示したとおりである。

主な出土遺物は253～255であった。253は甕形土器の口縁部で外反し、器面調整はハケ目である。254は壺形土器の口縁部で大きく外反し、器面調整はハケ目である。255は高坏の坏部で大きく外反し、器面調整はハケ目である。これらは成川式土器に比定する。

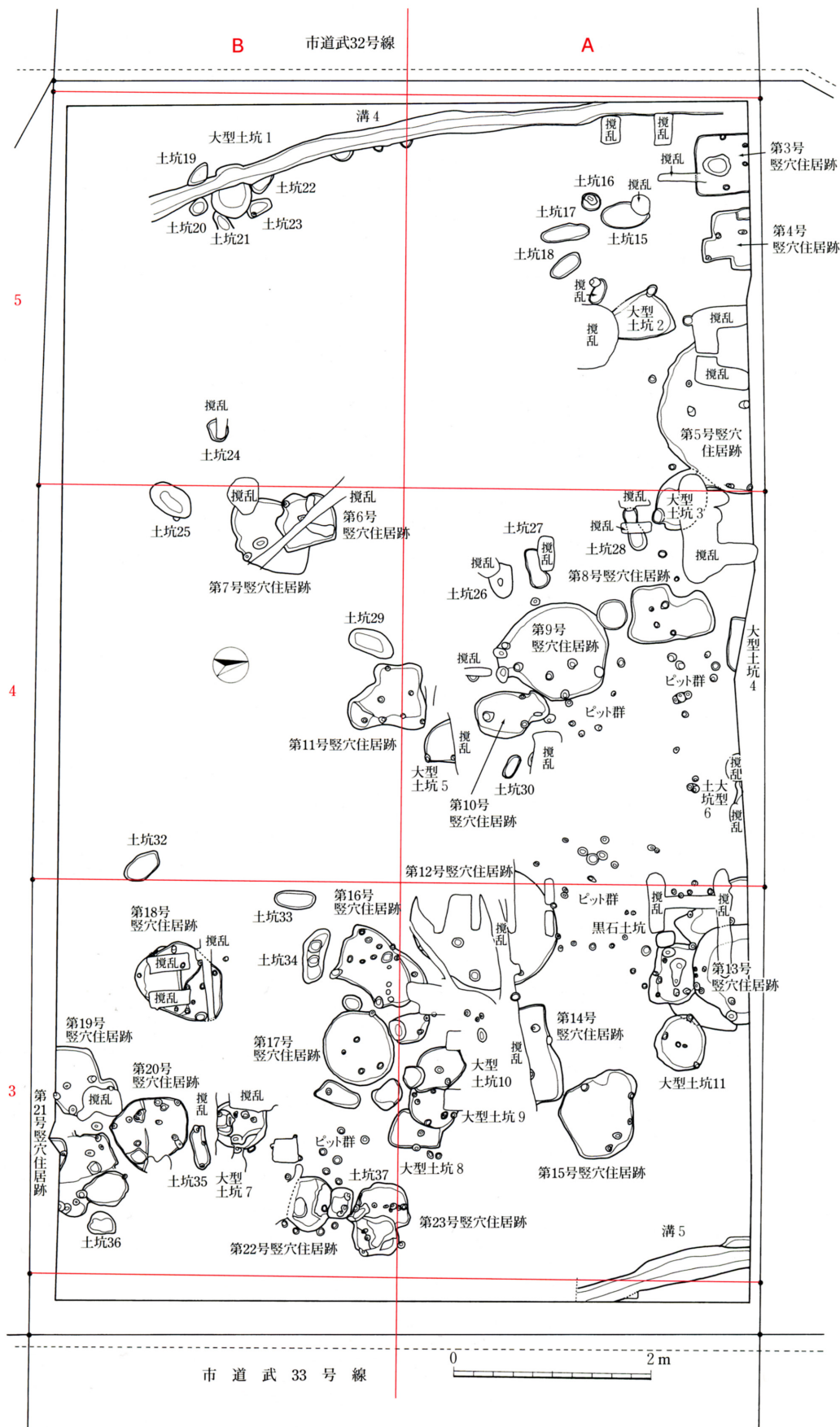
イ 第4号竪穴住居跡とその出土遺物 (第37・39図256～261)

この住居跡はA5区に検出したが、北側は工事敷地外のため未調査である。形状は東西3m15cm、南北2m45cmの張り出しのある方形である。ピットは3本あるが柱穴としてはP1が考えられる。また、西側壁には奥行き50cmの方形土坑が床面から18cmの深さである。遺物の出土状態は第37図に示したとおりである。

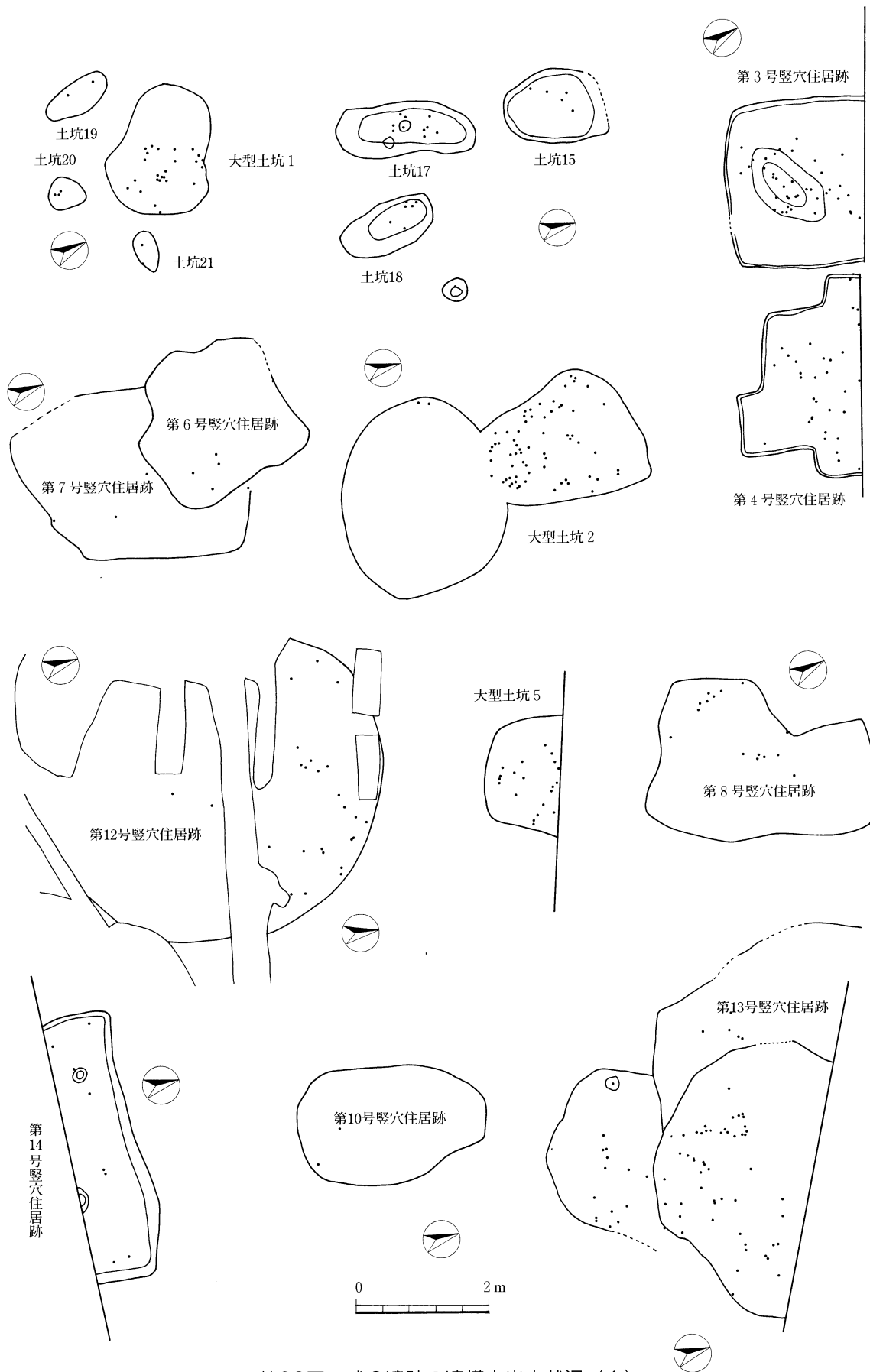
実測にできる出土遺物は256～261であった。256～259は甕形土器の口縁部で外反し、器面調整はハケ目である。260は壺形土器の頸部である。261は埴の胴部で大きく膨らみ、器面調整はハケ目である。これらは成川式土器に比定する。

ウ 土坑15・16 (第37・39図)

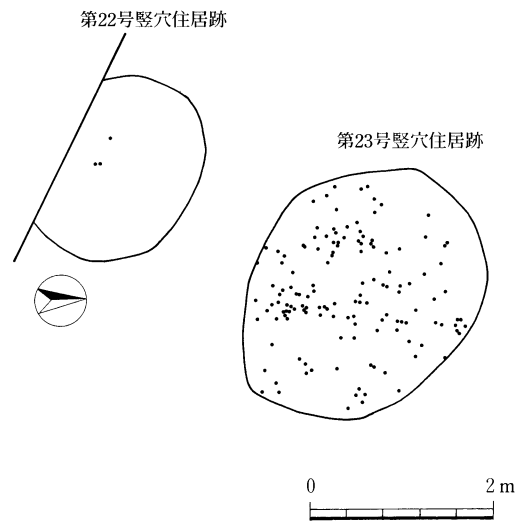
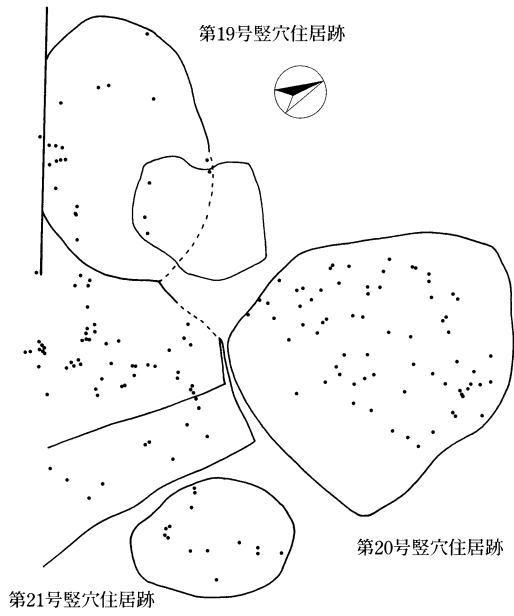
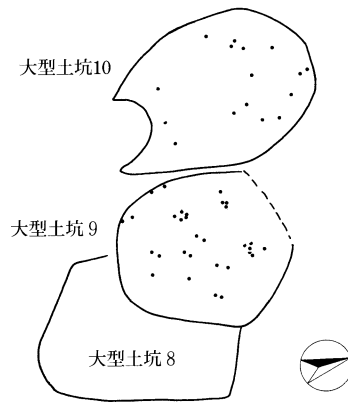
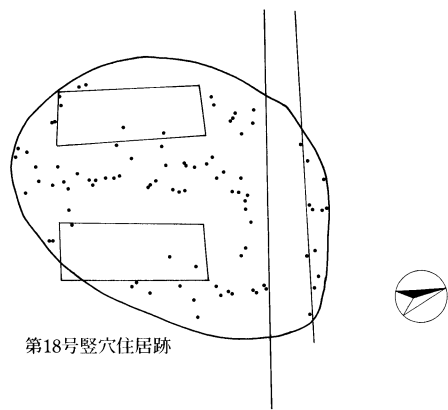
土坑15はA5区の中央に検出している。土坑15は東西1m30cm、南北2m40cm、深さ20cmで、楕円形の形状である。遺物は成川式土器が出土(第37図)したが、実測不可能であった。



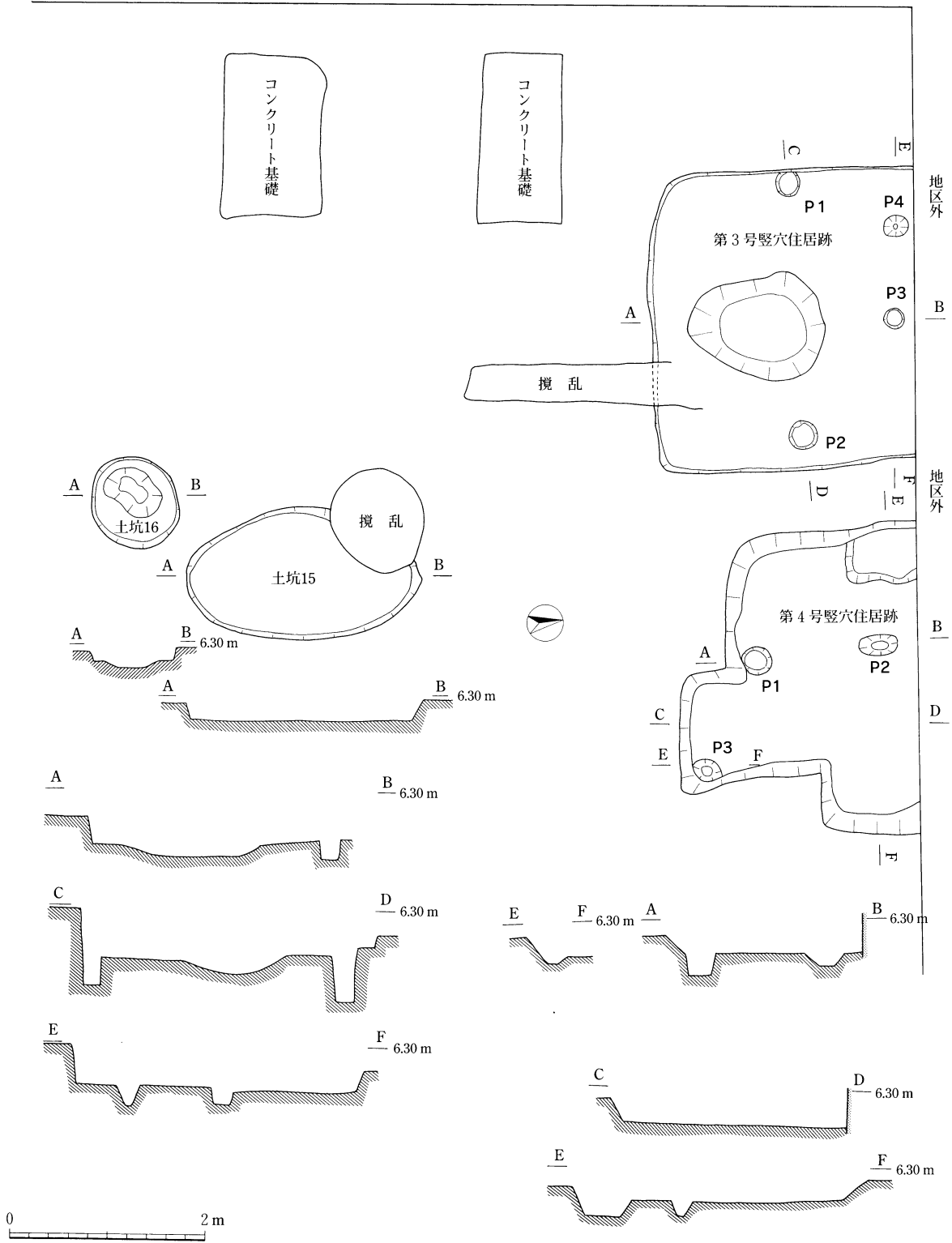
第37図 武C遺跡の遺構配置



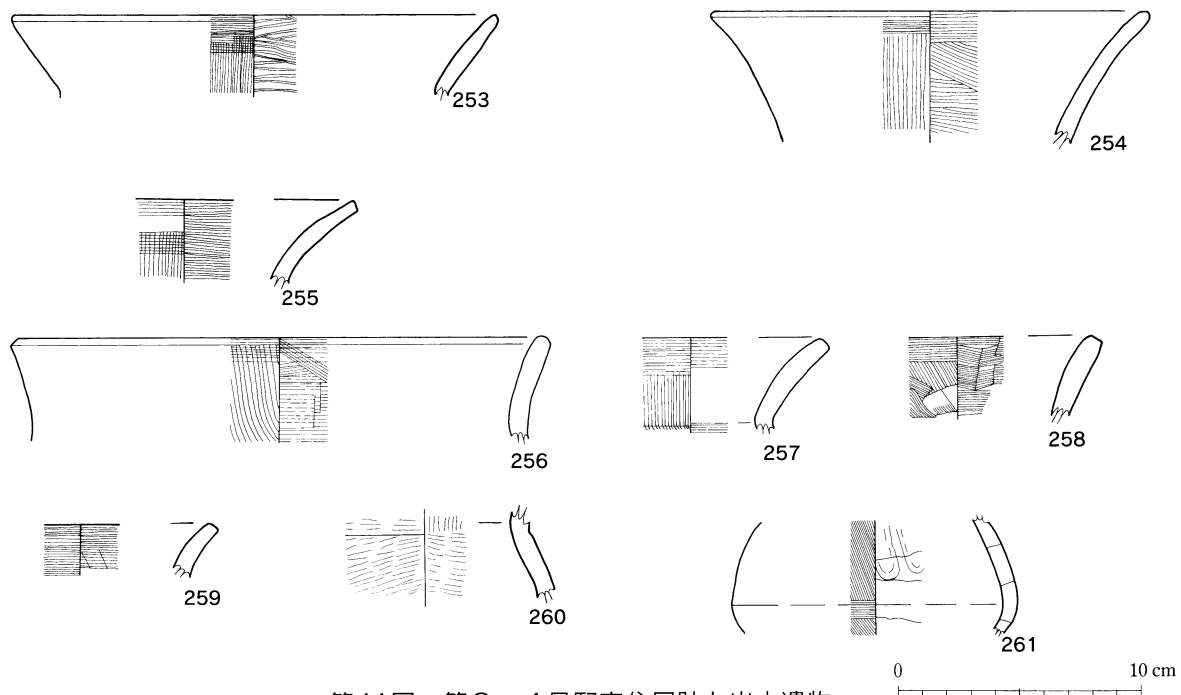
第38図 武C遺跡の遺構内出土状況（1）



第39図 武C遺跡の遺構内出土状況(2)



第40図 第3・4号竪穴住居跡と土坑15・16



第41図 第3・4号竪穴住居跡と出土遺物

土坑16はA5区に検出した。形状は直径90cmの円形で深さは15cmである。

エ 大型土坑2及び土坑17・18とその出土遺物（第37・42図262～269と270～273）

大型土坑2はA5区の中央に検出した。形状は東西2m50cm，南北約3mで深さは8cmと浅い。西の縁に深さ10cmのピットがある。遺物の出土は第37図で示した状況であった。形状から判断して竪穴住居跡の可能性はあるが根拠が薄いため大型土坑とした。

土坑17は東西40cm，南北2m40cm，深さ6cmで，形状は長楕円である。土坑18は東西40cm，南北80cm，深さ10cmで，形状は長楕円である。

大型土坑2には，262～269が出土した。口縁部が外反する甕型土器と，口径が広い壺が出土している。共に成川式土器である。

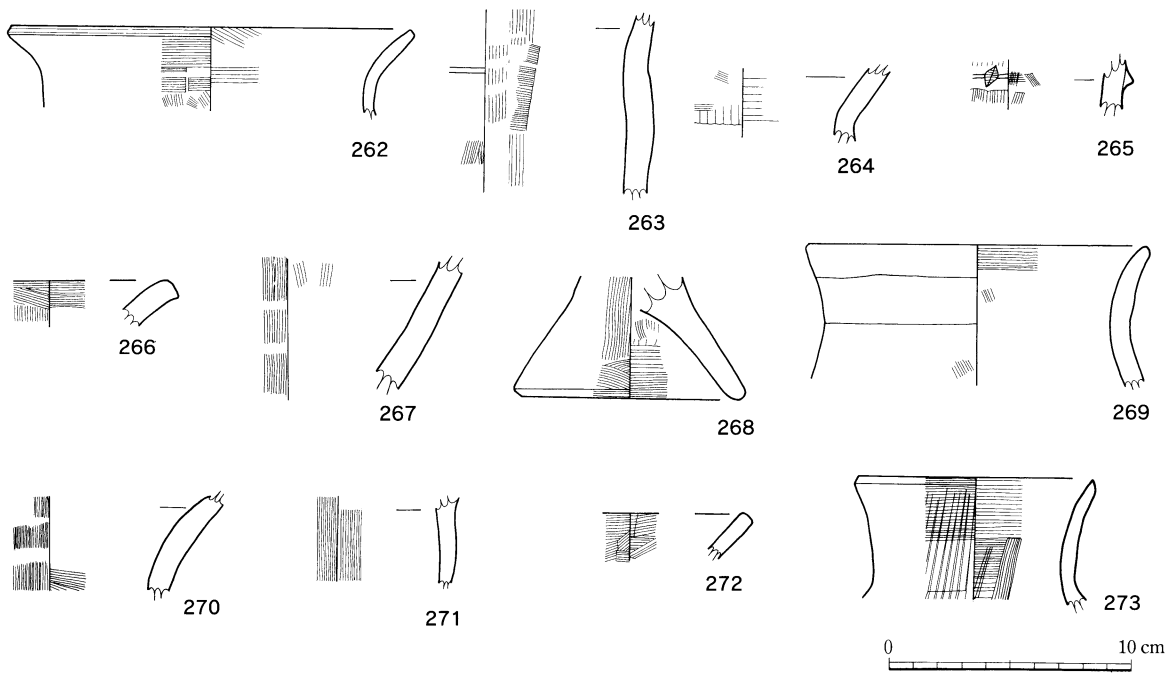
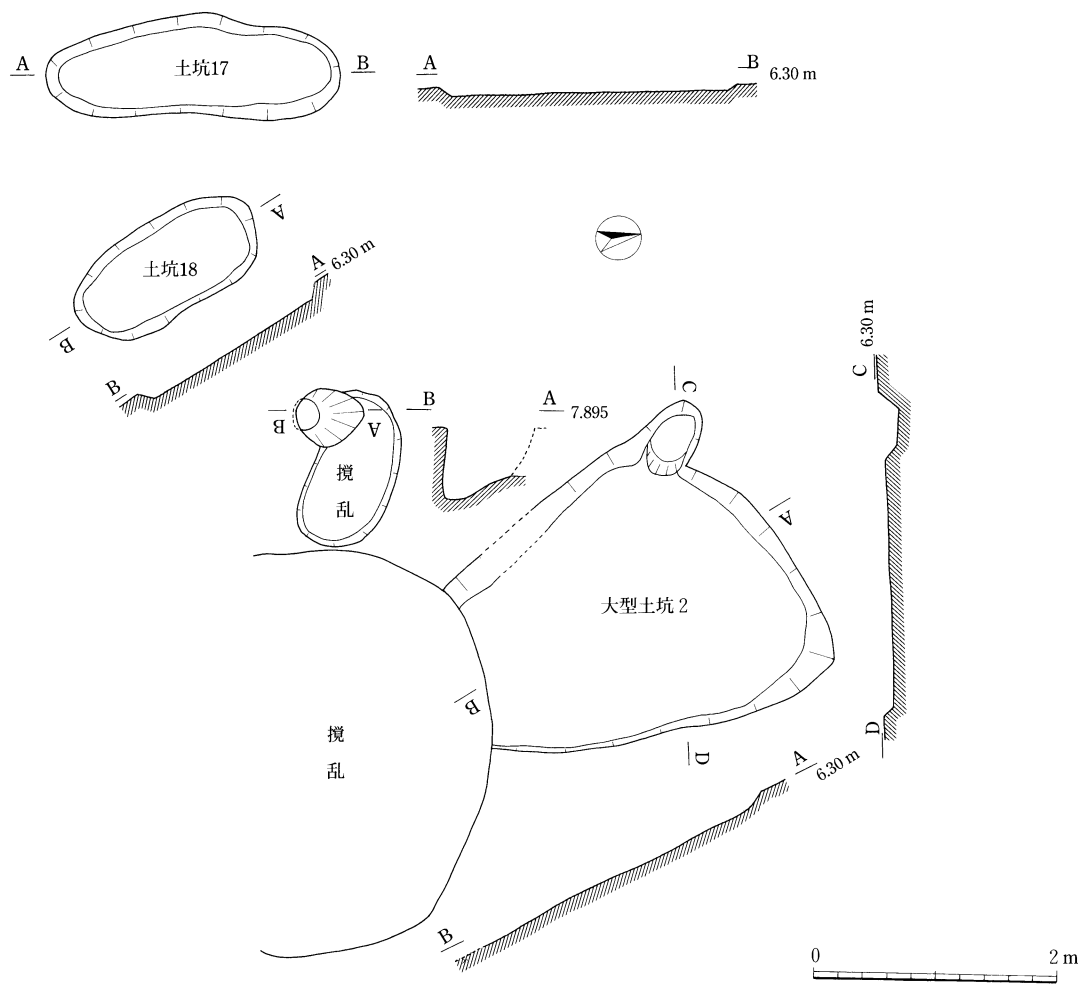
土坑17には271が出土した。共に成川式土器の甕形土器である。また，土坑18には270・272・273が出土した。前者が成川式土器の甕形土器で後者が小口の壺形土器である。これらの器面調整はハケ目である。

オ 第5竪穴住居跡とその出土遺物（第42図274）

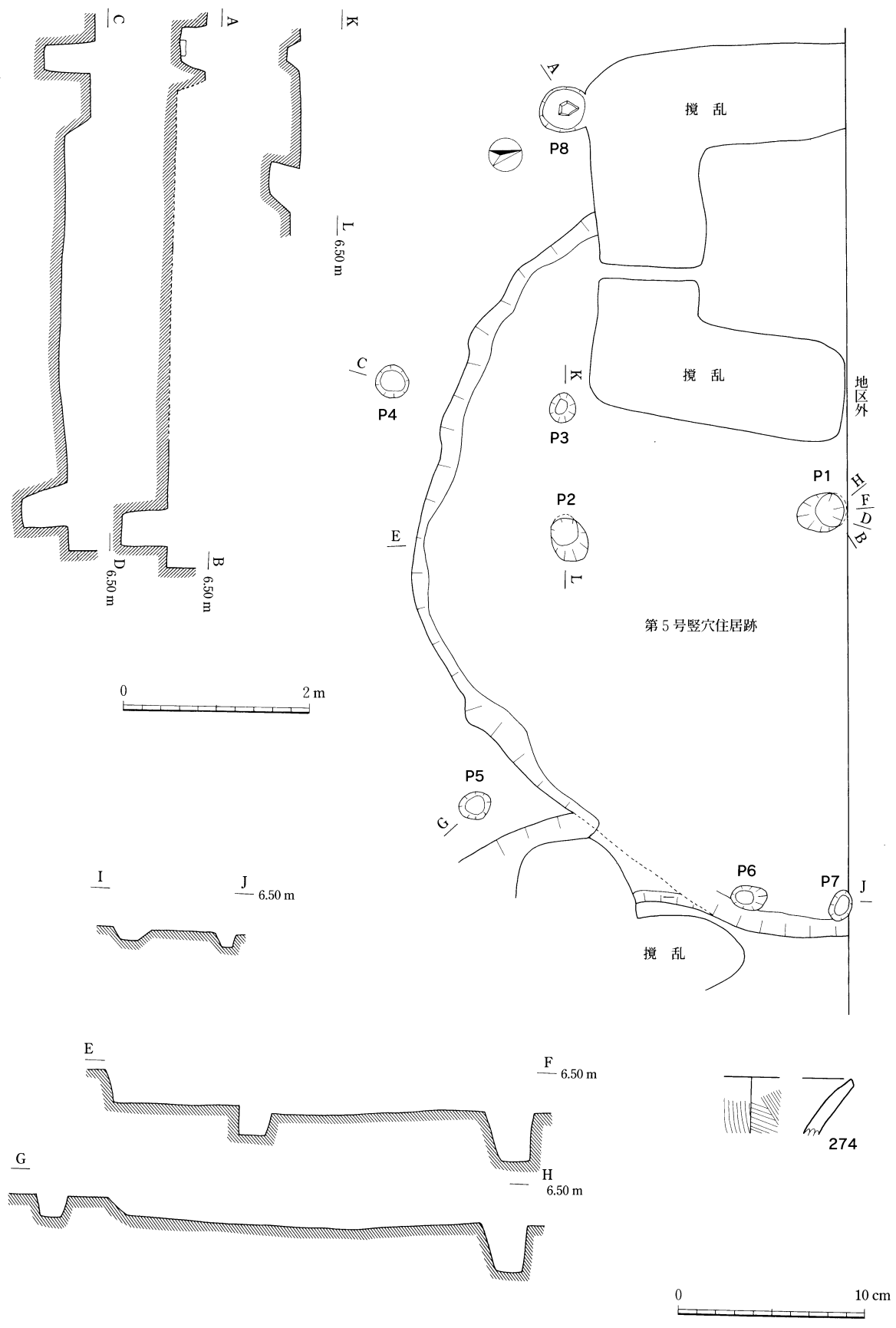
この住居跡はA5区の北側の縁に1/2を検出した。規模は約9mの半円形で調査地域外に広がっている。竪穴の深さは30cmである。この遺構に関係する柱穴は7本あり，P1（径50cm深さ50cm）が中心柱穴である。P4（径35cm深さ50cm）・5（径30cm深さ25cm）はそれに対応する脇柱の柱穴で，これらは竪穴の脇に廻っていると考えられる。他は攪乱で消滅したと思われる。また，P2（径30cm深さ35cm）・3（径20cm深さ15cm）・6（径35cm深さ20cm）・7（径25cm深さ25cm）は住居内部の施設に使用したと思われる。なお，P8（径50cm深さ25cm）は位置的に少しずれ，若干大きめであり，板石が敷かれているためこの遺構とは関係が薄いと思われる。

そして，この竪穴住居跡の特徴としてはかなり大きいタイプである。

出土遺物は274である。これは成川式土器の外反する甕形土器の口縁部で，器面調整はハケ目である。



第42図 大型土坑2及び土坑17・18とその出土遺物



第43図 第5号竖穴住居跡とその出土遺物

カ 第6号竪穴住居跡とその出土遺物（第44図）

この竪穴住居跡はB4区にあり他と離れて、第7号竪穴住居跡を切って検出している。

この住居跡は2m70cm、南北3m、深さ30cmの竪穴である。中央部は土管理設跡で破壊され中央のピットも切られている。また、南西隅には径30cm深さ20cmのピットがみられる。

出土遺物には276・279・280がある。276は成川式土器の甕形土器の外反する口縁部である。器面調整はハケ目である。279は釣り鐘状に作られた小型の蓋と思われる。上部には摘み部の突起があり、下縁は一段絞られている形をしている。外面は丁寧な研磨状調整で、内面は粗いハケ目がみられる。280は高坏の脚部である。

キ 第7号竪穴住居跡とその出土遺物（第44図）

この竪穴住居跡はB4区にあり他と離れて検出している。

この住居跡は東西3m50cm、南北4m、径30cm深さ20cmの竪穴である。ピットは2ヶ所あり、一つは深さ20cmで東南の隅にある。また、中のものは浅い。

出土遺物には277と278がある。278は成川式土器の甕形土器の脚部である。器面調整はハケ目である。

ク 土坑24・25とその出土遺物（第44図）

これらの遺構はB5区にあり他と離れて検出している。

土坑24は、直径55cm、深さ15cmのものである。土坑25は東西1m40cm、南北2m30cm、深さ60cmの楕円形土坑である。

出土遺物は275で成川式土器の甕形土器口縁部である。器面調整はハケ目である。

ケ 大型土坑4・6及びピット群とその出土遺物（第45図281）

これらはA4区に検出している。中でも大型土坑の大半は調査範囲外にひろがる。

大型土坑4は東西2m75cm、奥行きは50cm確認され、深さ15cmのものである。これは検出状況上調査区域範囲外に本体があると考えられる。

大型土坑4の周辺ピット群は10ヶ所あり、直径が35～40cm、深さが20～30cmである。中には三連結のピットもみられる。

出土遺物はみられなかった。

大型土坑6は東西1m、奥行きは50cm確認され、深さ10cmのものである。東西は攪乱されているが、本体は調査区域範囲外にあると考えられる。

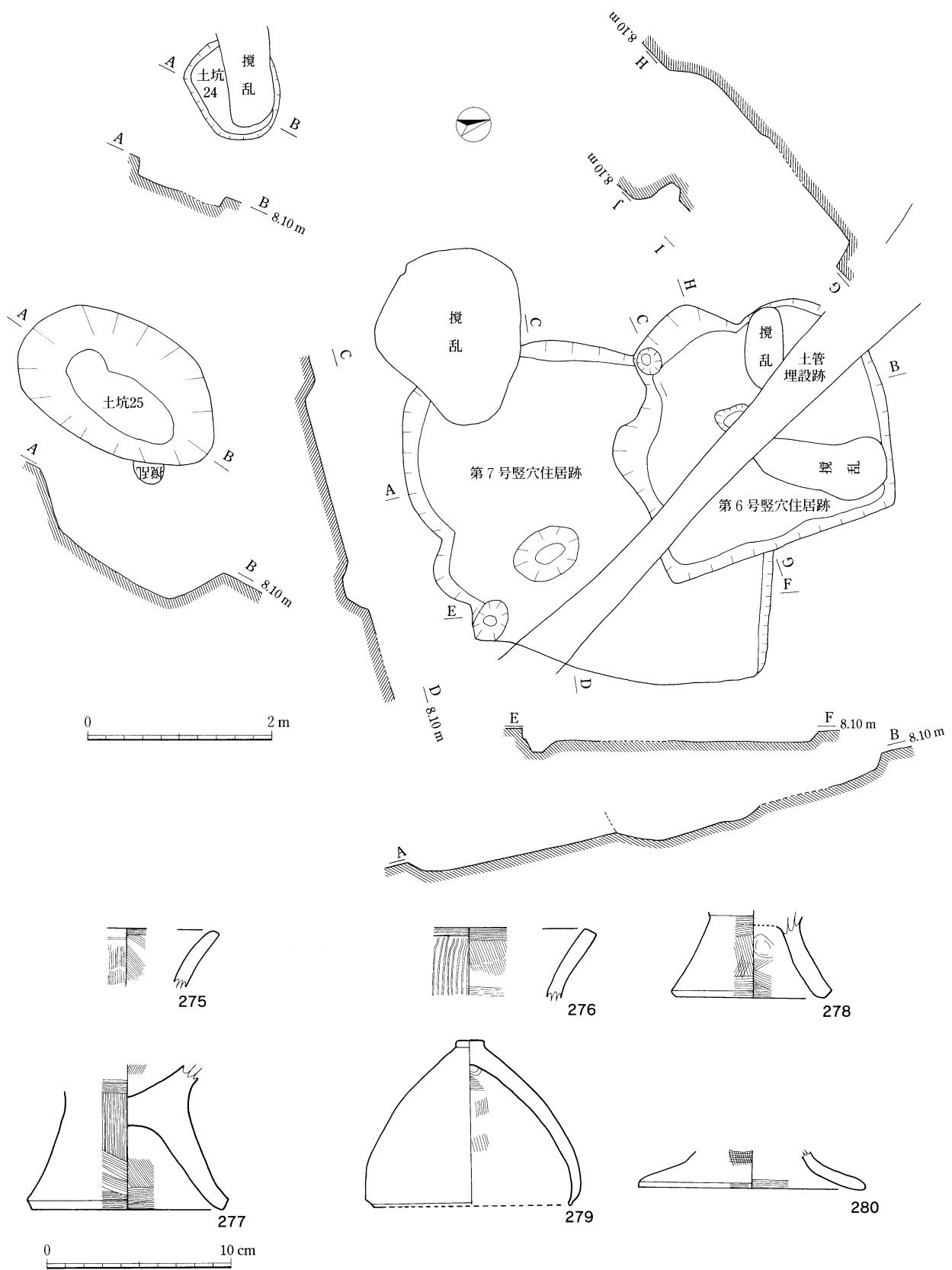
出土遺物は281で成川式土器の壺形土器が出土している。外面には3本の三角刻み目突帯を横位に施している。刻み目の付け方は一つのへら状の施文具で3本の突帯へ同時に施文している。器面調整はハケ目とへらケズリである。胎土には細砂粘土を使用している。

大型土坑6の周辺ピット群は4ヶ所あり、直径が35～20cm、深さが20cm前後である。中には二連結のピットもみられる。

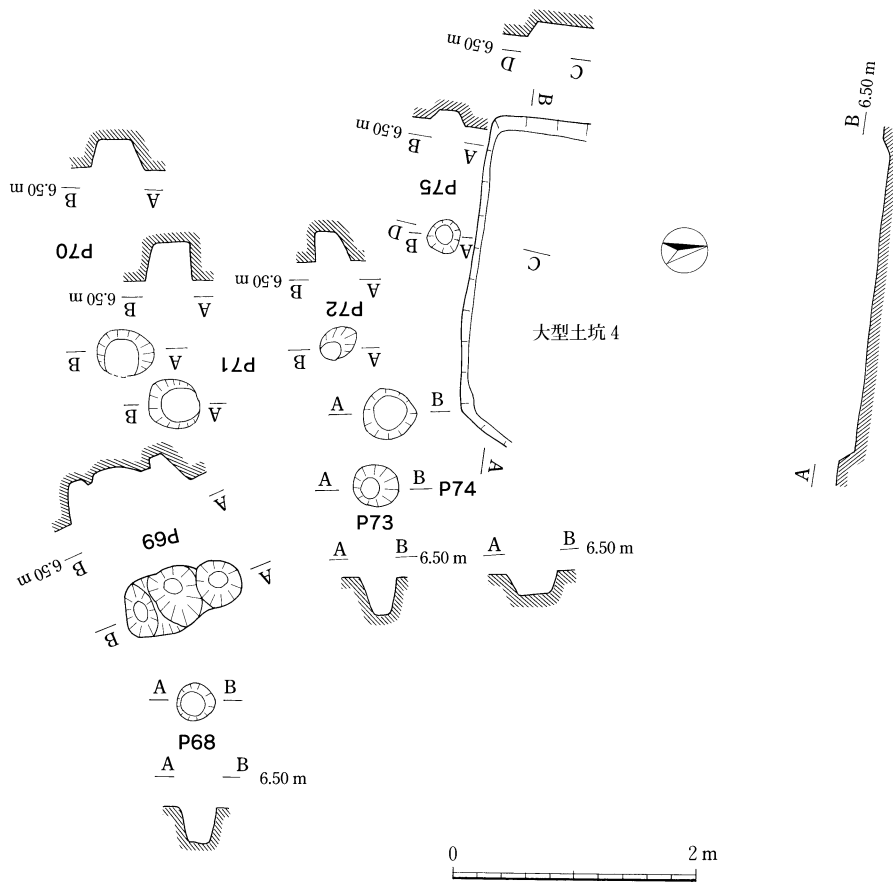
コ 第8号竪穴住居跡及び大型土坑3・土坑28とその出土遺物（第46図）

これらはA4区西側に検出している。大型土坑3は第5号竪穴住居跡の東側に隣接して検出し、土坑28はその南側に検出している。

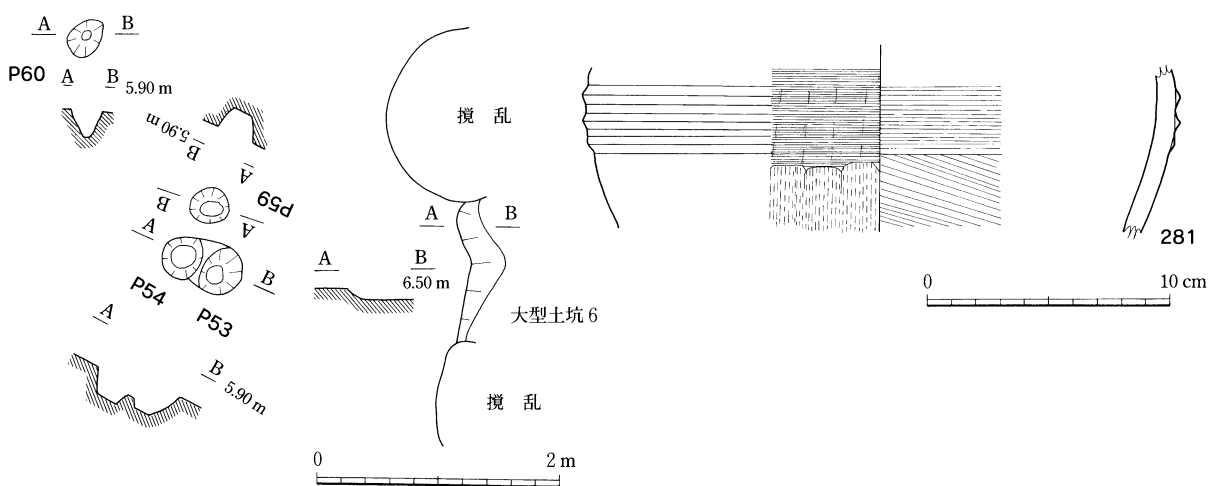
大型土坑3は東西2m70cmの円形で、北側は攪乱されている。深さは20cmである。南側に60cmで深さ10cmの土坑がみられる。



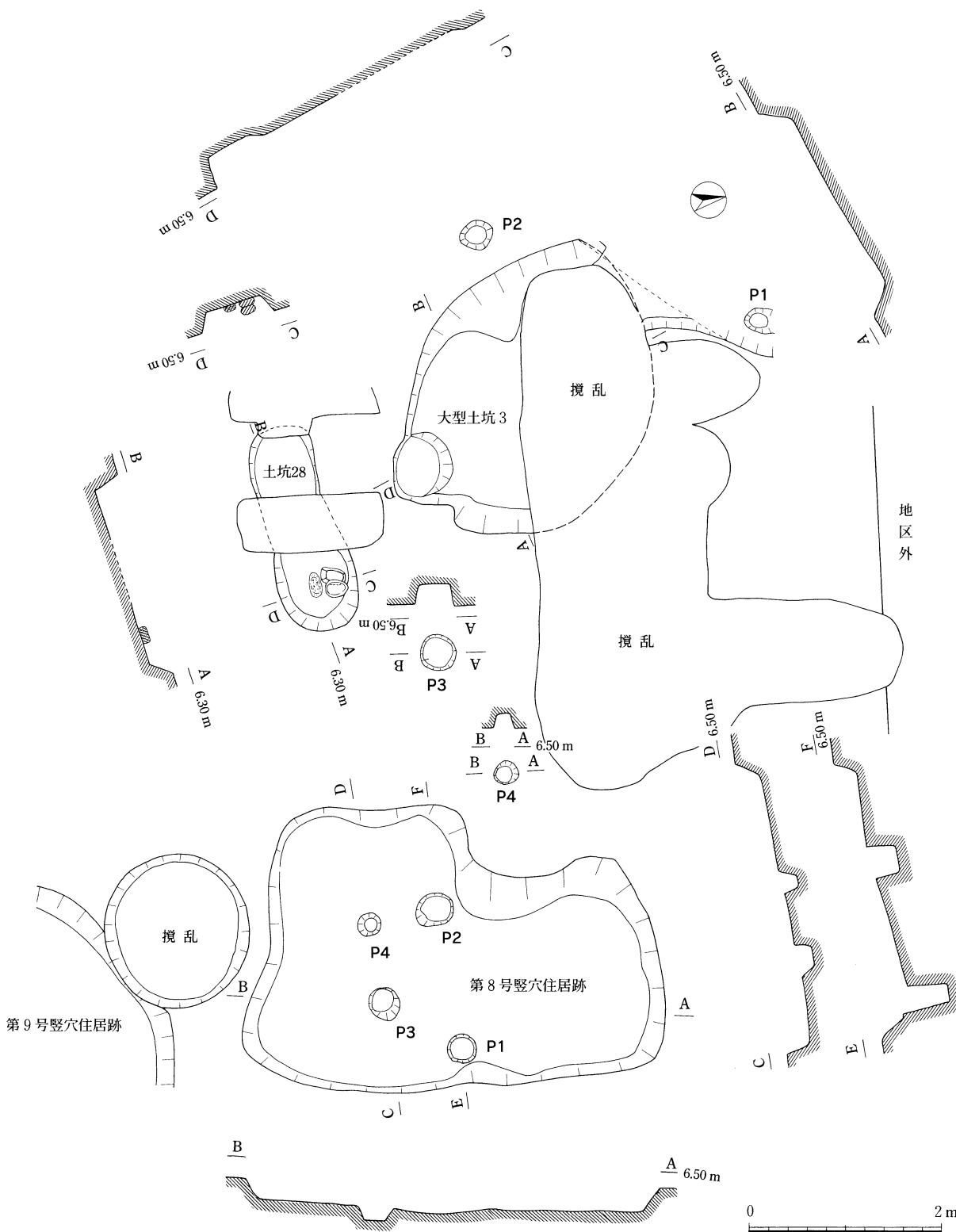
第44図 第6・7竖穴住居跡及び土坑24・25とその出土遺物



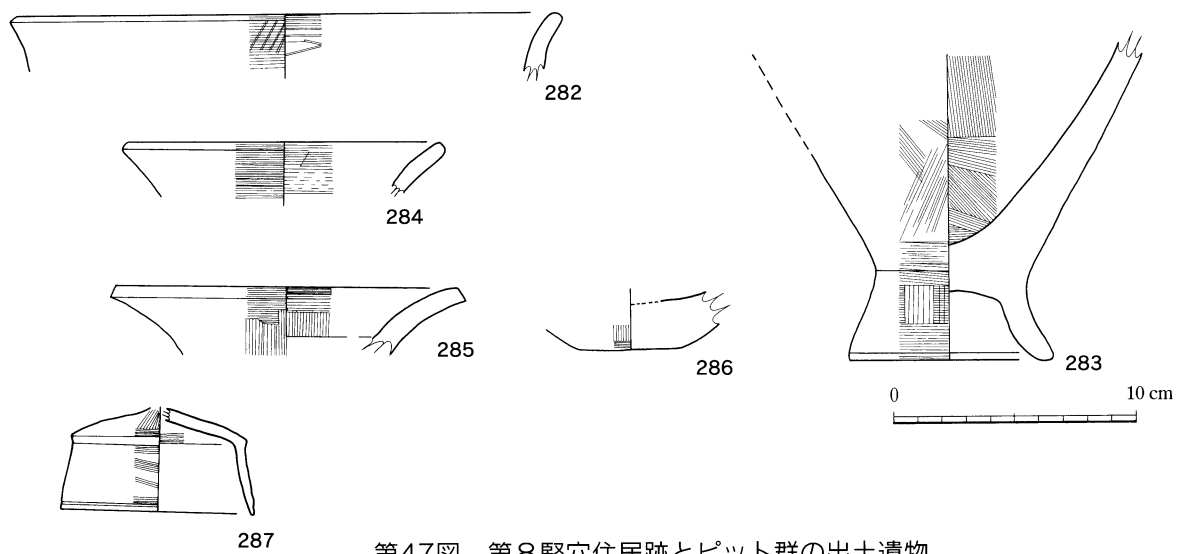
A 4区のピット群 (1)



第45図 大型土坑4・6及びピット群とその出土遺物



第46図 第8号竖穴住居跡及び大型土坑3・土坑28とピット群



第47図 第8竪穴住居跡とピット群の出土遺物

土坑28は東西2 m20cm、南北70cm、深さ20cmで、西部と中央部は攪乱されている。東部には軽石と円礫が3点置かれている状況で検出した。

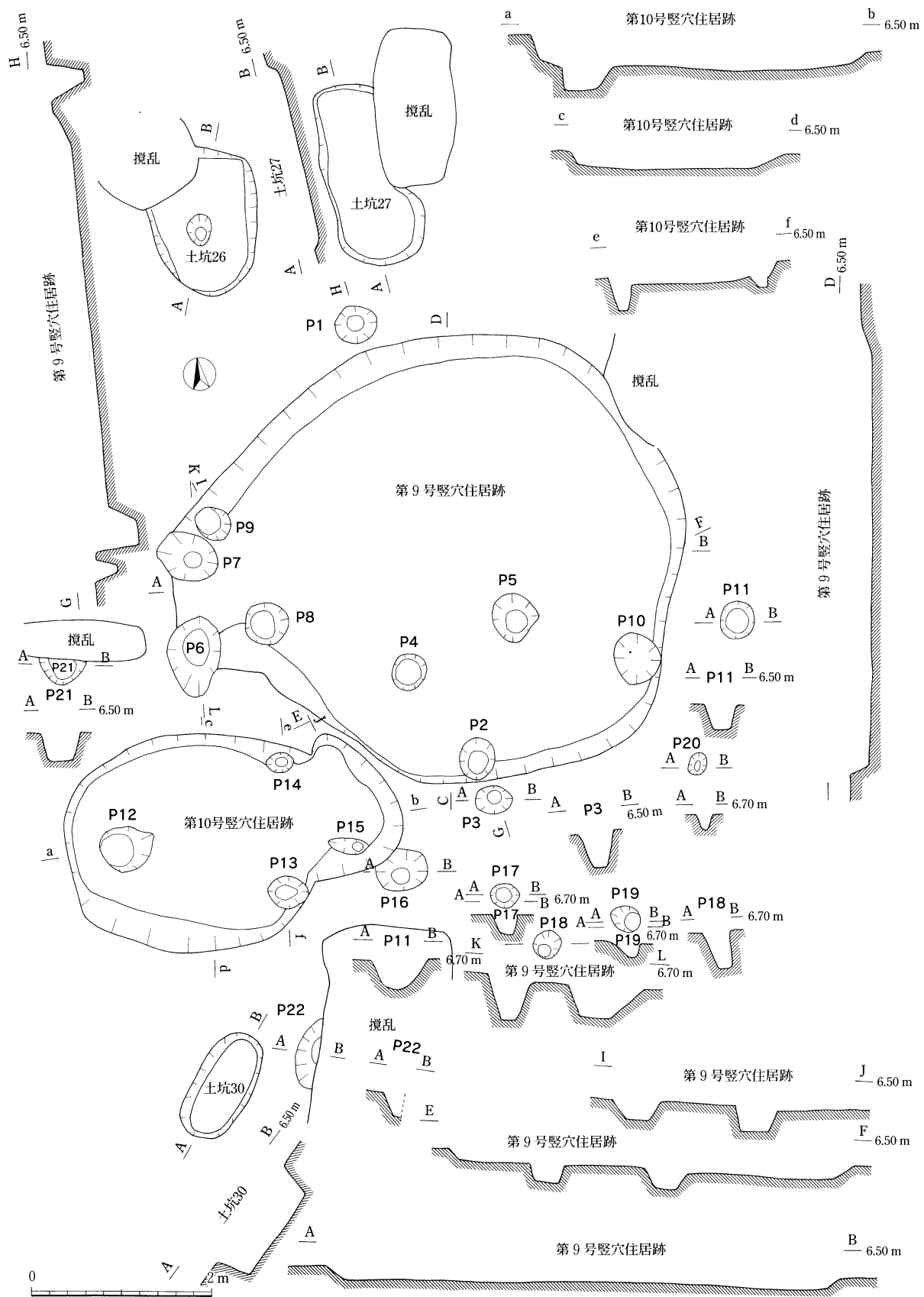
第8号竪穴住居跡は方形張り出しがみられるもので、東西3 m、南北4 m30cm、深さ25cmの規模である。ピットは4本あり、P 1とP 2が深く、それぞれP 1が径30cm深さ40cm P 2が径50cm深さ30cmである。他のものは浅く15cm弱である。周囲のピットは4本あり、P 3（径40cm深さ20cm）に遺物が出土している。これらの出土遺物は第47図の282～287である。

第8号竪穴住居跡の出土遺物は282～286で成川式土器である。ピット3の出土遺物は287で同じである。282と283は甕形土器で、284～286は壺形土器である。器面調整はハケ目である。287は細砂で作られた蓋である。丁寧な器面調整で、摘み部が欠損している。

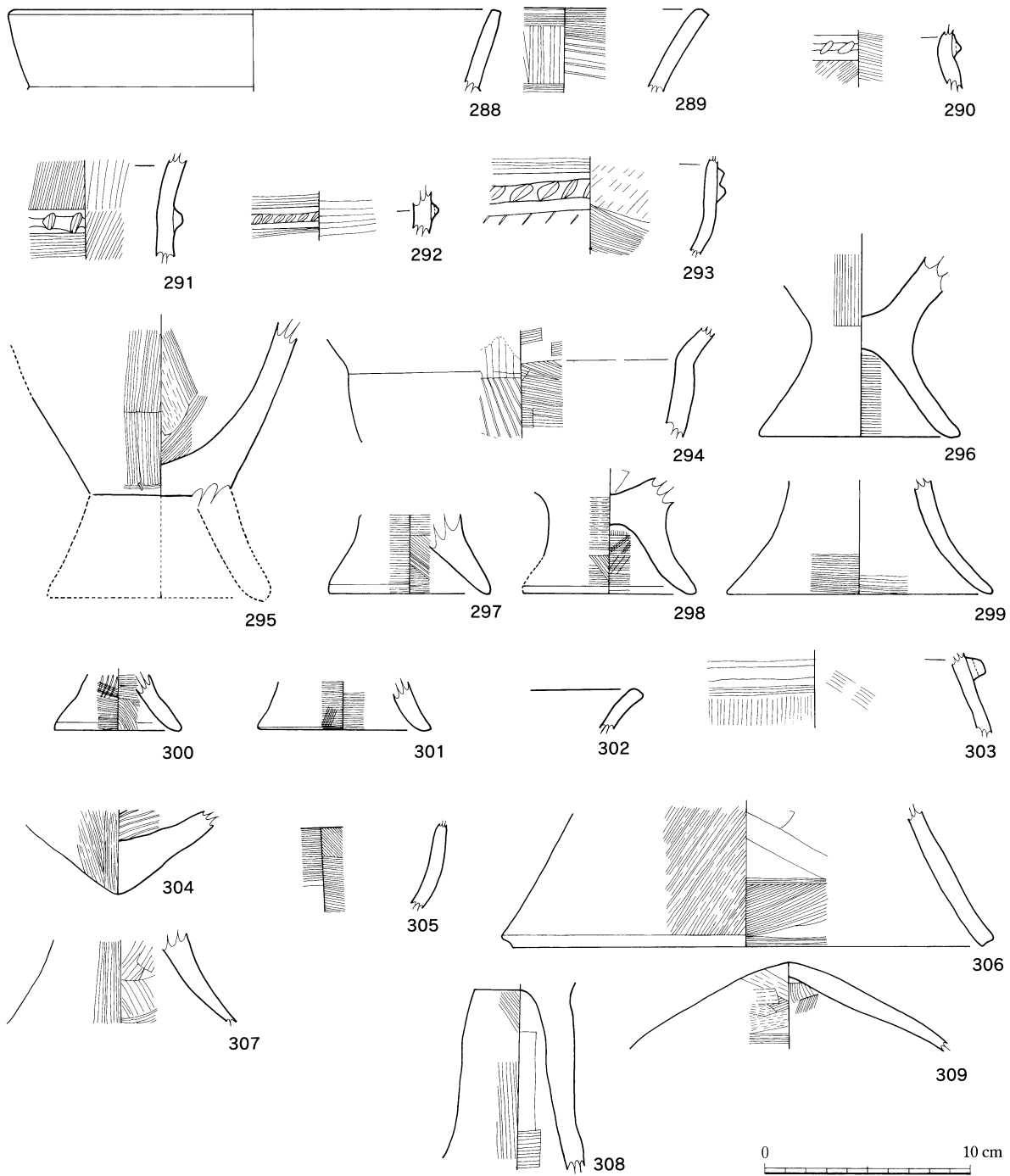
サ 第9・10号竪穴住居跡及び土坑26・27・30・ピット群とその出土遺物（第48～50図288～317）

第9号竪穴住居跡は東西5 m50cm、南北5 m、深さ23cmの規模でA 4区にある。形状の特徴は円形プランより西側へ方形の張り出しがみられる。これに付随するピットは11ヶ所あり、大きさと深さから判断するとP 1（径35cm深さ50cm）とP 2（径50cm深さ50cm）・P 3（径30cm深さ25cm）が、P 9（径45cm深さ50cm）とP 11（径60cm深さ50cm）が、また、P 6（径50cm深さ30cm）とP 7（径40cm深さ25cm）が対応すると考えられる。

これに伴う出土遺物は288～309である。288～301が成川式土器の甕形土器である。288は外反する口縁部で器面調整がナデである。289は外反する口縁部で器面調整はハケ目である。290～293は刻み目突帯を施す頸部である。294は頸部で外反するものである。295～301は底部で主に脚である。器面調整はハケ目である。302～304は同式の壺形土器である。302は薄手の口縁部で大きく外反する。303は台形突帯をもつもので若干薄手である。粘土は細砂を使用している。304は尖底で外面は研磨状調整で内面は粗い調整である。305～308が高坏である。305は坏部で両面とも丁寧なナデ調整をしている。306は大型の脚部で外面は丁寧なハケ目調整である。307は脚部で丁寧なハケ目調整痕が縦に施されている。粘土は細砂を使用している。309は蓋と思われる。内面の中央部は凹んでいる。器面調整は丁寧なハケ目である。これらは成川式土器である。



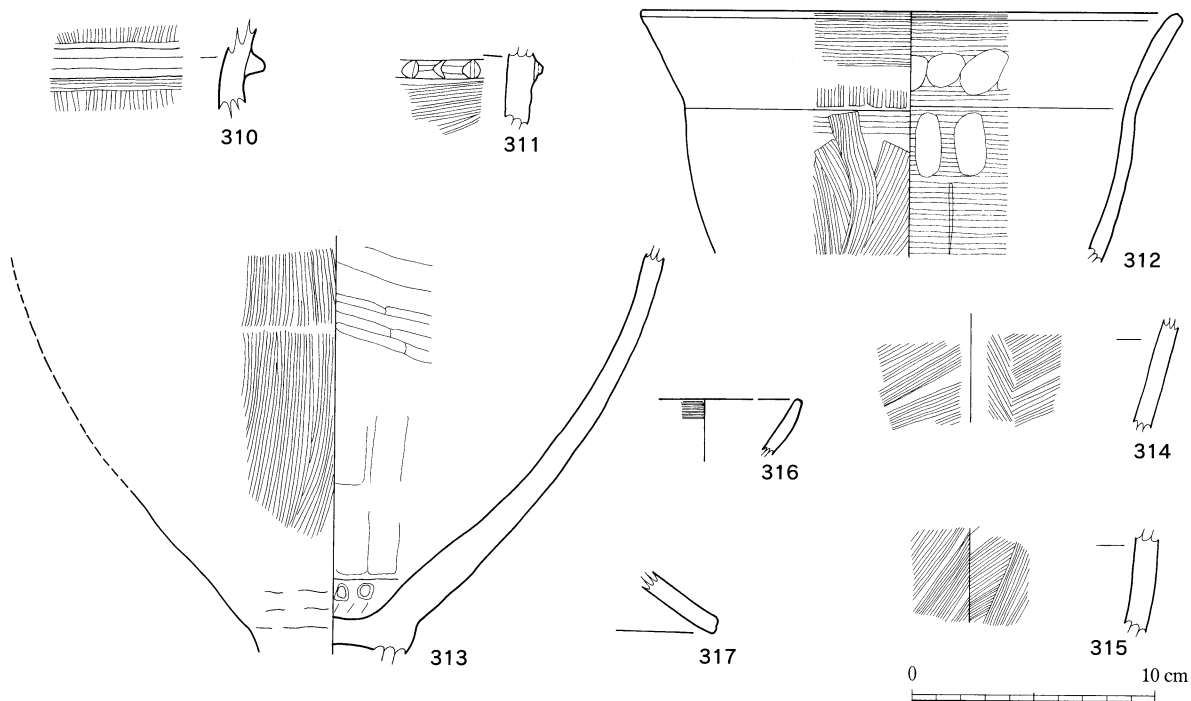
第48図 第9・10号竪穴住居跡及び土坑26・27・30とピット群



第49図 第9号竪穴住居跡の出土遺物

第10号竪穴住居跡 (第48図)

第10号竪穴住居跡は東西3m70cm、南北2m40cmで、深さ30cmの規模である。形は円形プランに方形の張り出しを付けたもので、第9号竪穴住居跡を反対にした状態である。ピットは4本あるがP12 (径50cm深さ25cm)・13 (径30cm深さ30cm)・14 (径25cm深さ20cm) が深く、他は浅い。



第50図 第10号竪穴住居跡・大型土坑5・土坑29の出土遺物

出土遺物は310～317である。310・311は蒲鉾状突帯と刻み目突帯の甕形土器である。312は口縁部が外反する甕形土器である。器面調整はハケ目であるが内側には指圧痕がみられる。胎土は細砂粘土を使用している。314・315も甕形土器である。

316は小型高坏の坏部である。器面は丁寧な調整である。317は高坏の脚である。

土坑26

この遺構は東西1 m20cm、南北1 m50cmの土坑である。出土遺物はなかった。

土坑27

この遺構は南北2 m、東西1 m、深さ10cmの楕円形土坑である。なお、出土遺物はなかった。

土坑30

この遺構は東西65cm、南北1 m25cmの楕円形土坑である。出土遺物はなかった。

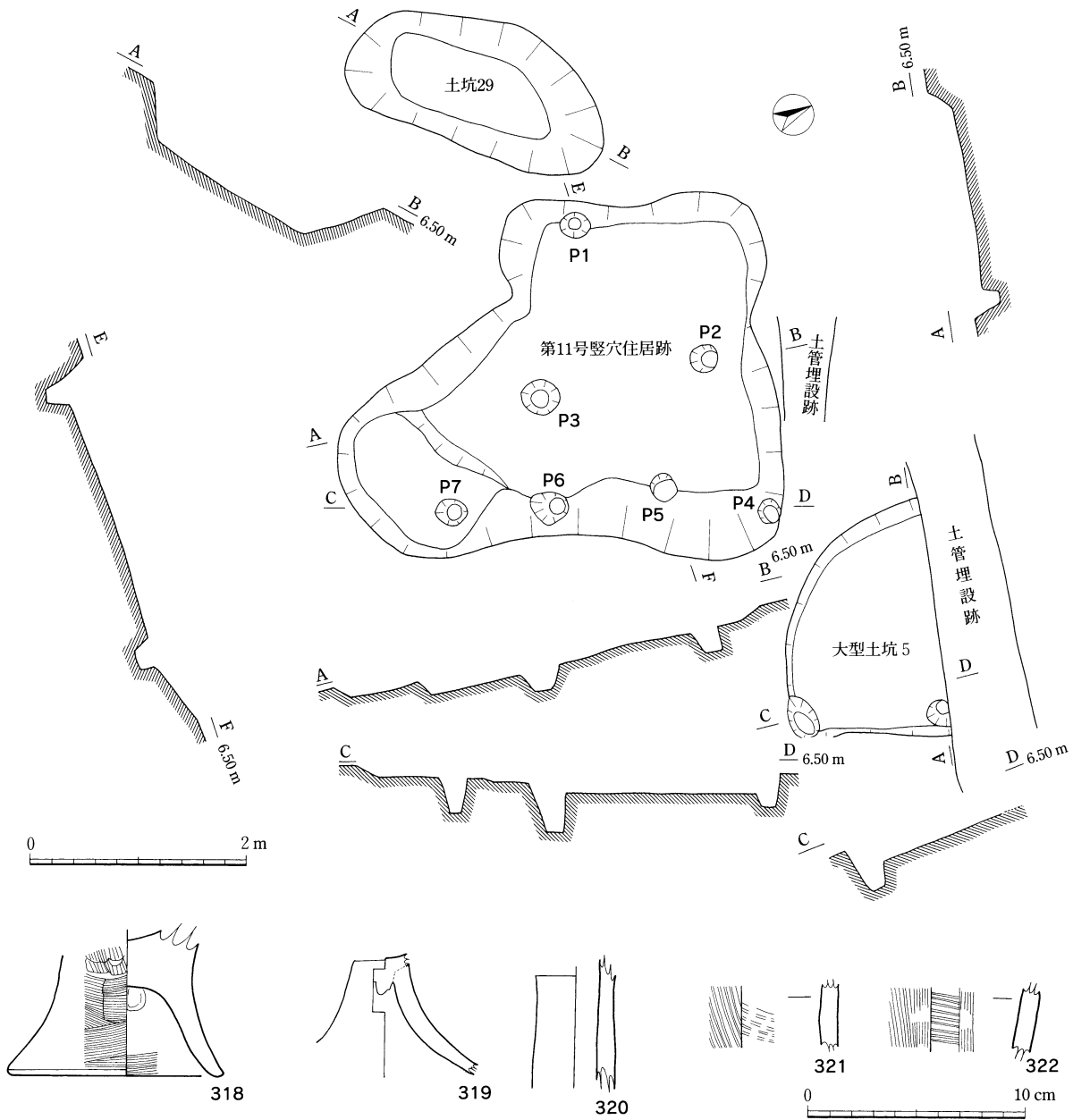
シ 第11号竪穴住居跡及び大型土坑5・土坑29とその出土遺物（第51図318～322）

これらの遺構はA B 4区に検出した。

第11号竪穴住居跡は東西3 m、南北4 m、深さ20cmで、南側に一段上がった方形張り出しがみられる。ピットは7ヶ所あり、柱穴はP 2（径25cm深さ25cm）とP 3（径35cm深さ25cm）、P 1（径20cm深さ25cm）とP 6が対応する。

出土遺物は319～320である。これらは成川式土器で、319は小型の高坏で320は筒形の脚をもつ高坏である。

大型土坑5は、土管埋設で壊されているが、東西2 m、深さ20cmの半月状の形状である。本遺構の出土遺物は313・318である。313は甕形土器の胴部から底部である。脚部は破損し、平坦な底面がみられる。器面調整は外面がハケ目で、内面がヘラナデである。318は甕形土器の底部である。



第51図 第11号竪穴住居跡とその出土遺物

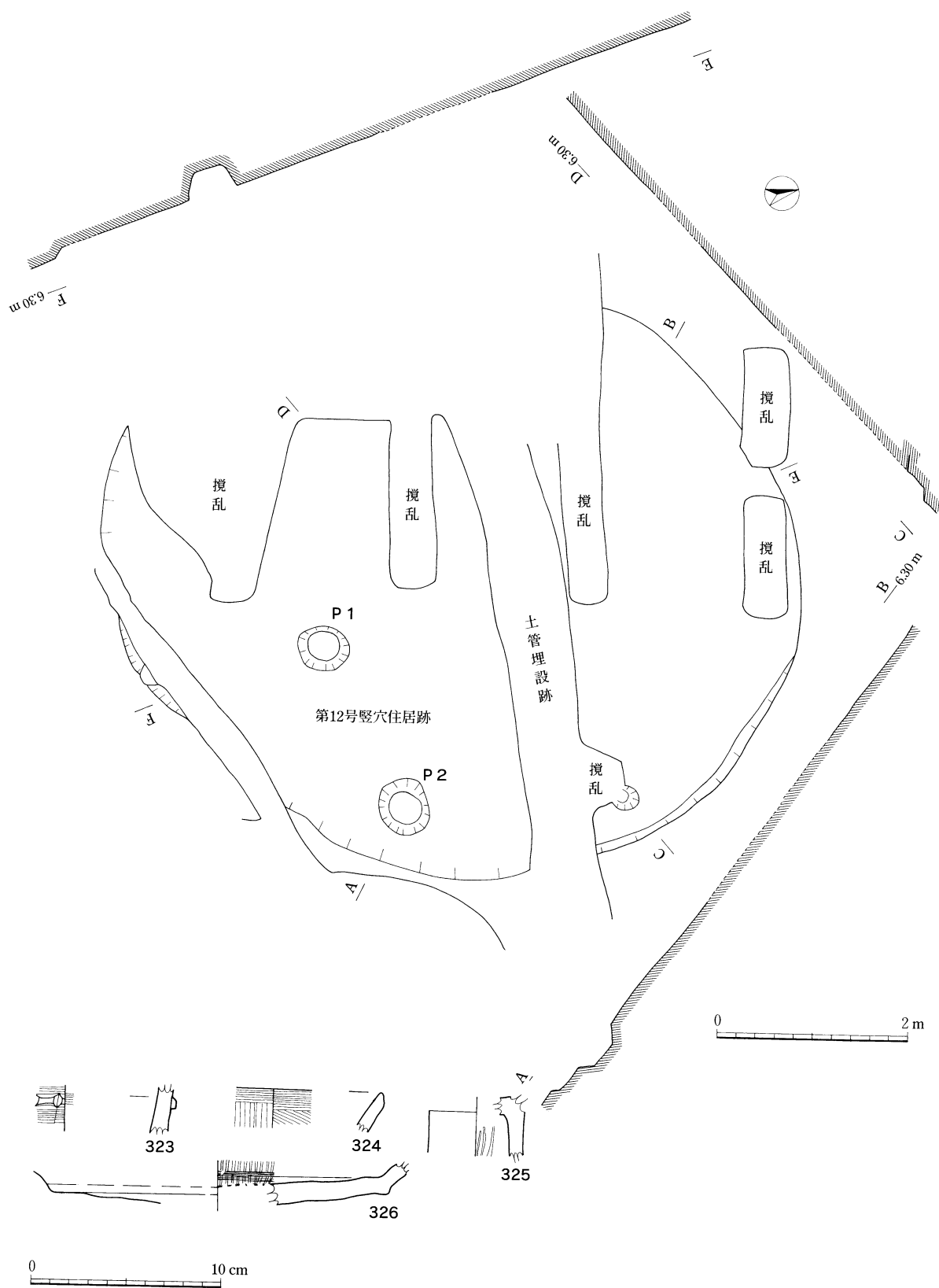
土坑29は東西1 m20cm、南北2 m50cm、深さ70cmの楕円形土坑である。出土遺物は321・322で、共に成川式土器の甕形土器である。

ス 第12号竪穴住居跡とその出土遺物 (第52図323~326)

この遺構はA4区の西部に検出した。

この竪穴住居跡は直径7 m35cm、深さ8cmの円形である。西側は土管理設や建物建設跡で攪乱されている。ピットは2ヶ所確認されP1は直径50cm深さ25cm、P2は直径60cm深さ18cmである。

出土遺物は323~326である。323は甕形土器で頸部の刻み目突帯で、324は甕形土器の外反する口縁部である。これらの器面調整はハケ目である。325・326は高坏である。325は筒部で内側



第52図 第12号竪穴住居跡とその出土遺物

にヘラケズリがみられる。**326**は坏部で頸部は「く」字に折れ、口縁部は外反する。器面調整は内面にハケ目が見られるが全体的に丁寧なナデである。

セ 第13号竪穴住居跡及び大型土坑11・集石土坑・ピット群とその出土遺物

第13号竪穴住居跡

この遺構は、円形竪穴の周囲に方形の張り出しを設けている竪穴住居跡で花卉状竪穴住居跡の類に属する。なお、この遺構は調査範囲限定のため南側半分が検出された。

円形竪穴部は、東西5m10cm、深さ65cmで緩やかな竪穴である。南側の柱穴はP1（径25cm深さ30cm）とP2（径25cm深さ20cm）（張り出し3内）が対応できる。この中には甕形土器などが出土している。張り出し1は円形竪穴部の東南部に付いた半円形に検出されたもので、幅3m、奥行き1.5m、深さ3cmである。張り出し2は円形竪穴部の南部に付いた2段の方形で検出されたもので幅3m、奥行き2～2.2m、深さ30cmである。この張り出しの特徴は中央部に2連結されたピットがあり、落ち込み縁部にも7ヶ所のピットがみられる。この張り出しに第56図にある壺形土器が土坑に一個体検出されている。遺物は**345**である。張り出し3は円形竪穴部の南西部に付いた2段の方形で検出されたもので、幅4m以上、奥行き1.5～2.5m深さ10cmの落ち込みである。

この竪穴住居跡の建物はP1・2が南側の柱とすると4本柱が考えられる。その柱間は4m15cmである。この間、攪乱部がみられるため支え柱の跡は検出されなかった。これらのことからこの竪穴住居跡の規模は、円形竪穴部と張り出し部を含めると約10mにも及ぶものと考えられる。

遺物の出土状態は第37図で示した状況である。

第13号竪穴住居跡の出土遺物（第56・57図327～361）

327～342は成川式土器の甕形土器である。

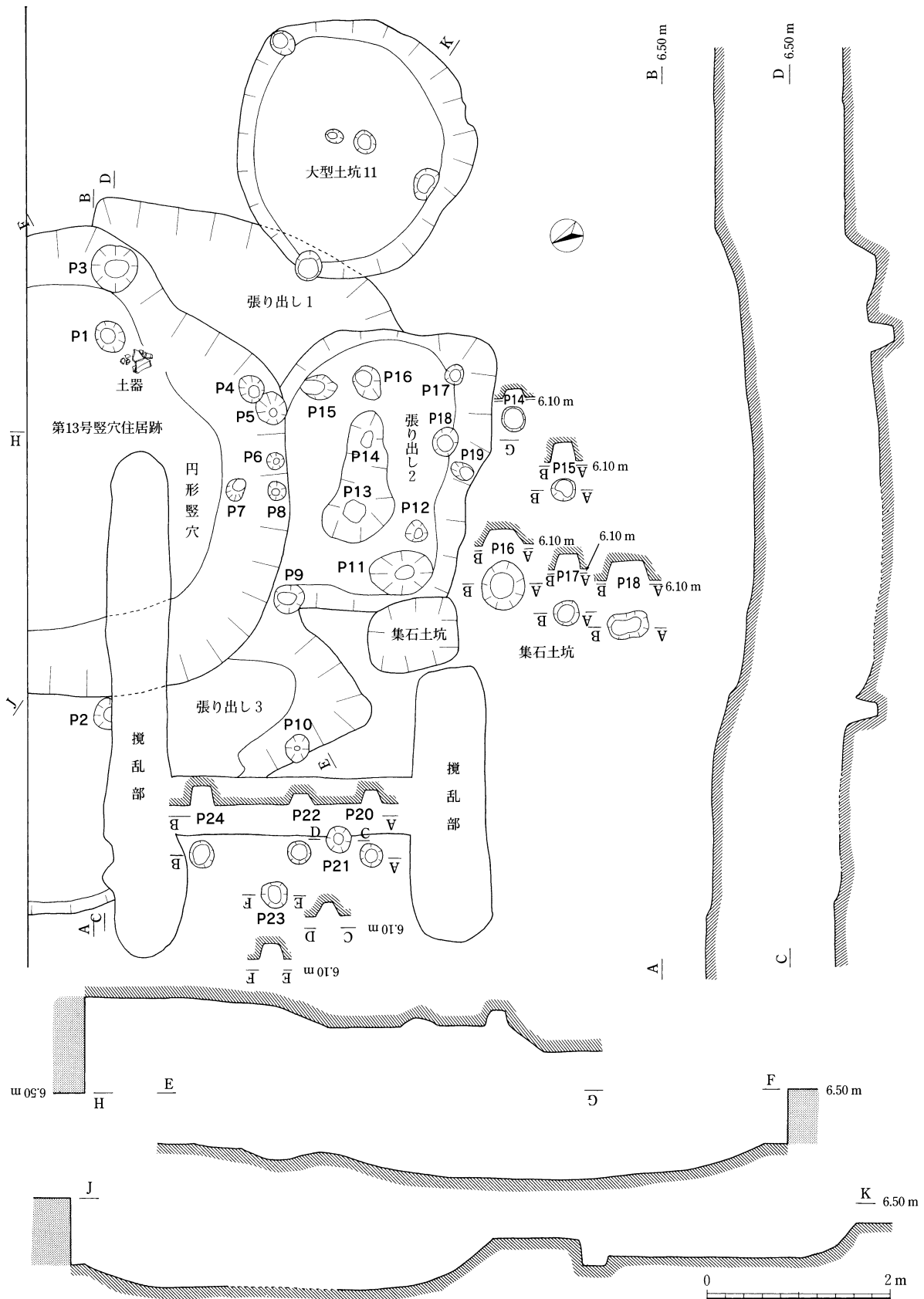
327・328・330・331は刻み目突帯を頸部下位にもつものである。器形は「く」字であるが**328**だけは「く」字にならずに直になっている。器面はハケ目調整である。**332・334～337**は外反する口縁部である。器面調整は**337**がハケ目で他はナデが主である。**333**は頸部で「く」字に外反し、肩が張り気味をもつ器形である。器面調整は口縁部と底部がハケ目で、肩部・胴部はヘラケズリである。また、内面は縦位のハケ目と横位のヘラナデである。**338**は「く」字になる頸部で肩部に向かって段が付く器形である。器面はナデ調整である。**339**は底部で平坦底を呈し、器面調整はハケ目である。**340～342**は脚部である。

343～349は成川式土器の壺形土器である。

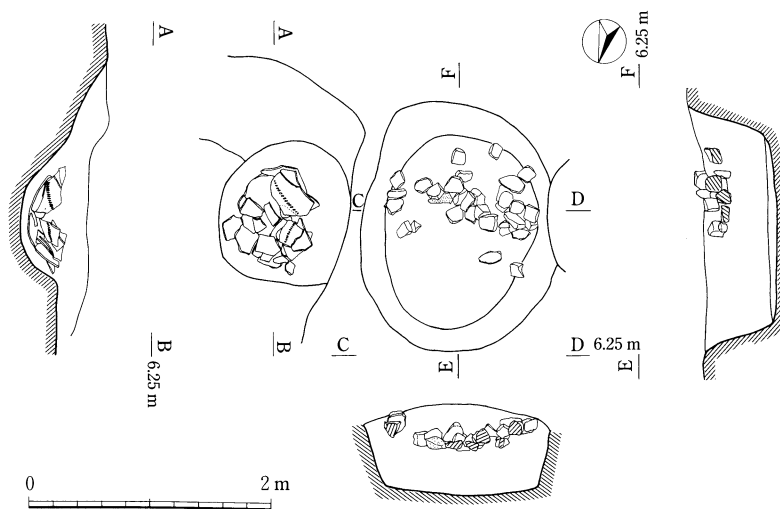
343は頸部である。**344**は外反する口縁部で刻み目がみられる。器面調整はハケ目である。**345**は肩部から底部までであるものである。器形としては胴部が球状に張り、底部は角のない平底を呈している。肩部下位には三角突帯に斜めの刻み目を施している。内外の器面調整は丁寧なハケ目である。**346**は台形突帯に幅広刻み目を施したハケ目調整のあるものである。**347**は尖り底で、**348**は角のない平底である、**349**は厚手の土器で、器形は丸く、底部は平底である。外面はハケ目調整で、内面は横位のヘラ研磨調整である。

350～355は高坏である。**350**は口縁部で**351**は坏部である。**352・353**は小型のもので細砂の粘土を使用している。**354**は大型の脚部でハケ目調整が内外面に施している。**355**は開く脚部である。

356は頸部で大きく外反する薄手の小型壺である。**357**は胴が下がった無頸壺である。口縁部から胴部にかけて3条の丹塗り帯がみられる。胎土は細砂で薄手である。**358**は口唇部と底部が確認



第53図 第13号竪穴住居跡及び大型土坑11・集石土坑・ピット群



第54図 集石のある土坑と住居内土坑の遺物出土状況

できないが薄手の土器である。器形としては罎であるが本遺跡で分類すると蓋の可能性もある。

359は鉢形土器である。底部はないが直行する器形である。土器製作で使う粘土帯は広いものを2重に張り付けている。よってこの土器は手づくね類に入る。

360・361は蓋である。360は掴み部で線刻がみられる。線刻は魚にもとられるが不明である。他の面は櫛目状にハケ目調整が施されている。361は直線的に大きく開く器形である。器面はハケ目調整である。

集石のある土坑（第54図）

この遺構は、東西1m25cm、南北2m、深さ70cmで上部に礫33個集められ、石は焼けた状態であった。土器の出土はなかった。

ピット（第53図）

第13号竪穴住居跡の南側と西側に5個ずつ検出している。直径25～50cmで深さは20～25cmである。

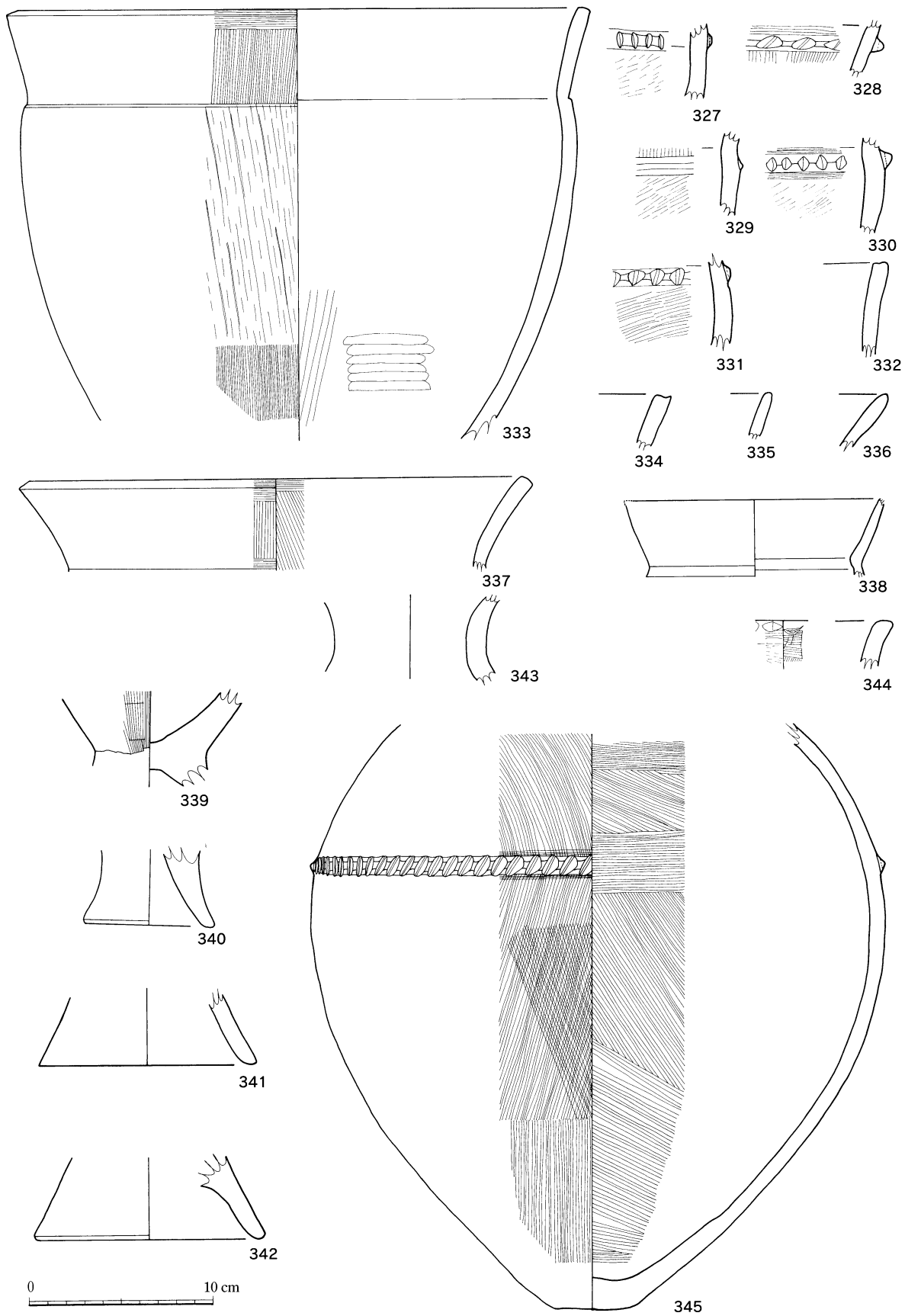
大型土坑11（第53・57～60図362～401）

この遺構は、A3区に検出した。その位置は第13号竪穴住居跡の南東部である。規模は東西3m、南北2m50cm、深さ15cmである。出土状況は第57図で示したごとく大きな土器片がみられた。最終の深さは30cm（第55図）でピットは4ヶ所検出され、ピットは径20cm深さ30cm前後である。

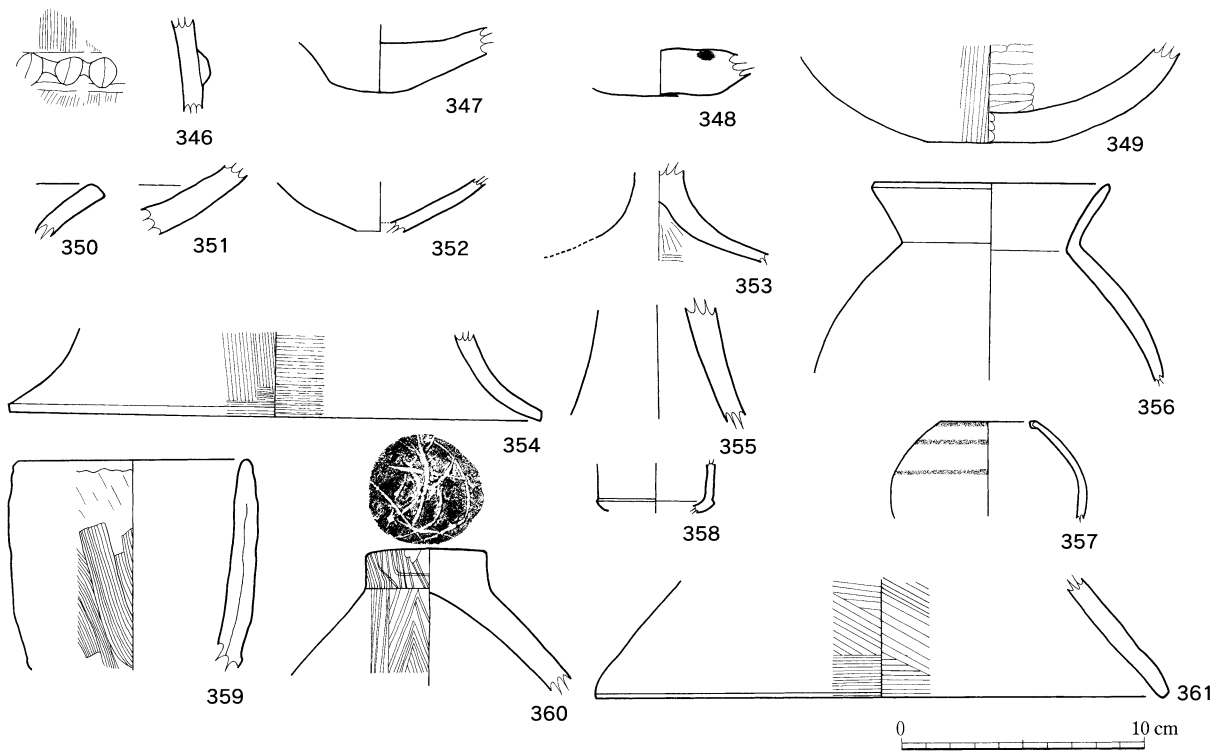
大型土坑内の出土遺物は362～401である。

362～383は成川式土器の甕形土器である。

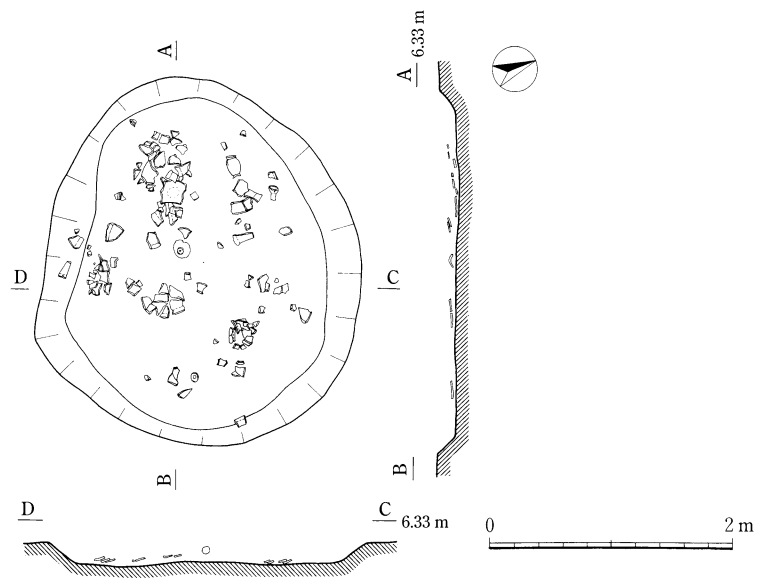
362は高さが高い三角突帯が頸部に廻り、口縁部に向かって立ち上がっている。口縁部は欠損しているため不明である。363は頸部に刻み目突帯を施している。364～367は頸部で口縁部に向かって緩やかに外反するタイプである。364は大型の土器で、器面調整は縦位に施されている。



第55図 第13号竪穴住居跡の出土遺物（1）

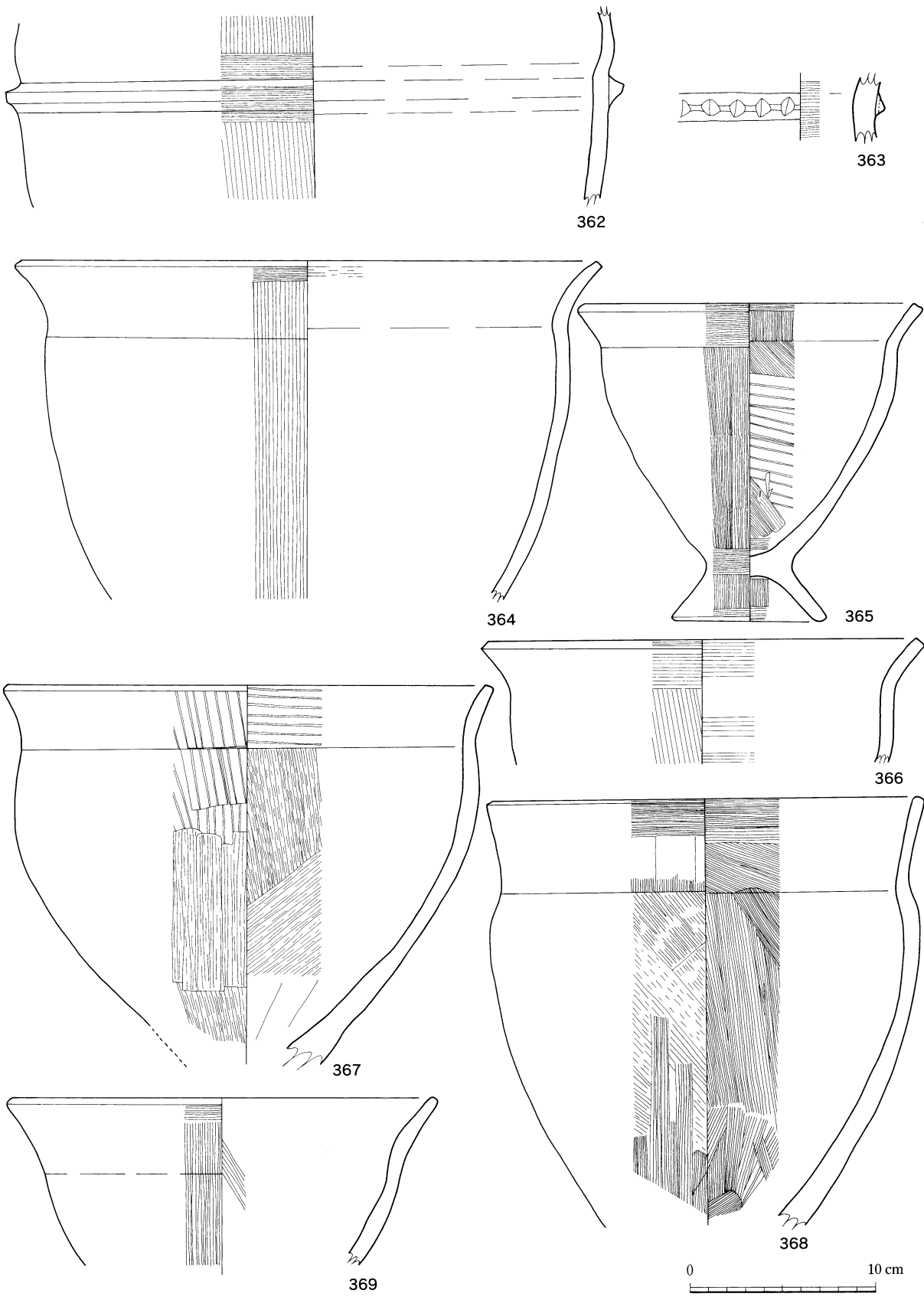


第56図 第13号竪穴住居跡の出土遺物（2）

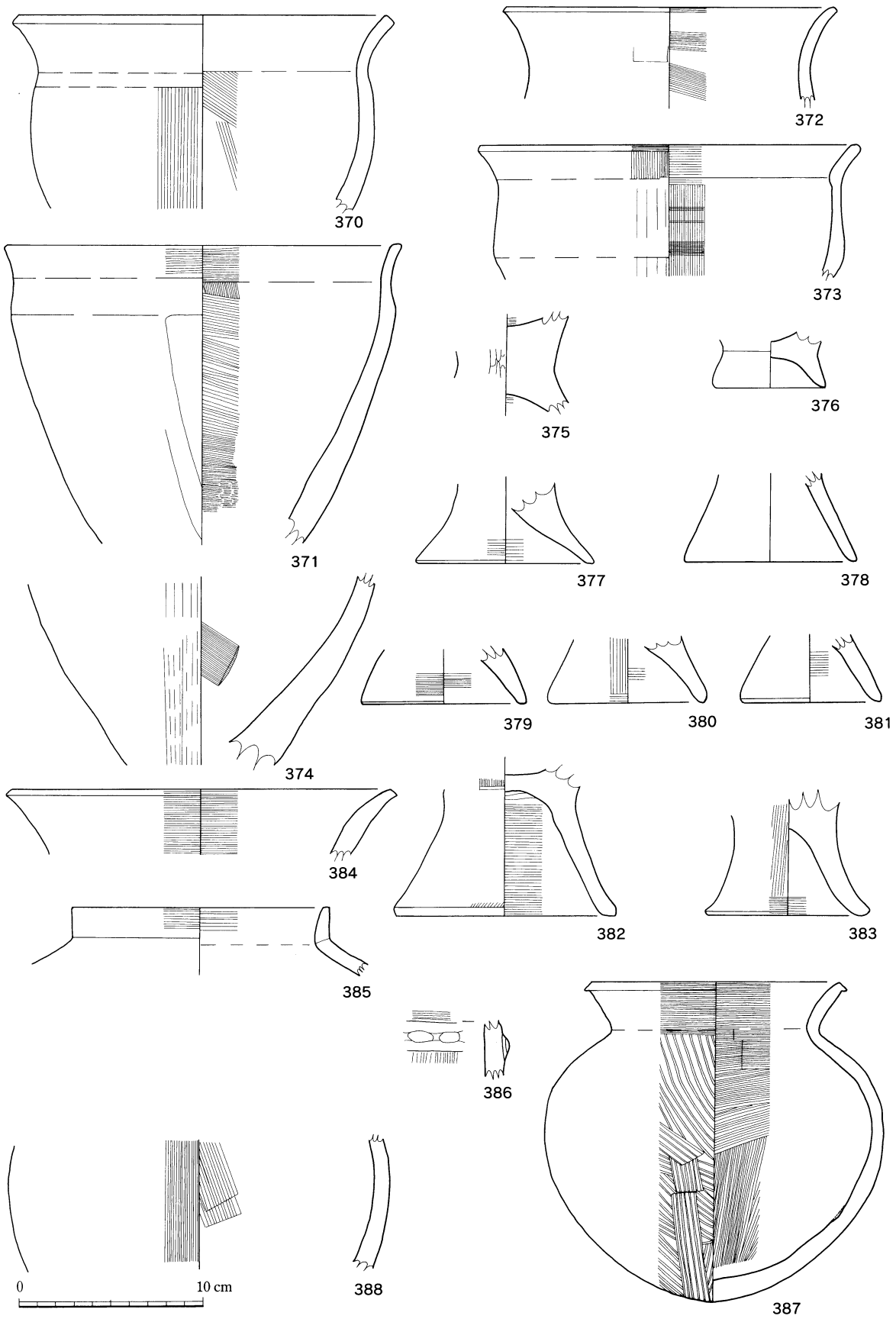


第57図 大型土坑11の遺物出土状況

365は小型の甕形土器で、器面調整は外面が縦位、内面が縦位と斜位のハケ目がみられる。脚は大きく開き長い。366の器面調整は外面が縦位で内面が横位のハケ目である。367は肩部が若干上位に位置し、張りがある土器である。器面調整は外面がへらの掻き上げ状に縦位と横位に、内面は



第58図 大型土坑11の出土遺物（1）



第59図 大型土坑11の出土遺物（2）

斜めに施している。**368**は口縁部が直に立つタイプで頸部から肩部にかけて短く、肩部が上位にある。器面調整は外面の口縁部は縦位と横位のハケ目で、肩から胴部は斜めにヘラケズリ状に、内面はハケ目が横位、縦位に施されている。**369**は胴部から直線的に外反する器形で、器面調整は縦位のハケ目である。内面はナデ調整で一部ハケ目がみられる。口縁部の内側のつくりから蓋の可能性も考えられる。**370~373**はやや小型の甕形土器である。**371**と**372**は肩部が上位にあり頸部で締まり、口縁部は外反する器形である。**372**と**373**は肩部が下位にあり口縁部が外反する器形である。これらの器面調整はハケ目が主であるが、**371~373**の外面にはヘラナデがみられる。**374**は底部に近い胴部である。器面調整は外面が粗いハケ目で、内面は一部にハケ目が見られるヘラナデである。

375~383は底部である。**375**は厚みが充実した底部で、器面調整はヘラ研磨である。弥生時代後期終末のタイプに類似している。**376**は脚の浅い底部である。**377**は厚みのある底部で浅い脚である。**378**は脚の高いものである。**379~381**は浅い脚である。**382**は平坦底面の底部で脚は直線的に長く脚の縁は若干外反している。**383**は脚が外反しながら開いている底部である。これらはハケ目調整をしているものが主であるが、ヘラナデ(**376・378**)をしているものもある。

384~389は壺形土器である。**384**は広口壺の口縁部である。大きく開くもので、器面は横位のハケ目調整である。**385**は口縁部が直に立つ低いもので、肩が張る器形である。器面調整は横のハケ目である。**386**は刻み目突帯の部分である。**387**は小型の壺である。口唇部は平坦につくり、口縁部は広口壺で外反し、胴部は球状につくり、底部は丸底である。器面調整は横位、斜め、縦位のハケ目である。器形は須恵器の壺を模範として製作した可能性が高い。**388**は胴部である。器面はハケ目である。**389**は大型の壺である。3条の三角突帯を胴部下位に施したもので、器面は丁寧なナデ調整である。

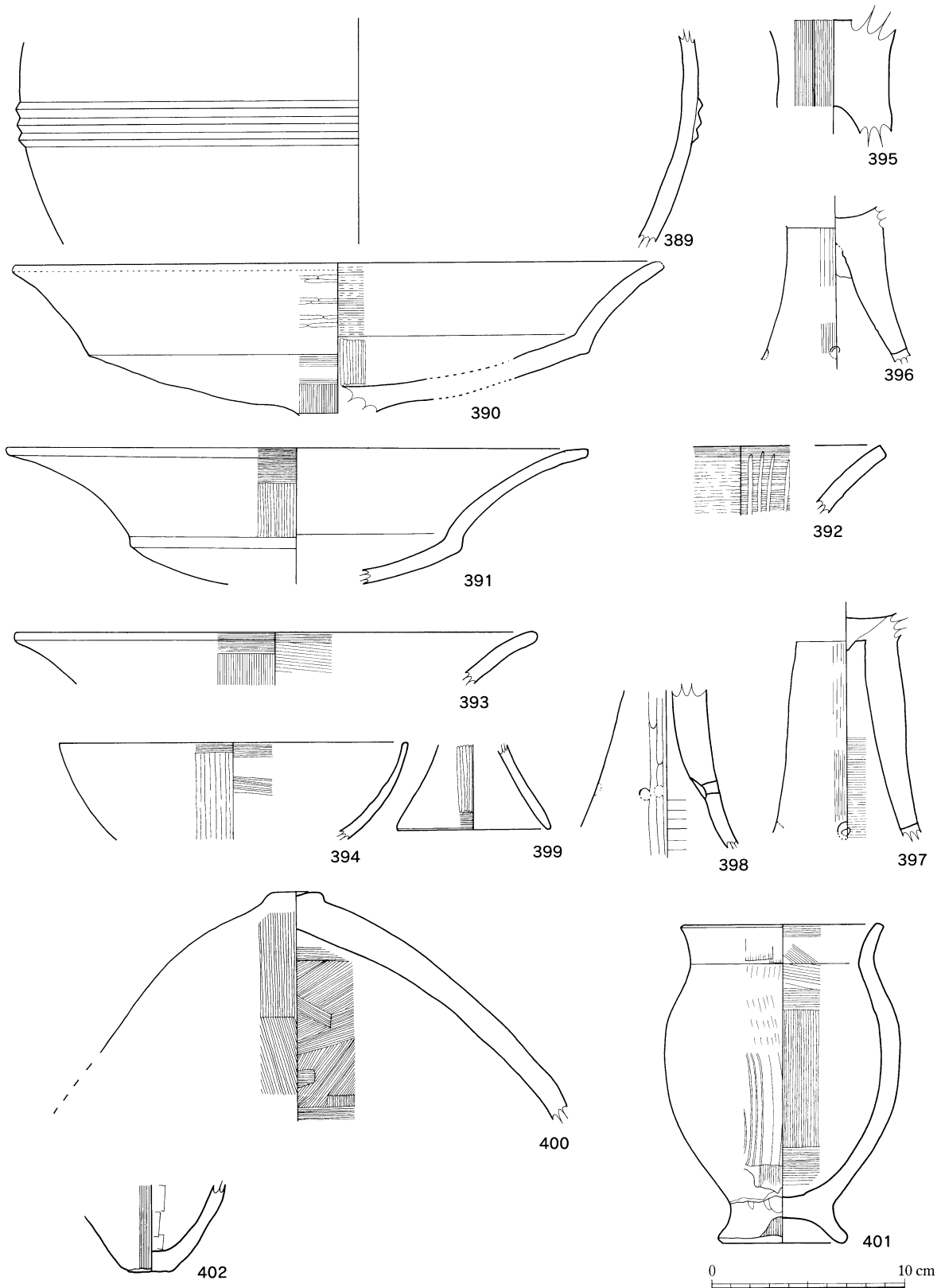
390~399は成川式土器の高坏である。

390は高坏の坏部である。器形は途中に稜を設け外反するものである。器面調整はヘラ研磨とハケ目である。**391**は高坏の坏部である。器形は途中に稜を設け内側に湾曲しながら長く外反するものである。器面調整はハケ目である。**392**は高坏の坏部である。口縁部の内側にハケ目の上に縦位の暗文が施されている。**393**は高坏の坏部である。器面はハケ目調整である。**394**は小型の高坏で丸形の坏部である。器面調整はハケ目である。**395**は筒形の脚部で縦位のハケ目である。**396**は広がる脚部で円孔透かしがある。**397**は筒形の脚部で円孔透かしがみられる。器面調整はハケ目である。**398**は開く脚部で円孔透かしがある。器面調整は外面がヘラ磨き、内面がハケ目である。**399**は小型の脚である。胎土は細砂粘土を使っている。器面調整はハケ目である。また、器形では**394**とは対になる可能性がある。

400は蓋である。頂点に摘み部をつくり、湾曲しながら開いている。口唇部は欠損しているが、口縁部に近い部分までであると考えられる。器面調整は外面が縦位のハケ目で丁寧である。内面はハケ目調整がそろってなく雑であり一定の方向性がない。また、この土器は全体的に厚みがある。

401は甕形土器のミニチュアである。口縁部と脚部が短く作られている。胴部は張り、丸味がみられる。器面調整は外面がヘラナデで、内面がハケ目である。

402は壺形土器の手づくねである。器面調整はハケ目とヘラナデである。



第60図 大型土坑11の出土遺物（3）

ソ 第14・15号竪穴住居跡及びピット群とその出土遺物（第61図・第62図403～416）

これら遺構は、A3区中央に検出した。

第14号竪穴住居跡は南側が土管理設とその他の攪乱で確認されなかった。

この遺構は東西4m90cm、南北1m55cm、深さ20cmで方形の竪穴住居跡である。柱穴は2ヶ所確認されている。遺構内のP1（径45cm深さ30cm）とP2（径45cm深さ35cm）の間隔は2m40cmである。

本遺構の出土遺物は403～405で、成川式土器である。

403は甕形土器の外反する口縁部である。器面調整は横位のハケ目である。404は刻み目突帯を施す壺形土器である。405は筒形の高坏である。器面調整は丁寧なヘラナデである。

第15号竪穴住居跡は、東西4m、南北4m30cm、深さ15cmの遺構である。これは方形の竪穴に北側へ幅1.5m張り出した形態である。遺構内のピットは5ヶ所みられP1（径35cm深さ40cm）とP2（径35cm深さ30cm）が対応する支柱穴と考えられる。またP3は径30cm深さ40cm、P5は径30cm深さ40cmと柱穴に適したピットも検出している。なお、P4は小さく浅い。

出土遺物は遺構の南側に板石と土器片がみられた。板石は粘板岩質のもので床面に接して検出し、当時の生活に使用された可能性が強い。しかし、使用痕跡は認められなかった。

本遺構の出土遺物は406～416で成川式土器である。

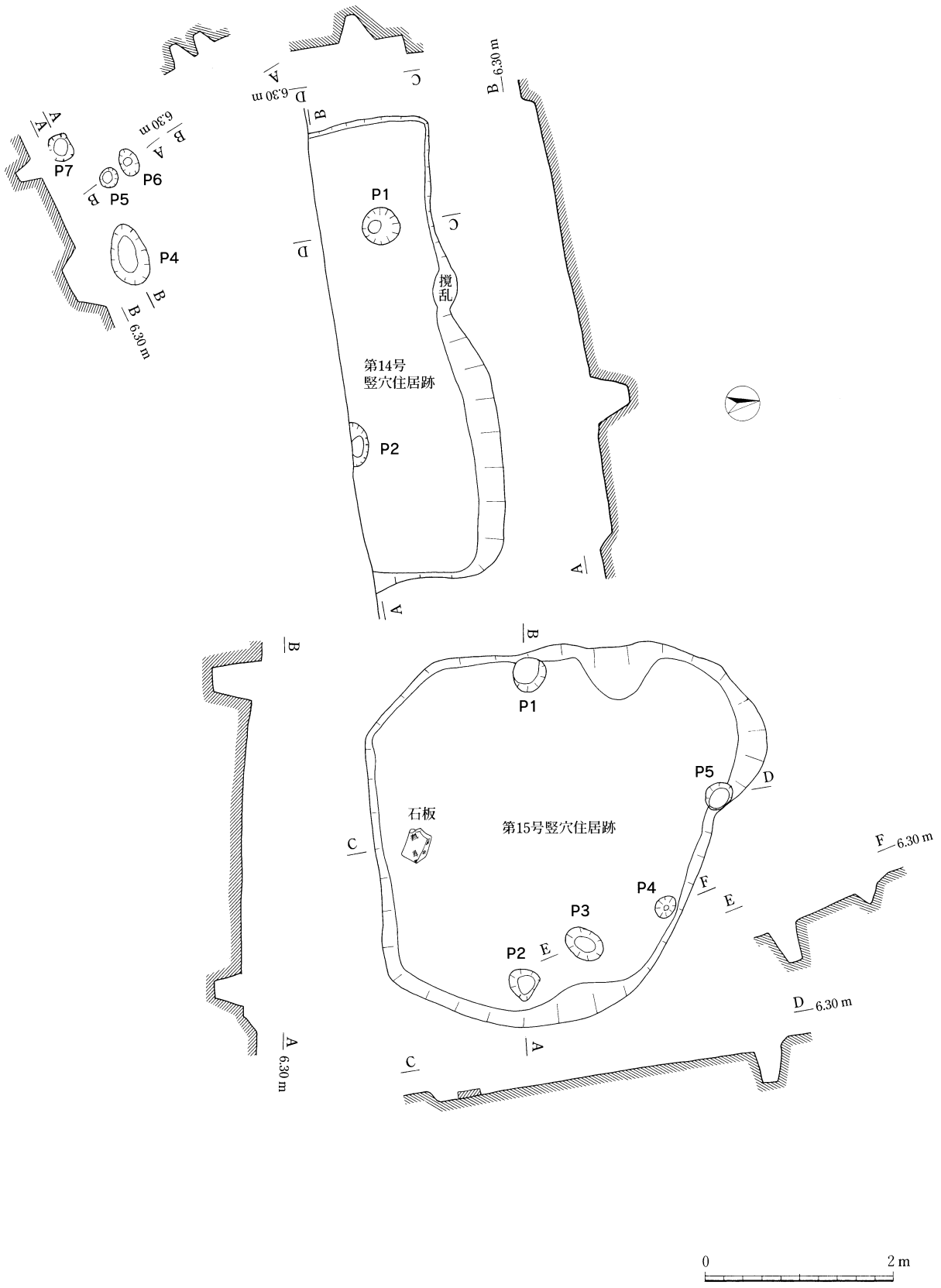
406は甕形土器の頸部で三角突帯に斜めの刻み目を施している。407は口縁部が外反する甕形土器である。器面はナデ調整をしている。408は外反する甕形土器の口縁部である。器面調整は外面が縦位に内面が横位に施されている。409は頸部で締まり、口縁部は緩やかに外反し、肩部はあまり張らない器形である。器面は丁寧に仕上げ、外面口縁部は縦位と口唇部近くが横位にハケ目がみられる。内面は口縁部が横位に肩部が縦位にハケ目がみられる。410は甕形土器の胴～底部である。底部は低い充実高台で平坦底である。器面調整は胴部の外面が縦位に、内面が縦及び斜めにハケ目を施している。内面には剥がれた部分がみられる。

411は壺形土器の底部である。薄手のもので小壺の類である。外面は使用の結果粗くなり内面は煮沸による黒色化がみられる。

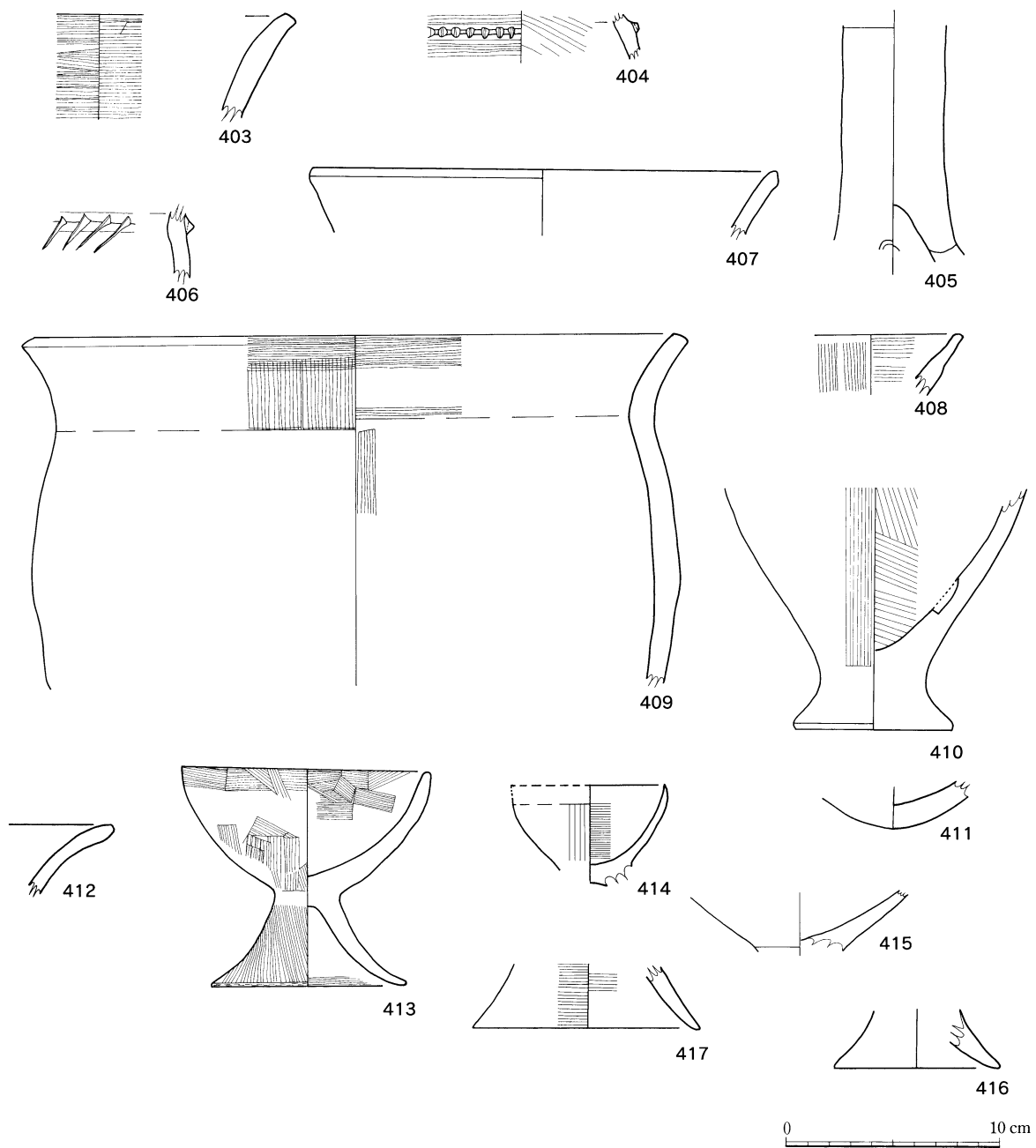
412～417は高坏である。412は大型の坏部で外反する口縁部である。器面は風化がみられ調整痕は良く分からない。413は小型のものである。坏部は半球状で、脚部は接合部より大きく開き安定している。器面調整は丁寧な研磨気味のハケ目である。胎土は細砂粘土を使用している。414は手づくね土器である。器部は半球状の坏部で、器面調整は丁寧な研磨気味のハケ目である。胎土は細砂粘土を使用している。415は坏部で、器面調整は丁寧なナデである。胎土は細砂粘土を使用している。416・417は脚部である。416は器面調整が粗く、甕形土器の脚部も考えられる。417はやや深めで立ち上がりが鋭角である。器面調整は内外面とも横位のハケ目である。これらは成川式土器である。

ピット群（第61図）

第14号竪穴住居跡の南側にあり本遺構に関係すると思われる。時にP4（長径65cm深さ25cm）はP1より2m50cmであるため支柱穴の位置にある。他P5～7は径20cm弱で、深さ15cm前後のものである。



第61图 第14·15号竖穴住居跡



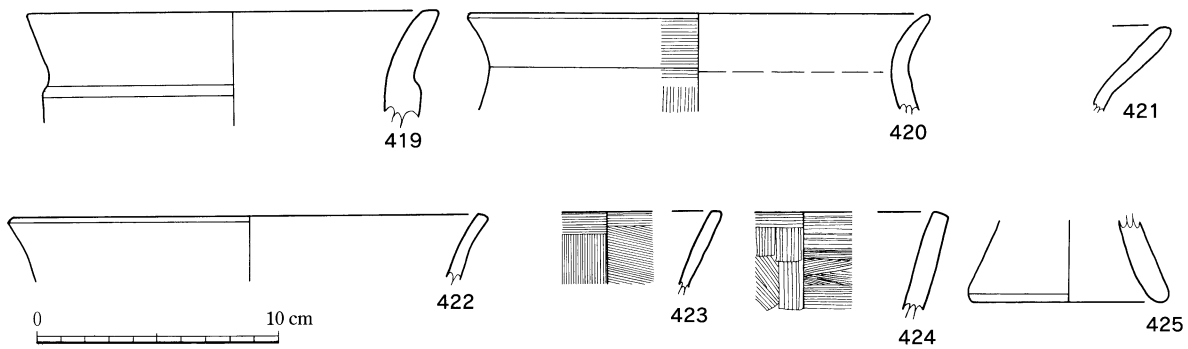
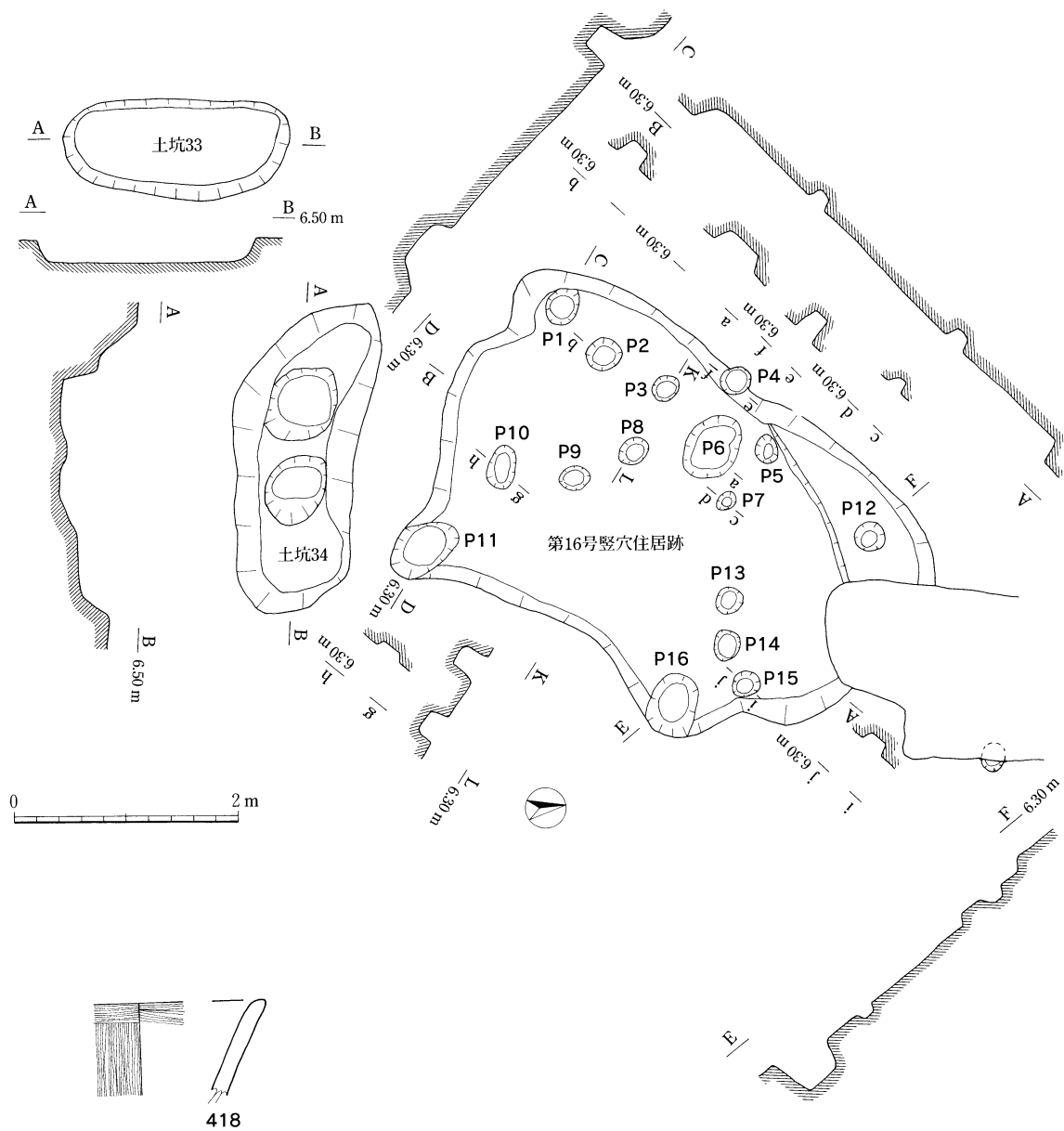
第62図 第14・15号竪穴住居跡の出土遺物

タ 第16号竪穴住居跡及び土坑33・34とその出土遺物（第63・64図418～425）

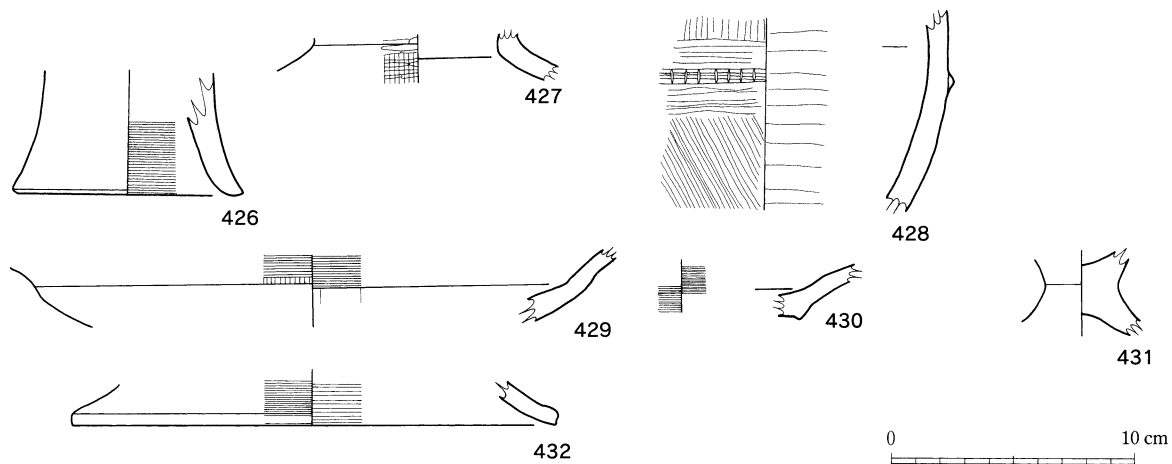
これらの遺構群はB3区西部に検出した。

第16号竪穴住居跡は第12号大型円形竪穴住居跡と第17号花弁状竪穴住居跡の間に検出した。

形は外円が4 m 50 cm、内円3 mで南側が短くなっている扇形状につくられている。部分的には北側に方形の張り出し、西側に方形の張り出しがつくられた形状である。また、北側は一段上がって



第63図 第16号竪穴住居跡及び土坑33・34とその出土遺物（1）



第64図 第16号竪穴住居跡の出土遺物（2）

いる。ピットは16ヶ所あり、中でもP 6・P 11・P 16が大きい。P 1は径30cm深さ30cm、P 2は径15cm深さ10cm、P 3は径20cm深さ25cm、P 4は径25cm深さ20cm、P 5は径15cm深さ10cm、P 6は径50cm深さ15cm、P 7は径15cm深さ10cm、P 8は径25cm深さ18cm、P 9は径25cm深さ14cm、P 10は長径40cm深さ5cm、P 11は長径65cm深さ15cm、P 12は径20cm深さ10cm、P 13は径25cm深さ14cm、P 14は径24cm深さ5cm、P 15は径24cm深さ8cm、P 16は長径50cm深さ25cmである。これだけのピットがあるが中心柱は設定できない。

出土遺物は419～431である。何れも成川式土器である。

419～426が甕形土器である。419は外反する口縁部で肩部において段がついている。420は頸部が丸味をもちながら締め、口縁部が外反する土器である。器面調整は横と縦のハケ目である。421～424は外反する口縁部である。器面調整はハケ目である。425・426は甕の脚部である。

427は小型壺の頸部である。器形は肩が極端に張るものである。器面調整はヘラ研磨である。428は壺形土器の胴部である。そこに、三角刻み目突帯が廻っている。器面調整は外面がハケ目で内面はヘラナデである。

429～432は高坏である。429・430は坏部で稜がみられるものである。器面調整はハケ目である。431は坏と脚の接着部である。小型のもので坏部が狭く立ち上げている。432は脚部である。

土坑33（第63図）

この遺構は東西90cm南北2m深さ20cmの隅丸方形土坑である。

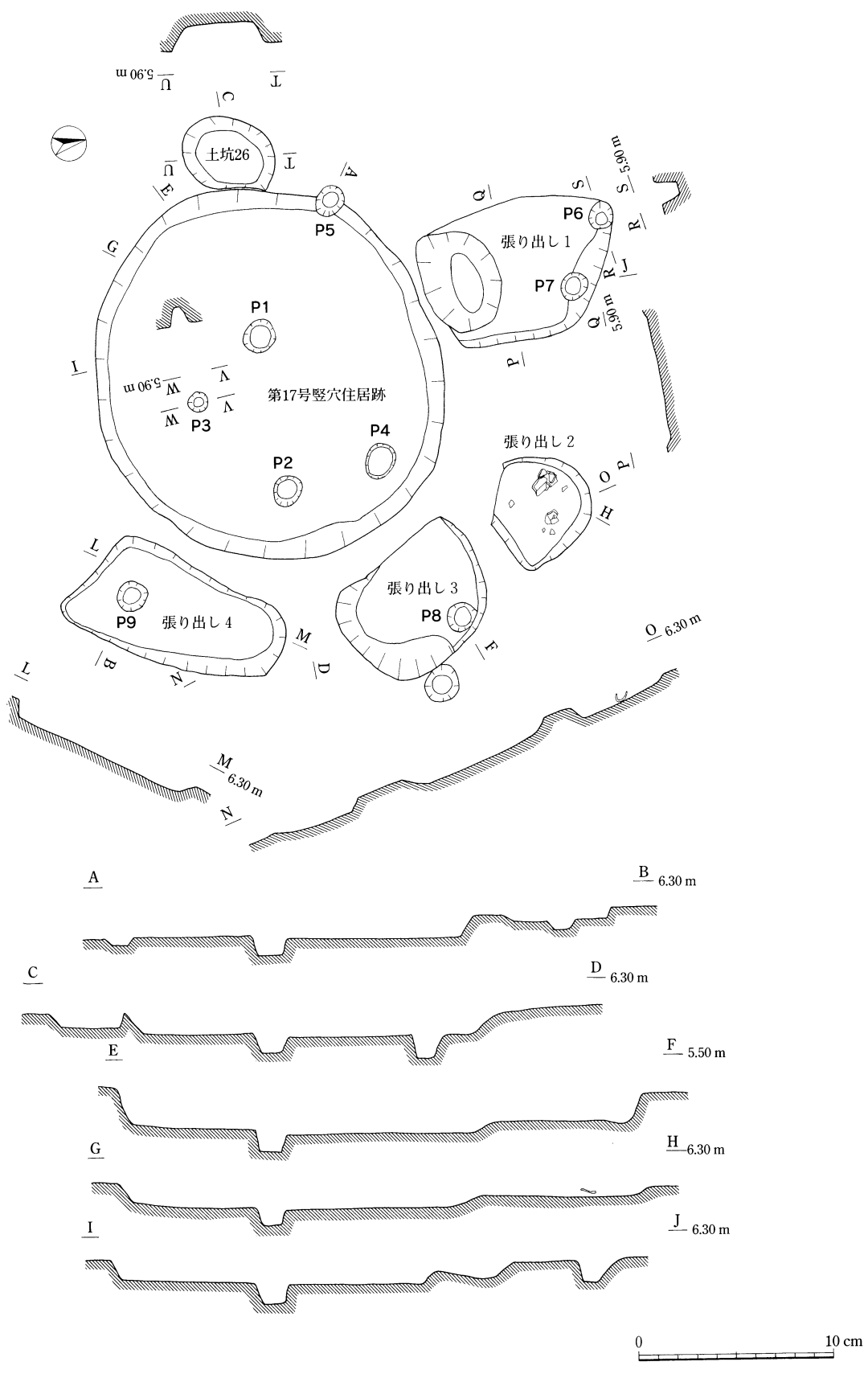
出土遺物は418で高坏の坏部口縁である。器形は大きく外反し、器面はハケ目調整である。

土坑34（第63図）

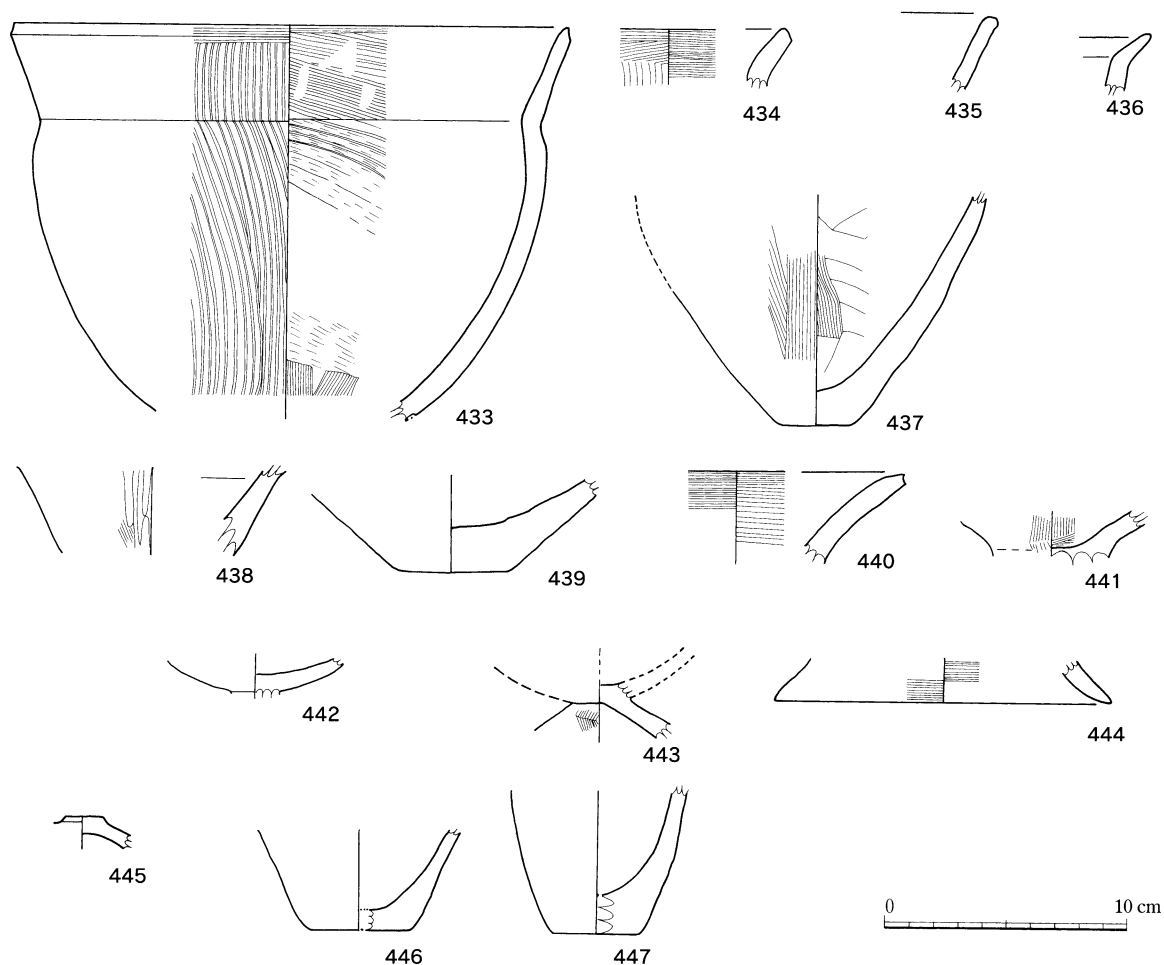
この遺構は東西2m70cm、南北1m10cmの隅丸方形土坑である。中に径60cmで深さ10cmの落ち込みがみられる。出土遺物はなかった。

チ 第17号竪穴住居跡とその出土遺物（第65図）

この遺構はAB3区中央に検出した。第16号竪穴住居跡の東に位置し、大型土坑9・10に切り合っている。また建物の範囲からみると第16号竪穴住居跡とも重なっている。



第65図 第17号竪穴住居跡



第66図 第17号竪穴住居跡の出土遺物

この遺構は、径3 m60~70cm、深さ35cmの円形竪穴の周りに4つの土坑状張り出しを東と北側に廻らす花卉状竪穴住居跡である。

中央の円形竪穴はP1（径25cm・深さ20cm）とP2（径25cm・深さ25cm）が対応する支柱穴で、この間隔は1 m65cmである。

張り出し1は東西1.5m、南北2 m、深さ8cmである。この中に検出したP6は径25cm深さ20cmで、P7は径30cm深さ20cmである。張り出し2は径1 m深さ10cmで、中には土器が出土した。張り出し3は東西1.2m南北1.5m深さ20cmの方形で、中にP8（径30cm深さ5 cm）が検出した。張り出し4は東西1.5m南北2.2m深さ15cmの土坑状である。中にP9（径30cm深さ10cm）がある。他に張り出し1に東西1 m南北75cm深さ12cmの落ち込みと、張り出し3の東に径35cmのピットと、円形竪穴の西側に東西70cm南北1 m深さ20cmの土坑がみられる。これらはこの住居跡に含まれる可能性が高い。

よって、この花卉状竪穴住居跡は直径7 mの規模になると考えられる。

出土遺物は第66図の433~447である。何れも成川式土器である。

433~436は甕形土器である。433は頸部で「く」字に外反し若干肩が張る器形である。器面調

整は外面が縦位のハケ目で、内面が斜めのハケ目である。434・435は外反する口縁部である。436は「く」字に折れ外反する口縁部である。

437～439は壺形土器で平底である。器面調整はハケ目である。特に439の底は広い。

440～444は高坏である。440は大型の口縁部で、ハケ目調整がみられる。441は坏部の底である。器面にはハケ目調整がみられる。442・443は小型のもので坏部は半球状である。444は小型の脚である。器面にはハケ目調整がみられる。

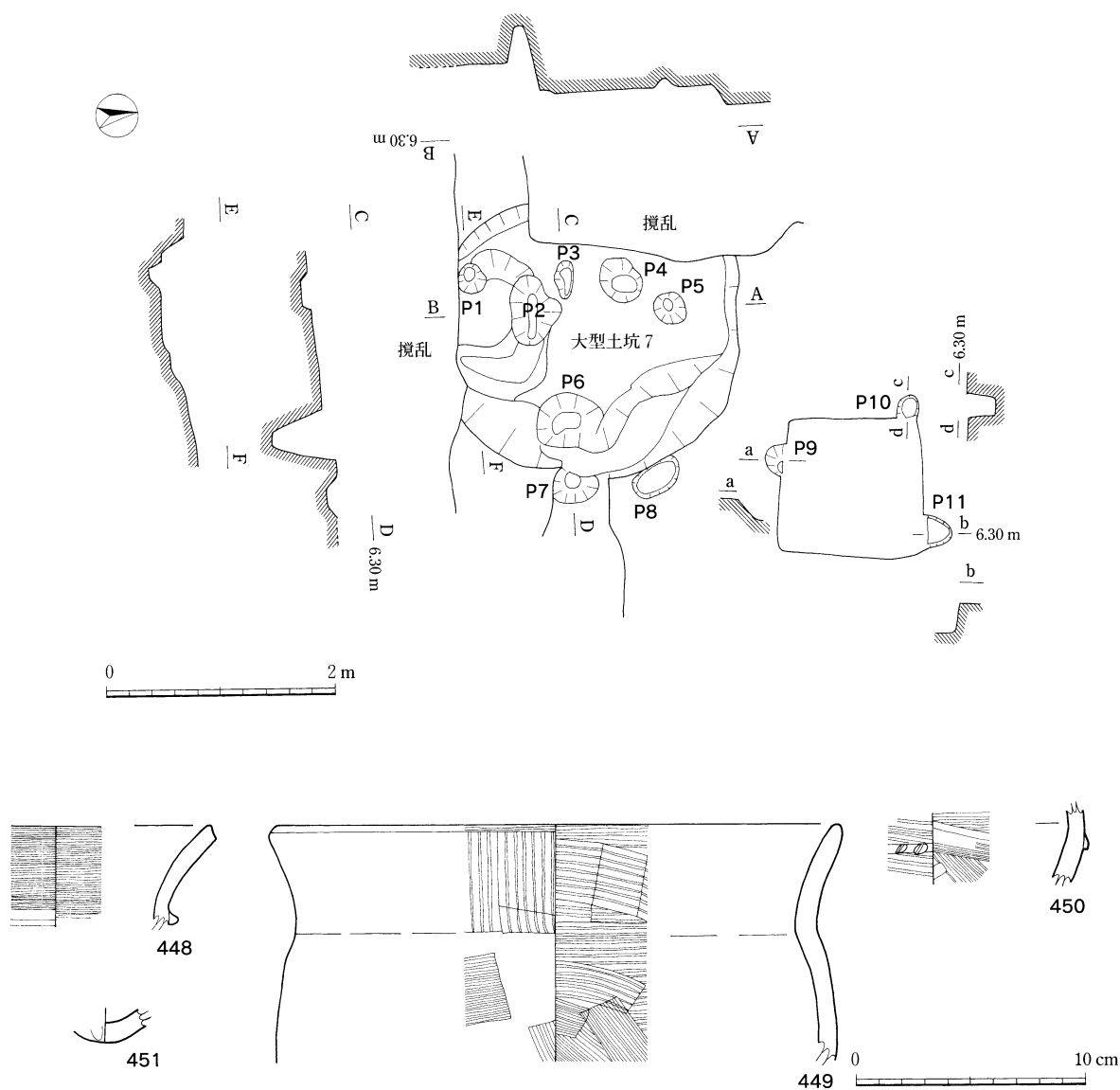
445は蓋の摘み部である。胎土は細砂を使用して丁寧に作っている。

446・447は手づくねで、器形は鉢と思われる。

ツ 大型土坑7及びピット群とその出土遺物（第67図448～450）

この遺構は、B3区に北と南側が建物の基礎で攪乱され検出した。

この遺構は長径2m60cm、深さ20cmの土坑である。底面は不安定で大きく3段に分けられ、南側



第67図 大型土坑7及びピット群とその出土遺物

に1 m×50cm深さ25cmの土坑があり、北西側は一段上がっている。この遺構に関するピットはP 1～8までである。このピット群の中で深いものはP 6で径55cm、深さ50cmである。次に深いものはP 2で35cmである。他のピットは10cm前後で浅い。

P 9～11は建物の基礎で切られているため1/2が検出されている。径は20cmで深さは25cm前後である。

出土遺物は**448～451**である。何れも成川式土器である。

448・449は甕形土器である。**448**は頸部に刻み目突帯を施し、内外器面はハケ目調整である。**449**は頸部で「く」字に外反する口縁部をもつ器形で、器面は縦位と横位のハケ目調整である。その調整はヘラの打ち込み跡が確認される。

450・451は壺形土器である。**450**は胴部に刻み目突帯を施した球状の器形である。器面はハケ目である。**451**は手づくね土器の底部である。

テ 大型土坑8・9・10及びピット群とその出土遺物

大型土坑8・9・10は3基が次々に重なるように切り合い状態で検出した。

大型土坑8は東西2 m、南北2 m70cm、深さ12cmである。これに関するピットはP 1・2と外側にP 11・12がある。P 3もこの遺構の可能性がある。これらは、径が約30cm、深さ15～20cmである。

大型土坑9は南北2 m60cm、東西は攪乱のため不明であるが約2 m深さ18cmである。ピットはP 3～8までである。なお、P 8は大型土坑10に付く可能性がある。ピットはP 3・4が径30cmで他は径20cm前後で、深さはP 9が30cm他は20cm前後である。

大型土坑10は南北2 m70cm、東西2 m10cm、深さ12cmである。P 9は径が25cm深さ23cmである。P 10は径30cm深さ15cmである。

これらは、大型土坑8・9・10の順で深くなっているが、埋土での前後関係は確認されなかった。これらは同程度の規模であるため性格は同じと考えられる。深さを基準とすると大型土坑8が古く、次に大型土坑9、次に大型土坑10の順で考えられる。よって、これらの遺構は3時期が考えられる。

遺構の性格は、他にみられる5～10mの竪穴住居跡と比較すると小規模であり、柱穴も規則性がなく倉庫的な小屋の可能性が考えられる。

これらの遺構の出土遺物は**452～469**である。何れも成川式土器である。

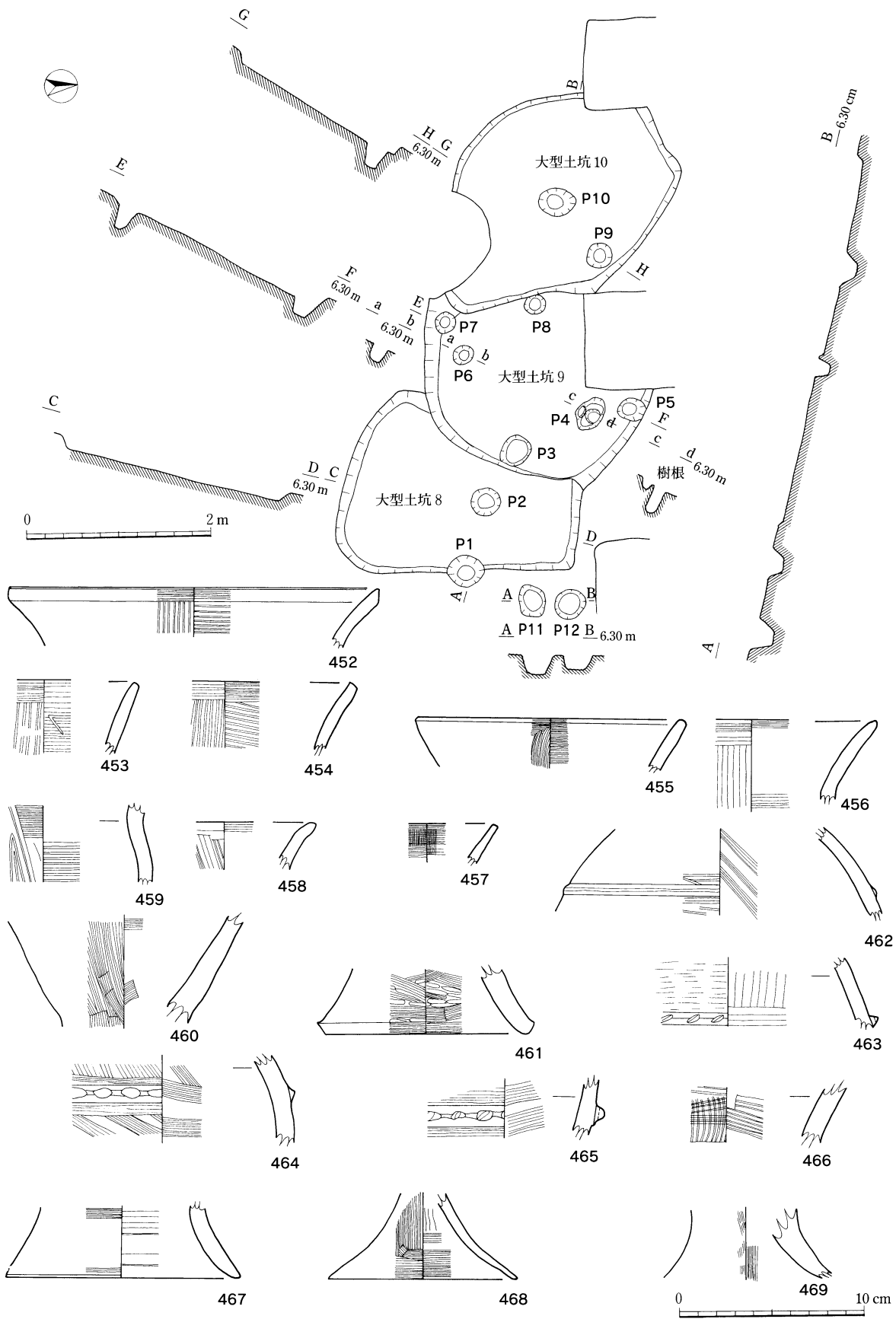
ここでは出土遺物は遺構による変化が顕著になかったため、まとめて紹介する。詳細は観察表で出土遺構を確認できる。

出土遺物は**452～461**が甕形土器である。

452～457は外反する口縁部、内外はハケ目である。**460**は胴部下位で器面にハケ目がみられる。**461**は脚部で器面は研磨気味のハケ目調整である。

462は壺形土器である。**463～465**は壺形土器で肩に刻み目突帯が施されている。器面調整はハケ目である。

466～469は高坏で、**466**は坏部、**467～469**は脚部である。この内**468**は小型のもので細砂粘土を使用している。器面調整はハケ目である。

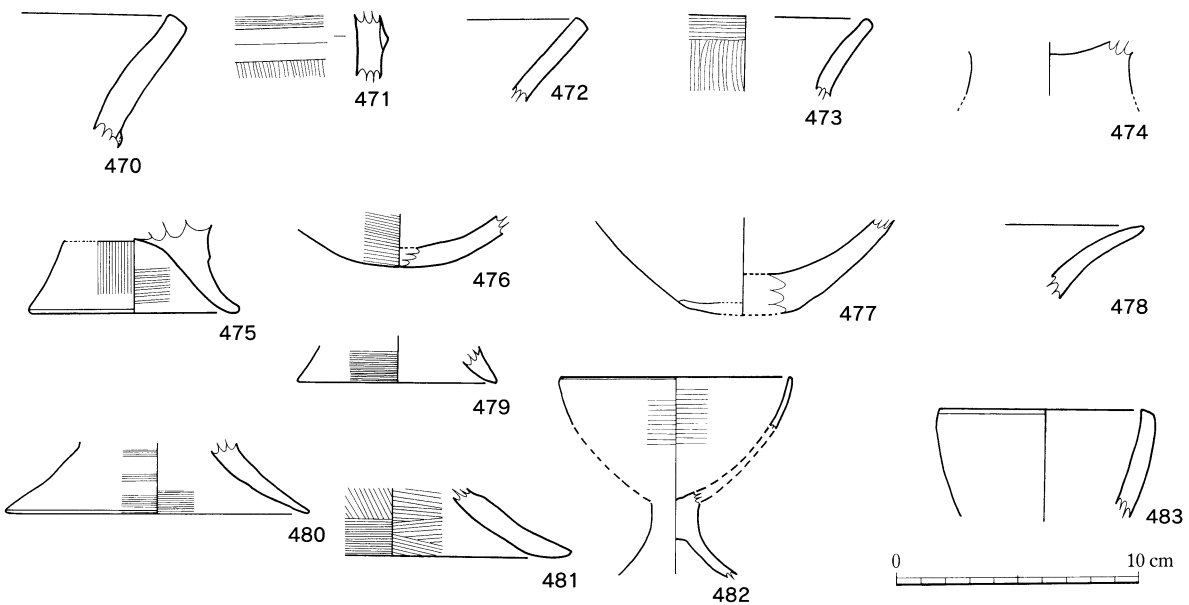
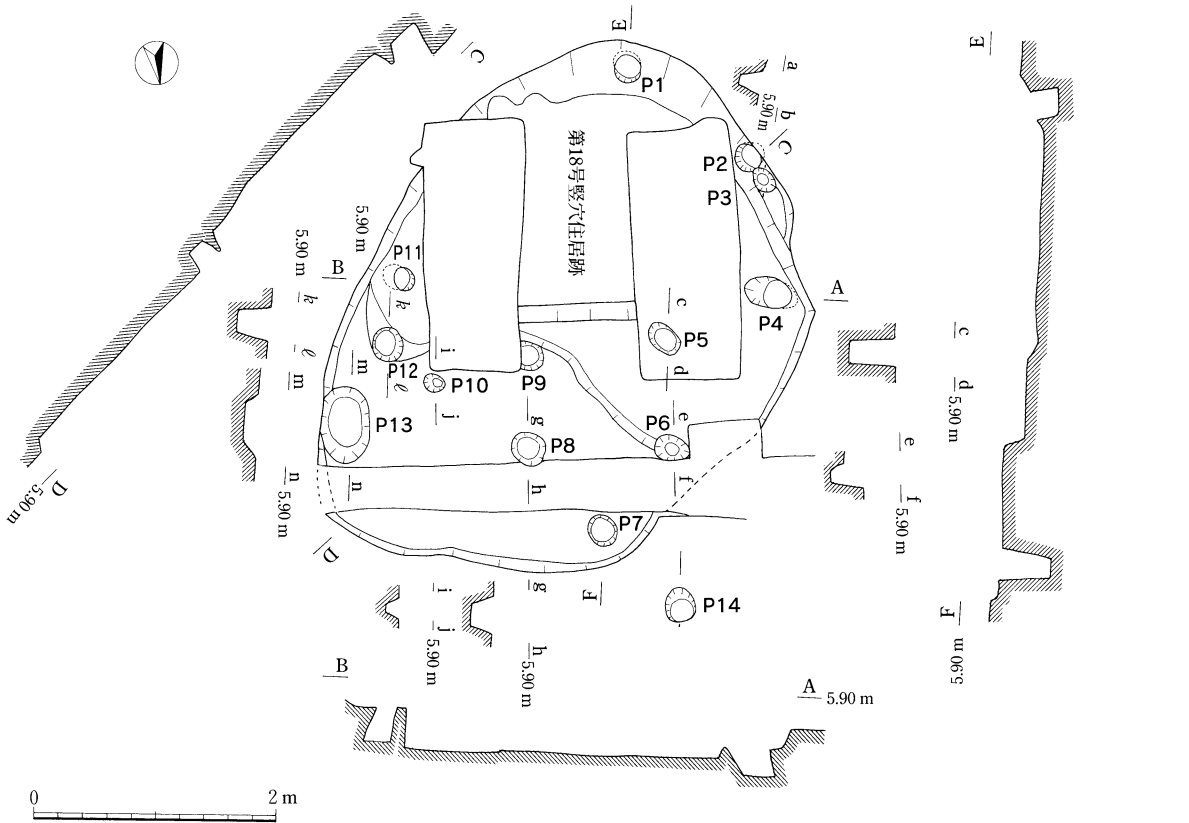


第68図 大型土坑8・9・10及びピット群とその出土遺物

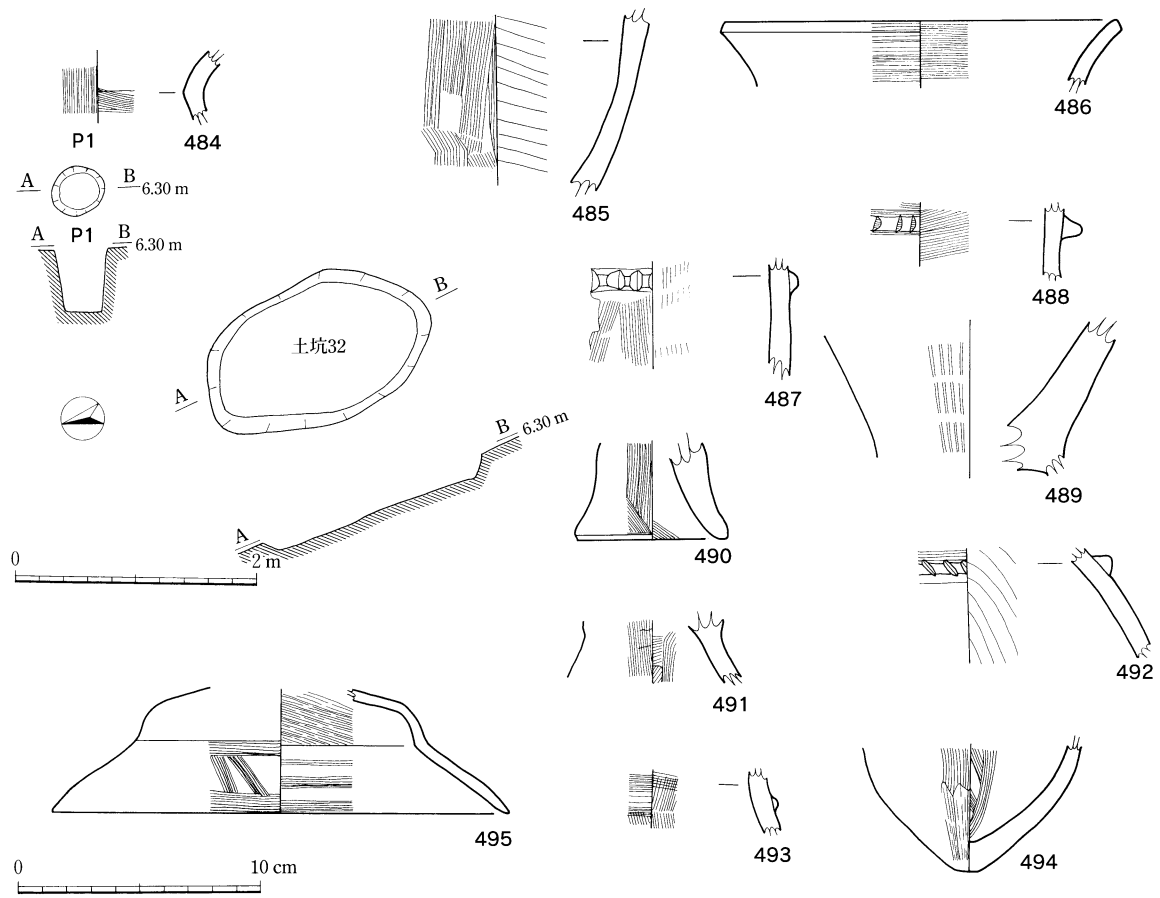
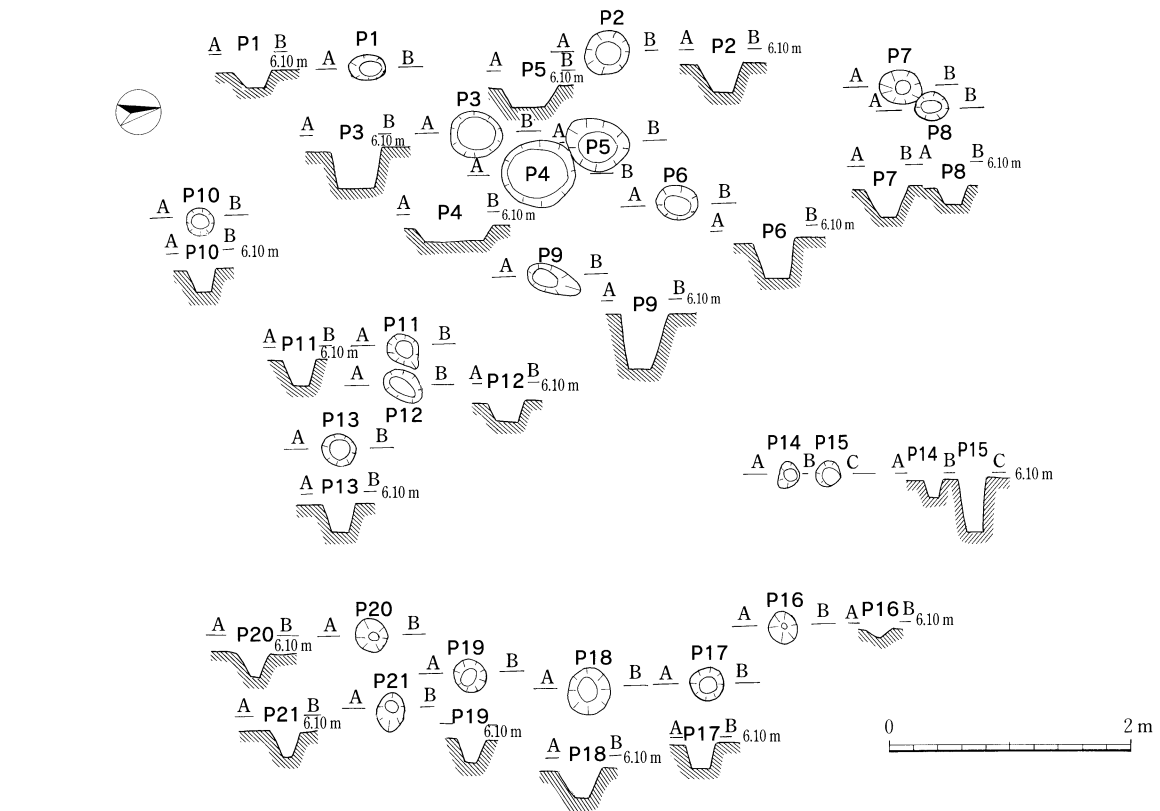
ト 第18号竪穴住居跡とその出土遺物（第69図471～483）

この遺構はB3区に一部建物の基礎で攪乱され検出した。

この遺構は東西3 m60cm、南北4 m70cm、深さ30cmの隅丸台形をした竪穴住居跡である。中は3段に区分けされ、ピットは遺構中に13ヶ所、外に1ヶ所みられた。



第69図 第18号竪穴住居跡とその出土遺物



第70図 ピット群及び土坑32とその出土遺物

P 1・P 4・P 12・P 17が建物の主柱穴として考えられる。各ピットの計測は、P 1が径26cm深さ26cm、P 2は径25cm深さ30cm、P 3は径18cm深さ15cm、P 4は径38cm深さ22cm、P 5は径22cm深さ40cm、P 6は径18cm深さ25cm、P 7は径25cm深さ40cm、P 8は径25cm深さ20cm、P 9は径23cm深さ15cm、P 10は径15cm深さ10cm、P 11は径20cm深さ32cm、P 12は径27cm深さ25cm、P 13は径50cm深さ10cm、P 14は径25cm深さ15cmである。

この中での特徴はP 1・4・11・14が内側斜め方向にみられ、建物の構造は円錐状が想像される。よって、この竪穴住居跡は考え方として住まいではなく倉庫風の建物が考えられる。

出土遺物は**470～483**である。何れも成川式土器である。

470～473は甕形土器である。この中で**470・471**は突帯を施している。器形は外反し、器面はハケ目とナデ調整がある。

474は甕形土器の底部で、**475**は脚部である。器面調整はハケ目である。

476・477は壺形土器の底部で丸底である。**476**は均一な厚さの土器で、**477**は底部に厚みが見られる。

478～482は高坏である。この中で、**478**は坏部で外反する口縁部で、**479～481**は脚部である。

482は小型高坏の坏部と底部である。これらは胎土が細砂使用されており同一個体とした。器面調整はハケ目である。

483手づくね状の鉢である。

ナ ピット群及び土坑32とその出土遺物 (第70図484～494)

このピット群はA 3・4にわたって22ヶ所検出した。

このピット群はP 13・12・9・7が一直線状に並び、P 20・19・18・17・16が等間隔につながる程度であるため、建物は復元できなかった。ピットの径と深さの計測は次のとおりである。

P 1 (30×15cm)、P 2 (35×25cm)、P 3 (40×35cm)、P 4 (60×12cm)、P 5 (50×18cm)、P 6 (35×35cm)、P 7 (35×25cm)、P 8 (28×15cm)、P 9 (40×40cm)、P 10 (20×20cm)、P 11 (25×25cm)、P 12 (30×15cm)、P 13 (30×24cm)、P 14 (15×12cm)、P 15 (25×45cm)、P 16 (24×5cm)、P 17 (25×15cm)、P 18 (35×25cm)、P 19 (25×20cm)、P 20 (25×20cm)、P 21 (25×20cm)であった。

この中で遺物が出土したピットはP 2とP 7である。

P 2の出土遺物は**484・485**である。2点とも成川式土器の甕形土器の頸部と胴部で、内外面はハケ目調整である。

P 7の出土遺物は**486～494**である。いずれも成川式土器である。

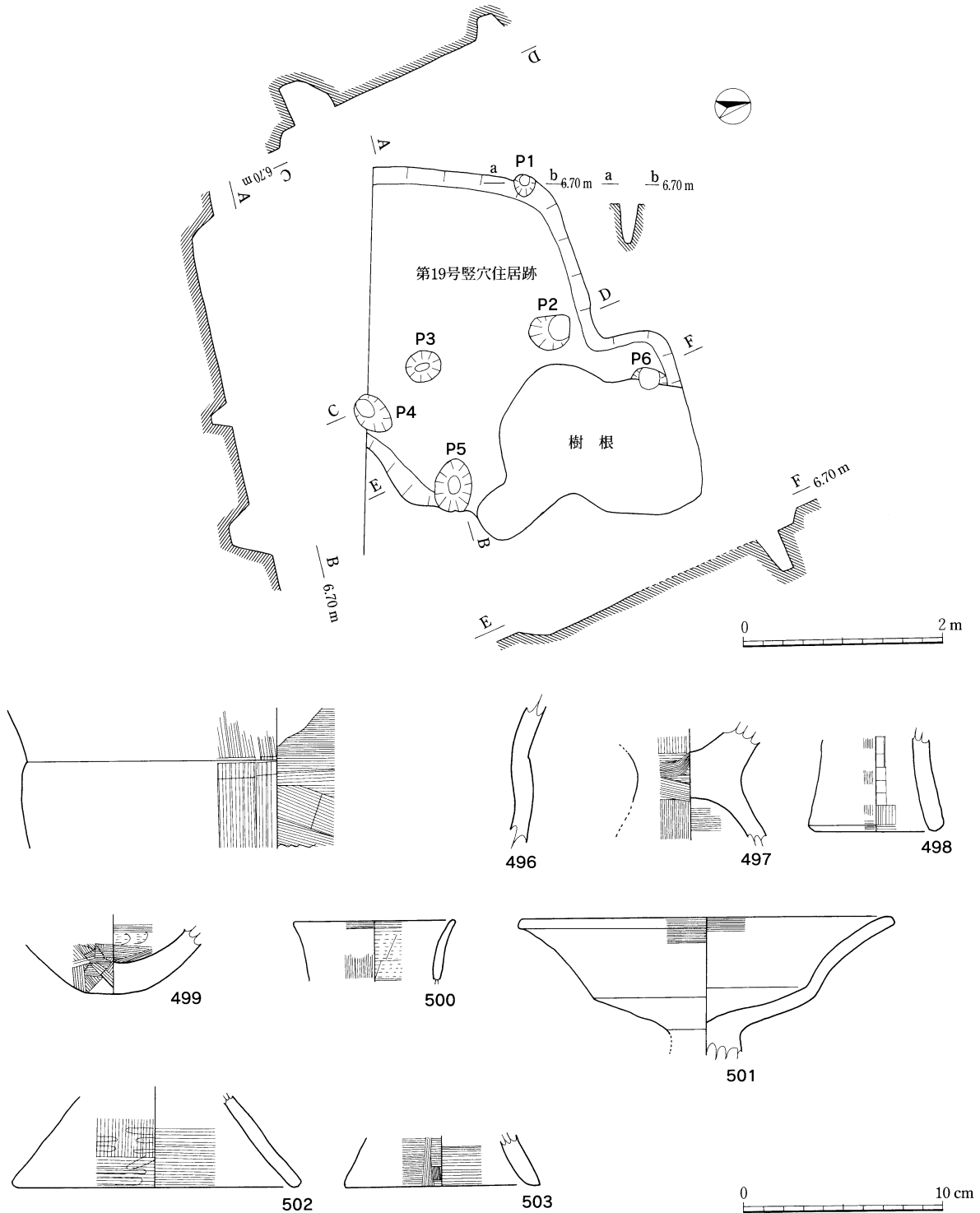
486～491は甕形土器で器面調整はハケ目調整である。**486**は外反する口縁部、**487・488**は刻み目突帯が施された頸部、**489～491**は底部と脚部である。**492～494**壺形土器である。**494**は小型の壺で他は突帯のあるものである。器面調整はハケ目である。

土坑32とP 1はB 4区に検出した。

土坑32は東西1 m 10cm、南北2 m、深さ15cmの長楕円形である。遺物は**495**が出土した。この土器は薄手で細砂粘土を使用したもので、橙色の焼成である。器面調整は外面が丁寧なハケ目で内面はケズリ気味に施している。調整面より判断して蓋とした。

二 第19号竪穴住居跡とその遺物 (第71図496~503)

この遺構は、B3区の南側に一部樹痕で壊されて検出した。規模は東西3m50cm、南北3m以上で、北側に奥行き50cmの張り出しがみられる。ピットは6ヶ所あり、P2とP4が主柱と考えられる。



第71図 第19号竪穴住居跡とその出土遺物

この遺構を竪穴住居跡と判断した根拠は、床面が平坦でとらえ、柱穴跡も確認したためである。床面の深さは30cmで、ピットの計測はP1が径15cm、深さ35cmで、P2は径30cm、深さ15cm、P3は径30cm、深さ15cm、P4は径35cm、深さ45cmで、P5は径40cm、深さ30cmで、P4は径25cm、深さ40cmである。

出土遺物は496～503で、成川式土器である。

496～498は甕形土器である。496は口縁部が外反するもので、497は脚台で、498は脚部である。どれもハケ目調整がみられる。

499は壺形土器の底部で丸底である。器面調整はハケ目である。500は埴の口縁部である。薄手で細砂粘土を使用している。器面調整はハケ目である。

501～503は高坏である。501は坏部で、器形は稜を持ち外反している。器面は丁寧なハケ目で横位に調整している。502・503は脚部で横位のハケ目調整を施している。

又 第20号竪穴住居跡及び土坑35とその出土遺物（第72図504～515）

これらの遺構はB3区南部に検出した。

第20号竪穴住居跡は東西3m30cm、南北3m90cm、深さ15cmと浅く、南側は一段低くなっている。形状は北側が尖った五角形で、ピットは9ヶ所ある。土坑のピットは2ヶ所検出されている。

ピットの中の支柱跡はP2・3とP8・9が1m70cmで対応し、P4とP6が1m30cmで対応すると考えられる。なお、この2列の間隔は1m80cmで平行である。計測はP1が径25cm、深さ10cm、P2は径35cm、深さ20cm、P3は径35cm、深さ20cm、P4は径30cm、深さ30cm、P5は径25cm、深さ10cm、P6は径35cm、深さ30cm、P7は径30cm、深さ15cm、P8は径32cm、深さ30cm、P9は径35cm、深さ20cmである。

土坑は土坑1が50×60cm、深さ15cmで2つのピットをもつ。土坑2は70×70cmで深さ15cmである。中には礫が5個みられた。

出土遺物504～510である。全て成川式土器である。

504～508は甕形土器である。504はなだらかに外反する口縁部を持ち、外面が縦位のハケ目で、内面が斜めのハケ目である。505は刻み目のある肩部である。506は胴部から底部でハケ目調整がみられる。507・508は底部と脚部でハケ目調整がみられる。

509は壺形土器の口縁端部で外反する口縁部である。510は壺形土器の底部である。これらの器面はハケ目調整である。

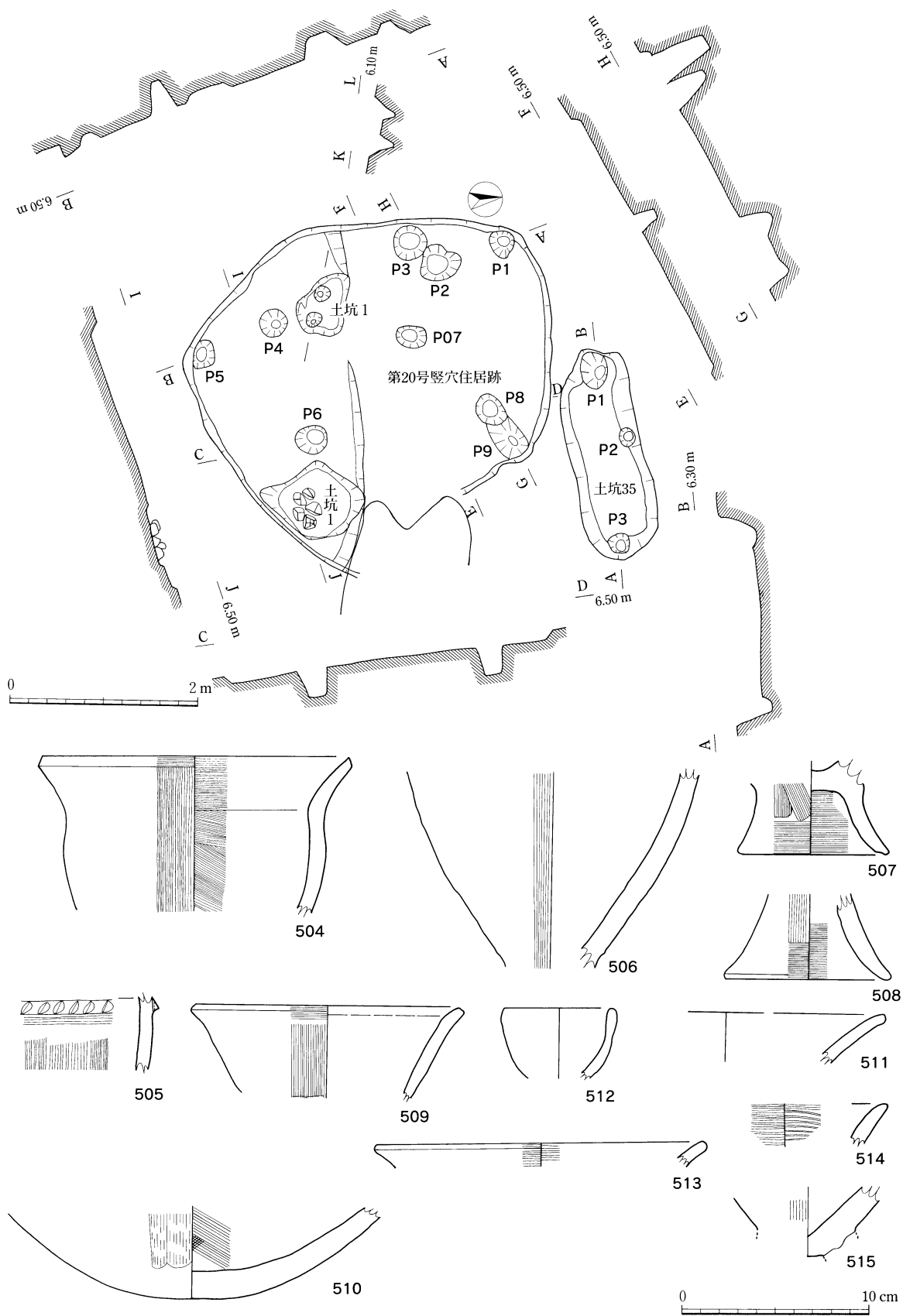
511は高坏の口縁部である。器面はナデ調整のため調整痕はみられない。

512は手づくね土器である。

土坑35は東西2m30cm、南北70cmの隅丸長方形で、深さは30cmである。ピットは3ヶ所ありP1が径35cm、深さ7cm、P2は径15cm、深さ10cm、P3は径18cm、深さ12cmである。これらの性格は不明である。

出土遺物は513～515で成川式土器の甕形土器である。

513・514は外反する口縁端部で、515が平坦底の底部である。どれも器面調整は横位のハケ目である。



第72図 第20号竪穴住居跡及び土坑35とその出土遺物

ネ 第21号竪穴住居跡及び大型土坑12・土坑36とその遺物（第73・74図516～542）

これらの遺構はB3区に検出した。

第21号竪穴住居跡は東西4m、南北3m以上、深さ20cmの規模である。大型土坑12で切られた状態で検出した。竪穴住居跡の中心部は南側で、方形の段落ちがあり、東と北側に一段上がった方形と円形の張り出しがみられる。竪穴住居跡関連のピットは9ヶ所みられる。その計測は、P1が径30cm、深さ15cm、P2は径40cm、深さ35cm、P3は径30cm、深さ15cm、P4は径40cm、深さ35cm、P5は径20cm、深さ15cm、P6は径60cm、深さ18cm、P7は径50cm、深さ20cm、P8は径45cm、深さ20cm、P9は径40cm、深さ20cmである。

出土遺物は516～530で、成川式土器である。

516～523は甕形土器である。516～521は外反する口縁部で、器面はハケ目調整を施している。522は三角突帯が廻り、ハケ目調整を施した肩部である。523はなだらかに外反する口縁部をもつ土器である。頸部から口縁部には縦位にハケ目がみられる。

524・525は壺形土器である。524は外に開く厚手の口縁部で、口唇部は角張り面取りをしている。525は頸部に三角突帯を廻らせたもので、内側に絞る形態である。器面調整はハケ目を突帯から上下に施している。

526・527は高坏の脚部である。526は筒形脚部の下部で器面にハケ目調整を施している。527は坏部より直ぐに開く脚部である。

528・529は蓋である。528は内側に黒色の塗りがみられる。529は須恵器の蓋を模範としたもので、厚手に作られている。器面はハケ目調整を施している。

530は口縁部が短く、肩部が張り、尖り底の坩である。器面調整はハケ目である。

大型土坑12（第73図531～538）

この遺構は東西1m60cm、南北2m10cmの楕円形で、深さは20cmである。ピットは2ヶ所あり、P10は径50cm、深さ15cm、P11は径30cm、深さ25cmである。

出土遺物は531～538で成川式土器である。

531～535は甕形土器である。531～533は外反する口縁部で、器面横位のハケ目調整がみられる。534・535は厚い脚部である。535には指押しとハケ目調整がみられる。536は鉢形土器である。器形は直に外開きするもので、器面にハケ目調整がみられる。537・538は高坏である。537は筒部で器面調整は研磨とヘラナデである。538は薄手の坏部で、細砂粘土を使用している。器面調整はハケ目、ヘラナデがみられる。

土坑36（第73図539～542）

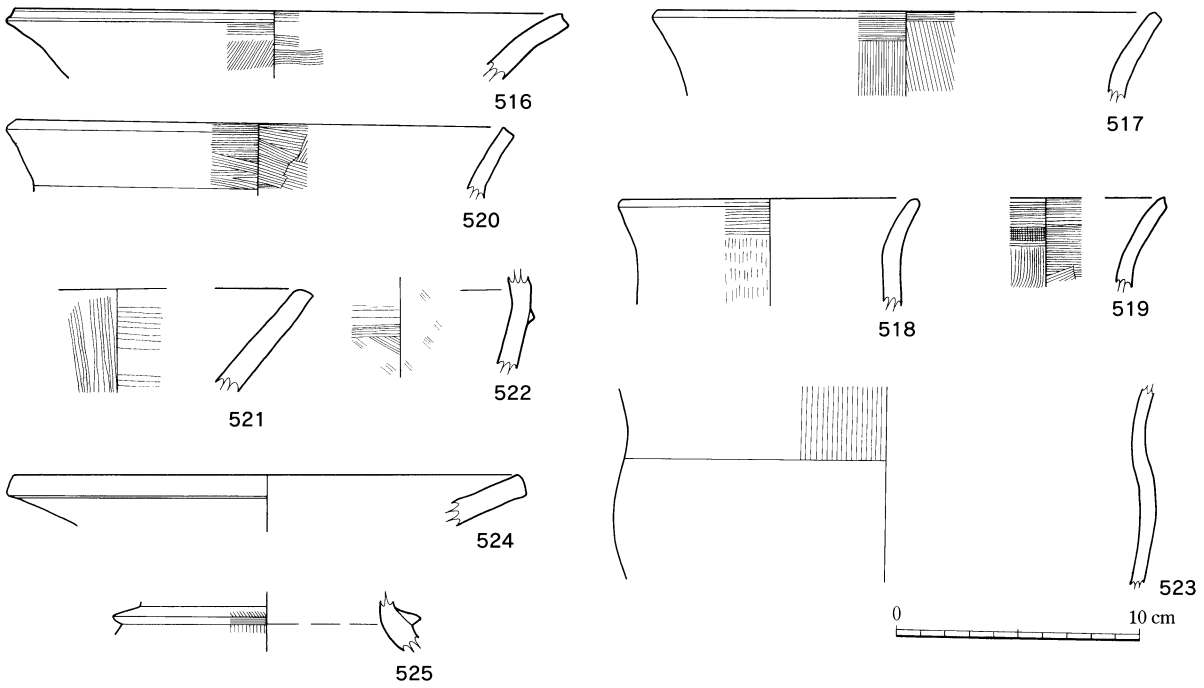
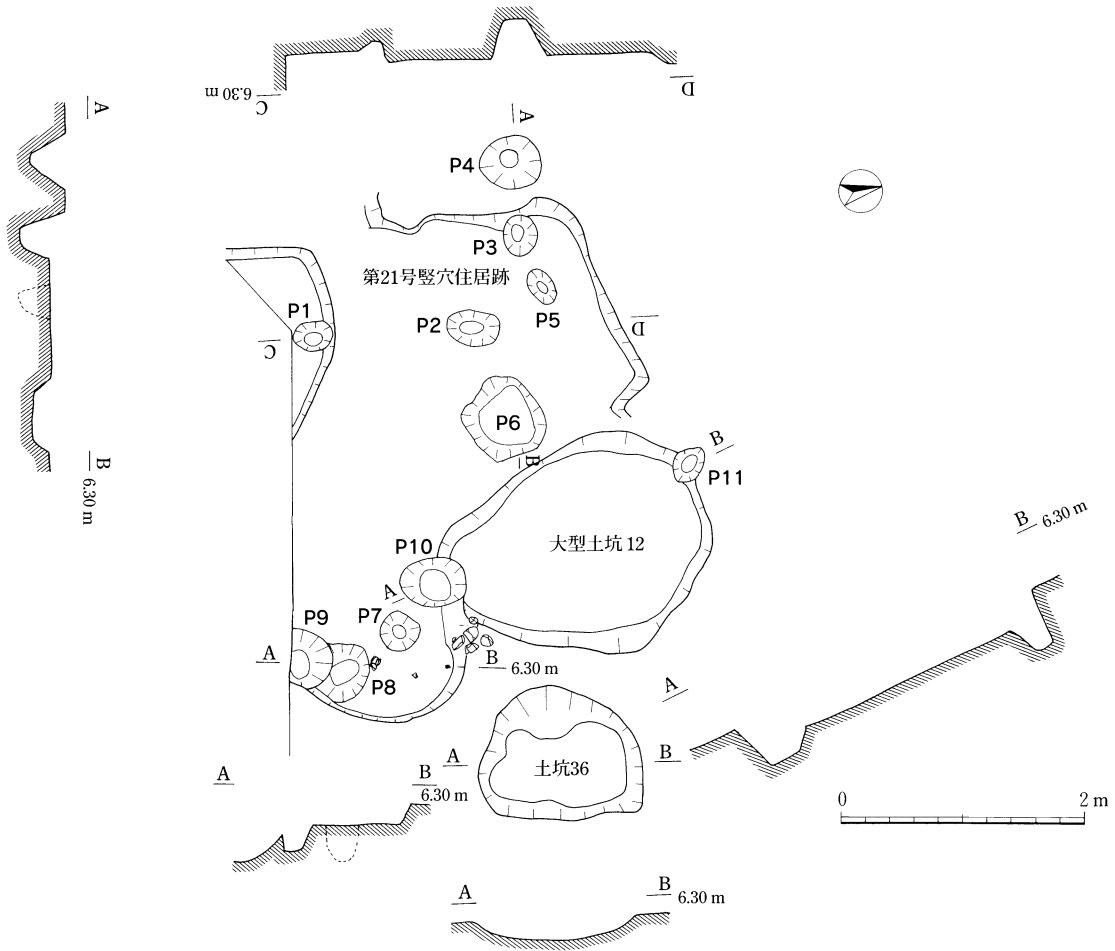
この遺構は東西1m、南北1m35cmの楕円形で、深さは10cmである。形態は東側が方形で西側が円形である。

出土遺物は539～542で、成川式土器である。

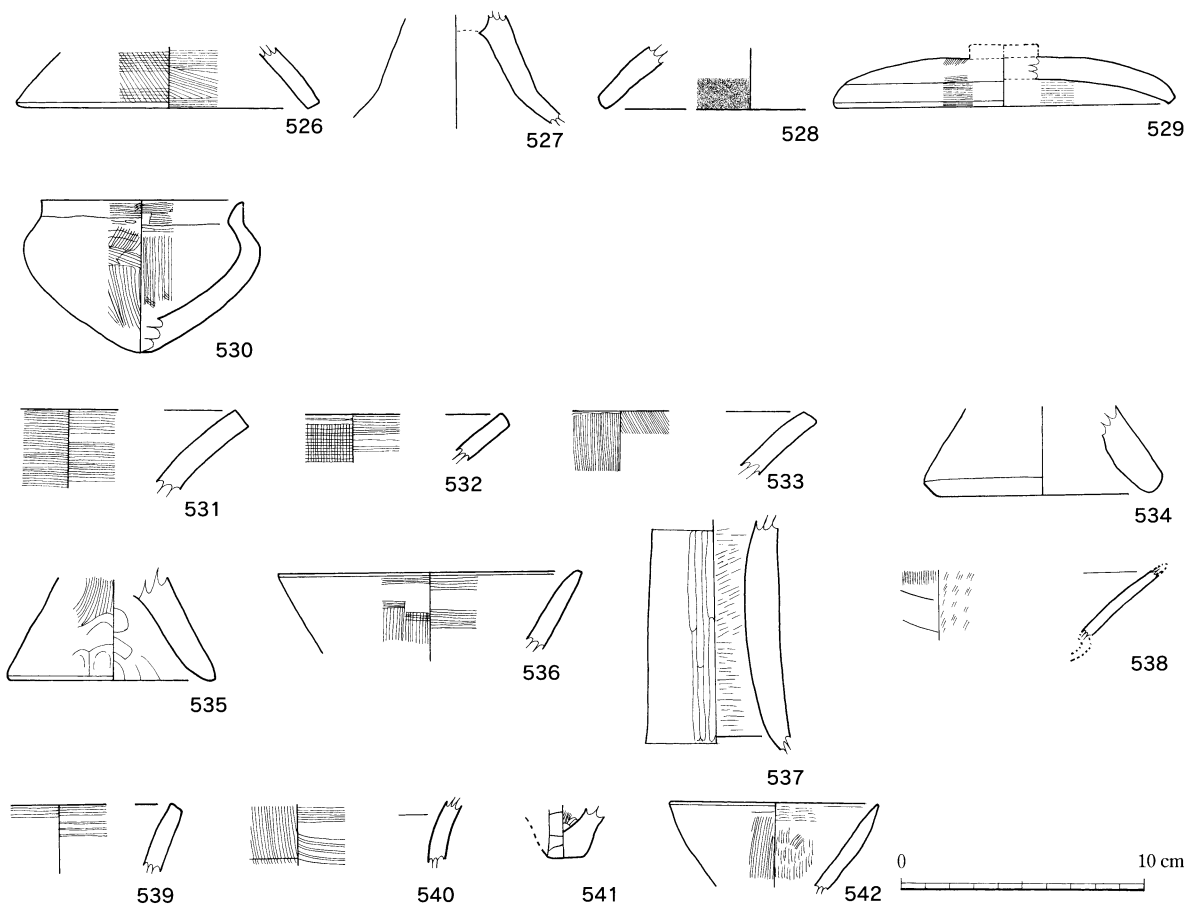
539・540は口縁部が外反する甕形土器で、器面調整は横位と縦位のハケ目である。

541は手づくね土器の壺の底部である。

542は高坏か鉢か底部がないため判断できないが、器面は丁寧に薄く仕上げているので高坏の可能性はある。器面調整はハケ目である。



第73図 第21号竖穴住居跡及び大型土坑12・土坑36とその出土遺物



第74図 大型土坑12・土坑36の出土遺物

ノ 第22・23号竪穴住居跡及び土坑36とその出土遺物（第75～78図543～569）

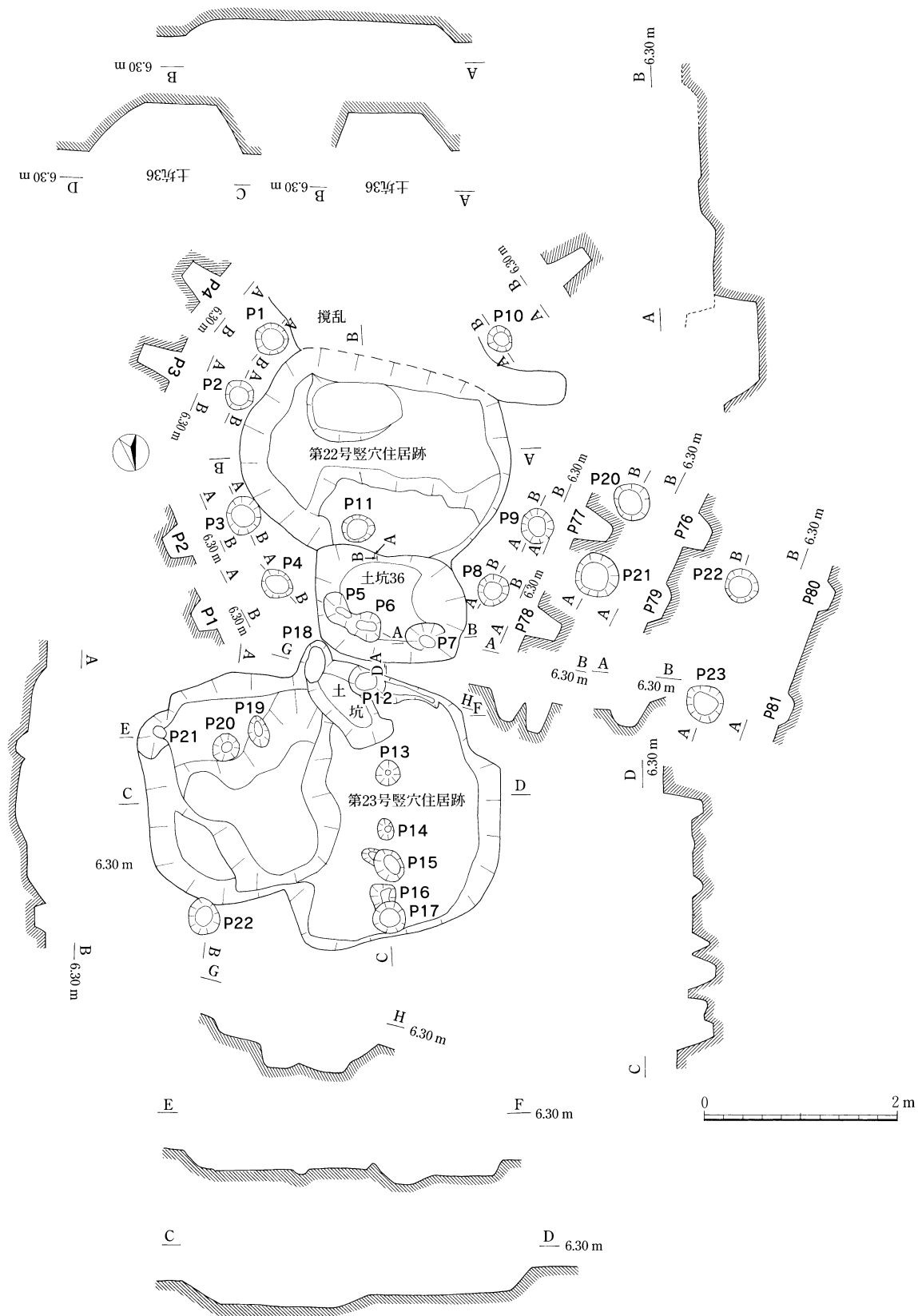
これらの遺構はB3区～A3区にかけて検出した。

第22号竪穴住居跡は、竪穴の周りに円形に廻らした柱穴をもつ形態である。竪穴部は南側の一部は攪乱で、北側が土坑36で削られて検出している。竪穴部の規模は東西2m、南北2m70cmで、深さが20cmである。この中は、西側に1m×60cm、深さ40cmの土坑があり、東側は1.5m×70cm、高さ15cmの段がある。

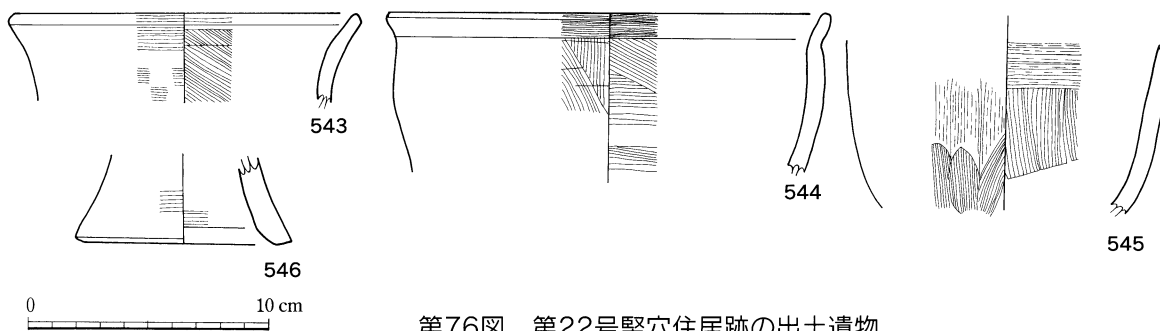
周りの柱穴は10ヶ所が円形に確認されており、その直径は3m50cmである。各柱穴の計測は次のとおりである。P1は径35cm深さ35cm、P2は径30cm深さ40cm、P3は径35cm深さ20cm、P4は径35cm深さ18cm、P5は径25cm深さ25cm、P6は径30cm深さ35cm、P7は径35cm深さ35cm、P7は径35cm深さ25cm、P8は径25cm深さ32cm、P9は径35cm深さ35cm、P10は径25cm深さ40cmである。

なお、竪穴部にも柱穴があり、そのP11は径30cm深さ25cmである。

これらの柱穴の間隔は、P1と2が70cm、P2と3が1m25cm、P3と4、P4と5、P6と7、P7と8、P8と9の各間隔が70cm前後である。西側のP9とP11は2mの間隔であるが



第75図 第22・23号竖穴住居跡と土坑36



第76図 第22号竪穴住居跡の出土遺物

その間に攪乱部があり、不説明部となっている。また、P10とP1の間も攪乱部で不説明部となっている。この不説明部には約3ヶ所の柱穴が考えられる。

よって、この建物跡の特徴は、柱の間隔が広い所を東西に設けてあり、その建物を想像すると出入口が2ヶ所あるため住居としては考えにくい。

出土遺物は543～546で、成川式土器の甕形土器である。

543はやや外反する口縁部で、器面にハケ目調整がみられる。544は口縁部が短いもので、少し外反する器形である。器面は横位と斜めに丁寧なハケ目がみられる。545は下部が広い胴部である。外面はヘラケズリとハケ目が縦位にあり、内面に横位のヘラケズリと縦位のハケ目調整が施されている。器形は土師の甕の器形に類似している。

546は脚部である。器面はハケ目が少しみられる程度のナデ調整である。

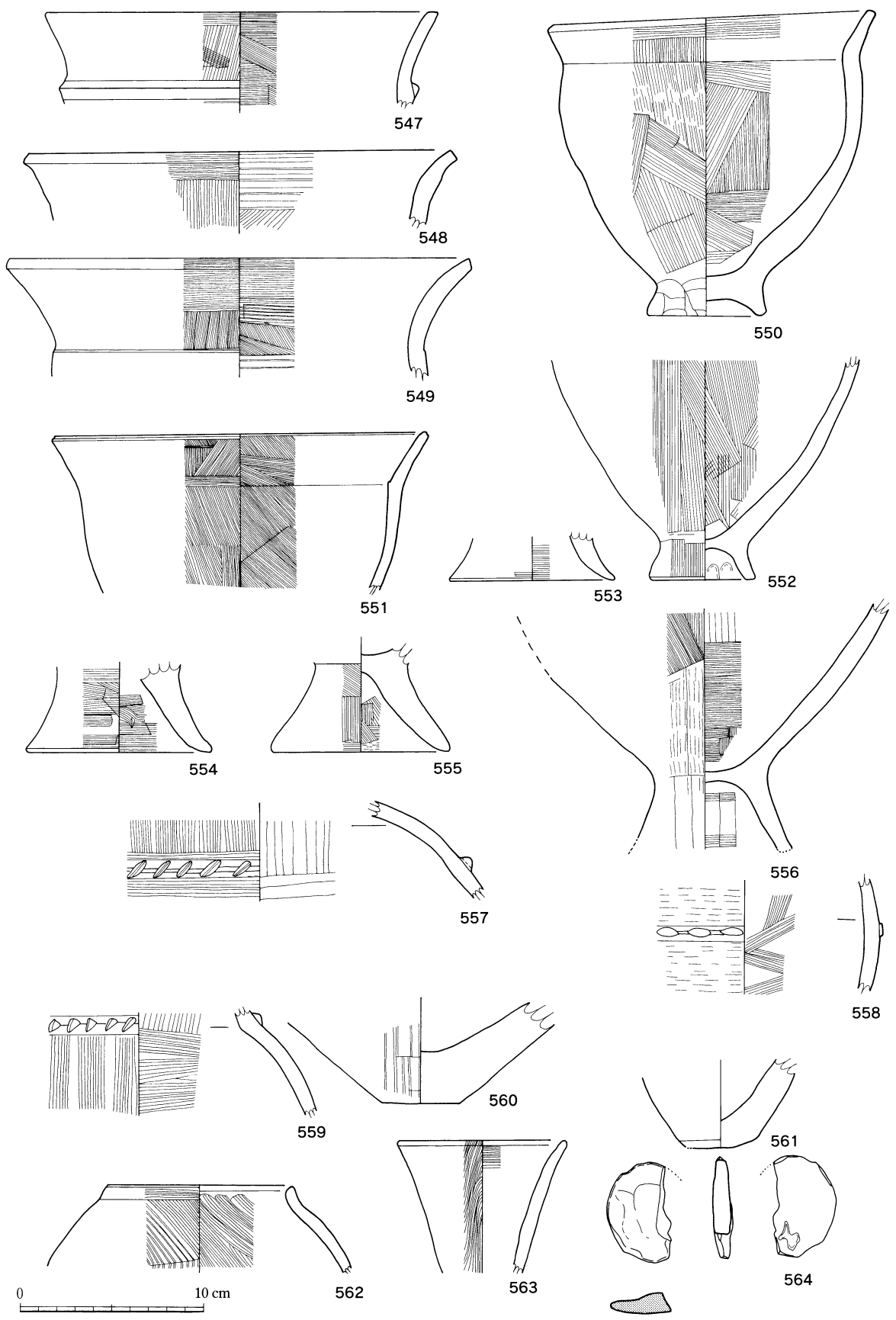
第23号竪穴住居跡は東西3m60cm、南北3m10cm、深さ30cmの規模である。形態は2つに分かれ、東側は東西2m35cmと南北2mで少し狭い方形に一段低く掘られている。西側は台形に作られ、南部に土坑がある。なお、この竪穴の深さは20cmである。ピットは12ヶ所みられ、P12～P17まで一列に並ぶのが特徴である。ピットの計測は、P12が径35cm深さ15cm、P13が径25cm深さ5cm、P14が径20cm、深さ10cm、P15が径30cm、深さ25cm、P16が径25cm深さ15cm、P17が径30cm、深さ20cm、P18が径25cm深さ10cm、P19が径20cm、深さ10cm、P20が径20cm、深さ20cm、P21が径25cm深さ5cm、P22が径20cm、深さ10cmである。

この遺構も前の遺構と同様、住居跡以外の用途が考えられる。

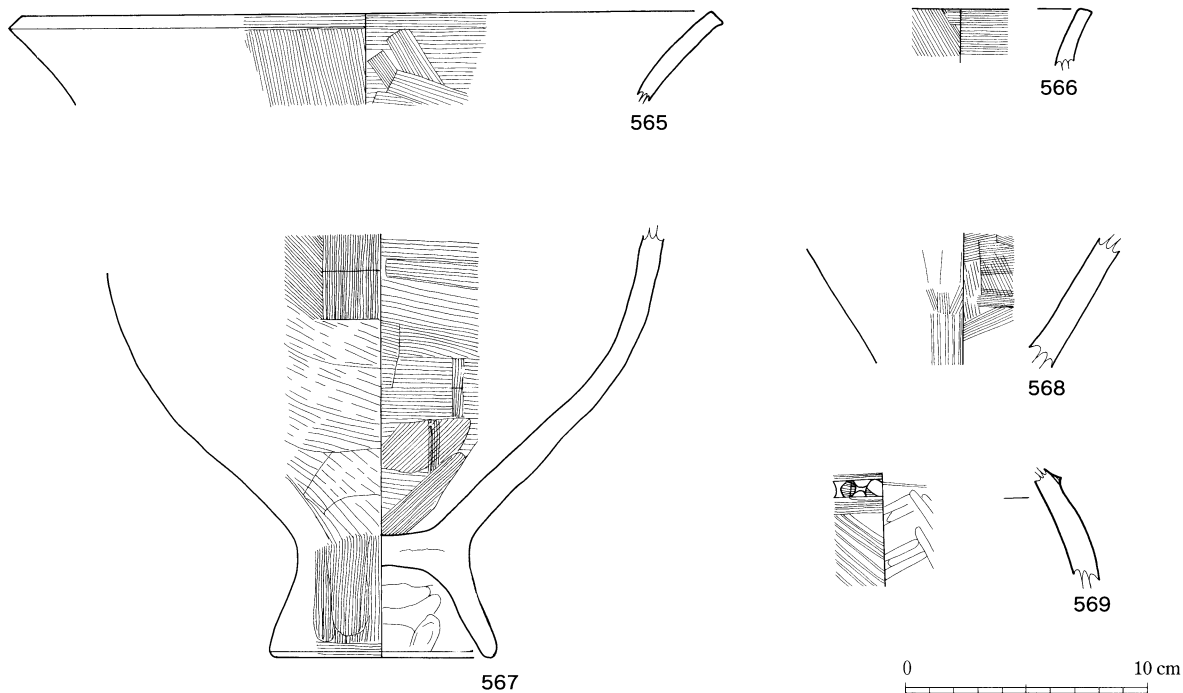
この遺構からの出土遺物は547～564で、成川式土器である。

この内547～556は甕形土器である。547は外反する口縁部で、頸部に三角突帯を廻らしている。器面調整はハケ目である。548・551は外反し、549は頸部で段がついて外反する口縁部をもつものである。550は、頸部で「く」の字に折れて口縁部が外反し、肩部が若干張り底部になる器形をもつものである。底部は低い脚部で外面はヘラキリ状に粗く作っている。器面調整はハケ目である。この土器は小型の部類に属し、甕の形をしているが、脚部が低いことから鉢的要素がある。552も小型の土器で、脚の低い土器である。器面調整はハケ目である。533は脚部である。554・555は脚の高い底部で、器面調整はハケ目である。556は脚の高い底部をもつものである。器面はヘラケズリとハケ目で調整している。

557～561は壺形土器である。557は肩部に刻み目突帯を廻らしたもので、器面調整はハケ目である。558は胴部に広い刻み目を施した突帯で、器面は外面がヘラナデ、内面がハケ目で調整である。559は頸部に刻み目突帯を廻らしたもので、器面はハケ目調整をしている。560は狭い平坦を



第77図 第23号竪穴住居跡の出土遺物



第78図 大型土坑1と土坑20の出土遺物

もつ平底で厚みのあるものである。器面はヘラナデで縦位に施している。**561**は手づくね状の底部で丸味のある平底である。

562は薄手の無頸壺である。口縁部は短く立ち上がり、口唇部は尖っている。器面調整はハケ目である。

563は長頸壺の口縁部である。器形は直上に外反し薄手である。器面はハケ目調整が外面全体と内面の口縁端部にみられる。

564は円形の土製品である。底部作成時にはめ込むために作った可能性が考えられる。

土坑36は東西1 m 10cm、南北1 m 50cm、深さ50cmの方形土坑である。第22号竪穴住居跡を切った形で検出され、底面には第22号竪穴住居跡の柱穴跡がみられる。

この遺構の出土遺物は**565**～**569**で成川式土器である。

565～**568**は甕形土器である。**565**は外反する口縁部で、外面は縦位、内面は横位斜位のハケ目がみられる。**566**は外反する口縁部で横位と斜めのハケ目調整がみられる。**567**は高い脚台をもった胴部から底部までの土器である。器形は胴部に膨らみがある。外面は縦位のハケ目と横位や斜めのヘラケズリ調整をしている。内面は横位と斜めのハケ目調整がみられる。脚の内面は手押しやヘラナデで調整している。**568**は底部の上部である。器面調整はハケ目である。

569は壺形土器である。文様は刻み目突帯を肩部に廻らしたものである。器面調整は外面がハケ目を横位と斜めに、内面がヘラ研磨である。

ハ 溝1・2・4・5 (第79・80・81・122図)

溝は五つに分けられ、溝1は古墳時代でB6区に、溝2は古墳時代でA9区に、溝3は近世でA B3～5区に、溝4はA B5区に、溝5は平安時代でA3・2区に検出した。ここでは古墳時代と平安時代の溝を説明する。

溝1 (第79図)

溝1は幅25cm、長さが14m50cmの規模で、方位は南北に検出した。断面の形状は箱形に掘り下げ、南側が止まった状態であった。出土遺物はなかった。

溝2 (第79図)

溝2は幅2m65cm、長さが2m90cmの規模で、南北に検出した。断面の形状は大きな逆台形に掘り下げている。そして、北側は建物の基礎で破壊されていた。なお、南側は用地外のため調査できなかった。遺物は成川式土器が、溝に埋まった上層に摩耗した状態で出土している。このことから古墳時代以前である可能性が高く、包含層に弥生時代中期の遺物が出土しているため、この時期が考えられる。

溝5 (第79図)

溝5は幅1m60cm、長さが9m10cmの規模で、方位は南北に検出した。断面の形状は逆台形に掘り下げている。そして、南側は建物の基礎等で破壊されていた。北側は用地外のため調査できなかった。この溝は、出土遺物の中に成川式土器と土師器が混在していたので平安時代の遺構と考えられる。出土遺物の説明は平安時代で記載する。

溝4 (第80・81図)

溝4はA B5区に、幅1m20cm～70cm、長さ31m、深さ20～50cmの規模で、南北に検出した。断面の形状は、逆台形に掘り下げている。そして、南側は地形を整地のため削られているので浅くなっている。なお北側は用地外のため調査できなかった。

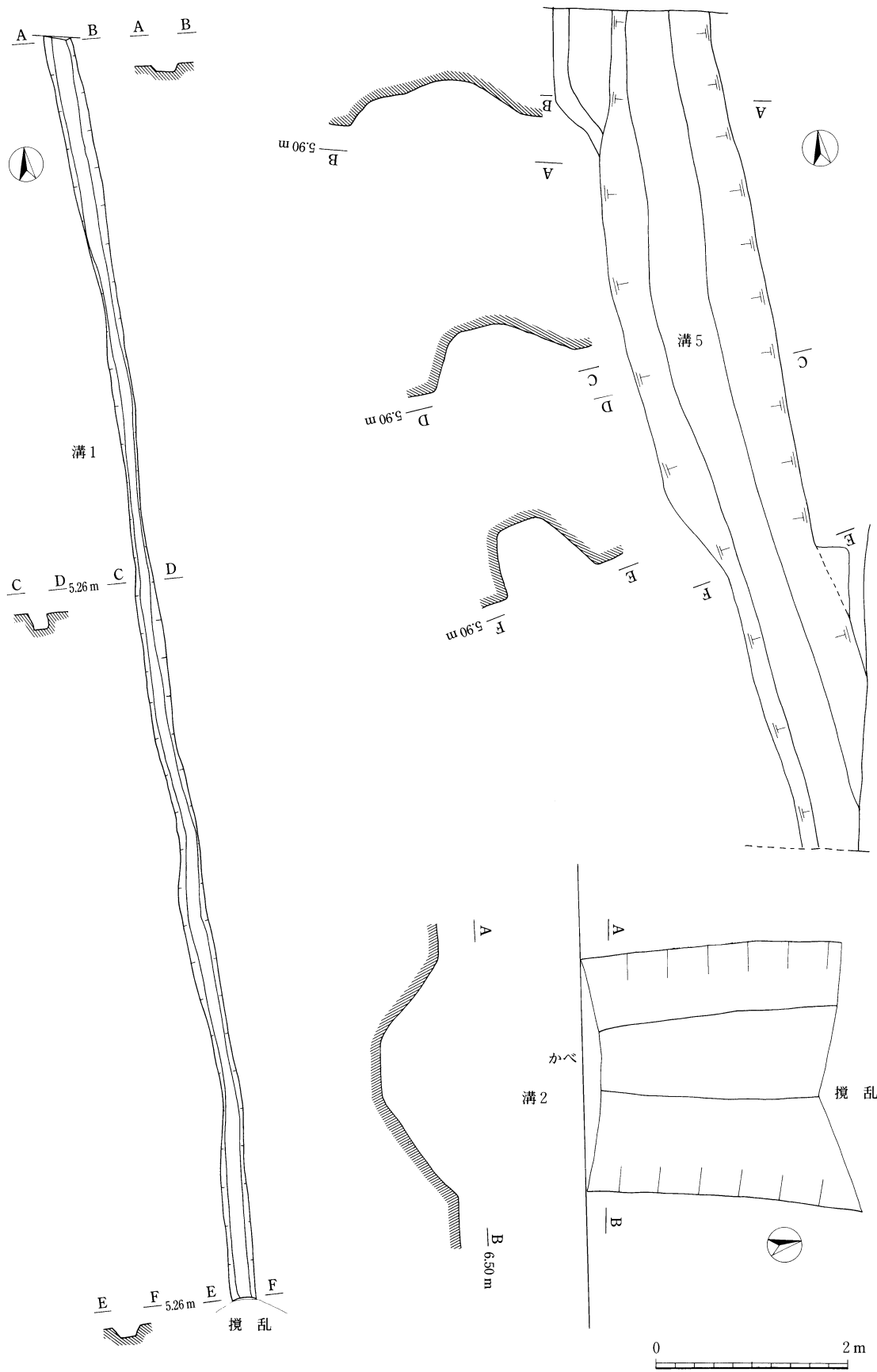
この溝は、最も高い底はB区の中央で標高6m30cmである。最も低い底はA区の北端で5m85cmである。よって、この溝は南から北へ流れるように作っている。また、溝の形状は直線状で、北端から約6mで東に折れ曲がり、さらに約6mで東に折れ曲がっている。

この溝のB区には大型土坑1や土坑19～21がある。切り合い関係としては大型土坑1や土坑19・22を溝4が後から切っている。なお、その北側には土坑か自然の抉られか不明の段が3ヶ所みられる。また、北端には、底面に長径25cmのピットがみられる。

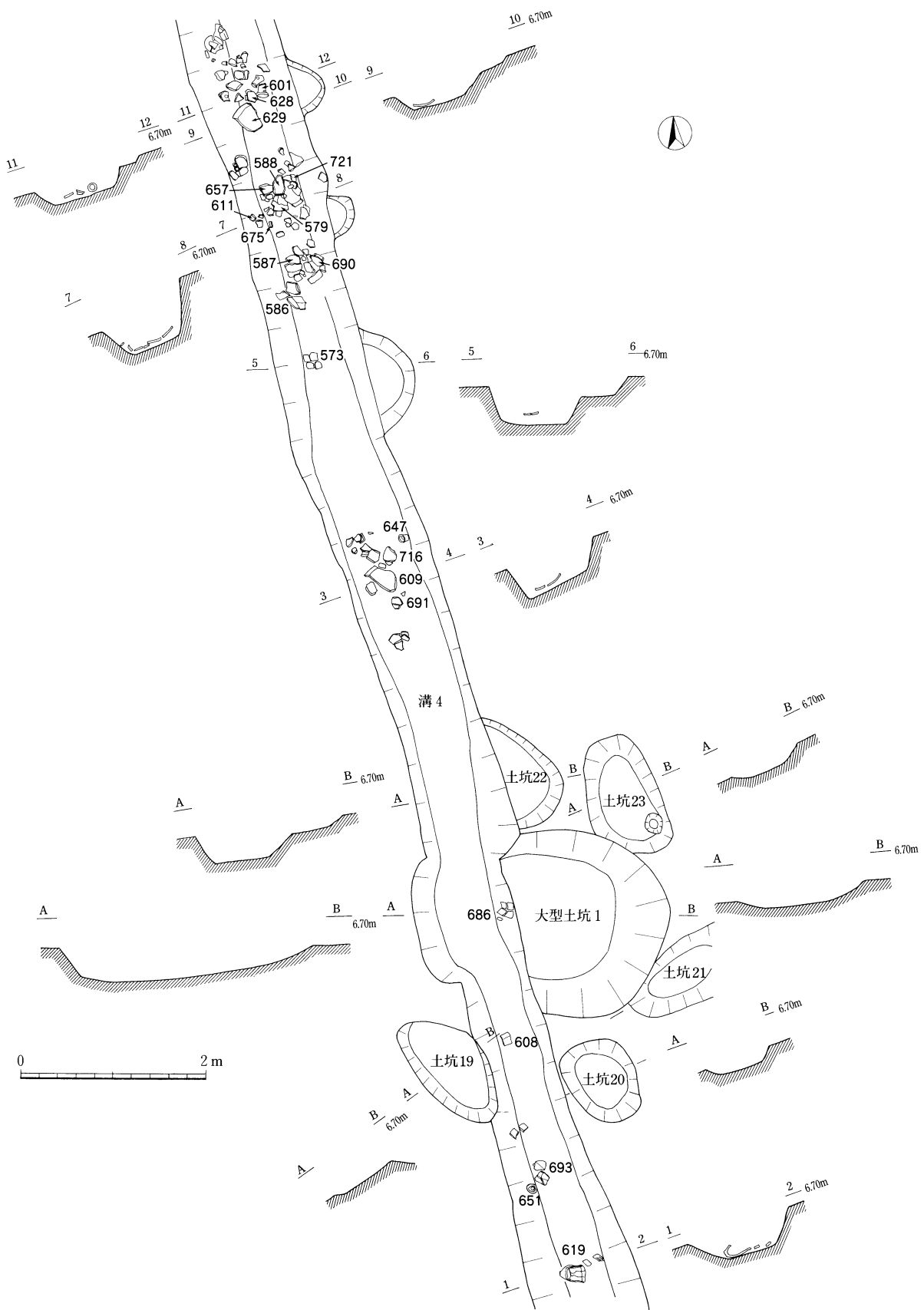
遺物の出土状況は、南側は少ないが甕形土器の完形品がブロックでみられる。大型土坑1の下にも出土している。区境の中央部から北側には完形品が多量に出土している。その遺物は、溝底から上に立ち上がるものや、被さって出土するものがみられる。

遺物は、成川式土器の甕形土器、壺形土器、高坏、鉢、蓋、手づくね等がみられ、完形品の一部は破損している。これらの復元は実測図にして掲載している。なお、遺物の説明は、出土状況図の番号と遺物実測図の番号と一致する。

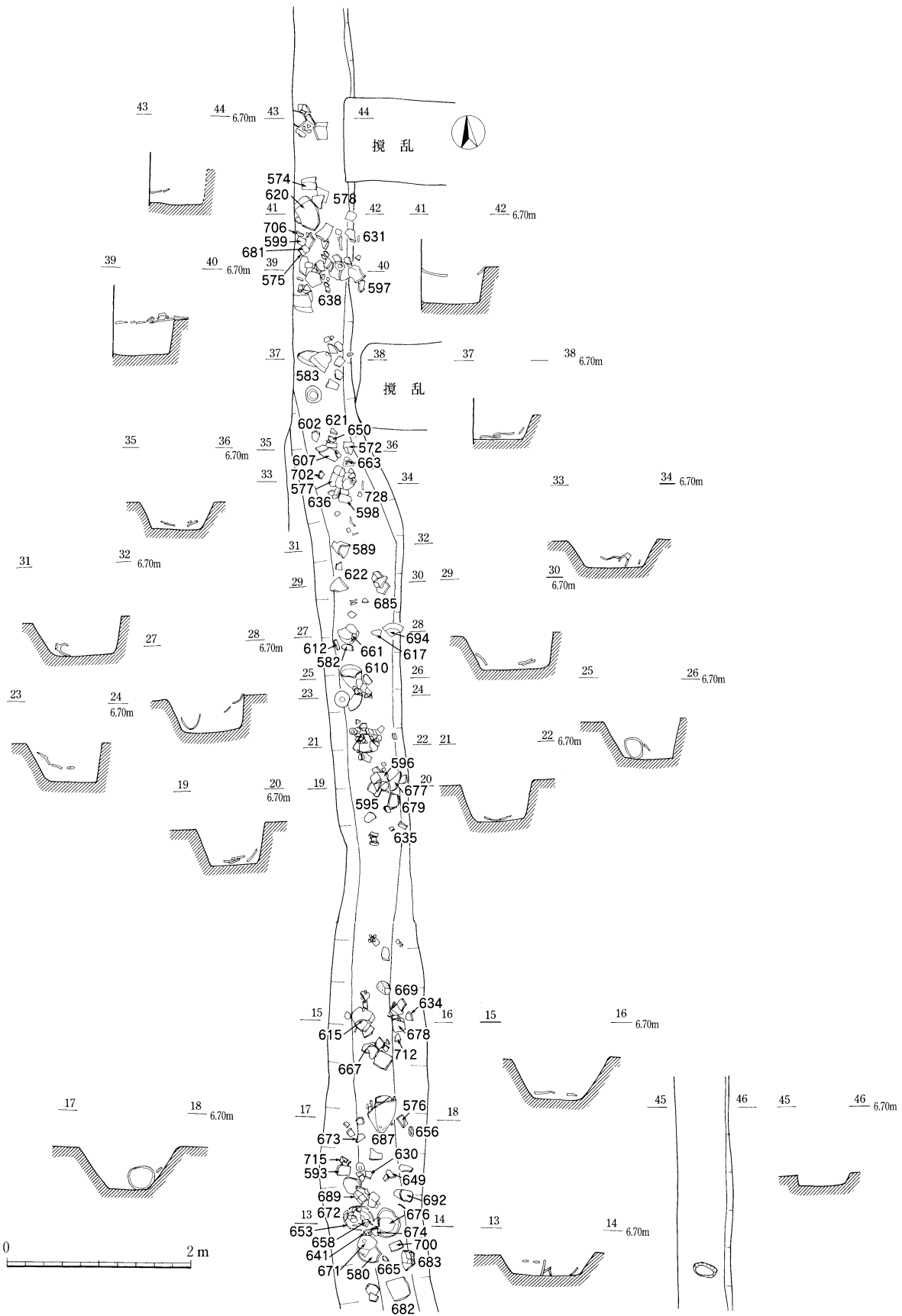
また、出土遺物の中に免田式土器も1点含まれている。



第79図 溝1・2・5



第80図 溝4及び大型土坑1と土坑19・20・21並びにその遺物出土状況(1)



第81図 溝4とその出土状況 (2)

溝4の出土遺物（第82～103図 570～729）

甕形土器（第82・92図 570～651）

570～578は頸部に突帯をもつタイプで、器形は頸部で「く」の字に外反する。この中で、570～573は背の高い先が尖った三角突帯を頸部に廻らしている。574は背の低い三角突帯で貼り付けが明瞭に確認できない。また、器形は口縁部の外反が少ない。これらの器面はハケ目調整痕で、板目の幅の広いものと幅の狭いものがある。

575～578は突帯に刻み目を施すタイプである。刻み目はヘラを右斜めと左斜めに施し、576・577は板目がみられる。突帯は575・577が三角断面で、576が台形断面で578は少し盛り上がったものである。器形は頸部で「く」の字に折れ、口縁部は外反する。576は脚部底部に付いていないもので、先端は欠けているが少し平坦部がみられる。調整は外面がハケ目とヘラケズリの施しがあり、内面は、ハケ目とヘラナデである。

579～632は突帯がなく、器形は頸部で「く」の字に折れ、口縁部は外反するタイプである。このタイプはA B C Dの4つに分け説明する。

Aタイプは579～588である。器形は口縁部の外反が大きく、なで肩状のため胴部の膨らみがない。器面調整はハケ目である。

Bタイプは589～596である。器形はやや小型で頸部の折れ方が小さく、胴部の膨らみがあり、胴部から口縁部までは直線的に外反するものである。器面は590・593が広いハケ目調整で、591・595・596がヘラ搔き上げ状、他は狭いハケ目調整である。

Cタイプは一番多く597～621である。器形は、頸部での折れ方が大きいいため頸部が締め内側に稜線があるものが多い。そして、肩部は張り、中には、肩部で稜線ができるものもある。よって、肩が張るために胴部の膨らみが目立たない器形である。器面調整は板目の幅の広いものや狭いハケ目を施している。また、598・607・609・616は底部近くにヘラケズリ状の調整もある。このタイプの特徴は頸部と肩部をヘラの打ち込み点としているために、折れ線や稜が作られている。そのため、ハケ目は頸部と肩部から縦位に施されていることが多い。この中で、620・621は頸部で大きく内側に絞り込まれているため肩部で内湾し、そこから口縁部は外反している。特に621は内側に稜線が顕著にみられ、肩部の張りが大きい土器である。また、621は頸部と肩部の間隔が長い。

底部は598・610にみられるが、底は平坦である。脚は平均的な高さで、開きが大きい。

Dタイプは622～632である。

このタイプは頸部から肩部の間隔が長く、頸部や肩部のくびれや張りが少ない部類である。よって、器形は622・629・630・632でみるように口縁部の外反が少なく、少しのくびれで肩下位部までを作っている。また、胴部の張りはない。器面調整は幅広と狭いハケ目が主で、632にはヘラケズリがみられる。

底部（635～651）

底部は脚台を付けたものである。全体的に脚台は高く、外側に開いている。その脚台は634・640・642・645・648・649等が直線状で、637・639・641・646等は外反に開いている。器面調整は縦位のハケ目を施すのが多い。また、642・648にあるように指押し調整もみられる。

これらの底部は甕形土器のものであるが、この底部の中で、646は高坏になる可能性もある。

壺形土器 (第93～99図 652～689)

652～655は頸部から朝顔状に大きく開く口縁部である。器面調整は丁寧なハケ目である。656は大型壺の頸部から口縁部で、頸部に背の高い断面三角突帯を廻らしている。器面調整はハケ目である。657は肩部で三角突帯を廻らしたもので、器面調整はハケ目である。658・659胴部で断面三角突帯を廻らしている。器面調整はナデ研磨状である。660は断面三角突帯を2条廻らしたものである。器面調整はナデ研磨状である。

661は狭口の頸部をもつものである。口縁部は外反し、肩部はなで肩である。胴部は球状を呈しているが底部近くでは玉子形になっている。器面調整は外面が縦位で、内面は横位と斜めである。

662～668は底部である。622～665・667は平坦面を丁寧につくり、666・668は変形した平底である。これらの器面調整は主にハケ目で、ナデもみられる。

669～672は複数の断面三角突帯で刻み目をもつタイプである。669は2条であるが3条の刻み目突帯をもつものと考えられる。670～672は球状の器形で、3条の刻み目断面三角突帯を肩部に施している。672は頸部が狭い口を呈し、器形は球に近い。刻み目はやや斜めにヘラで平行に施している。669の器面調整はヘラナデであるが、他はハケ目ないしヘラナデである。

674・675・676は球状の器形で、刻み幅の広い断面三角突帯を胴部に廻らしている。675の頸部は狭口である。器面調整はハケ目である。

673は外反した小口の口縁部である。器面はハケ目とヘラナデである。

677は大壺の肩部で、器面調整はハケ目である。内面にはヘラ幅が確認される調整痕がみられる。

678は肩部が上がった壺で、器面調整はハケ目である。内面の頸部には指で仕上げた痕跡がみられる。

679・680は器壁の厚い大型壺で、肩部に蒲鉾形の突帯を廻らしているものである。その突帯は幅広の刻み目を施している。器面調整は幅の広いハケ目を縦位や斜位に施している。

681～684は球状の器形で、胴部に複数の断面三角突帯を廻らしている。681は4条の突帯で、682・683・684は3条の突帯である。器面調整はハケ目で、縦位や横位に施している。

685～687は丸底の類である。685は丸みのある尖り底である。686は尖底である。687・688は平面がみられるが、壺の手づくねとして分類した。器面調整はハケ目である。

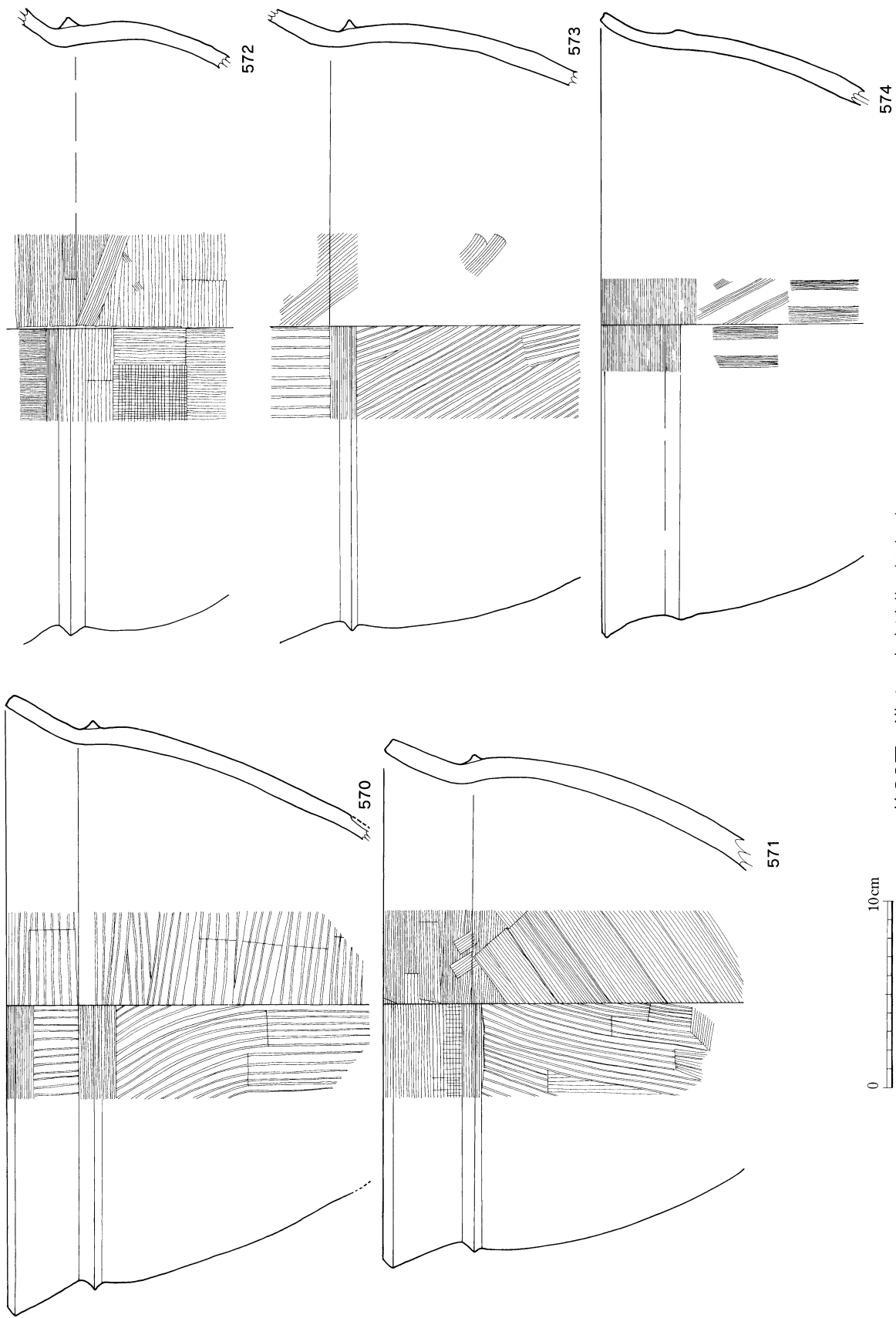
689は器形が球状の狭口の壺である。器面調整は丁寧なナデで、内側には製作時の指押し調整がみられる。また、胴部には穿孔がある。

鉢形土器 (第99図 690・691・692)

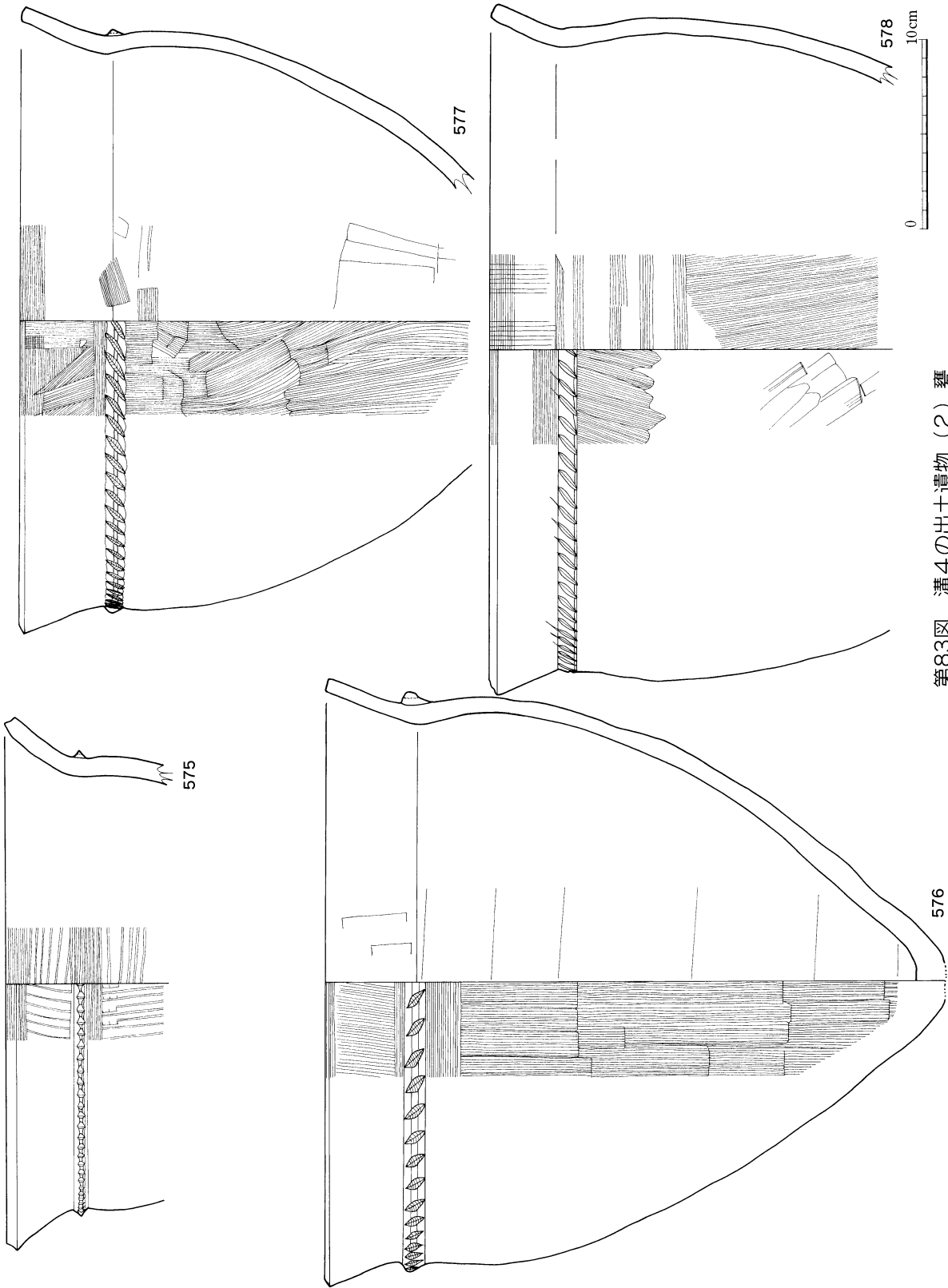
690は平底のものである。胴部は丸味があり、底は不安定で、手づくね状に作っている。器面調整は外面がハケ目、内面がハケ目と指押しである。691は直線状に開き、口唇部は面取りをしている。器面はハケ目とヘラケズリで調整している。692は手づくね状に作られたもので、器面の調整は外面が手ナデで内面がハケ目である。底部は不安定な平底である。

長頸壺 (693)

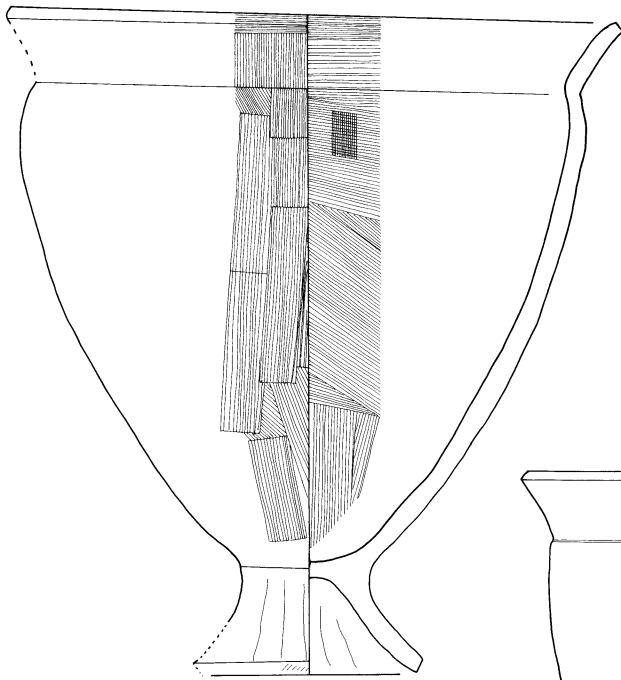
口縁部はないが、そろばん玉状の器形をした壺である。外面は頸部から胴部の稜にかけてヘラで直線が二回折れる文様を施し、胴部はハケ目調整をしている。内面は、ハケ目調整である。この土器は免田式土器に比定される。



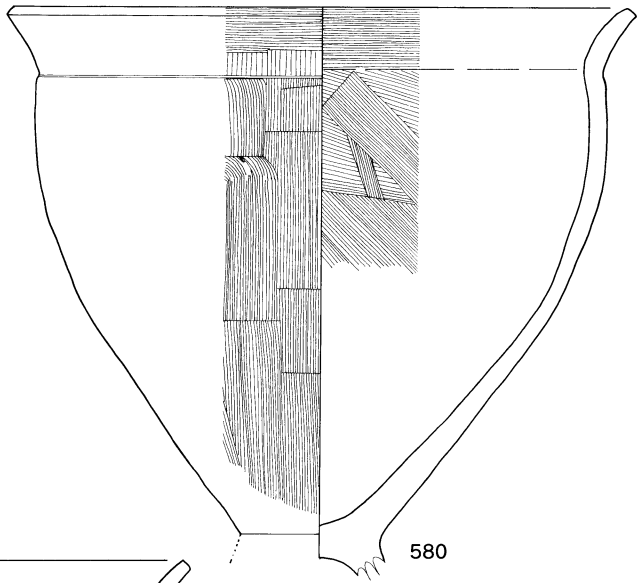
第82図 溝4の出土遺物(1) 甕



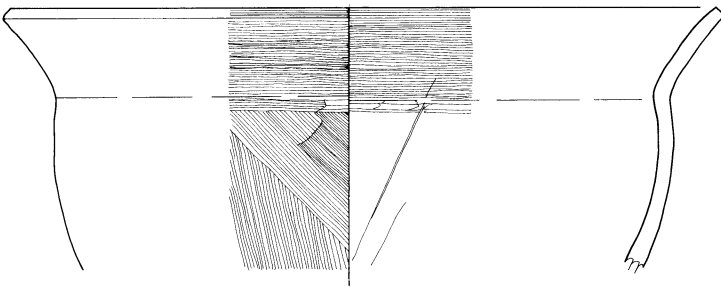
第83図 溝4の出土遺物(2) 甕



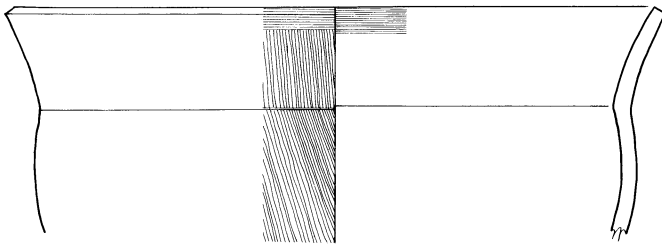
579



580



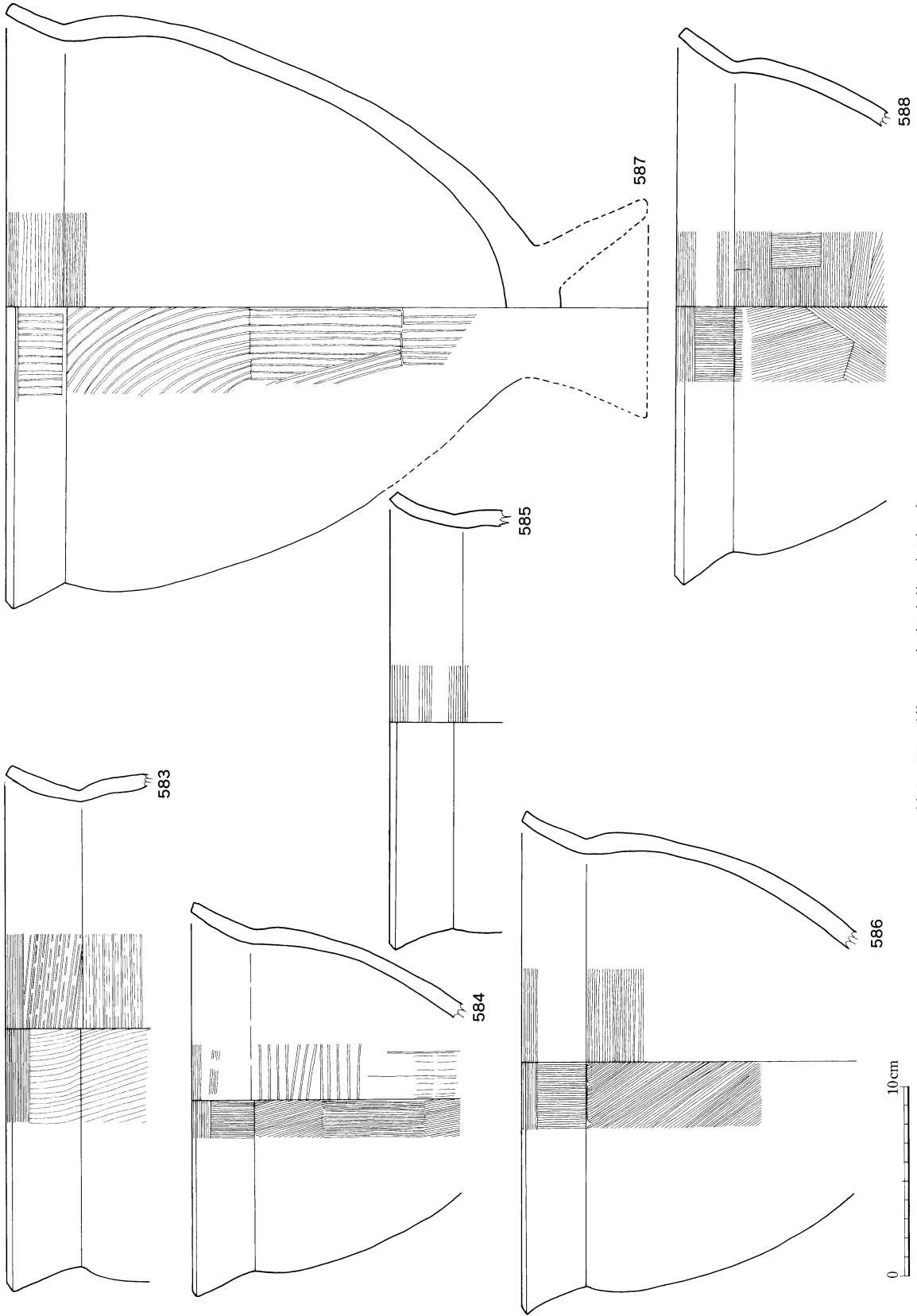
581



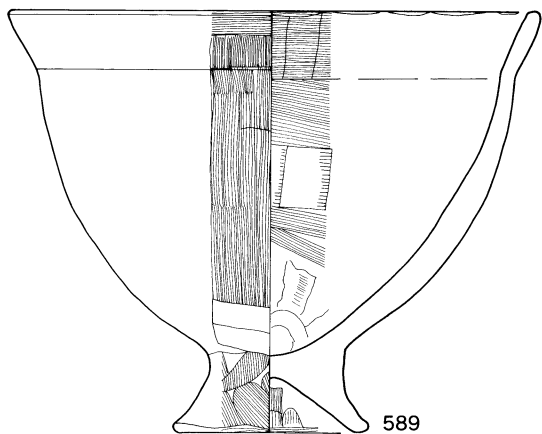
582

0 10 cm

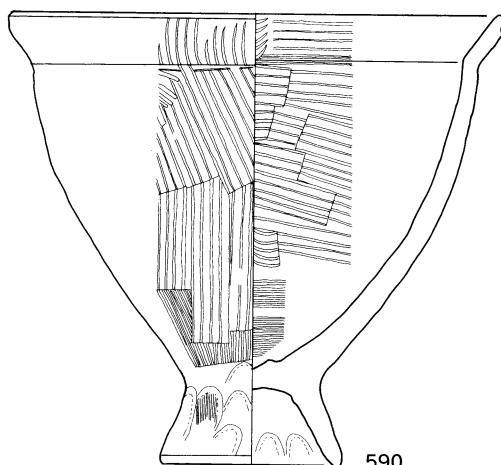
第84図 溝4の出土遺物(3) 甕



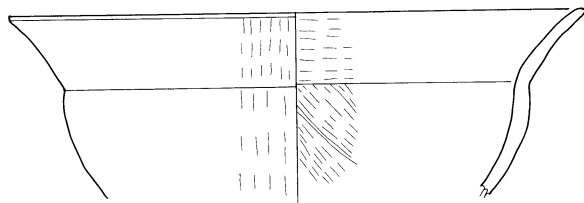
第85図 浦4の出土遺物(4) 甕



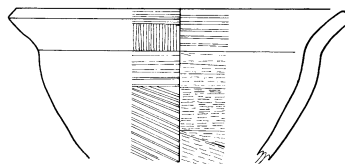
589



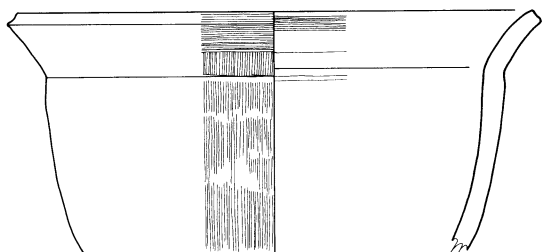
590



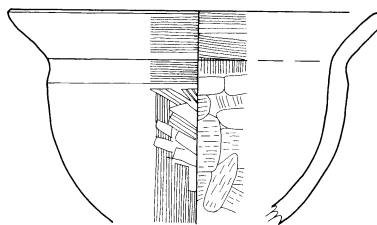
591



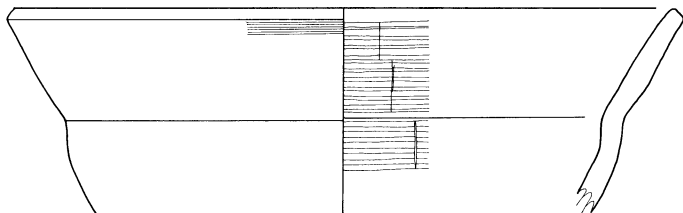
594



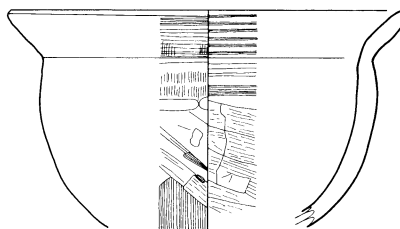
592



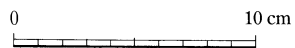
595



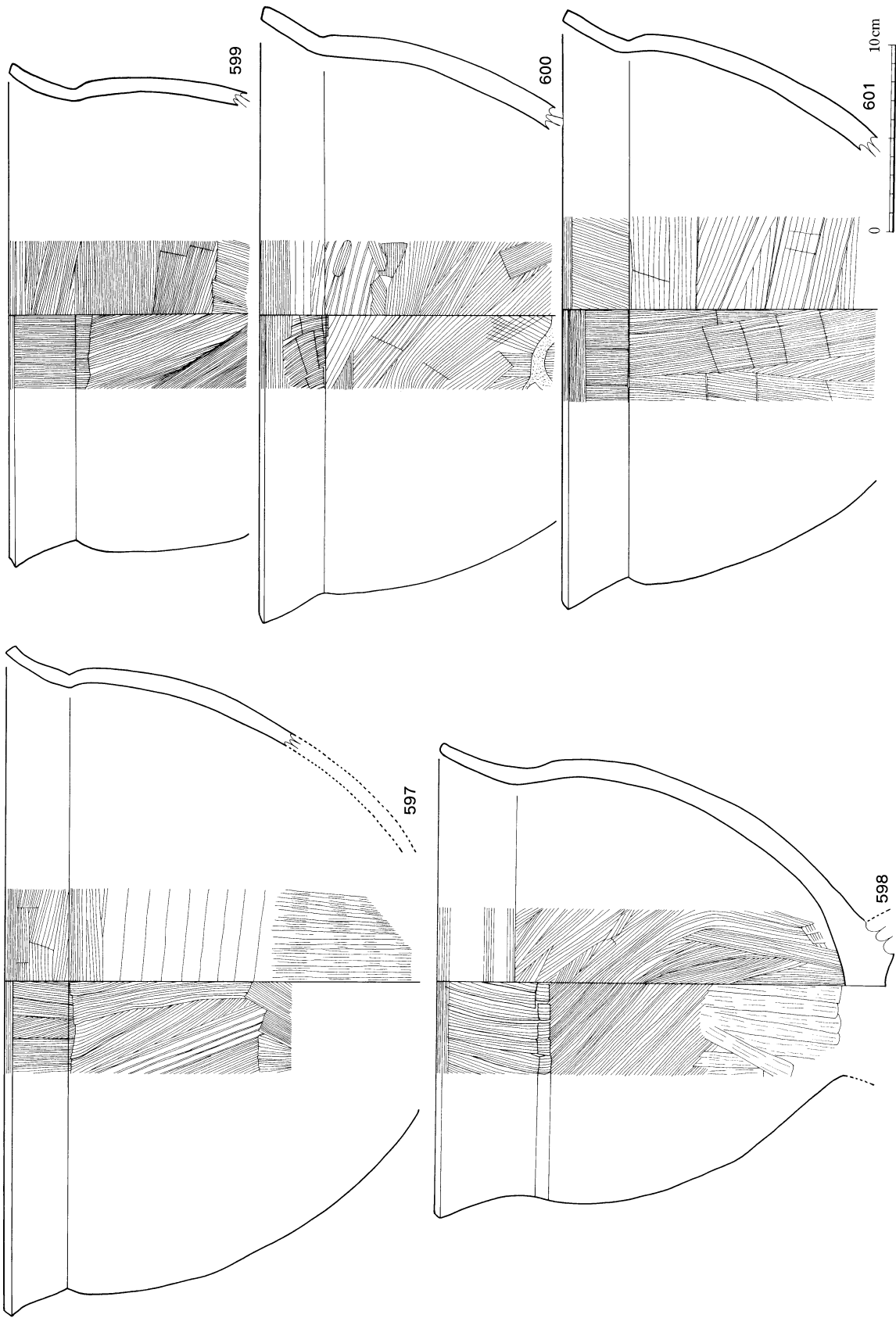
593



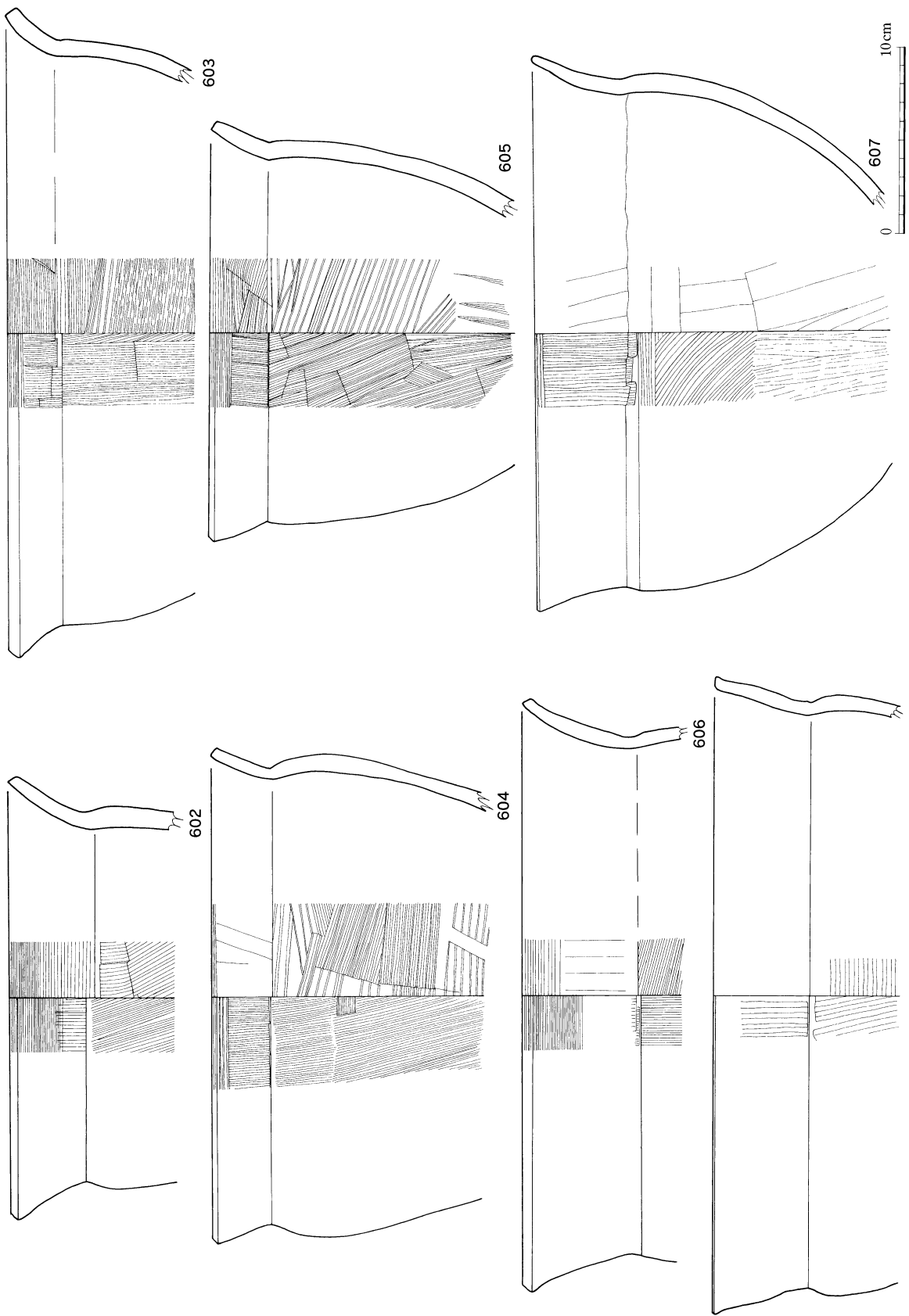
596



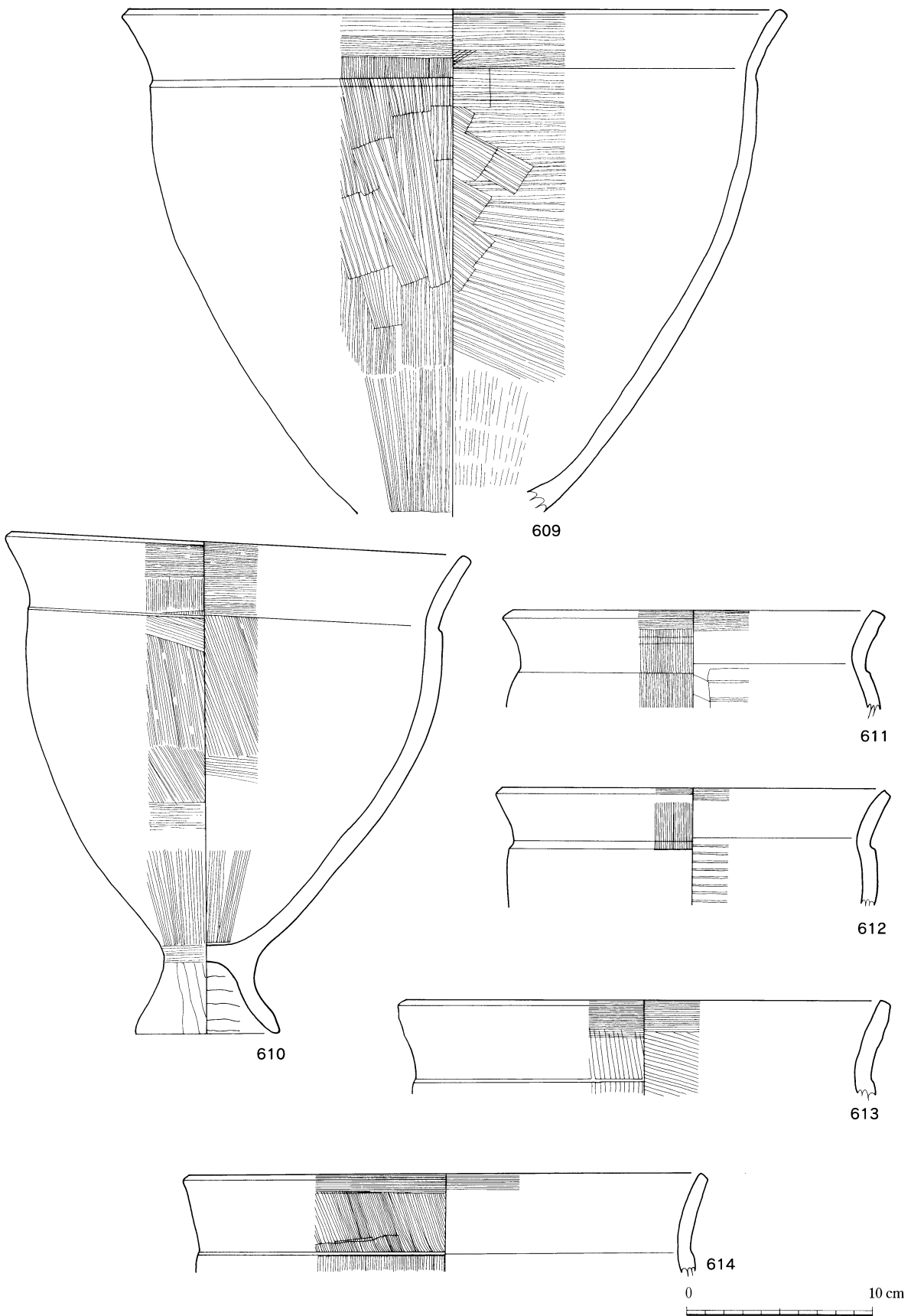
第86図 溝4の出土遺物 (5) 甕



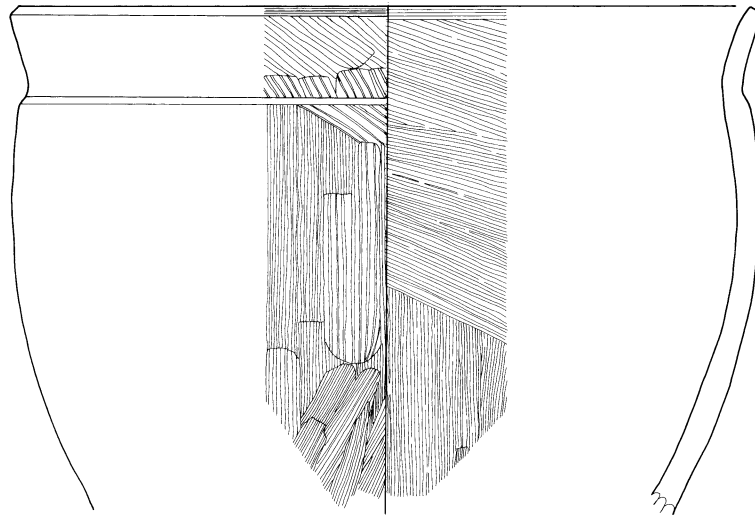
第87図 溝4の出土遺物(6) 甕



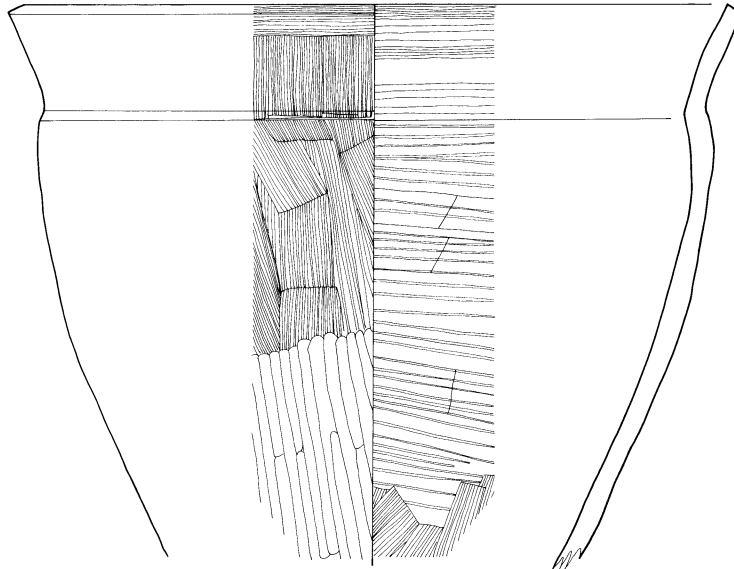
第88図 溝4の出土遺物（7）甕



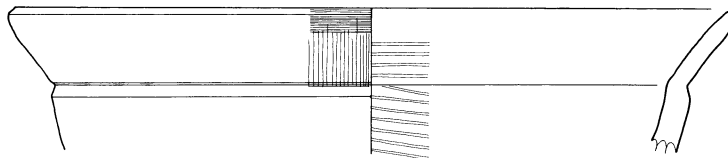
第89図 溝4の出土遺物(8)甕



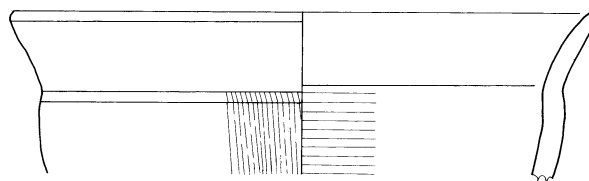
615



616



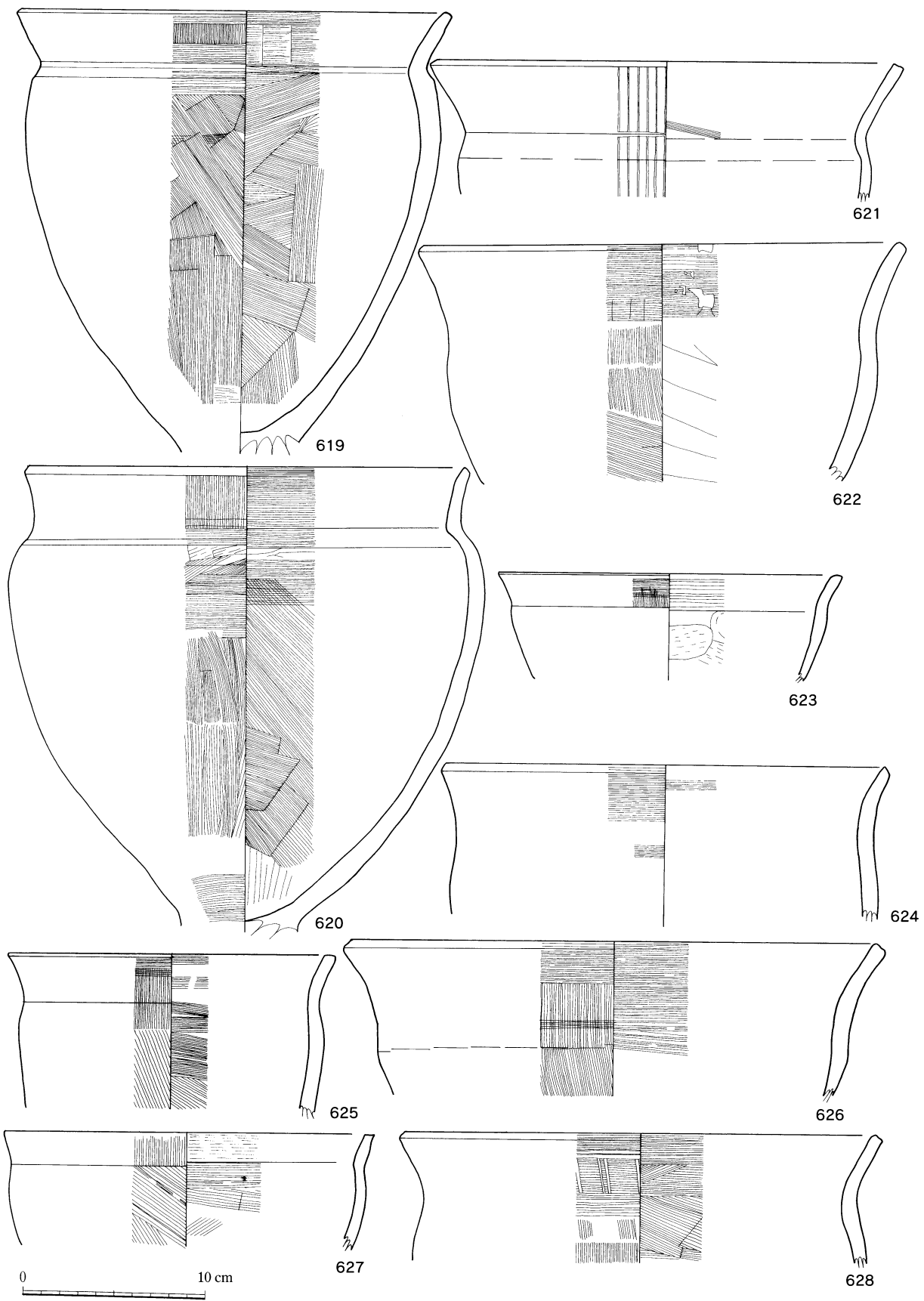
617



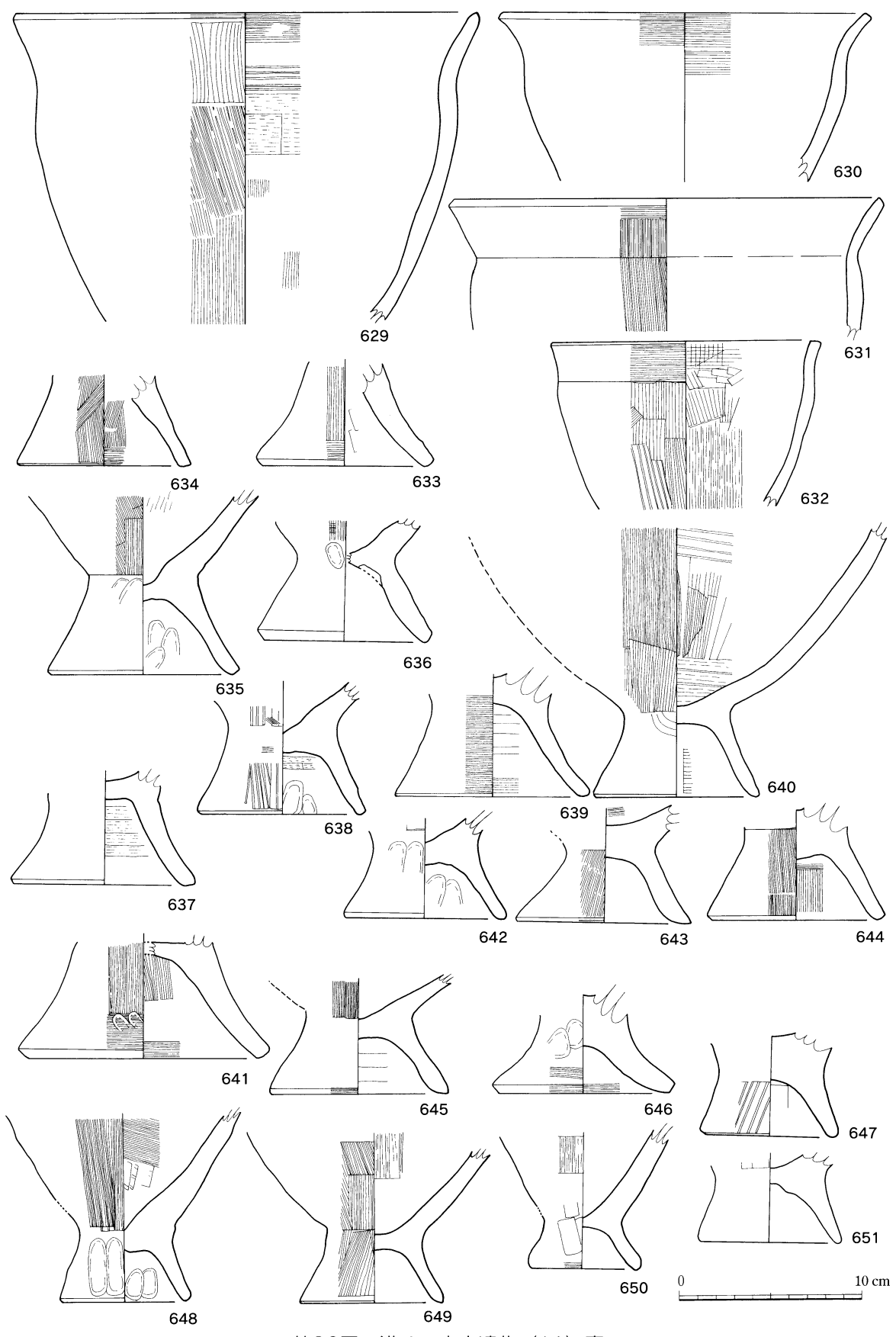
618

0 10 cm

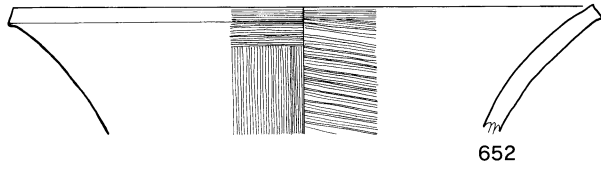
第90図 溝4の出土遺物(9)甕



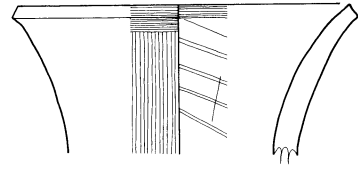
第91図 溝4の出土遺物 (10) 甕



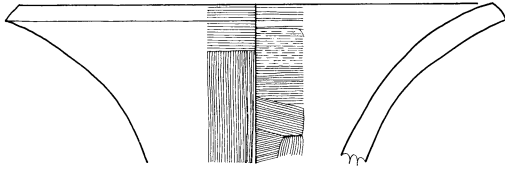
第92図 溝4の出土遺物 (11) 甕



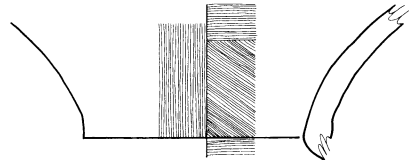
652



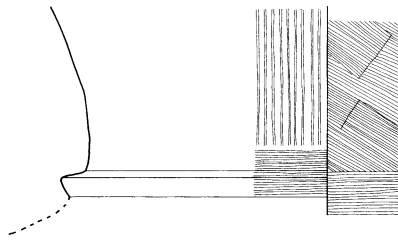
654



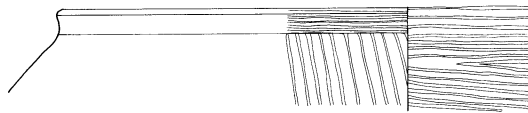
653



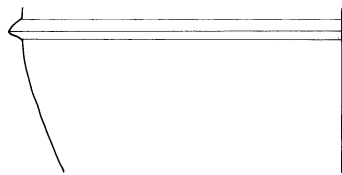
655



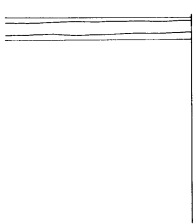
656



657



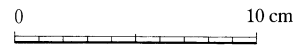
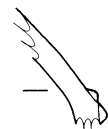
658



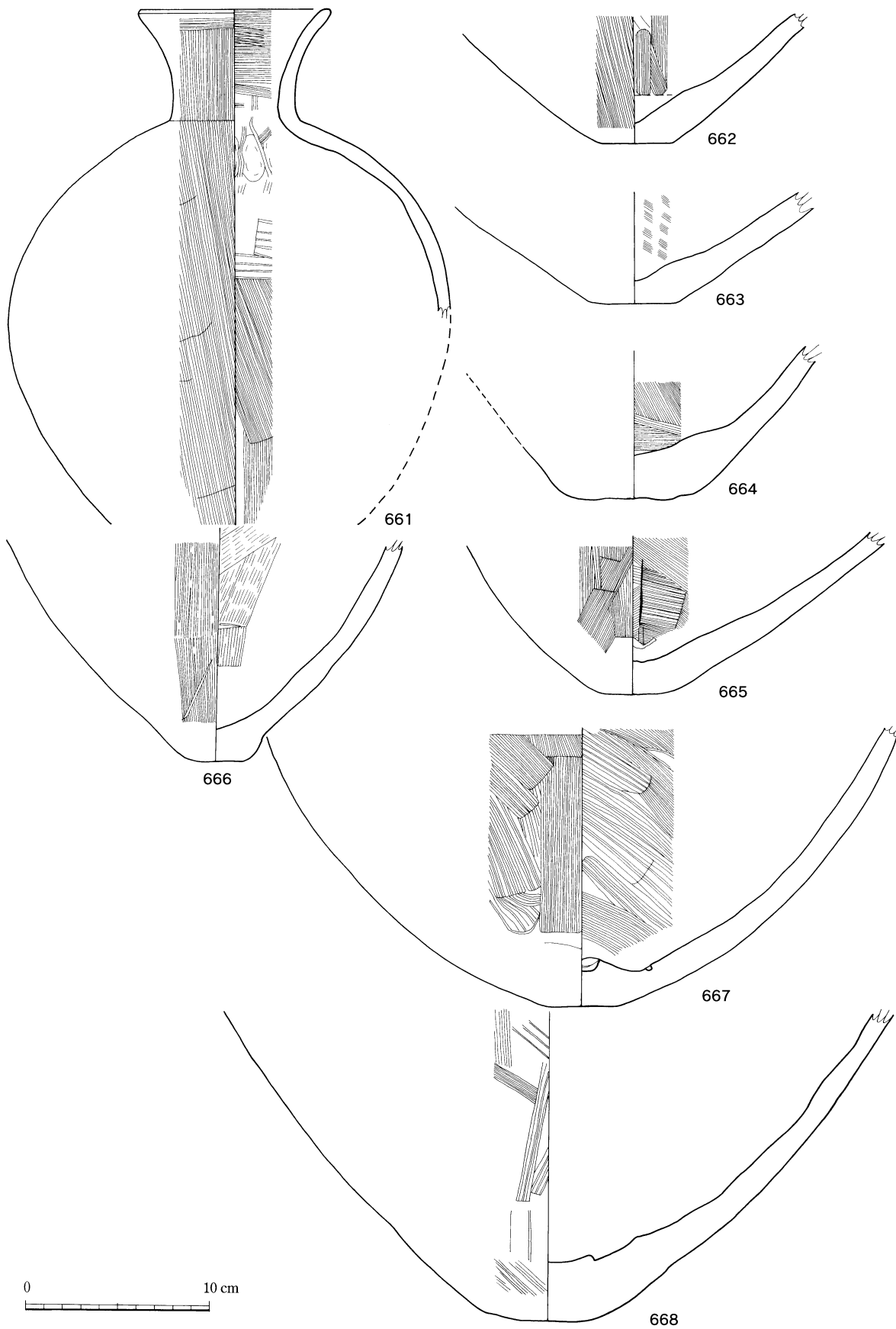
659



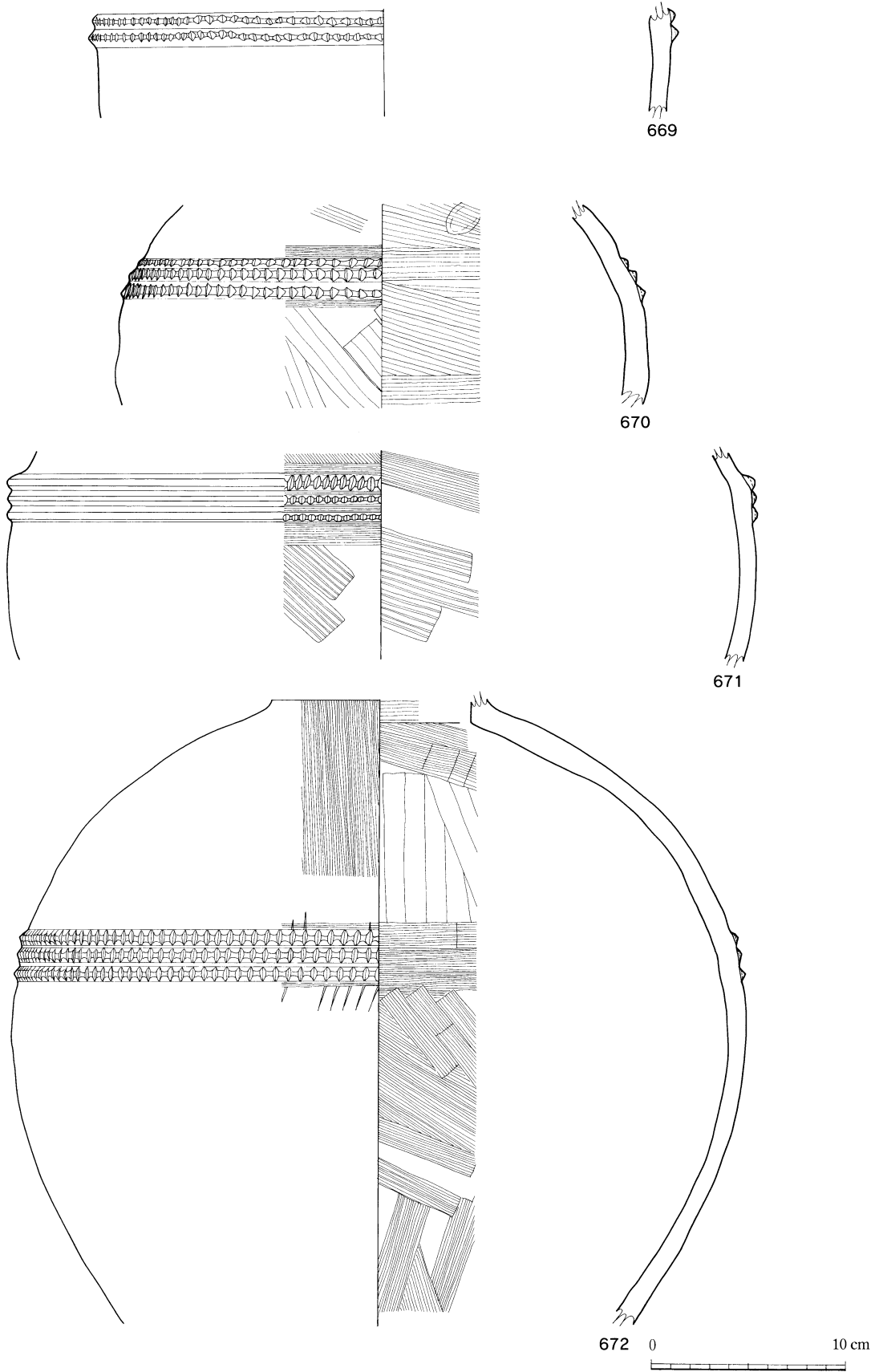
660



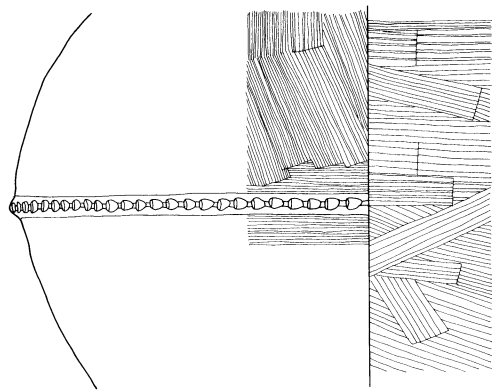
第93図 溝4の出土遺物 (12) 壺



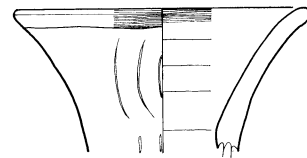
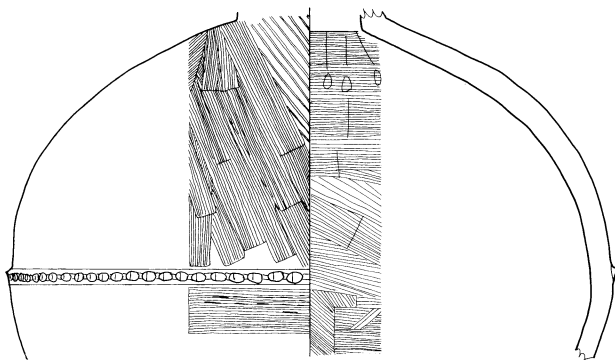
第94図 溝4の出土遺物 (13) 壺



第95図 溝4の出土遺物 (14) 壺

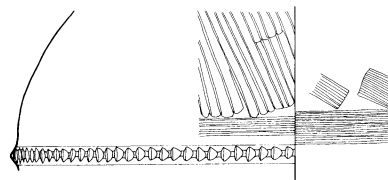


674

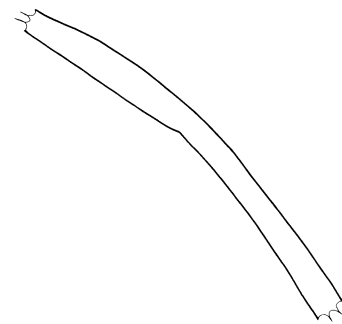
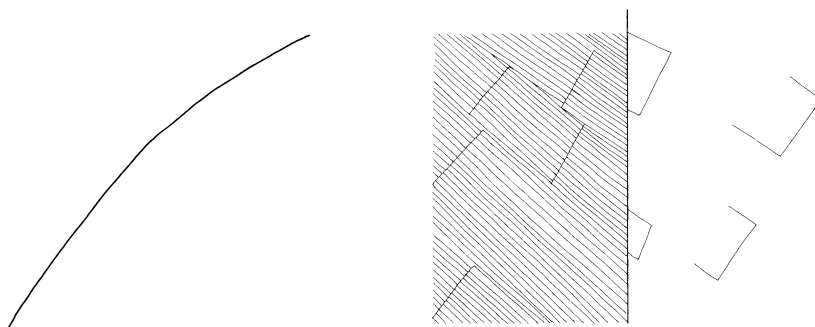


673

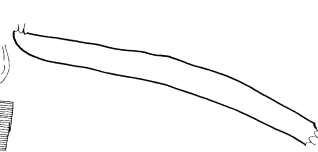
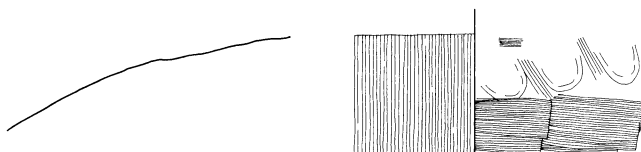
675



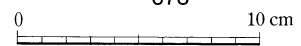
676



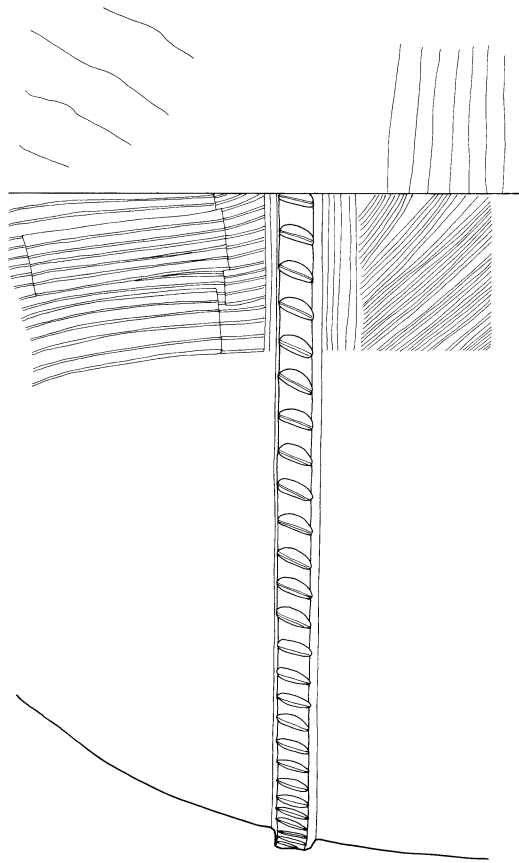
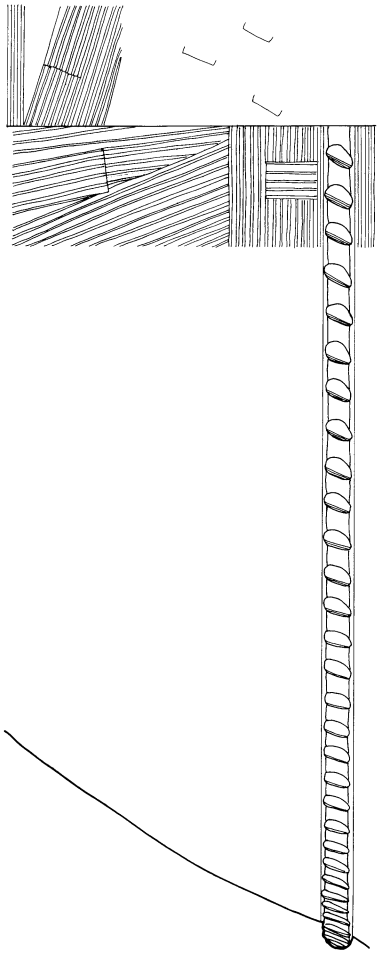
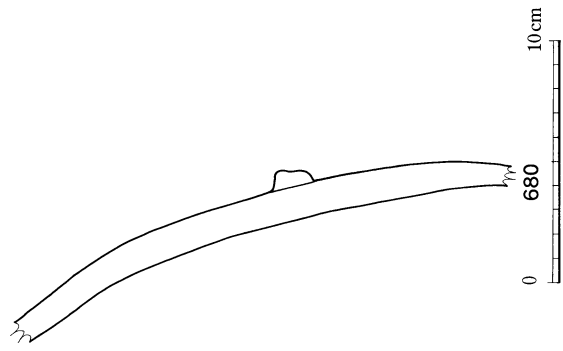
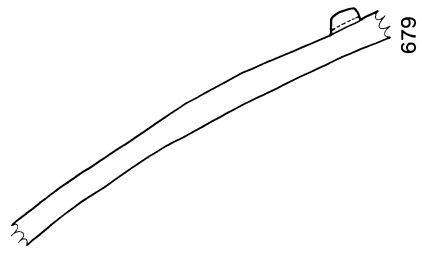
677



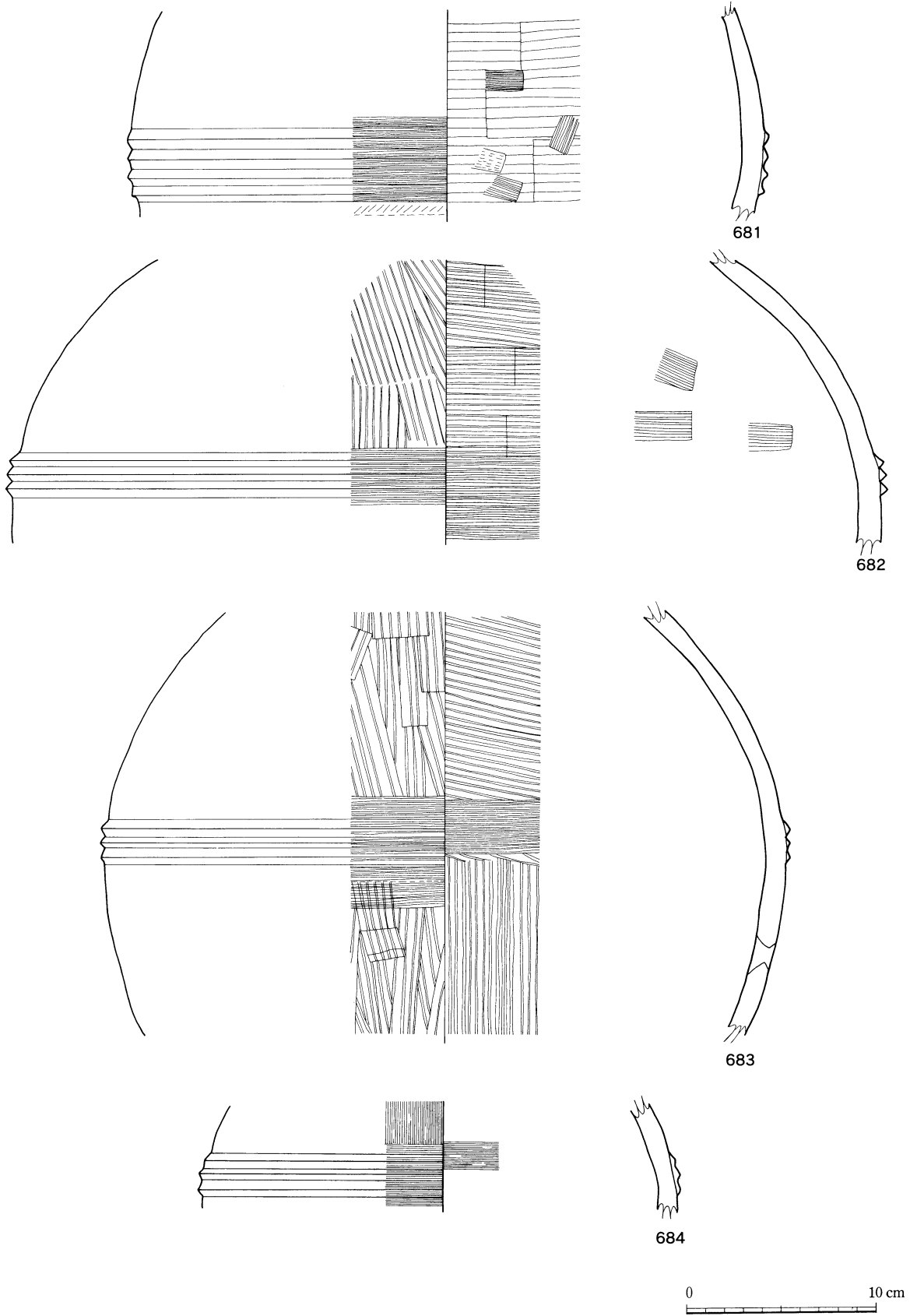
678



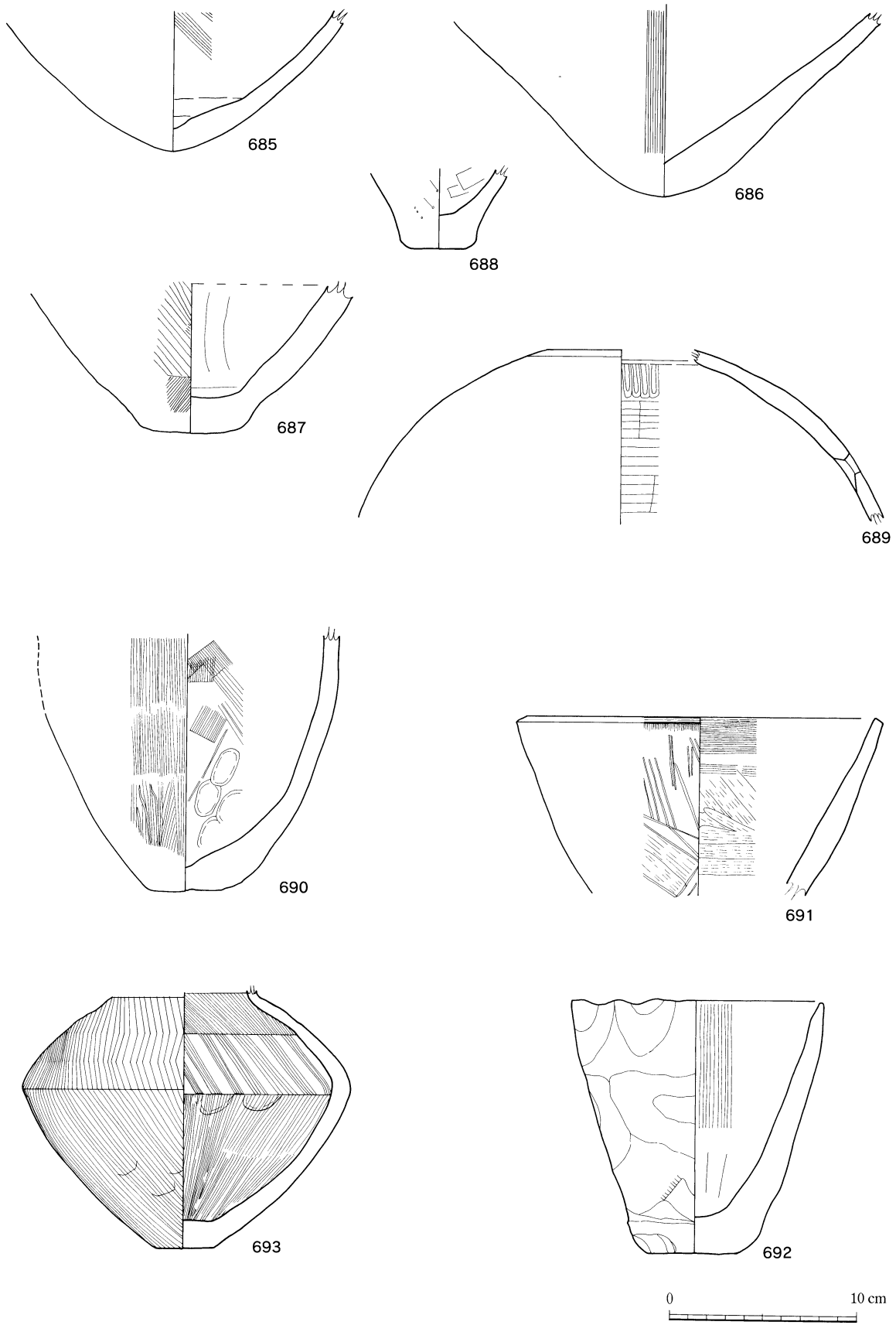
第96図 溝4の出土遺物 (15) 壺



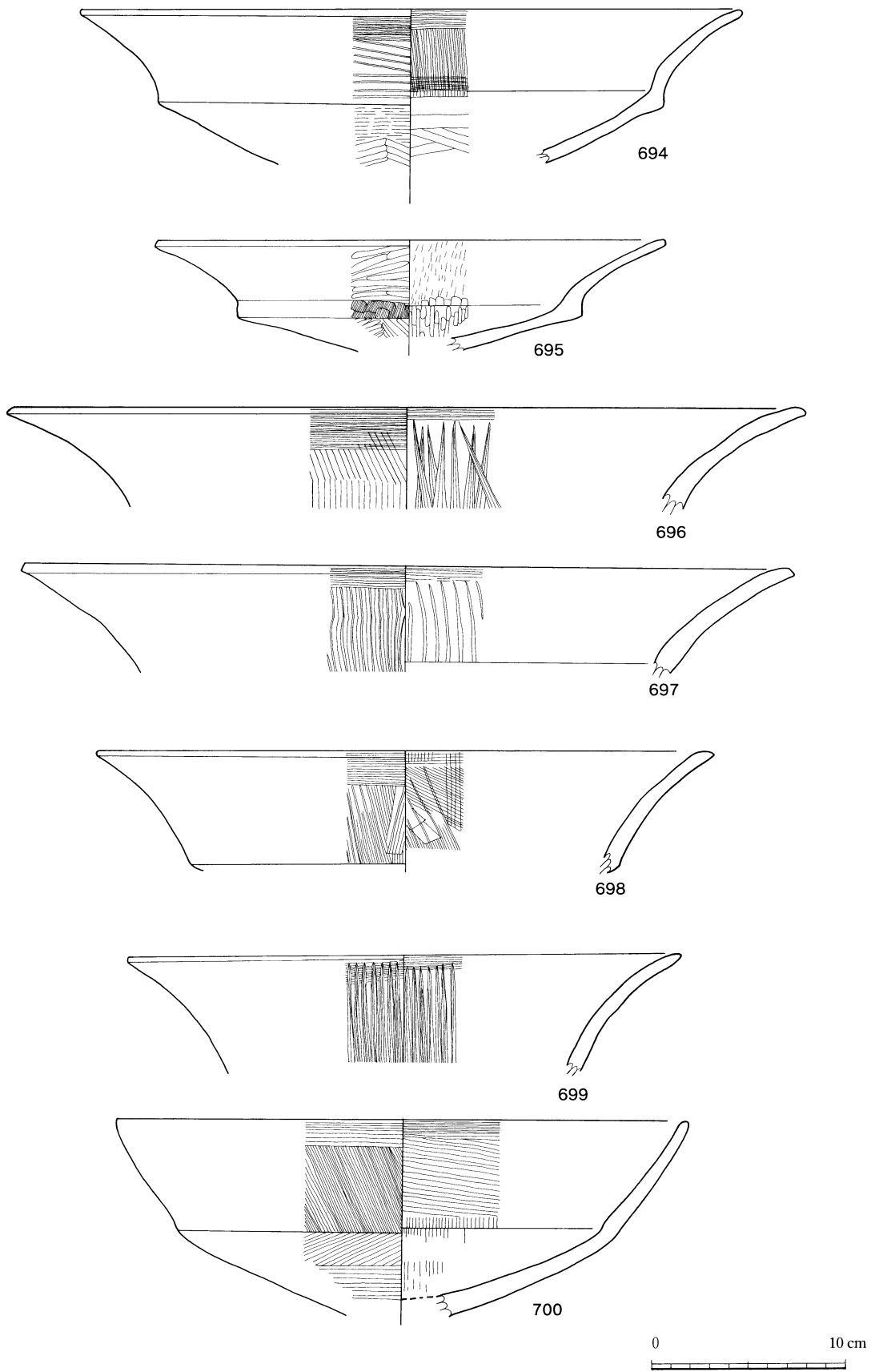
第97図 溝4の出土遺物(16) 壺



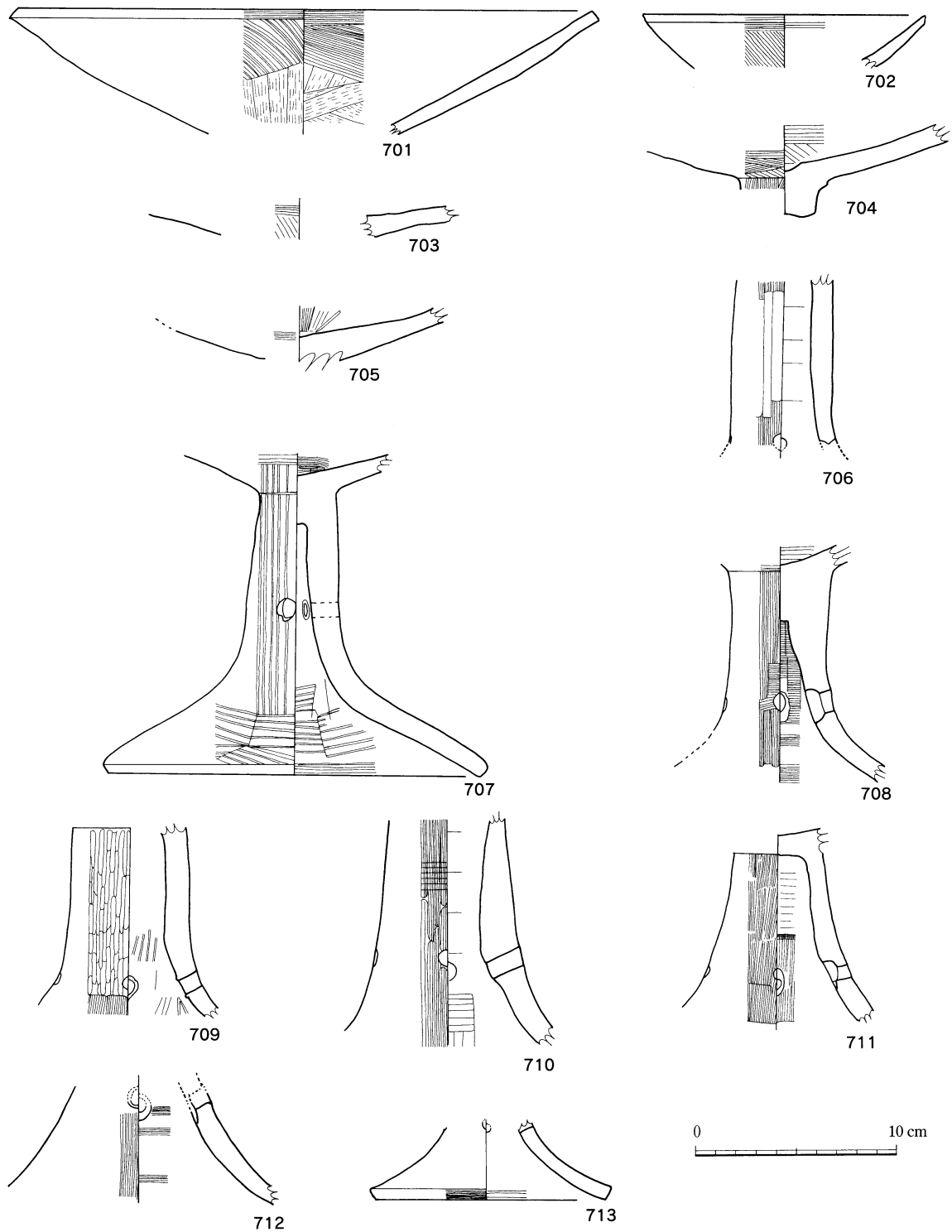
第98図 溝4の出土遺物 (17) 壺



第99図 溝4の出土遺物 (18) 壺・長頸壺・鉢



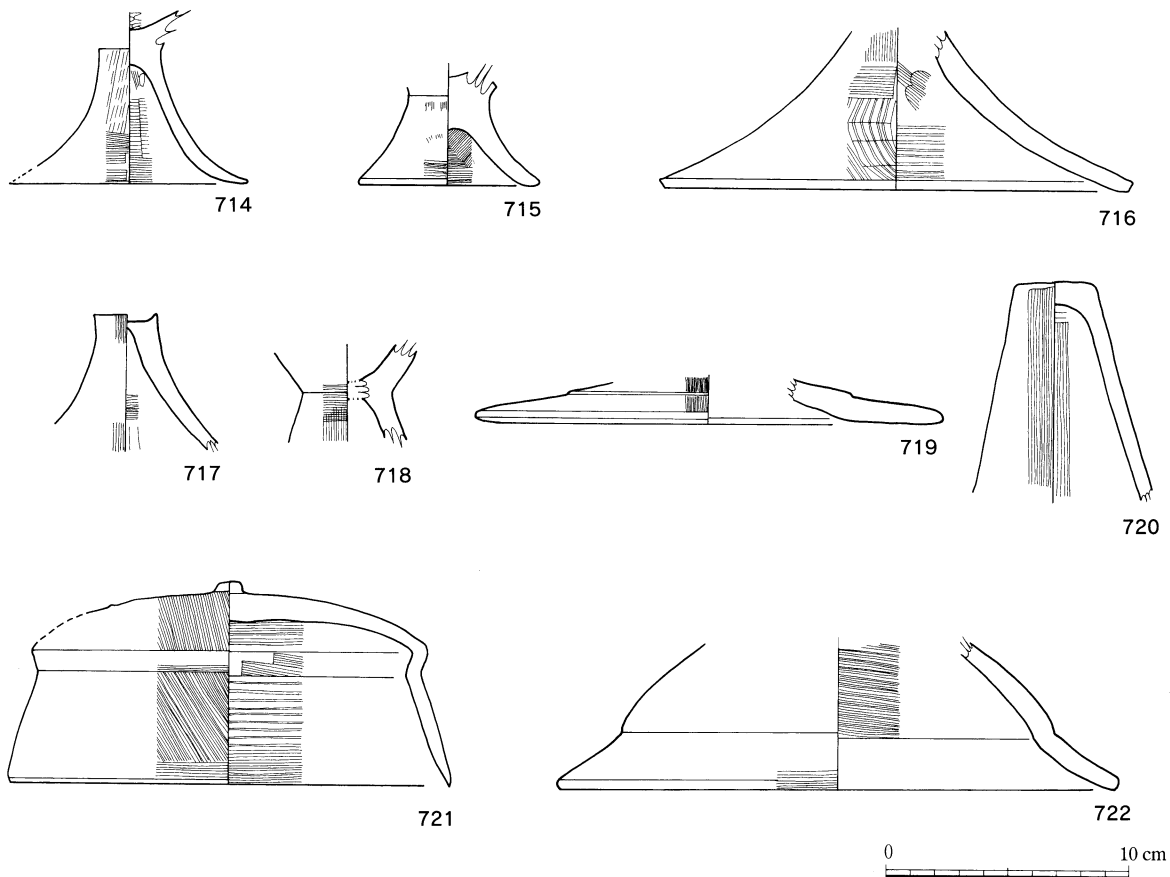
第100図 溝4の出土遺物 (19) 高坏



第101図 溝4の出土遺物 (20) 高坏

高坏 (第100~102図 694~719)

694~701は大型の高坏の坏部である。694~699は大きく外反する器形である。特に694・695は坏部の稜線から大きく外反しているのもも同様な器形と考えられる。文様は696・699に



第102図 溝4の出土遺物 (21) 高坏・蓋

黒色丹塗りの茅葉状の暗文が施されている。器面調整は内面が研磨で外面は一部を除きハケ目である。700は内湾する坏部で稜がみられる。器面調整はハケ目である。701・702は稜のない皿状の坏部である。器面はハケ目、ヘラケズリで調整されている。703～705は坏部の底及び軸部である。器面調整はハケ目である。

706～719高坏の脚部である。706は筒状脚部で、円孔の透かしがみられる。器面調整は研磨とハケ目である。707は筒状脚部まではならないが脚部を円筒状に作り、碗を伏せた脚と組み合わせて脚部を構成している。器面はハケ目調整である。円孔の透かしがみられる。708・709は筒状で、円孔の透かしがみられる。器面調整は丁寧なハケ目と研磨である。710～713は坏部から直に開くタイプで円孔の透かしがみられる。器面はハケ目調整である。714～717は薄手の高坏の脚部である。丁寧な器面調整で、小型が多い。718は高坏の坏部が狭い器形のものである。器面調整はハケ目である。719は段付きの脚部である。器面調整は丁寧なハケ目である。

蓋 (第102図 720～722)

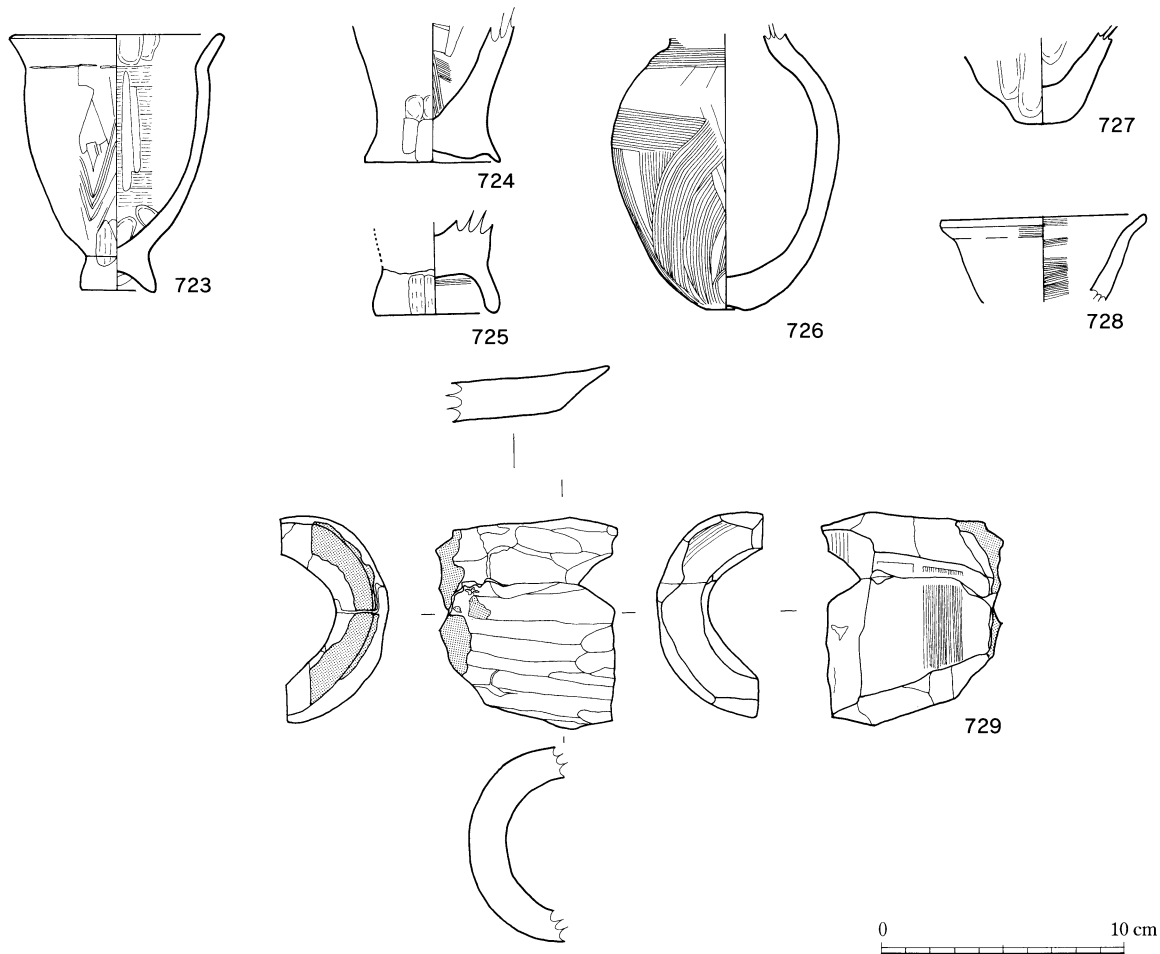
720はコップを反対にした形である。蓋にした理由は外面の調整が非常に良く鉢の底部ではないことで判断した。器面調整はハケ目である。721は細砂粘土を使い作られたもので、内側の調整が粗く、外面は丁寧にハケ目調整で仕上げている。上中央には摘み部と考えられる部分が作られている。722は外面が丁寧に仕上げ、内面は粗いハケ目で仕上げている。器壁は厚く、段のある皿を伏せた器形をしている。

手づくねとふいごの羽口 (第103図723~729)

723は甕形土器を手づくねに作ったものである。口縁部は「く」の字に外反し、底部は低い脚台である。外面はヘラでハケ目を粗く施したため板目がない部分がある。内面は横位のハケ目の上に一部研磨を施している。また、口縁部と底部は指押しの部分もみられる。724は甕形土器の厚みのある底部である。底の面は上げ底で調整が粗く、器面はヘラ調整が粗くみられる。725は脚台が高い底部で、器面はハケで粗く調整している。

726は壺形土器の手づくねである。器形は肩が張り寸胴で、厚い丸底である。器面調整はハケ目である。外側と内側は手ナデである。727は尖り気味の壺底部である。器面は手ナデ調整である。728は鉢形土器である。口縁部が「く」の字に外反しているため、甕形土器の可能性もある。

729はふいごの一部である。釜部に差し込む部分は焼けた後の酸化した鉄が付着している。作り方は筒に巻き、外はヘラで切りそろえている。また、縁部もヘラで切り揃えて面取りをしている。そして、内面には筒を作った時の糸巻痕がみられる。



第103図 溝4の出土遺物 (22) 手づくね・ふいごの羽口

ヒ 包含層の出土遺物 (第104～109図 730～796)

730～756は甕形土器である。

730～738は頸部に断面三角突帯 (730～733) や刻み目突帯 (734～738) 施すタイプの甕形土器である。器形は口縁部の外反の角度が鈍く、肩部の張りがなく胴部から直線に外反している。また、731・735で代表されるように口縁部が長く突帯の位置は下位にある。器面は丁寧なハケ目調整である。

739～751は頸部で「く」の字に折れ曲がり、肩部が張り、口縁部の外反の角度が大きい甕形土器である。これらは、前のタイプと比較すると頸部で絞られ、器形の線が全体的に丸味があるのが特徴である。器面調整は丁寧なハケ目である。この中では口縁部が直線に開く739・740・743 (A) と長い口縁部で丸味をもちながら大きく開く741・742・744・754 (B) と口縁部が少し外反するが直線的に作り肩部が張る747・750・751 (C) の3タイプに分けられる。Aタイプは前の有帯の甕形土器と類似点がある。

752～756は脚台つきの底部である。底は平坦面で、脚の開きは高い。器面調整はハケ目である。

757～768は壺形土器である。

757は小口壺でやや外反する口縁部である。外面調整は頸部を板ヘラで上下に調整されたハケ目がみられる。内面は横位に調整している。758・759は三角断面突帯を2条と3条に廻らしている。器面調整は横位のハケ目である。760は大型壺の肩部で台形断面突帯を廻らしている。器面調整はハケ目で、突帯の調整は横位で他は縦位と斜位である。761・762は胴部に刻み目突帯を施すもので、器形は球状である。器面は縦・斜位のハケ目調整である。763・764・765は口縁部が外反し、なで肩で胴部の張りが下位にみられるものである。器形は頸部の絞り込みが強く、全体的に曲線で構成されている。器面調整は丁寧なハケ目で縦・横・斜位に施されている。766は胴部から底部にかけてのものである。器形は底部がやや尖り気味の球状である。器面調整は縦・横・斜位の丁寧なハケ目である。767は、楕円形の器形で、胴部から底部にかけてである。器面は外面が丁寧な縦・斜位のハケ目調整で、内面は斜位のヘラケズリで器壁を薄くした調整である。768はやや尖り気味の丸底である。器面調整はハケ目である。

769～778は高坏である。

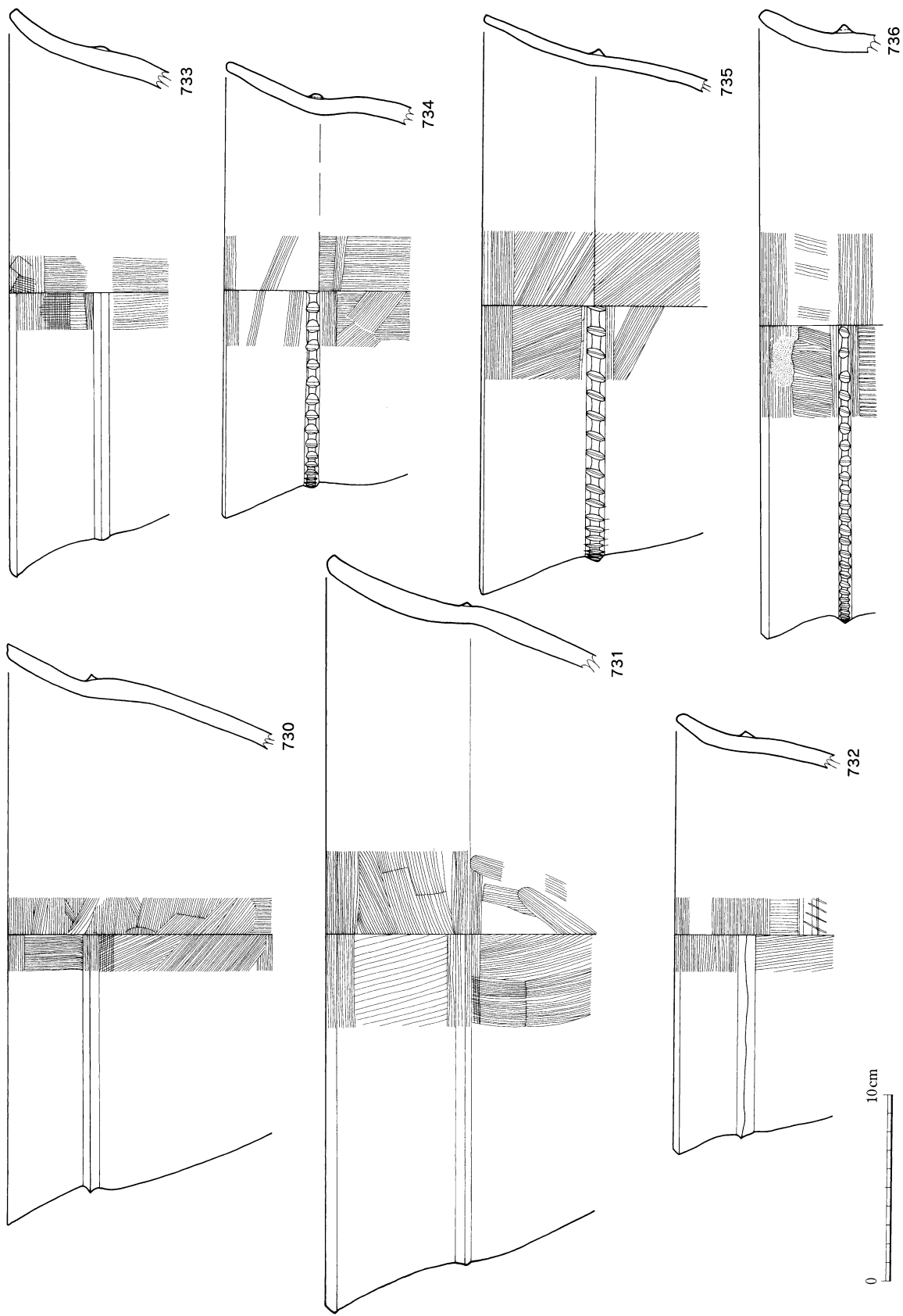
769は筒形の脚部で、開き部との境には折れ線が見られる。器面調整は研磨とヘラナデである。770は坏部より直接開いて脚を作っている。文様は円孔の透かしが見られる。器面はハケ目調整である。771・772は筒状から開く形態で、文様は円孔の透かしが見られる。器面は771が研磨で772がハケ目である。773・777は薄手で細砂を使用した粘土で作られている。器形は坏部との接し部分が厚くその下部から大きく開いている。器面調整はナデである。774は坏部である。鉢形の坏で底部の脚部の径が大きい。器面調整はハケ目である。775・776・778は鉢形の坏部でやや低めの脚部を付けたものである。このタイプは本来の高坏よりも台付き鉢の解釈が良いかもしれない。

780～784は鉢形土器の類である。

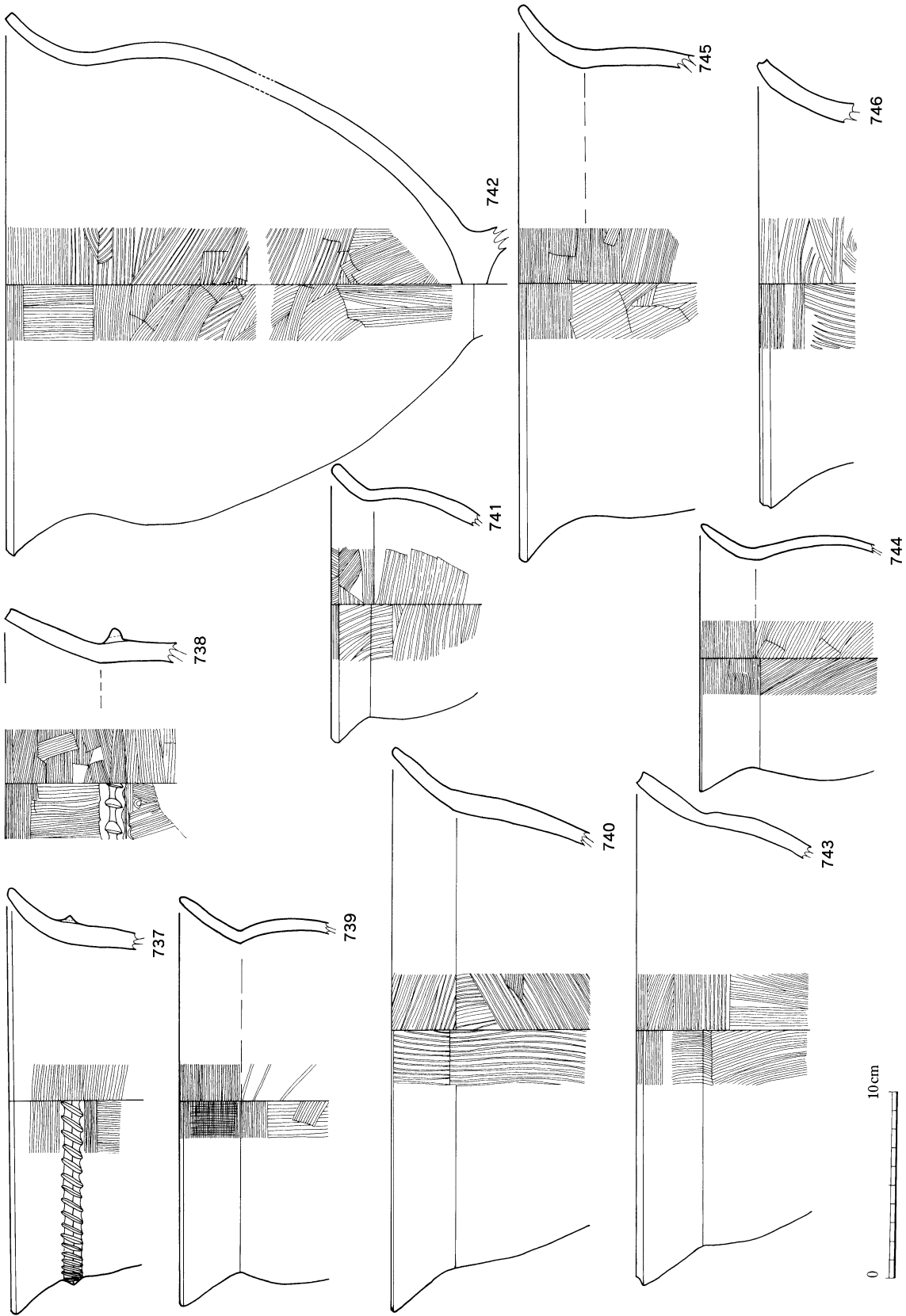
780・781は平底をもち、器面はハケ目調整である。782は丸底で中に鋳物が付着したるつぼと考えられる。783は尖り底で、器面調整がハケ目調整である。784は厚手の底部で粗い底部である。

785・786は埴である。

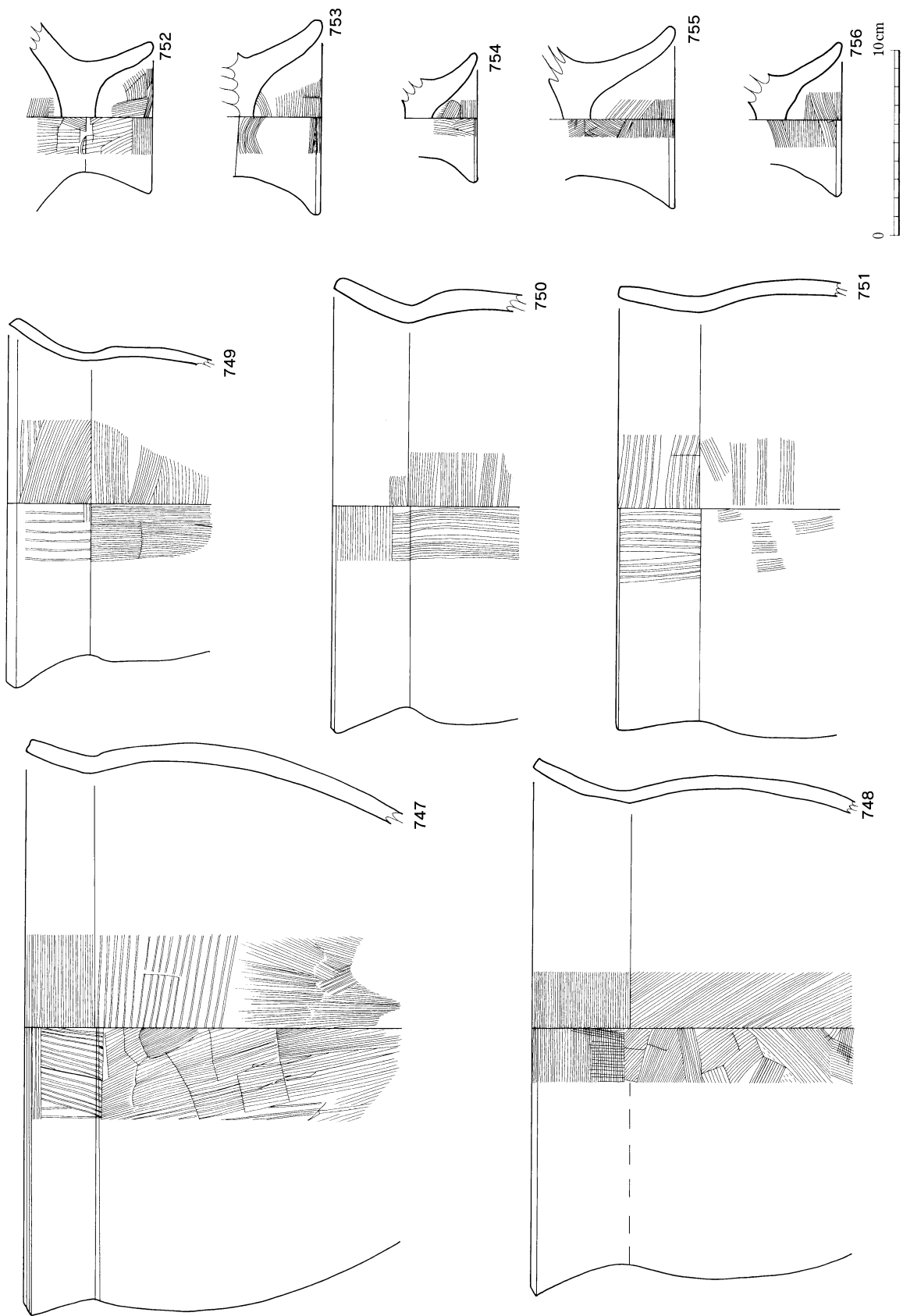
785は底部が厚く、口縁部が外反するものである。786は薄手のものでハケ目調整が縦位に施



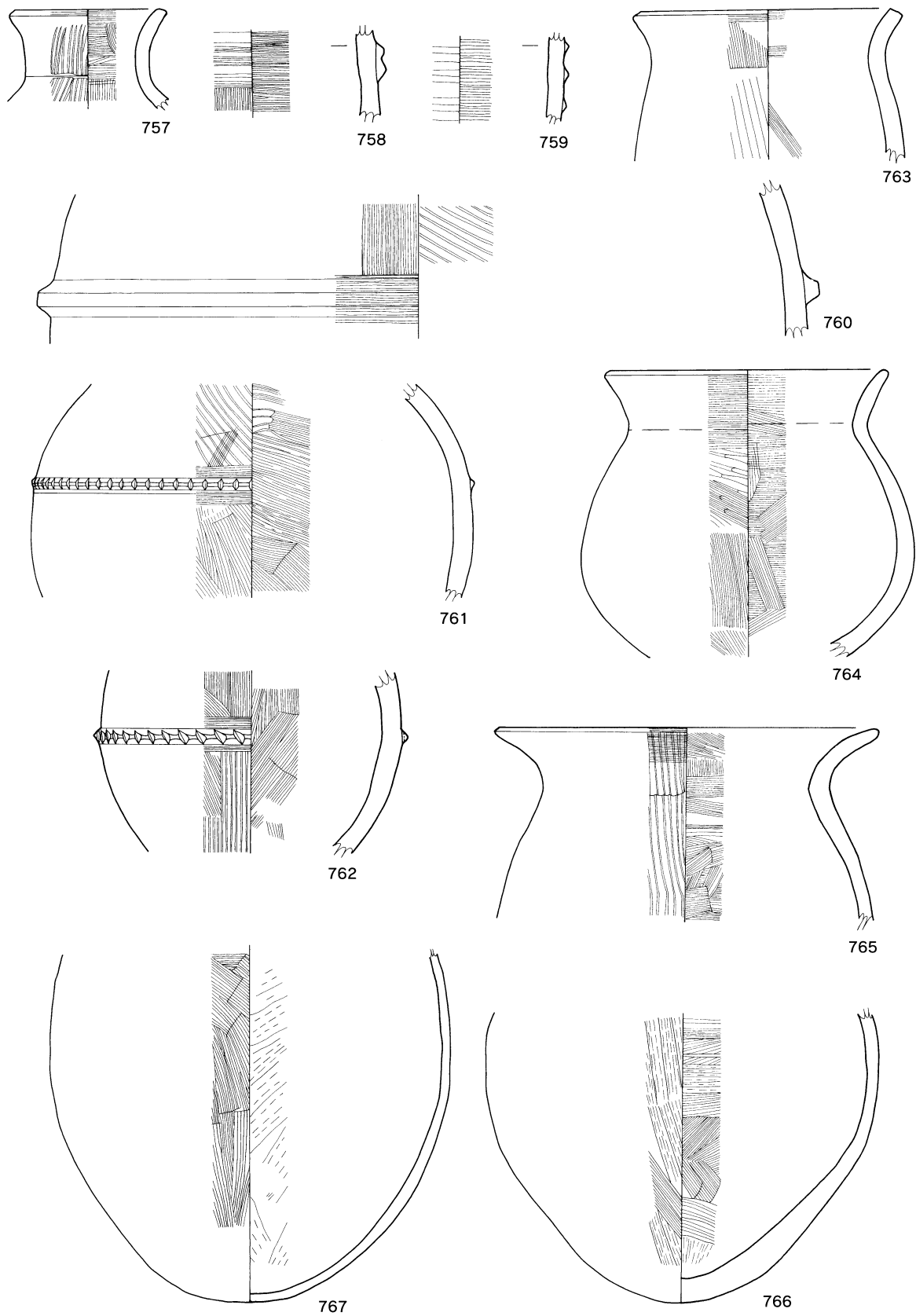
第104図 C遺跡包舎層出土遺物（1） 甕



第105图 C 遗迹包含層出土遺物 (2) 甕

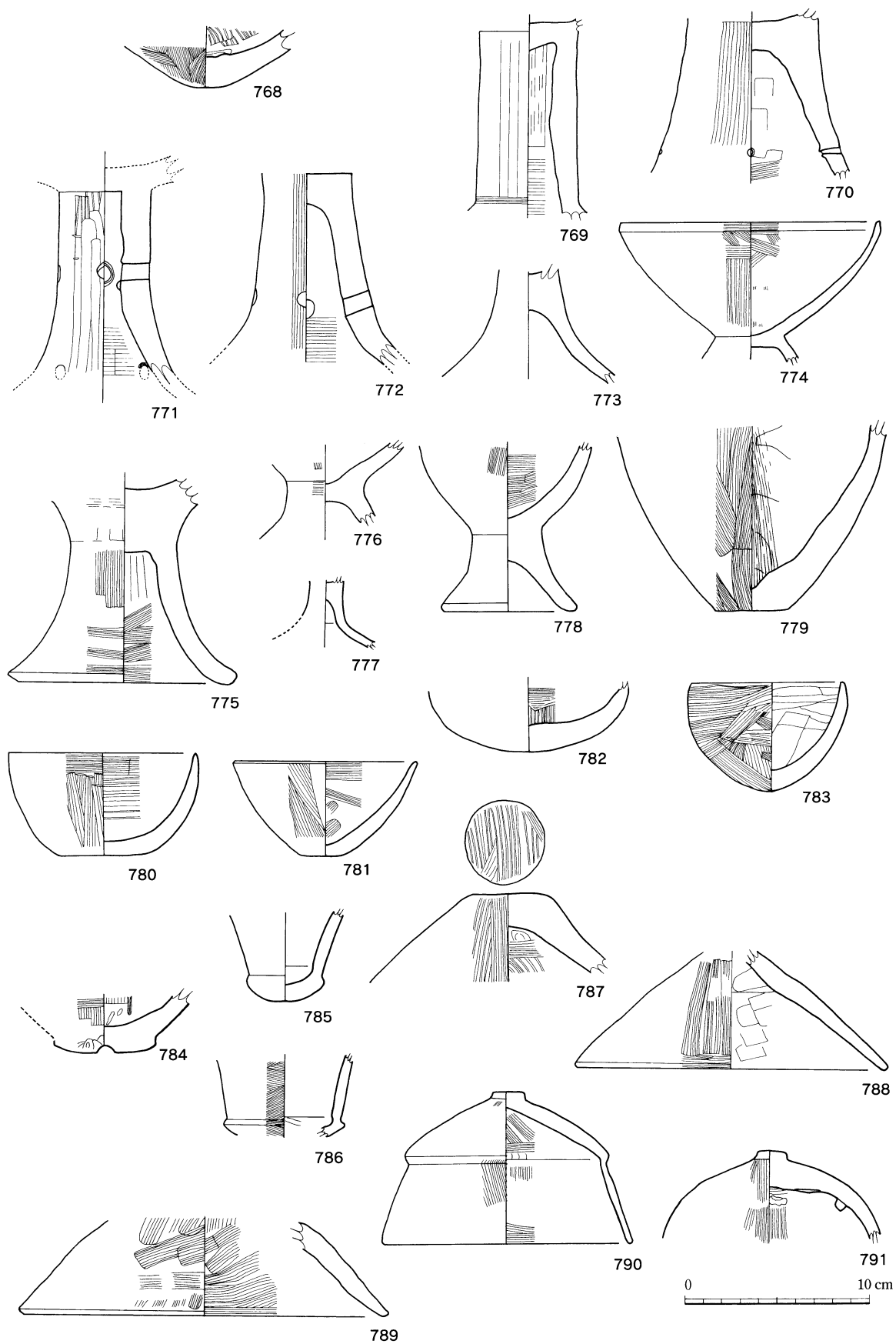


第106図 C遺跡包含層出土遺物(3) 甕

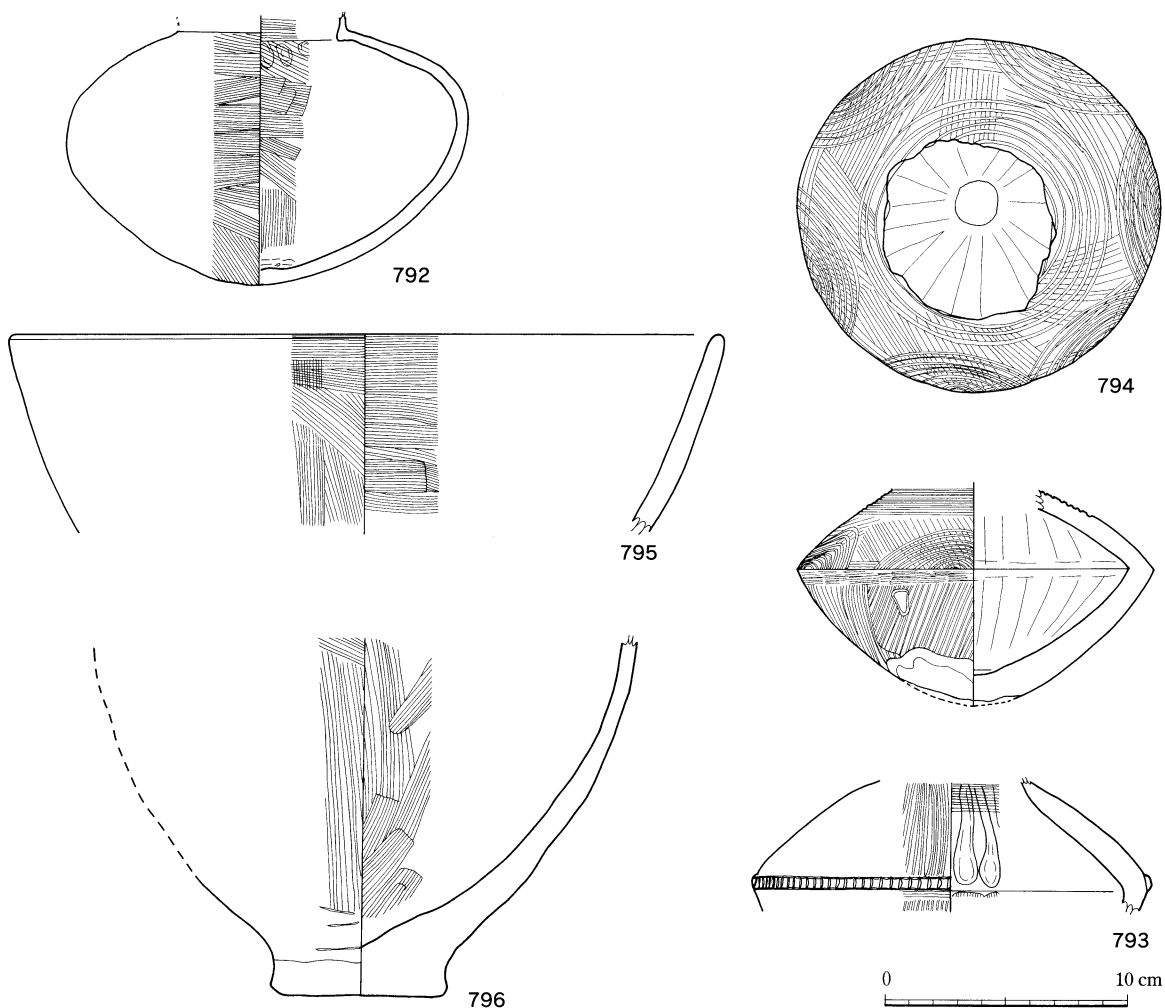


0 10 cm

第107图 C遺跡包含層出土遺物(4)壺



第108图 C遺跡包含層出土遺物(5) 壺・高坏・蓋



第109図 C遺跡包含層出土遺物(6)長頸壺・鉢

している。器形は埴であるが、外面が丁寧で内面は粗い。使用によっては蓋の可能性もある。

787~791は蓋である。

787は蓋の外面に沈線状の板目でハケ目を丁寧に施し、内面は粗いハケ目調整である。788は器形が傘状に開き、外面は丁寧なハケ目で、内面は粗い調整を施している。798は丸味のある傘状で外面のハケ目調整が内面よりも良い。790は頂部に丸い摘みがあり、器形に丸味がみられ、開き部は直線である。器壁は薄く細砂の粘土を使用している。791は頂部に摘みがあり、丸味をもった器形である。外面は丁寧に仕上げているが、内面は雑で、調整した粘土のあまりも残っている。器面調整はハケ目である。

792・793・794は長頸壺である。

792は頸部が小口で、胴部が丸味をもち大きく張り、底部は丸底である。この土器は薄手の土器で、器面調整は横位のハケ目である。口縁部は長頸か短頸かは判断ができないが、長頸の可能性が高い。793は小口で算盤玉状の器形である。胴部には刻み目突帯を廻らし、器面はハケ目調整を縦位と横位に施している。内面には指押しの調整がみられる。794は算盤玉状の器形である。器面は

外面にハケ目調整痕の上に8～10条の重弧文を6ヶ所に施し、7条の重円を施している。下面はハケ目調整がみられる。内面はヘラナデ調整である。これは免田式土器に比定される。

795・796は鉢形土器に分類した。795は大きく開いた口縁部である。下部が不明であるため鉢形土器に入れたが、高坏の可能性もある。器面調整は、内面が丁寧な横位のハケ目で、外面がやや粗い縦位のハケ目である。調整痕で鉢に分類した。796は胴部が丸く張り、充実した低い平底をもつ土器である。上部が不明であるため鉢に入れた。

(3) B遺跡 (A B-1・2区) (第110～113図 797～860)

この地区はA B-1・2区の地域を指している。

797～815は甕形土器である。

797は、厚手の土器でやや大型の土器である。器形は口縁部が大きく外反し、肩の張りが無い。文様は頸部に刻み目突帯を施している。器面調整は外面が突帯から上下へ縦位に施し、内面が横位に施している。

798～806は突帯の付いていない甕形土器である。器形は口縁部が外反し、頸部で締まるものである。この中で、798・800は口縁部が長く、799・801は口縁部が短い特徴がある。また、803・804は肩の張りが無い。そして、805は肩の張りが突帯状に施されている特徴がある。これらの器面調整はハケ目で縦位・横位・斜位で、803ではヘラケズリもみられる。

807・808は甕形土器で胴部から底部にかけてである。器面調整はハケ目である。809～815は甕形土器の底部である。809～813は高く、大きく広がっている脚台である。器面調整はハケ目である。814は手づくね土器の底部である。815は小型の底部で整形が粗い。

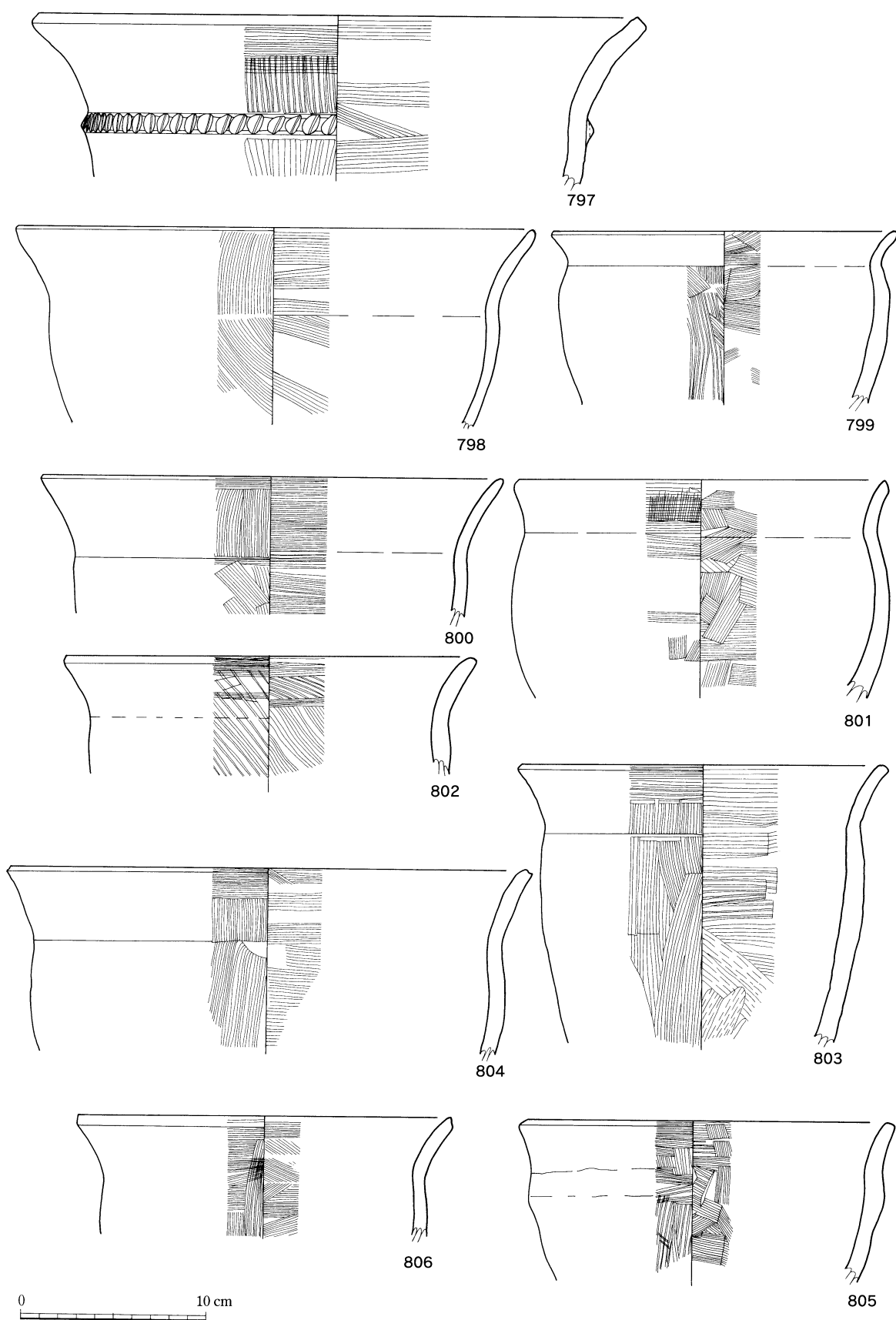
816～844は壺形土器である。

816～819は口縁部で、816はやや広口で、817は小口で、共に口縁部は直線で開いている。818はやや広口で、819は小口で、共に口縁部は直線外反している。これらの器面調整はハケ目である。820～823は器形が球状のためなで肩で、文様は胴部に刻み目突帯を施しているものである。器面調整はハケ目である。824は3条の三角断面突帯が胴部に施されているものである。825はやや幅広の突帯で、ヘラ刻み目を2方向に施している。器面調整はハケ目である。826はやや幅広の突帯に間隔を広く刻み目を施している。器面調整はハケ目である。827～844は底部である。平坦面をもつもの、やや平坦面をもつもの、丸底、尖り底がある。器面調整はハケ目である。

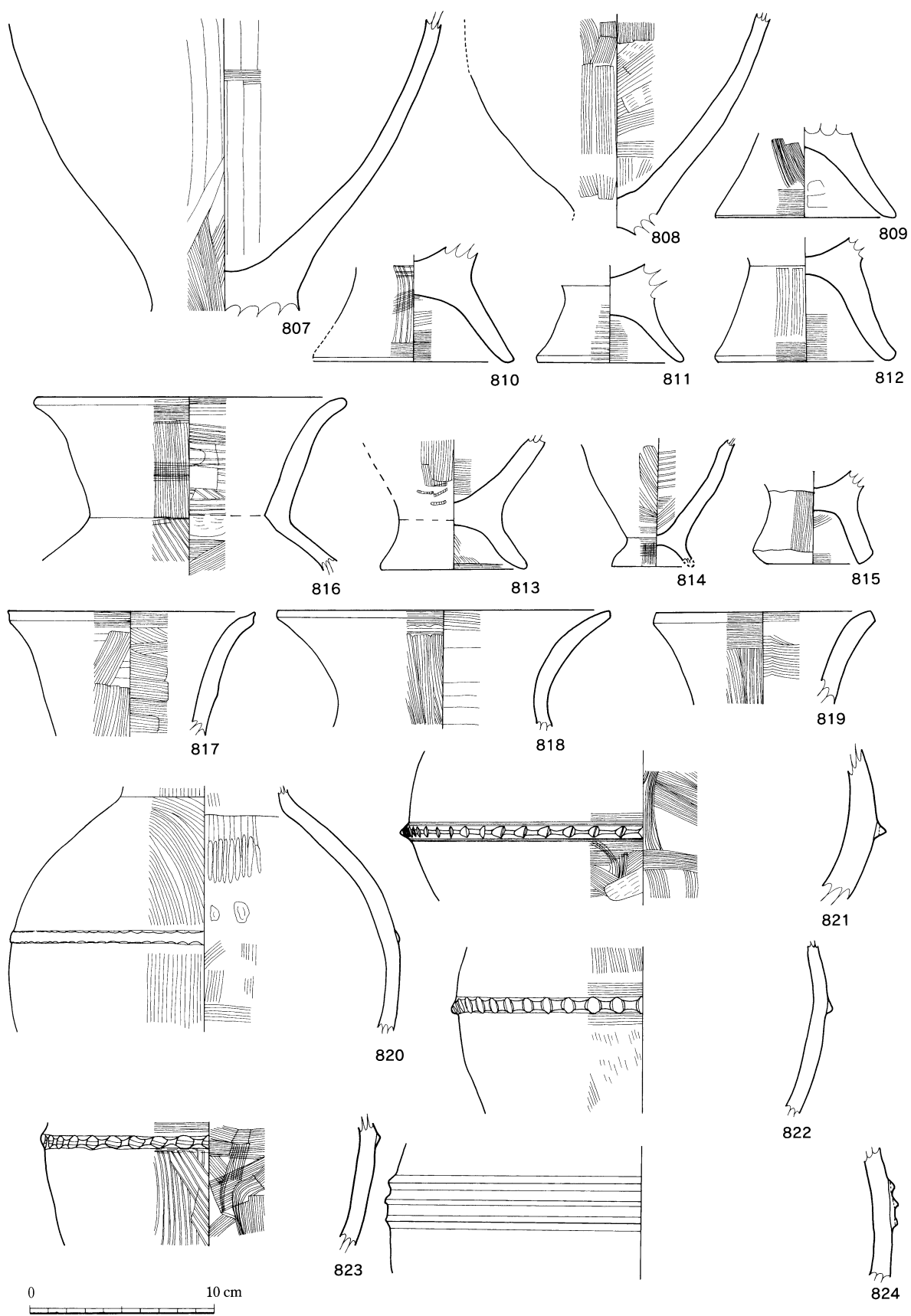
845は広口壺と小型甕との中間である。846は手づくね小型壺か坩である。847は手づくね坩である。器面調整はハケ目と手ナデである。848は算盤玉型の壺で重弧文が施され、内面は手ナデの調整である。免田式土器に比定される。849は無頸壺である。内面は手ナデ調整である。850・851・852・853は手づくね鉢である。853は高坏の可能性もある。これらはハケ目調整である。

854～860は高坏である。

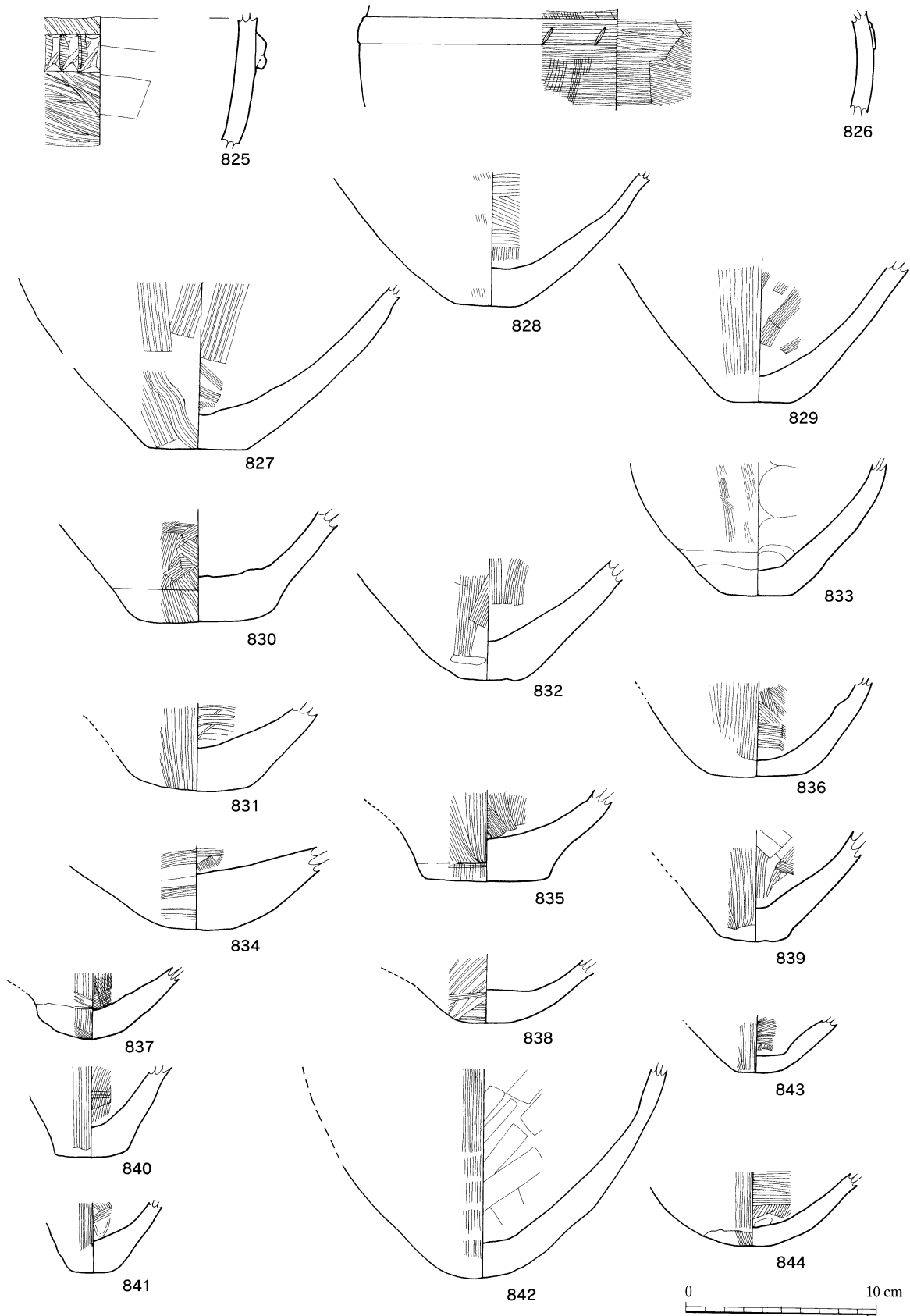
854は稜のある坏部である。外面は粗いハケ目調整で、内面は横位のヘラ研磨調整である。855は筒型の脚部である。856はやや開く筒型の脚部で円孔の透かしがある。857は大きく開く脚部で円孔の透かしがある。858はやや開く筒型の脚部で円孔の透かしが2段みられる。859は大きく開く脚部で細砂粘土を使用している。860は低い脚部で坏部は鉢状のものが考えられる。これら脚部の器面調整はハケ目である。



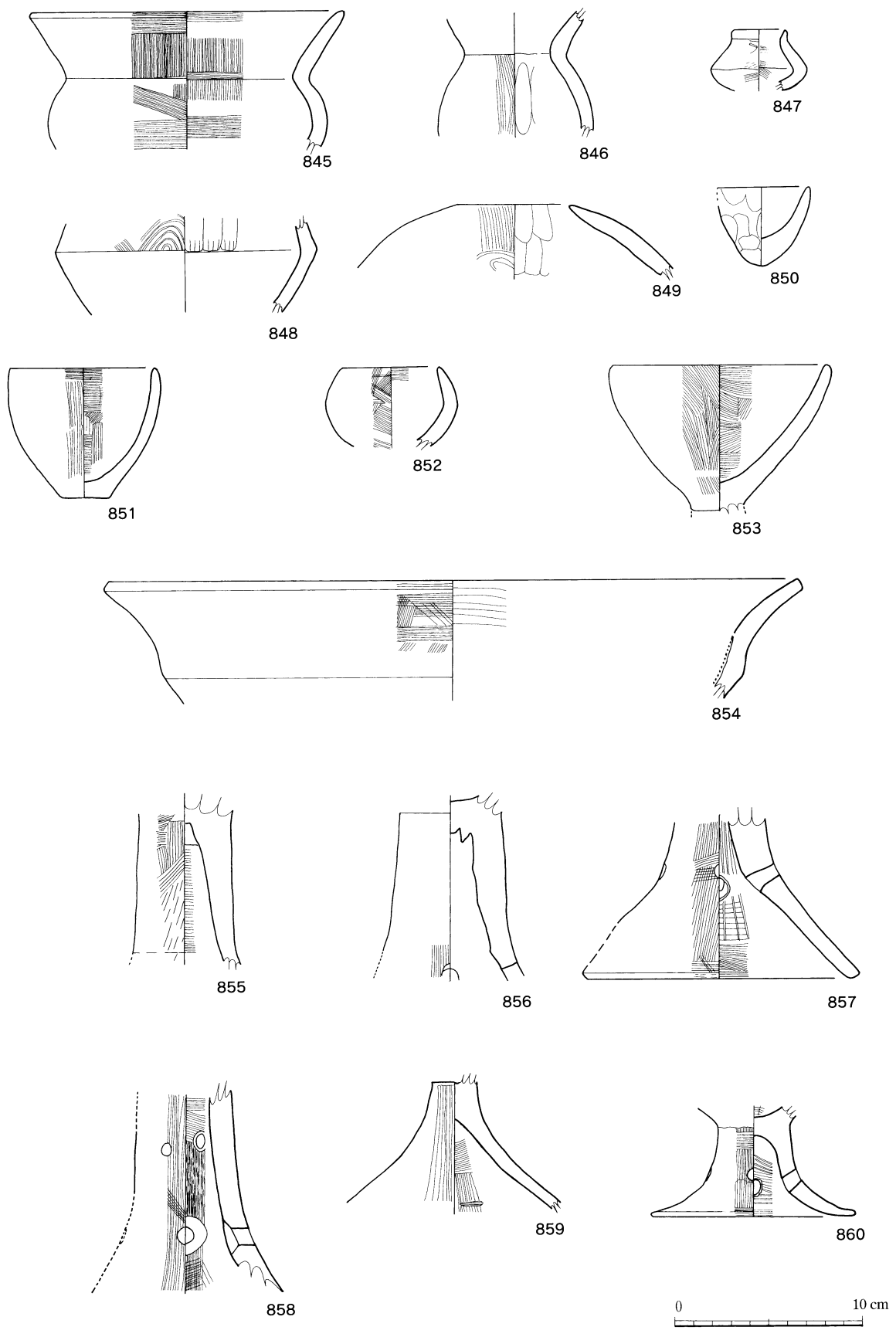
第110図 B遺跡包含層出土遺物(1)甕



第111图 B遺跡包含層出土遺物(2)甕・壺



第112图 B遺跡包含層出土遺物(3)壺



第113図 B遺跡包含層出土遺物(4)小壺・手づくね・鉢・高坏

4 平安時代 (第78・114～118図)

遺構溝5には古墳時代の遺物と平安時代の遺物が同溝内の埋土に混在して出土した。このことは、この遺構は平安時代の時期に作られ、最も新しい平安時代の遺物に、周りにあった古墳時代の遺物が混在したことになる。よって、この溝は平安時代と判断した。

他の出土遺物はBC遺跡の包含層に出土した。

(1) 溝5の出土遺物 (861～886)

861～868は甕形土器である。

この中で、861～866は混在して出土した古墳時代のものである。これらの甕は無突帯で頸部が「く」に折れ肩の張らない器形で、866は外面にヘラケズリがみられる。器面調整はハケ目を横位・縦位に施されている。底部は脚部の裾が開き、全体的に丸味がみられる。

867・868は土師器の甕形土器である。

867は「L」字口縁部をもつ土器である。大型の口縁部は厚みが均一であり、器面は丁寧な面が作られている。また、頸部から下部は少し開き気味に作られている。器面調整は口縁部が横位のハケ目で、頸部から下は外面が丁寧な縦位のハケ目調整で、内面がヘラケズリ調整である。胎土の色は他の土器と違い暗茶色が強い。器形・調整・胎土からみて移入土器の可能性が強い。868は厚みがある「く」の字口縁部である。器面調整は横位のヘラナデで、内側にヘラケズリがみられる。

869～875は壺形土器である。

壺形土器では平安時代のものは出土していない。869は狭口の外反する口縁部であり、870は頸・肩部である。これらの器形は不明である。器面調整はハケ目である。871・872は2条の三角断面突帯と1条の刻み目突帯を胴部に廻らしている。器形は871がやや肩張り形で、872は球状でナデ肩である。これらの器面はハケ目調整である。873～875は底部である。873は尖り状の底部に平坦面を施す平底である。874は狭い平坦面をもつ底部である。875は中心部がいびつな丸底である。これらはハケ目調整である。

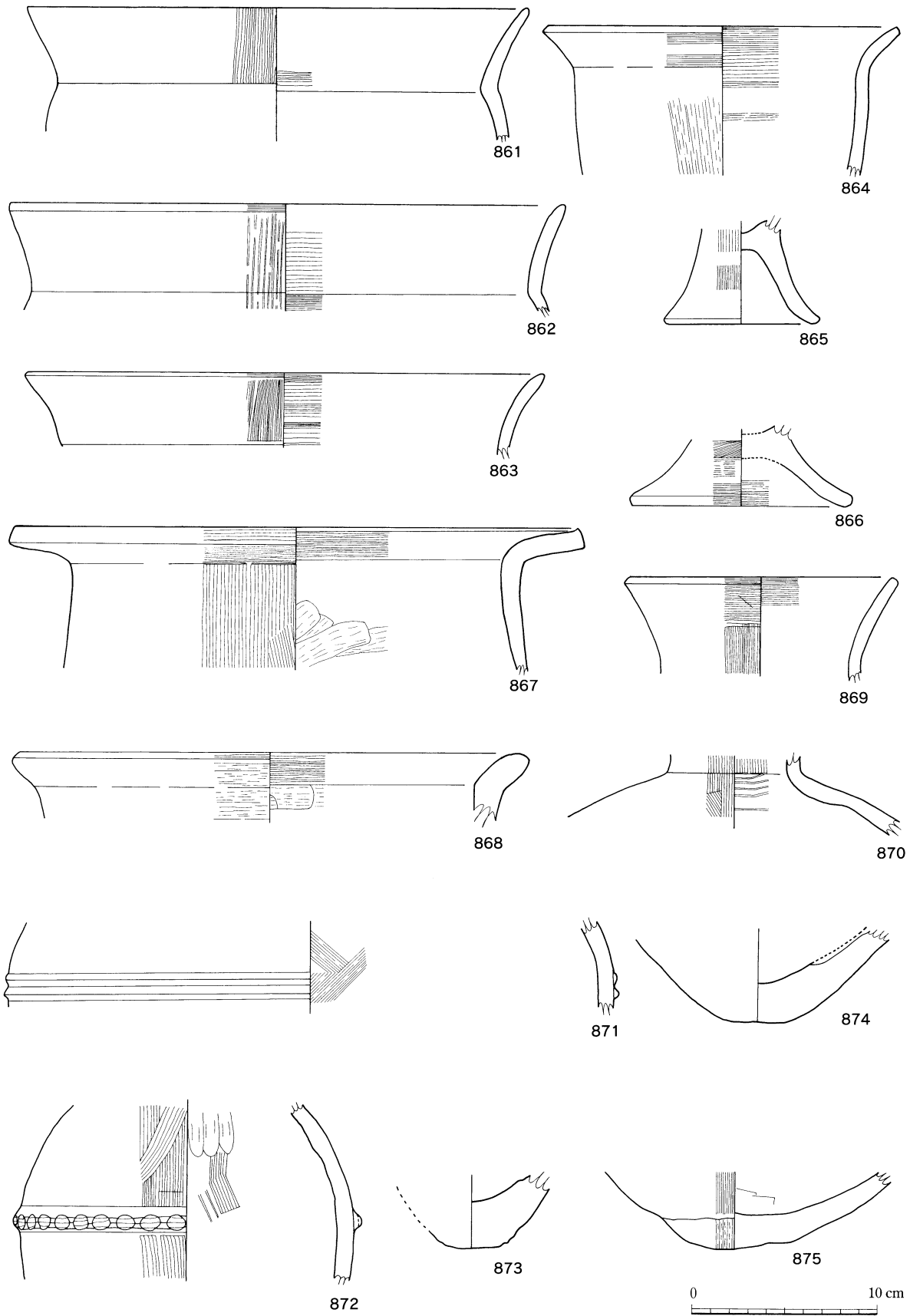
876～882は高坏である。

高坏の中には平安時代のものは確認されていない。876は坏部の皿部である。器面調整はヘラ研磨である。877は大きく開いた坏部である。口縁部は三角断面状に尖らし、細い沈線を施している。878は大型の脚部で、裾部で大きく開いている。器面調整は横位にハケ目がみられる。879は筒部で、円孔の透かしが施されている。880は脚部で円孔の透かしが変則に施されている。881は大きく開いた脚部である。大きさと透かしがないことで判断すると蓋の可能性もある。882は高坏の類に入れたが、坏部が小型の鉢であるため、脚台付き鉢とした方が良い。

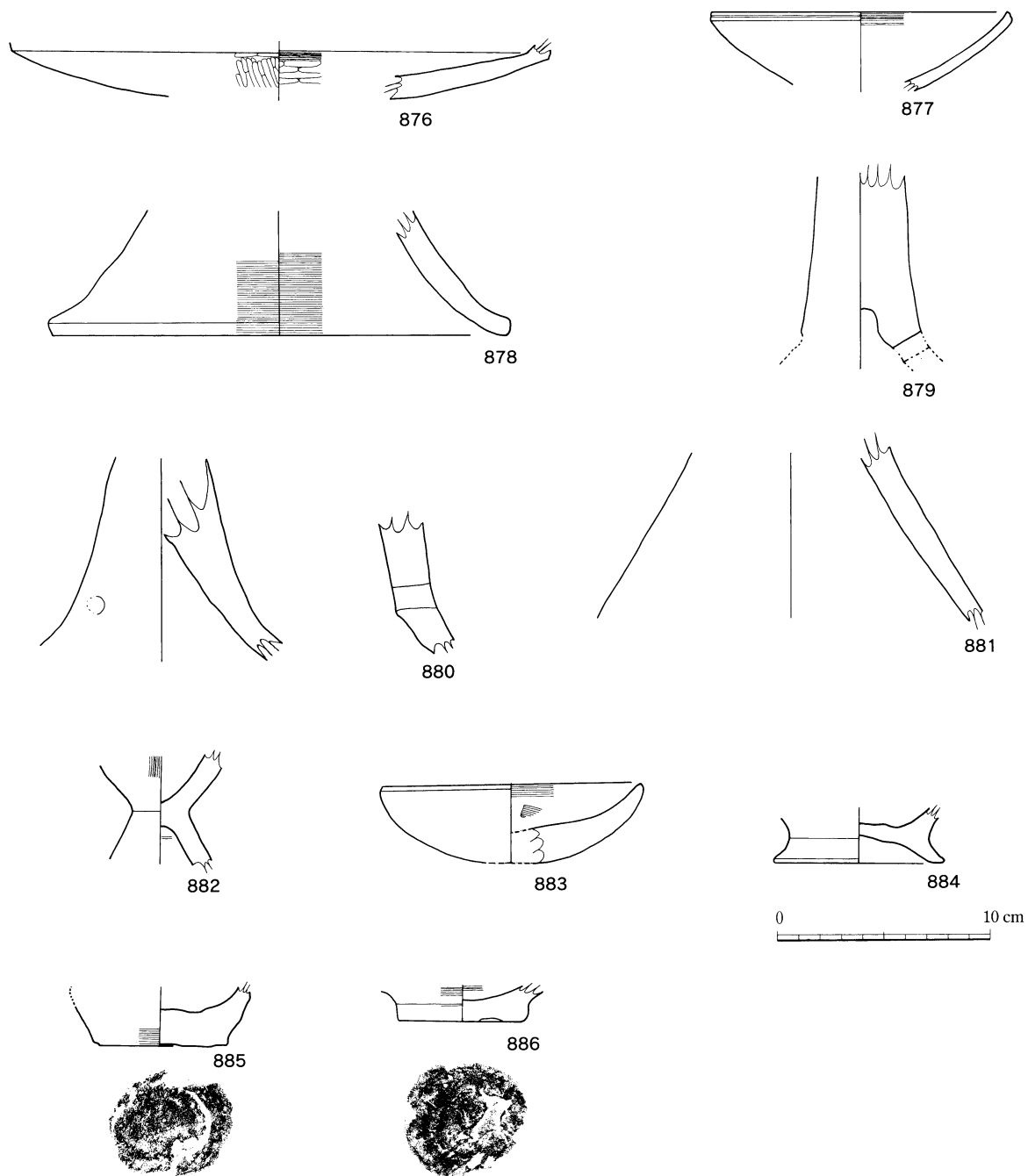
883は底が厚い皿形土器でるつぼと思われる。口縁部は内湾し、口唇部の断面は尖っている。内面にハケ目がみられ、外面はナデ調整である。

884～886は土師器である。

884は高台が外側に開く碗の底部である。器面はロクロ調整である。底部の裏側はヘラ切りでその上から高台をつけている。885は厚手の坏で底面はヘラの回転切りである。器面はロクロ調整がみられる。886は薄手の坏で底面はヘラの回転切りである。器面はロクロ調整がみられる。これらは9世紀中頃のものと考えられる。



第114図 溝5の出土遺物(1)

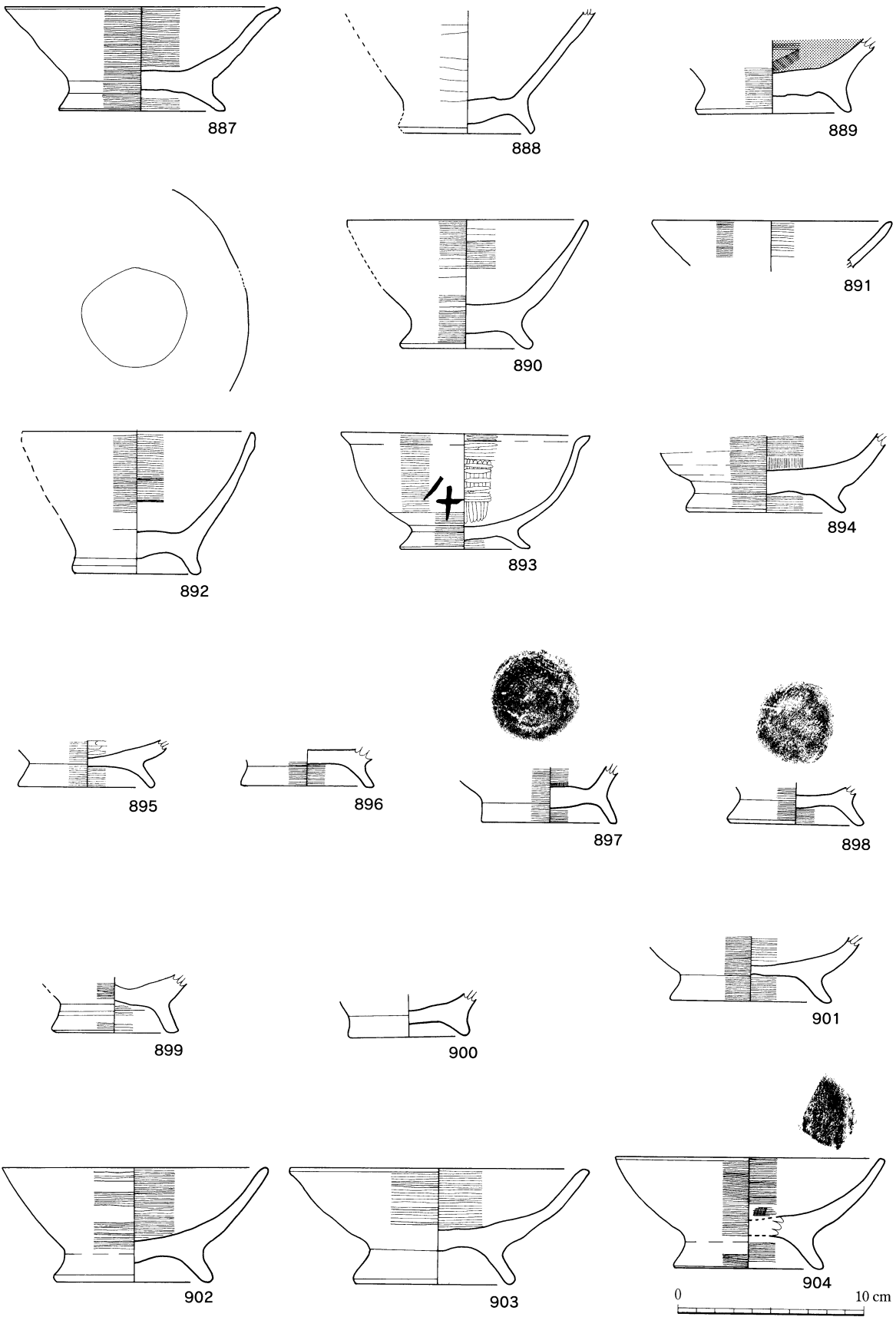


第115図 溝5の出土遺物(2)

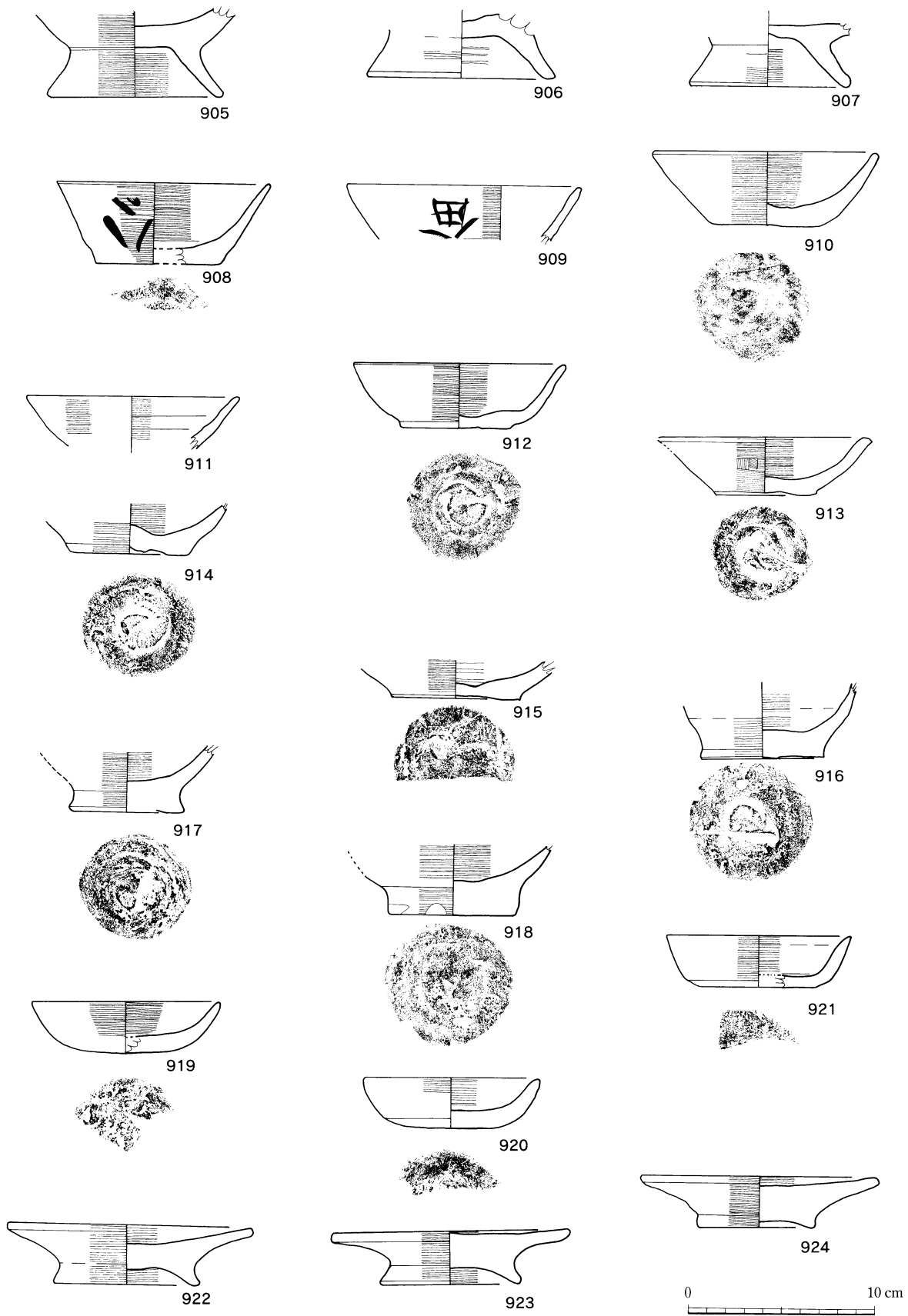
(2) 包含層の平安時代遺物(第116図887~928)

887~907は碗である。この中では、高台の低いタイプ(887~901)と高いタイプ(902~907)に分けられる。

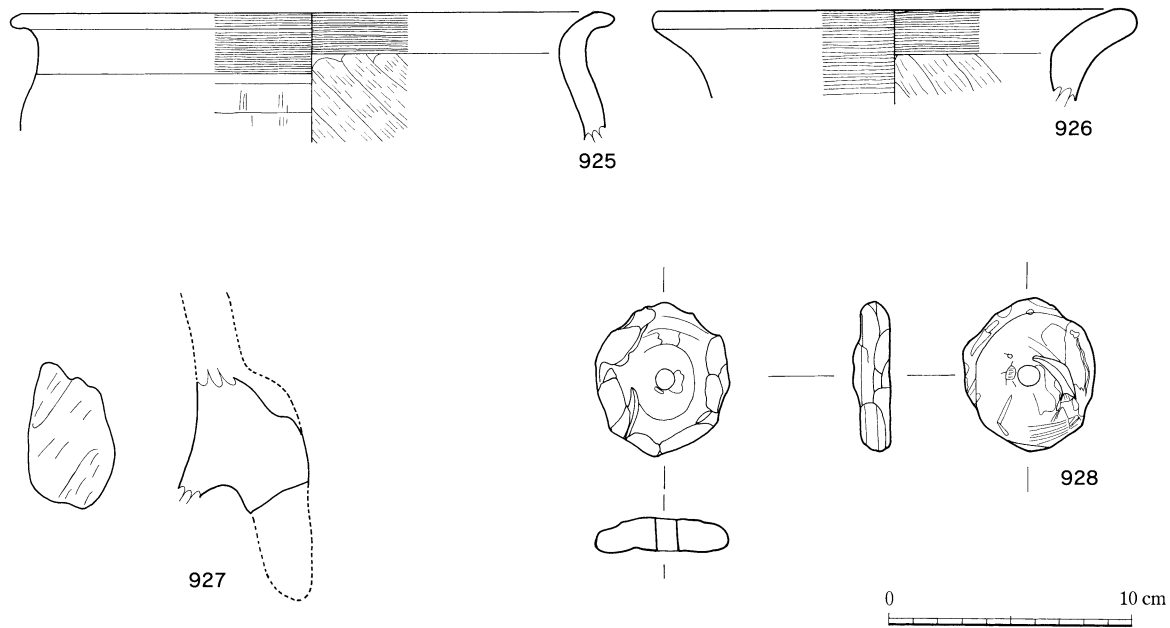
高台の低いタイプは坏部が直線状になる887~892と、湾曲になる893・894とに分けられる。前者が9世紀中頃~10世紀初頭で後者が10世紀中頃から後半と考えられる。なお、個々の特徴としては、889が内黒土師器で、892は口縁部の見込みが楕円形につくられ、893は欠けの部分が多く



第116図 平安時代の出土遺物（1）



第117図 平安時代の出土遺物（2）



第118図 平安時代の出土遺物（3）

読みとれないが、外面には「本」又は「八十」の墨書がみられる。895～901は碗の底部である。時期としては901が10世紀で他は9世紀中頃と思われる。また、個々としては897と898の内面には布目痕がみられる。なお、891は底部不明のため断定できないが、器形で碗の中に入れた。

902～907は高台の高いグループである。この中で、902～904の坏部は径が大きく、浅く、やや内湾している。器面調整はロクロ調整で、904の見込みには布目痕がみられる。時期は9世紀末から10世紀中頃と思われる。

908～918は坏である。

908・910・912～915は底部が薄手でへら切り離しである。916～918は底部が厚手でへら切り離しである。これらの器面はロクロ調整である。この中で908は「八〇」909は「八田」の墨書がみられる。なお、909・911は底部不明のため断定できないが、器形で坏に入れた。時期は9世紀中頃から10世紀中頃と思われる。

919から921は皿か蓋と思われる。特に919と920は丸味のある不安定底のため蓋の用途が強い。器面はロクロ調整とへらナデ調整である。

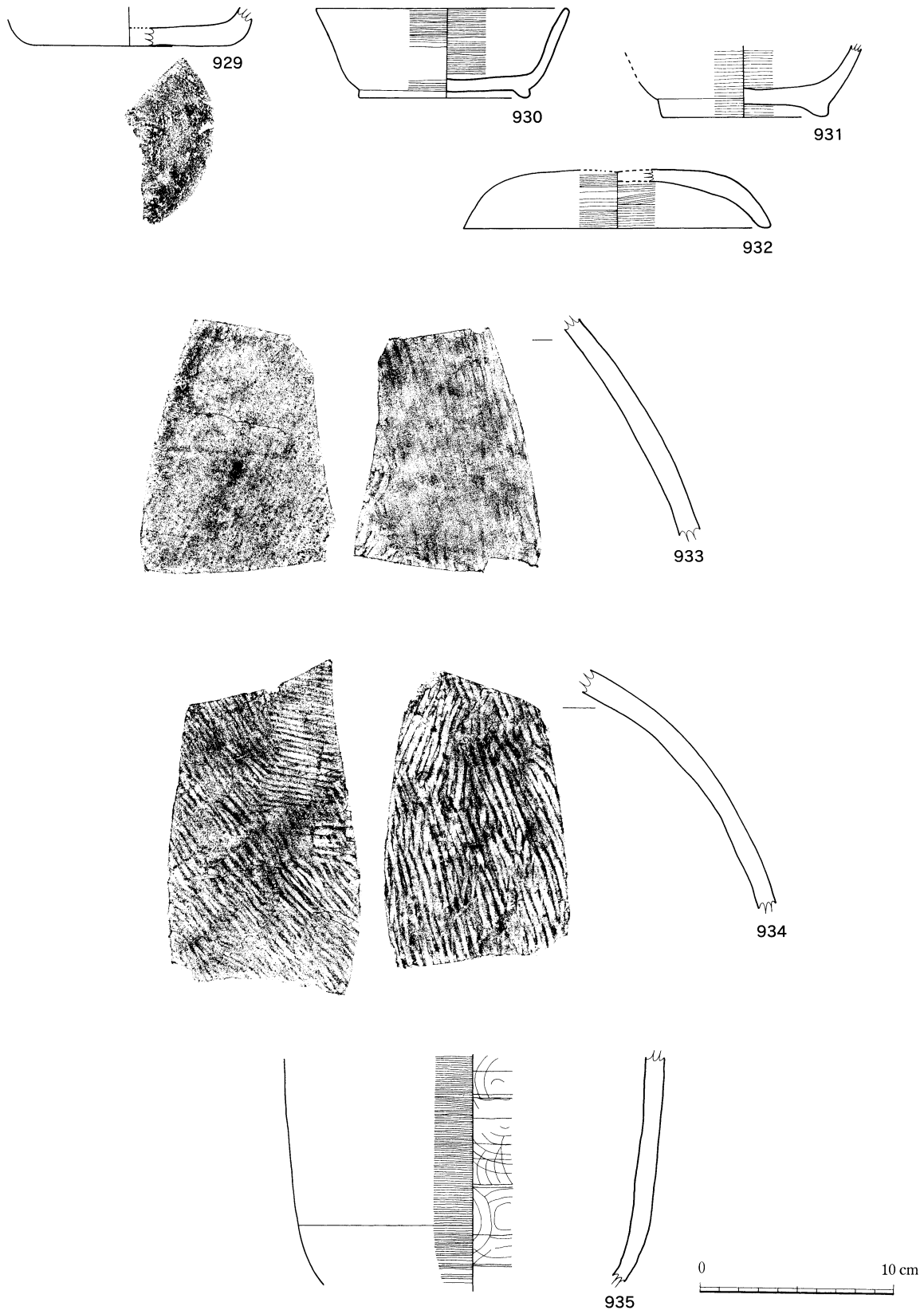
922～924は台付皿か蓋と思われる。皿部の深みがなく平坦面の見込みである。脚部は充実され、開きがある。器面は内外面とも丁寧なロクロ調整である。使用方法は平坦面の見込みと充実高台から判断すると蓋の可能性が高い。

925・926は土師器の甕形土器である。925は頸部に稜をもち口縁部が外反し胴部が張る器形で、926は口縁部が長く外反し、胴が張らない器形である。器面調整には内面にへらケズリがみられる。

927は甑の脚の部分と思われる。928は土師器を再利用した紡錘車と思われる。

須恵器（第119図 929～935）

929は径が大きいため壺形土器の底部と思われる。器面はへらナデ調整である。しかし、底面の



第119図 平安時代の出土遺物（4）

形からみて坏か皿の可能性もある。

930は碗である。高台が低く断面がしっかりした方形で口縁部は直線で外反している。器面は口クロ調整である。931は高台の断面がはつきりしないものである。

932は蓋と思われる。厚みが均一でなく、なだらかなカーブをもって下がっている。器面は口クロ調整である。

933・934は甕形土器である。器面には敲き目が内外面にみられる。

935は壺型土器の胴部である。器形は筒型で蔵骨器の可能性が高い。内面はタタキ目の青海波文がみられる。

5 近世

(1) 井戸跡 (第120図)

この遺構はA9区の中央で第1層下部から第2層に検出した。検出面の標高は5 m80cmであった。井戸枠は地表面部では長さ1 m70cm、高さ1 m、厚み25cmの凝灰岩で上部をかみ合わせて作っている。地下部は長さ1 m50~70cm、高さ65cm、厚み25cmの厚板を4段に組み、さらに、最下部で35 cm角をした1 m60cmの角材で構成して作っている。これらは縦1 m73cm、厚み35cm角材で地上部の板石を支えている。そして、最下部の部分には濁り止めの砂利を敷き詰め、調査時の砂利層は水分がみられた。また、地上部の東側井戸枠の南部には使用されて桶があたり、窪みができた部分が造られている。

この井戸の周囲には板切れや丸太が出土し、その外側には屋根柱の基礎と思われる50cm四方の凝灰岩やその痕跡が4ヶ所検出した。その間隔は東西7 m、南北5.5mであった

この井戸は鹿児島師範学校がこの地にあったことからその時のものと考えられる。

(2) 溝3 (第121図)

この遺構は、A・B-3・4区の第1層下部から第2層に検出した。検出面は赤褐色で鉄分が張り付き、用途は水田の水路と考えられる。

南中央から北西へ幅30cmの支線溝が伸び、北東へ約1 mの本線水路が伸びている。これらの水路の深さは5~15cmであった。東北部の支線水路では別に2本みられ時期的に水路が作られたことがうかがえられる。また他にも3ヶ所支水路がみられる。

この水路の時期は出土遺物から近世も水田跡と判断できる。

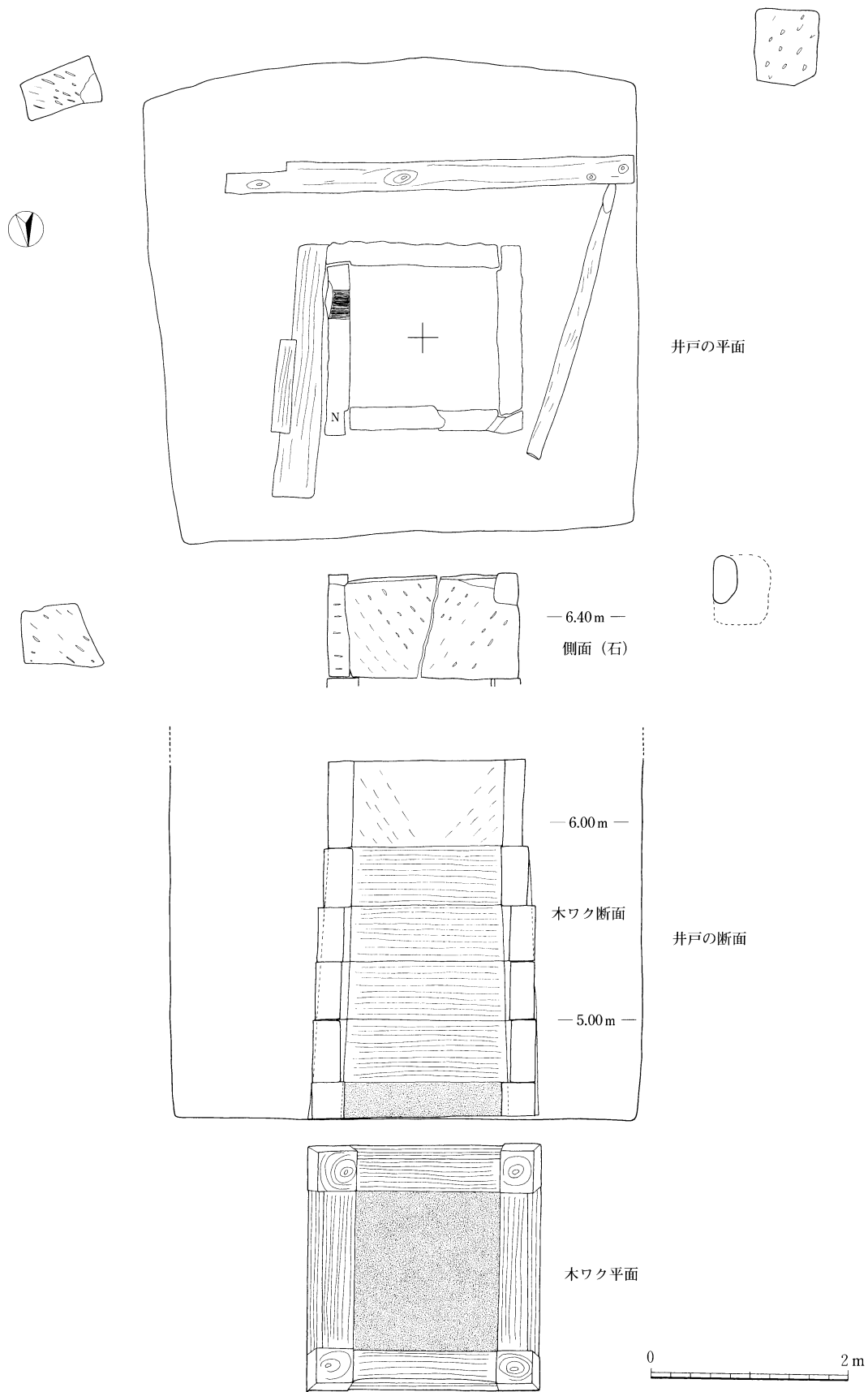
(3) 出土遺物 (第122図 936~948)

936~943・948は陶器である。

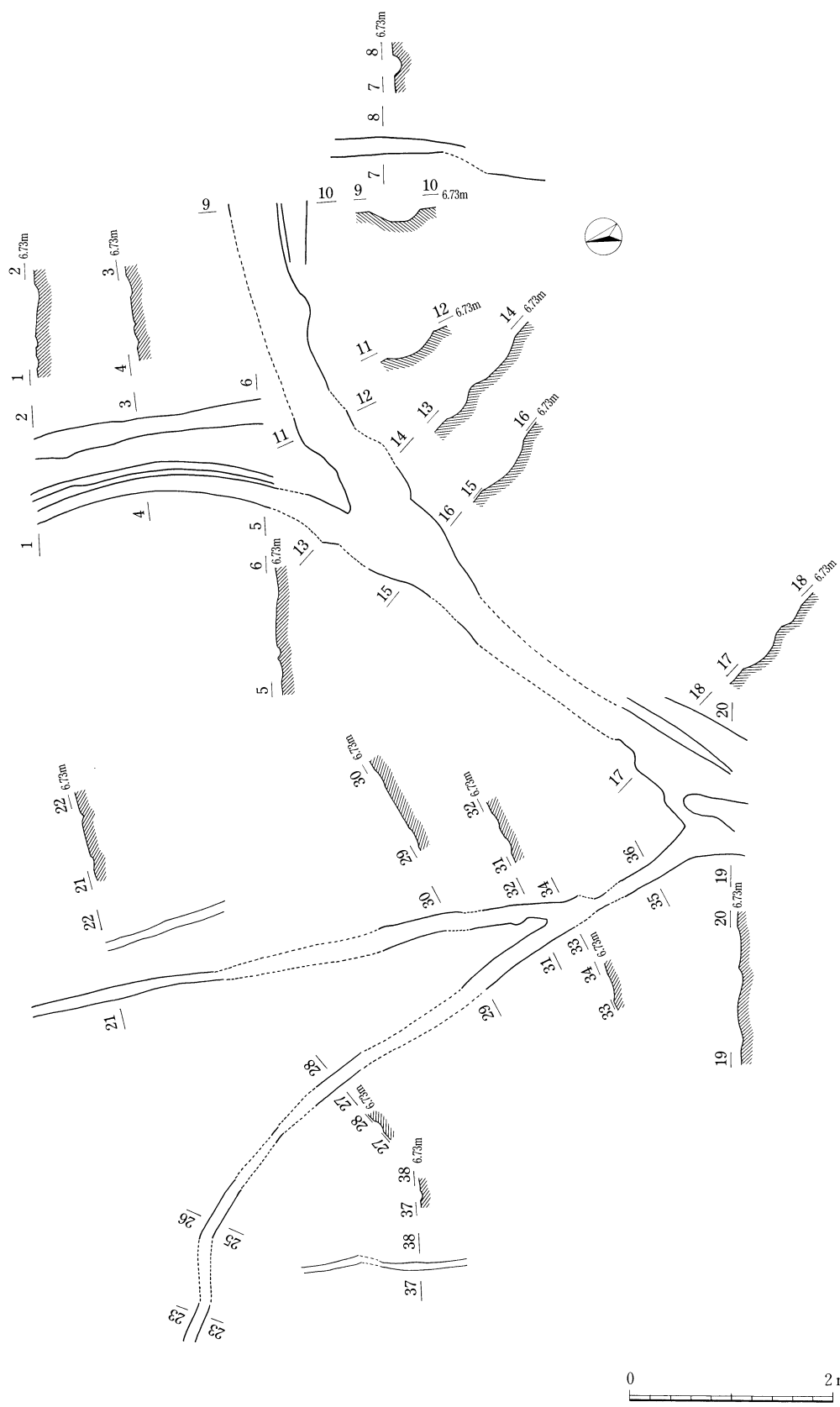
936は苗代川焼の半胴甕の口縁部で、937は底部である。938~941は琉球焼である。938は赤と黄色で庭を描いたもので、合子の蓋である。939・940・941は青と黄で描いたもので茶家・差し口・蓋である。942は薩摩焼の台付き猪口で、そば釉がかかっている。943は竜門寺焼きの皿で、茶色の鉄釉がかかっている。948は苗代川焼の山茶家の差し口である。

944~947は磁器である。

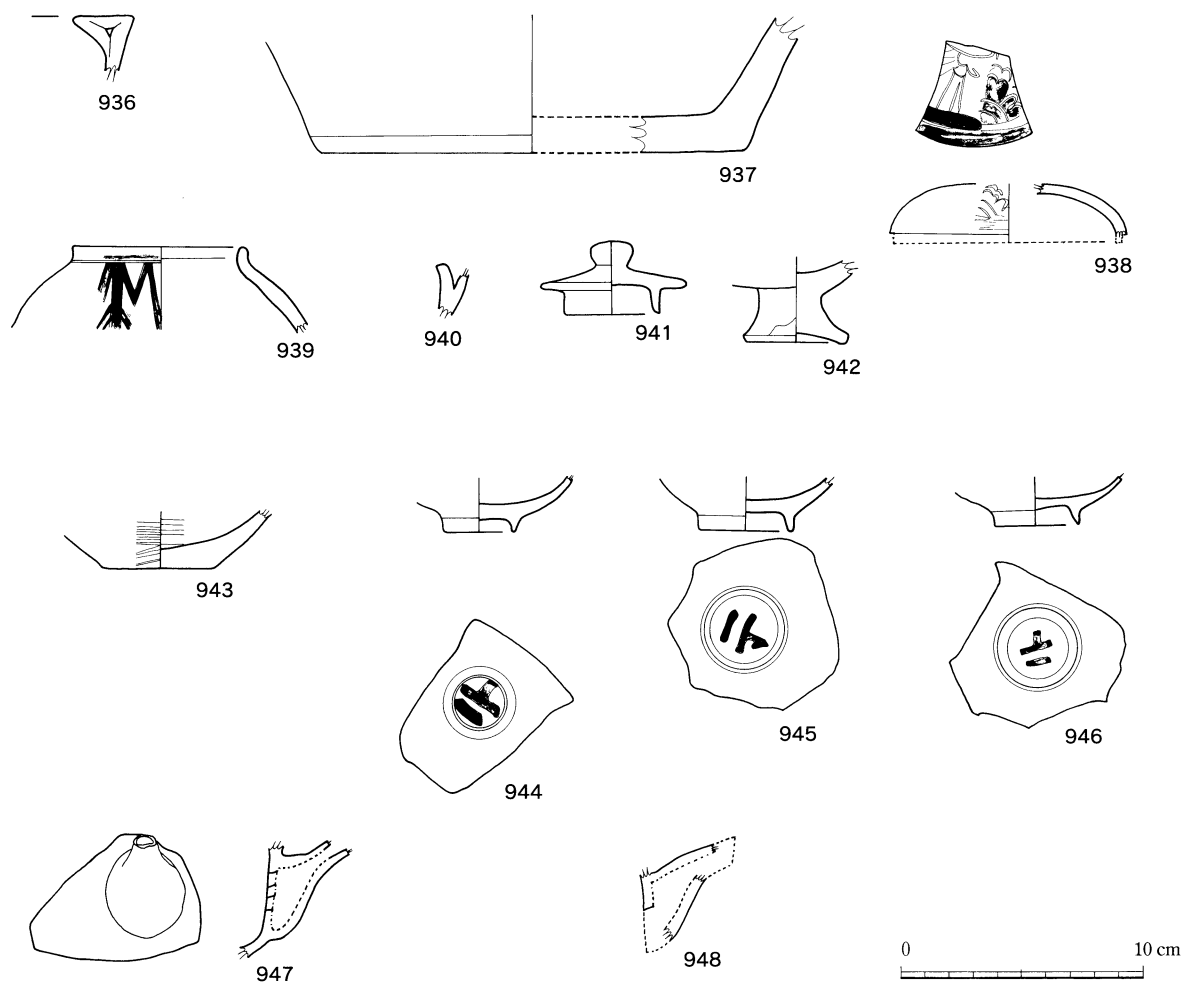
944~946は白地の湯飲み茶碗である。高台の内側に「一丁」の字を書いている。947は白地の茶家である。これらはセットの可能性が高い。



第120図 近世井戸跡



第121図 溝3 (近世水路跡)



第122図 近世の出土遺物

第IV章 まとめ

第1節 縄文・弥生時代

早期

本遺跡の第1類の前平式土器が1点出土している。低地での出土は珍しい。

前期

遺構としては、前期末の深浦祖木土器の集石が1基確認できた。他は古墳時代の遺構の中に混在していたので確認できなかった。

遺物は本遺跡の第2・3類で轟系式の遺物が少量出土し、第4類の深浦式土器が多量に出土している。大根占町の轟木ヶ迫遺跡などでみられる。

中期

第5類の船元式土器、第6類の春日式土器、第7類の北手牧式土器、第8類の大平式土器、第9類の並木式土器、第10類の阿高式土器、第11類の南福寺式土器、第12～14類は第9～11類のバリエーション等が出土している。船元式土器は鹿屋市の榎木屋遺跡で移入土器がみられる。

晩期

第15類の刻目突帯文土器の時期がみられる。

以上のように本遺跡の縄文時代では、深浦式から南福寺までが主に出土している。この文化の流れの途中に瀬戸内地方の船元式土器の移入土器がみられ、春日式のキャリッパー器形が生まれたことを意味している遺跡と言えよう。

なお、縄文早期の前平式土器の出土は、甲突川でのシラス台地の崩壊やそれに伴う河川での流れ込みが考えられる。

弥生時代

弥生時代は、中期末～後期初頭の山之口式土器がみられ、後期は三津永田式土器が出土している。これらは摩耗された土器も含まれており、また少量であることから散布地的な遺跡と言える。

また、免田式土器の長頸壺が包含層から出土している。この土器は、古墳時代の溝にも3点みられ、遺物の量や、共伴する土器から判断して古墳時代の土器に位置づけられる可能性が高い。

第2節 古墳時代

本遺跡の中心的存在である。

遺構は竪穴住居跡23基、大型土坑11基、土坑37基が検出した。この遺構群は南東と北西の線で幅約30mのベルト状に検出している。その間に溝4がみられる。

1 遺構

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は方形に方形の張り出しがあるもの、円形に方形の張り出しがあるもの、大型円形、小型円形、花卉状に張り出しがあるものに分けられる。

- | | | |
|-------------------|-------------------------------------|------|
| ① 大型で花卉状張り出しタイプ | 13・17号 | 計2基 |
| ② 大型で円形タイプ | 5・12号 | 計2基 |
| ③ 中型で方形に方形張り出しタイプ | 1・2・3・4・6・7・8・11・14・16・19・20・21・23号 | 計14基 |

- | | | |
|-----------------|--------|---------------|
| ④ 中型で方形に円形張出タイプ | 15・18号 | 計2基 |
| ⑤ 中型で円形に方形張出タイプ | 9・10号 | 計2基 |
| ⑥ 小型で円形タイプ | 22号 | 計1基 (大型土坑の範疇) |

竪穴住居跡形態は、方形に方形張り出しが付くものが14基と一番多い。また、規模は4m前後が一番多い。規模が似たような方形に円形張出と円形に方形張出のタイプを含めると18基になる。

他の形態では、7～10mで規模が大きい大型円形タイプと花卉状張出タイプが各2基ずつある。小型円形タイプは1基あるが、大型土坑の円形タイプと同じ性格であろう。

このように本遺跡では、大型タイプと中型タイプと小型タイプに分けられる。

大型竪穴住居跡

竪穴住居跡の形態は、南九州の弥生時代では鹿屋市王子遺跡にみられるような張りだしがあるものが見られる。また、これは隼人町の小田遺跡、始良町の保養院遺跡では古墳時代にみられる。

この傾向から判断すると大型の④タイプの13・17号が先行し、⑤タイプの5・12号がその後続くと思われる。

中型竪穴住居跡

③④⑤タイプでは第6号と第7号竪穴住居跡が重なり、第3と4号、第9と10号が隣接している。これらで判断すると張り出し部の簡素化、同型が大型から小型へ移ると考えられる。また、A遺跡では第2号竪穴住居跡に張り出しが四方にみられ、第1号竪穴住居跡では方形で簡素化されている。

小型竪穴住居跡

第22号竪穴住居跡の竪穴部の計測は最大2.7mである。これは、周囲のピットを含めると3.5mの規模になる。

そして、竪穴部の床面に段がある。住居跡とした根拠は周囲にピットが廻ることであった。建物の構造では大型土坑とした小屋的建物の範疇に入ると思われる。

(2) 大型土坑

大型土坑は2～3mの土坑で、遺物の出土量が多いのが特徴である。性格は小屋的建物の可能性が高い。半円形と円形と方形がある。

- | | | |
|----------|-----------|-----|
| ① 半円形タイプ | 3・5・10 | 計3基 |
| ② 円形タイプ | 7・9・11・12 | 計4基 |
| ③ 方形タイプ | 1・2・4・8 | 計4基 |

この大型土坑の新旧の傾向は次のことが言える。まず、第13号竪穴住居跡を大型土坑11が切っている。次に第5号竪穴住居跡と大型土坑3が隣接している。そして、溝4の上に大型土坑1が重なっている。

よって、①の変則タイプから③の規則タイプの変化の傾向がみられる。

(3) 土坑

これらは長楕円、円形、隅丸方形がみられる。

- | | | |
|--------|---|------|
| ① 長楕円 | 7・8・11・14・15・16・17・19・21 | 計9基 |
| ② 円形 | 2・3・4・5・9・10・13・18・24 | 計9基 |
| ③ 隅丸方形 | 1・6・12・20・22・23・26・27・29・30・
31・33・34・35・36・37 | 計16基 |

(4) ピット群

A3・4区に集中して検出している。建物の復元はできない。

遺構総括

以上、これらを総合すると、大型の竪穴住居跡と中型の竪穴住居跡と大型土坑がセットになり、これらの遺構は2時期が考えられる。

2 出土遺物

出土遺物の比較は第13号竪穴住居跡と大型土坑11を基本に新旧関係を判断した。

(1) 甕形土器

この土器類はまず第2号竪穴住居跡と第13号竪穴住居跡と溝4のグループが考えられる。

器形が大きく外反するもので、三角断面突帯があるタイプ(570~573)、刻み目突帯があるタイプ(207, 575~578)、無突帯のタイプ(333, 579~596)が上げられる。

次に大型土坑11の368・370・371・373のタイプで肩部と頸部が段になり稜線がみられる器形である。溝4でも615~628がこれにあたる。突帯のあるものは362でみるように口縁部は内湾気味になっている。この362は、成川式土器の笹貫タイプに移行する器形と考えられる。しかしながら、大型土坑11には364・365・367等前の器形のものもあり、器形の変化は序々に進んだことが考えられる。

(2) 壺形土器

壺形土器は第13号竪穴住居跡内に出土した複数突帯である345と溝4の刻み目の653・656・670・672及び681・682・683・684と単数突帯である674・675と大型壺の679・680が上げられる。そして、661でみられるように無突帯もある。笹貫タイプの壺は大型になり、突帯が肩部にあるため、大型壺の679・680が移行期で新しいと考えられる。

また、胴部が球形で土師器の器形に類する387や、内面ヘラケズリがみられる767が特徴をもっている。

(3) 高坏

高坏は、大型と小型が出土している。大型は694~699のタイプと700・701のタイプが出土している。粘土は粗めの粘土が多いが、細砂粘土を含めているものもある。脚は筒状とラッパ状が円孔透かしとともにみられる。小型は第15号竪穴住居跡の413や第18号竪穴住居跡の482と溝4の702・713が出土している。700・701は小型のタイプと類似している。

小型は250・319・482・717で細砂粘土を使用しているため、白色が強く、器面は丁寧に仕上げられている。出土は遺構内のほか、包含層にもみられる。

特殊壺

長頸壺、無頸壺、罎が出土している。

長頸壺は、563・693・792~794・848が出土している。胴部に刻み目突帯を廻らしたものである。この類で型式が付いている免田式土器は693・794・848である。ともに包含層より出土している。また、693は溝4から出土している。この土器は、器形が深みのあるもので、文様を直線で施している。これらの長頸壺の口縁部は563の土器が考えられる。この時期の長頸壺は指宿市の横瀬遺跡でみられる。

無頸壺は、357・562・849があり罎の口縁部の立ち上がりが見られないものと考えられる。

罎の類は261・358・500・530・785・786・846・847があり大形・小形・手づくね状がみ

られる。

蓋

この類は大形(252・360・361・400・722・787・789)と中形の粗粘土(309・528)及び細砂粘土(495・721)と小形の粗粘土(720・791)と細砂粘土(287・529・790)がある。これらは、今まで鉢や甕に比定されていたが、器面調整の施しと使用面を考察した結果、蓋として分けた。

ふいごの羽口

溝4より出土した729がこれにあたる。面はへうで面取しながら作っている。時期は検出状況からみて古墳時代と思われる。

時期の設定

遺構では2時期の集落がとらえられ、土器の型式は全体で把握すると指宿市の成川遺跡から出土した成川式土器になる。その成川式土器は、吹上町の辻堂原遺跡や、指宿市の宮ノ前遺跡でみられるように時期幅が広く、中津野タイプ、東原タイプ、笹貫タイプに分けられている。

本遺跡の成川式土器は、東原遺跡の竪穴住居跡に出土したセット関係が近く、東原タイプの時期に比定されよう。

第3節 平安時代と近世

平安時代

9世紀中頃から10世紀中頃の遺跡である。土師器は直線で立ち上がる9世紀(887・888)ものと湾曲して立ちあがる10世紀(902・903・904)等がみられる。

墨書は「八田」らしくは読めるが他は確証がない。

近世

明治以降で、鹿児島師範学校関係の井戸と水田の溝が検出し、遺物も薩摩焼き、琉球焼き、近世の磁器が出土している。「一丁」の文字もみられる。

参考文献

- 「榎木原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24)1983・3 鹿児島県教育委員会
彌榮 久志・前迫 亮一
- 「東原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(8)1984・3 鹿児島県教育委員会
諏訪 昭千代・彌榮 久志・中村 耕治
- 「成川遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24)1983・3 鹿児島県教育委員会
彌榮 久志・繁昌 正幸
- 「轟木ヶ迫遺跡」大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)1988・3 大根占町教育委員会
東 和幸
- 「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)1985・3 隼人町教育委員会
立神 次郎・峯崎 幸二
- 「横瀬遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)1982・3 指宿市教育委員会
彌榮 久志・吉永 正文
- 「辻堂原遺跡」吹上中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1977・3 吹上町教育委員会
池畑 耕一・彌榮 久志
- 「宮ノ前遺跡」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)1981・3 指宿市教育委員会
彌榮 久志・中島 哲郎
- 「保養院遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(11)1994・3
鹿児島県立埋蔵文化財センター 長野 眞一
- 「小田遺跡」隼人町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)1974・3 隼人町教育委員会
青崎 和憲

第2表 縄文時代土器一覽 (1)

番号	遺物番号	種類	型式等	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕		胎土				焼成	文様等	図版
					部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	石英	長石	角閃			
1		縄文土器	前平	深鉢	胴部		B3	住16	灰褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	×	○	×	良	貝殻刺突	19	
2	5670	"	"	"	口縁部		"	V	褐色	黄褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	×	"	三角突帯	"	
3		"	"	"	"		"	住18	黒褐色	黒褐色	"	ナデ	○	○	○	"	"	"	
4	7783	"	"	"	胴部		"	住18	にぶい褐色	にぶい褐色	"	"	○	○	×	"	突帯	"	
5	7741	"	"	"	口縁部		"	住18	にぶい褐色	にぶい褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○	"	"	"	
6	5659	"	"	"	"		"	V	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	"	"	×	○	×	三角突帯	"		
7	2879	"	"	"	"		"	Ⅲ	灰白色	黄褐色	ナデ	ナデ	×	○	×	火山ガラス	"		
8		"	"	"	"		A5	土18	にぶい褐色	赤褐色	"	"	×	○	×	隆起突帯	"		
9	3709	"	"	"	口縁部		"	Ⅲ	"	にぶい黄褐色	へら調整	へら調整	○	○	○	微隆起突帯, 貝殻相交弧文	"		
10	7019	"	"	"	胴部		"	V	灰褐色	にぶい褐色	貝殻条痕	ナデ	○	○	×	貝殻相交弧文	"		
11	6541	"	"	"	口縁部		"	V	にぶい黄褐色	"	ナデ	"	○	○	×	微隆起突帯 (細い沈線)	"		
12	4615	"	"	"	"		"	Ⅲ	"	黒褐色	貝殻条痕	ナデ	○	○	×	微隆起線文	"		
13	6335	"	"	"	"		"	V	"	にぶい黄褐色	ナデ	"	○	○	×	微隆起突帯 (細い沈線)	19		
14	6487	"	"	"	"		"	V	にぶい黄褐色	暗褐色	"	"	×	○	×	火山ガラス(白)	"		
15	6418	"	"	"	"		B5	V	にぶい黄褐色	黒褐色	"	"	×	○	×	火山ガラス(白黒)	"		
16	1562	"	"	"	"		A5	Ⅲ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	研磨ナデ	"	×	○	×	"	"		
17	846	"	"	"	"		"	Ⅲ	褐色	黒褐色	ナデ	"	×	○	×	"	"		
18	6527	"	"	"	"		"	V	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	"	"	×	○	×	火山ガラス	"		
19	1797	"	"	"	"		"	Ⅲ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	貝殻条痕	ナデ	×	○	×	"	"		
20		"	"	"	"		A4	V	にぶい黄褐色	黒	"	"	×	○	×	"	"		
21		"	"	"	"		A4	大土6	"	にぶい褐色	ヨコナデ	"	×	○	×	微隆起突帯	"		
22	2024	"	"	"	胴部		A5	Ⅲ	にぶい褐色	灰褐色	貝殻条痕	"	○	○	○	微隆起突帯 (細い沈線)	"		
23	7014	"	"	"	"		"	V	にぶい黄褐色	黒褐色	ナデ	"	○	○	○	"	"		
24	958	"	"	"	"		"	Ⅲ	黒褐色	"	"	"	×	○	×	"	"		
25	5832	"	"	"	"		"	V	"	にぶい褐色	"	"	×	○	×	"	"		
26	6435	"	"	"	"		B5	V	にぶい黄褐色	灰褐色	貝殻条痕	ナデ	×	○	×	"	"		
27		"	"	"	口縁-胴部		B3	Ⅲ	暗灰黄色	褐灰色	"	縄文	○	○	○	縄文	24		
28	8019	"	"	"	口縁部		A3	大土8	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	"	"	○	○	×	突帯二条	"		
29	5058	"	"	"	"		"	V	にぶい褐色	明褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	×	刺突押引文	20		
30	5446	"	"	"	"		"	V	明褐色	褐色	"	"	×	○	×	刻み目突帯刺突文, 波状突帯	"		
31	3915	"	"	"	"		A4	Ⅳ	にぶい褐色	にぶい褐色	"	"	×	○	×	刺突押引文, 沈線	"		
32	7983	"	"	"	"		B3	大土9	"	"	"	"	×	○	×	"	"		
33		"	"	"	"		A3	住12	にぶい褐色	褐色	"	"	×	○	×	刺突連続文	"		
34	7176	"	"	"	"		A4	V	にぶい褐色	黒褐色	"	"	×	○	×	刺突押引文, 刻み目文	"		
35	7236	"	"	"	"		"	V	褐灰色	にぶい褐色	"	"	×	○	×	口唇部刻み目	"		
36	7814	"	"	"	"		B3	住18	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	"	"	×	○	×	沈線文, 口唇部刻み目	"		
37	5750	"	"	"	"		"	V	褐色	褐色	"	"	×	○	×	沈線文(小), 口唇部沈線刻み目	20		
38	5417	"	"	"	"		A3	V	オリーブ褐色	オリーブ褐色	"	"	×	○	×	突帯 (中筋)	"		
39		"	"	"	"		B3	住17	黒褐色	にぶい赤褐色	"	"	×	○	×	"	"		

第2表 縄文時代土器一覽(2)

番号	遺物番号	種類	型式等	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土				焼成	文様等	図版
					部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	石英	長石	角閃	雲母	その他			
40		縄文土器	春日	深鉢	口縁部		B3	住17	黒褐色	褐色	ナデ	ナデ	ナデ	黒褐色	×	○	○	×	良	突帯(貝殻刺突文)	20
41	5134	"	"	"	"	"	A3	V	にぶい褐色	にぶい褐色	"	"	"	明褐色	×	○	○	×	"	突帯(貝殻刺突文),口唇部刻み目	"
42	4178	"	"	"	"	"	B3	IV	棕色	黒褐色	"	"	"	棕色	○	○	○	×	"	突帯(貝殻刺突文)	"
43		"	"	"	"	"	B4	土25	明赤褐色	にぶい赤褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい褐色	○	○	○	×	"	刻み目突帯	"
44	7168	"	"	"	"	"	A4	V	にぶい褐色	明褐色	"	"	"	"	×	○	○	×	"	"	"
45	907	"	"	"	"	"	A5	III	褐色	黄褐色	"	"	"	褐色	×	○	○	×	"	"	"
46	3437	"	"	"	"	"	A3	III	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	"	"	"	褐色	×	○	○	×	"	"	"
47	7167	"	"	"	"	"	A4	V	褐色	明赤褐色	"	"	"	にぶい黄褐色	○	◎	×	×	"	"	20
48	3883	"	"	"	"	"	"	IV	明赤褐色	"	"	"	"	明赤褐色	×	○	○	×	"	"	"
49	5110	"	"	"	"	"	A3	V	黄褐色	黄褐色	"	"	"	黄褐色	×	○	○	×	"	刻み目突帯(刺突押引文)	20
50	3210	"	"	"	"	"	A4	III	黒褐色	灰黄褐色	"	"	"	灰黄褐色	○	○	○	×	"	刻み目突帯	"
51	7220	"	"	"	"	"	"	V	にぶい黄褐色	にぶい橙色	"	"	"	オリーブ黒色	○	○	○	×	"	刻み目突帯,口唇部刻み目	"
52	5595	"	"	"	"	"	B3	V	にぶい褐色	にぶい褐色	"	"	"	にぶい褐色	○	×	×	×	"	"	"
53	510	"	"	"	"	"	A3	V	明黄褐色	明黄褐色	"	"	"	黒	○	○	○	×	"	二又刻み目突帯,口唇部二又刻み目	"
54		"	"	"	"	"	"	住15	暗褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○	○	×	"	突帯,刺突連続文	"
55	5060	"	"	"	"	"	"	V	にぶい黄褐色	明黄褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕	黄褐色	×	○	○	×	"	沈線文	"
56	5713	"	北手收	"	"	"	B3	V	にぶい黄褐色	明褐色	ナデ	ナデ	ナデ	明褐色	×	○	○	×	"	"	"
57	6254	"	大平	"	"	"	"	V	褐色	黒褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕	褐色	◎	○	○	×	"	沈線文,刺突文(突帯)	21
58	6691	"	"	"	"	"	"	"	暗黄褐色	"	"	"	"	黄褐色	◎	○	○	×	"	"	"
59	7343	"	"	"	"	"	"	V	にぶい褐色	にぶい褐色	"	"	"	にぶい褐色	○	○	○	×	"	沈線文(細い)	21
60	5738	"	"	"	"	"	"	V	黄褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	ナデ	灰褐色	○	○	○	×	"	3本平行沈線,肥厚口縁	"
61	7354	"	"	"	"	"	"	V	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	"	"	"	黒褐色	×	○	○	×	"	沈線文	"
62	7355	"	"	"	"	"	"	"	にぶい褐色	にぶい褐色	"	"	"	"	×	○	○	×	"	"	"
63	5115	"	"	"	"	"	A3	住12	にぶい褐色	にぶい褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕	"	×	○	○	×	"	2本平行沈線(小)文	"
64	6785	"	"	"	"	"	A4	V	黄褐色	黄褐色	"	"	"	黄褐色	×	○	○	×	"	二又刺突押引文,沈線文	"
65	5732	"	"	"	"	"	B3	V	にぶい赤褐色	明褐色	"	"	"	黒褐色	×	○	○	×	"	二又押引文,突帯	"
66	7642	"	"	"	"	"	"	V	灰褐色	棕色	"	"	"	褐色	×	○	○	×	"	沈線(小)文,刺突文	"
67	5533	"	"	"	"	"	"	V	灰黄褐色	にぶい黄褐色	"	"	"	にぶい黄褐色	×	○	○	×	"	沈線文,刺突突帯	"
68	4157	"	"	"	"	"	"	V	にぶい褐色	褐色	"	"	"	"	×	○	○	×	"	刺突突帯	"
69	7834	"	"	"	"	"	"	IV	にぶい橙色	"	"	"	"	"	×	○	○	×	"	沈線文,刺突突帯,三角突帯	"
70	6128	"	"	"	"	"	"	V	褐色	黒褐色	"	"	"	にぶい褐色	×	○	○	×	"	凹点刻み目押引文	"
71	7357	"	"	"	"	"	"	V	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	"	"	"	黒褐色	×	○	○	×	"	突帯	"
72	6621	"	"	"	"	"	"	V	褐色	にぶい褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕	褐色	×	○	○	×	"	段有	"
73	5748	"	"	"	"	"	"	V	灰黄褐色	黄褐色	"	"	"	黄褐色	×	○	○	×	"	微隆起突帯,沈線(細)	"
74	6653	"	"	"	"	"	"	V	黒褐色	暗褐色	"	"	"	黒褐色	◎	○	○	×	"	"	"
75	5508	"	"	"	"	"	"	V	黄褐色	黄褐色	"	"	"	黄褐色	○	○	○	×	"	"	"
76	7452	"	並木	"	"	"	"	V	にぶい赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	×	○	○	×	"	凹線文,二又刺突押引文	22
77		"	"	"	"	"	"	V	暗褐色	黒褐色	"	"	"	黒褐色	×	○	○	×	"	凹線文,二又刺突連続文	"
78	5465	"	"	"	"	"	"	住16	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	"	"	"	にぶい赤褐色	×	○	○	×	"	"	"
79	3355	"	"	"	"	"	A3	III	褐色	灰褐色	"	"	"	褐色	○	○	○	×	"	二又刺突連続文	"
		"	"	"	"	"	"	"	暗褐色	暗褐色	"	"	"	暗褐色	○	○	○	×	"	二又刺突連続押引文	"

第2表 縄文時代土器一覽 (4)

番号	遺物番号	種類	型式等	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土					焼成	文様等	図版				
					部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	石英	長石	角閃	雲母	その他								
121	5135	縄文土器	前期	深鉢	底部	口径 8.8	A3	V	暗褐色	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ研磨	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	丸底	24
122	7191	"	中期	"	"	底径 8.8	A4	V	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	上げ底	"
123	5015	"	"	"	"	"	A3	V	褐色	褐色	褐色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	網代圧痕	"	
124	5735	"	"	"	"	"	B3	V	にぶい褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	木葉痕	24	
125	6251	"	"	"	"	"	V	V	褐色	明赤褐色	明赤褐色	貝殻条痕	貝殻条痕	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	貝殻条痕, 木葉痕	"
126	2342	"	"	"	"	"	III	V	暗褐色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
127	5515	"	"	"	"	"	V	V	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
128	5056	"	"	"	"	"	A3	V	浅黄色	褐色	褐色	ナデ	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
129	8605	"	"	"	"	"	V	V	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
130	5742	"	"	"	"	"	B3	V	黒褐色	赤褐色	赤褐色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	網代圧痕	24
131	4397	"	"	"	"	"	A3	IV	褐色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	上げ底	"
132	"	"	"	"	"	"	A2	シヨコ	にぶい黄褐色	黒褐色	黒褐色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
133	"	"	"	"	"	"	"	シヨコ	"	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
134	6364	"	"	"	"	"	B3	V	黄褐色	黄褐色	黄褐色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
135	5735	"	"	"	"	"	V	V	にぶい褐色	"	"	貝殻条痕	貝殻条痕	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	網代圧痕	"
136	7950	"	"	"	"	"	住23	V	明赤褐色	褐色	褐色	ナデ	ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	若干上げ底	24

第3表 弥生時代土器一覽

番号	遺物番号	種類	型式等	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土					焼成	文様等	図版				
					部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	石英	長石	角閃	雲母	その他								
172	1271	弥生土器	中期	甕	口縁部	口径 26.8	A10	III	にぶい黄褐色	灰白色	灰白色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三条突帯, L字口縁	28
173	1276	"	"	"	"	"	B3	III	明褐色	暗褐色	暗褐色	ヨコナメ目	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	L字突帯	"
174	7909	"	"	"	"	"	A2	IIIa	灰褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	「く」字突帯	"
175	8806	"	"	"	"	"	B5	III	にぶい黄褐色	褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	突帯	"
176	239	"	"	"	"	"	B5	III	にぶい黄褐色	灰黄褐色	灰黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
177	131	"	"	"	"	"	B5	III	黒褐色	灰リブ色	灰リブ色	"	"	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"		
179	"	"	"	"	"	"	A10	III	褐色	褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
180	74	"	"	"	"	"	A5	III	赤灰色	褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
181	1335	"	"	"	"	"	A10	III	にぶい黄褐色	明褐色	明褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	上げ底	28
182	1280	"	"	"	"	"	A10	III	褐色	褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
183	8347	"	"	"	"	"	B1-2	IIIb	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
184	"	"	"	"	"	"	A2	ミゾ4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
185	15	"	"	"	"	"	"	ミゾ4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
186	"	"	"	"	"	"	"	P44	灰黄褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
187	5981	"	"	"	"	"	B3	IV	灰褐色	黄褐色	黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	突帯	"
188	7929	"	"	"	"	"	"	住23	赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	M字突帯	"
189	2	"	"	"	"	"	ミゾ4	明赤褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三角突帯, 三条突帯	"
190	"	"	"	"	"	"	住2	褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
191	7051	"	"	"	"	"	B5	ミゾ	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	指テ	指テ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	上げ底	"
192	"	"	"	"	"	"	A1	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
193	7542	"	"	"	"	"	A5	褐色	黄褐色	黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"	
194	7544	"	"	"	"	"	B3	住23	明黄褐色	黄褐色	黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	"

第4表 古墳時代土器一覽(1)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕		胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量(cm)			内面	外面	内面	外面	内面	外面	色調			
199	2420	成川式土器	甕	口縁~肩部	口径	A9	住1	浅黄橙色	褐灰色	ココナツ目	ココナツ目	ココナツ目	灰色	良	蒲鉾状突帯	30	
200	2410	"	"	口縁部		"	"	黄褐色	黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	ココナツ目	黄褐色	"	"	"	
201		"	"	"		"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	"	"	"	にぶい黄褐色	"	"	"	
202	2420	"	"	肩部		"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	浅黄褐色	"	刻み目突帯	"	
203	2418	"	"	底部		"	"	黒褐色	にぶい黄褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	灰色	"	"	"	
204	2420	"	"	肩部		"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	浅黄褐色	"	絡状突帯	"	
205	2407	"	壺	頸部		"	"	橙色	褐色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	褐色	"	"	"	
206	2417	"	高坏	口縁部	口径	"	"	"	橙色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	褐色	"	"	"	
207	2421	"	甕	口縁~肩部	"	A6	住2	明褐色	にぶい黄褐色	"	"	"	灰色	"	刻み目突帯	42	
208		"	"	頸部		"	"	橙色	明赤褐色	ココナツ目	ココナツ目	ココナツ目	赤褐色	"	"	"	
209		"	"	胴部		"	"	赤褐色	黒色	"	"	"	褐色	"	"	"	
210		"	"	頸部		"	"	浅黄褐色	黄褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	灰褐色	"	"	"	
211		"	"	口縁部	口径	A7	"	にぶい淡黄色	淡黄色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	淡黄色	"	"	"	
212		"	"	"	"	A6	"	浅黄褐色	浅黄褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	浅黄褐色	"	三角突帯	31	
213	2421	"	"	"	"	"	"	"	褐色	ココナツ目	好ナツ目	好ナツ目	"	"	"	"	
214		"	"	"	"	"	"	にぶい黄褐色	灰褐色	"	好ナツ目	好ナツ目	赤灰色	"	"	"	
215		"	"	"	"	"	"	灰褐色	黒褐色	ココナツ目	ココナツ目	ココナツ目	浅黄褐色	"	"	"	
216		"	"	底部		"	"	褐色	黄褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	黄褐色	"	"	"	
217	2421	"	"	"		"	"	黒褐色	褐色	ココナツ目	ココナツ目	ココナツ目	褐色	"	"	"	
218	2453	"	"	"		"	"	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	赤黒色	"	"	"	
219	2451	"	"	"		"	"	黒色	赤褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	灰色	"	"	"	
220	2428	"	"	"		"	"	"	褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	褐色	"	"	"	
221	2461	"	"	"	底径	"	"	にぶい橙色	浅黄色	ココナツ目	ココナツ目	ココナツ目	にぶい黄褐色	"	"	"	
222	2421	"	壺	胴部		"	"	にぶい褐色	褐色	ココナツ目	指押し	好ナツ目	褐灰色	"	刻み目突帯	"	
223		須恵器	甕	"		"	"	灰黄色	黄灰色	青海波	格子目文	好ナツ目	黄灰色	"	"	"	
224		成川式土器	"	口縁部		"	土2	褐色	暗褐色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	黒褐色	"	"	"	
225		"	"	"		"	土4	灰黄褐色	暗灰黄色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	にぶい黄褐色	"	"	"	
226		"	鉢	"	口径	"	"	にぶい赤褐色	黒褐色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	にぶい橙色	"	"	"	
227		"	甕	脚部	脚径	"	"	赤褐色	黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	褐色	"	"	"	
228		"	"	胴部		"	土5	"	暗褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	"	"	"	"	
229		"	"	"		"	"	黄褐色	褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	黄褐色	"	"	"	
230		"	"	"		"	土6	灰黄褐色	黒褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	にぶい黄褐色	"	"	"	
231		"	"	脚部	脚径	"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	褐色	"	"	"	
232		"	鉢	口縁部	口径	"	"	にぶい褐色	にぶい赤褐色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	にぶい赤褐色	"	"	"	
233		"	甕	"		"	土8	明褐色	黒褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	にぶい褐色	"	"	"	
234		"	"	胴部		"	土9	灰黄褐色	赤褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	黄褐色	"	"	"	
235		"	"	"		"	"	赤褐色	暗褐色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	褐灰色	"	"	"	
236		"	"	"		"	土10	黒褐色	褐色	好ナツ目	好ナツ目	好ナツ目	褐色	"	"	"	
237		"	高坏	口縁部	口径	"	土11	褐色	にぶい褐色	ココナツ目	ココナツ目	好ナツ目	にぶい橙色	"	"	"	

第4表 古墳時代土器一覽(2)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量(cm)			内面	外面	内面	外面	内面	外面	色調			
238		成川式土器	壺	胴部		A6	土11	灰黄色	にぶい、褐色	ナナメ目	ナナメ目	ナナメ目	黒色	良	三角突帯		
239		"	高坏	口縁部		"	"	浅黄褐色	赤褐色	ナナメ目	"	"	褐色	"	"		
240		"	"	坏部		"	"	にぶい、赤褐色	褐色	"	"	"	赤褐色	"	"		
241	1015	"	甕	口縁~肩部	口径	A9	III	灰黄褐色	にぶい、黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
242	2372	"	"	"	"	B9	IV	"	黒褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰色	"	"		
243	1281	"	"	口縁~胴部	"	A10	III	にぶい、褐色	浅黄褐色	ナメ目、指押し	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
244	2327	"	"	脚部	脚径	B9	III	にぶい、黄褐色	褐色	ナメ目、指押し	ナメ目	ナメ目	浅黄褐色	"	"		
245	2323	"	"	"	"	"	III	"	黒色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	にぶい、黄褐色	"	"		
246	2320	"	壺	口縁部	口径	"	III	灰褐色	にぶい、褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	明褐色	"	"		
247	1734	"	"	底部	底径	A6	III	にぶい、褐色	黒色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	にぶい、褐色	"	手づくね		
248	2096	"	"	"	"	"	III	黒色	にぶい、黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	にぶい、黄褐色	"	"		
249	2369	"	"	"	"	B9	III	褐色	灰褐色	ナメ目、ヘラケズリ	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
250	2094	"	高坏	脚部		A6	III	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
251	2345	"	"	"	脚径	B9	III	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目、研磨	褐色	"	"		
252	1449	"	蓋	完形	口径	A6	III	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目、研磨	灰褐色	"	円孔透し	43	
253	7575	"	甕	口縁部	"	A5	住3	灰黄褐色	黒褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	黄褐色	"	"		
254		"	壺	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	"	ナメ目	ナメ目	ナメ目	にぶい、黄褐色	"	"		
255	7553	"	高坏	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰黄褐色	"	"		
256	7591	"	甕	"	"	"	住4	暗赤灰色	にぶい、赤褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	赤褐色	"	"		
257		"	"	"	"	"	"	褐色	暗褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
258		"	"	"	"	"	"	黄褐色	"	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
259		"	"	"	"	"	"	黒褐色	明赤褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
260		"	"	頸部	"	"	"	暗褐色	暗褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	暗褐色	"	"		
261		"	壺	胴部	"	"	"	褐色	にぶい、黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰黄褐色	"	"		
262	5852	"	甕	口縁部	口径	"	大土2	にぶい、黄褐色	にぶい、褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	暗褐色	"	"		
263	5867	"	"	胴部	"	"	"	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
264	5855	"	"	口縁部	"	"	"	灰黄褐色	黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	黒褐色	"	"		
265	5878	"	"	胴部	"	B5	"	にぶい、褐色	黒褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	にぶい、褐色	"	刻み目突帯		
266	5891	"	"	口縁部	"	A5	"	黒褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	黒褐色	"	"		
267	5902	"	"	胴部	"	"	"	"	"	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰色	"	"		
268	5886	"	"	脚部	脚径	"	"	にぶい、褐色	黒褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	黒褐色	"	"		
269	5841	"	壺	口縁部	口径	"	"	明赤褐色	明赤褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	明赤褐色	"	"		
270	7630	"	"	"	"	"	土18	にぶい、褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
271		"	"	"	"	"	土17	灰色	黒褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	浅黄褐色	"	"		
272	7631	"	"	胴部	"	"	土18	明赤褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	明赤褐色	"	"		
273	7633	"	壺	口縁部	"	"	"	褐色	明褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	"	"	"		
274	7069	"	甕	"	"	A3	住5	暗褐色	暗褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
275		"	"	"	"	B4	土25	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰黄褐色	"	"		
276		"	"	"	"	"	住6	"	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	明黄褐色	"	"		
277		"	"	底部	底径	"	住7	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"		
278	8272	"	"	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	"	ナメ目	ナメ目	ナメ目	黒色	"	"		

第4表 古墳時代土器一覽(3)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量(cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴				
279	8270	成川式土器	蓋	完形	口径	B4	住6	褐色	明黄褐色	ヨコナケ目, 指押し	ヨコナケ目, 研磨	褐色	褐色	良			
280		"	高坏	脚部	脚径	"	"	黒褐色	にぶい、橙色	ヨコナケ目	"	にぶい、橙色	"	"			
281		"	壺	胴部		A4	大土6	にぶい、灰黄色	黄褐色	ヨコナケ目	ハケ目、ベラケズリ	灰褐色	細砂	"	三条刻み目突帯		
282		"	甕	口縁部	口径	"	住8	灰黄褐色	黒褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	褐色	"	"		32	
283	8236	"	壺	底部	底径	"	"	黒色	褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	黒褐色	"	"		"	
284	8227	"	壺	口縁部	口径	"	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	にぶい、黄褐色	"	"		"	
285		"	"	"	"	"	"	赤褐色	黒褐色	ヨコナケ目	好ナケ目	赤褐色	"	"		"	
286		"	"	底部	底径	"	"	黒褐色	黄褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	黒褐色	"	"		"	
287		"	蓋	下部	口径	"	住9	黒褐色	灰黄褐色	ナデ	ヨコナケ目, ナデ	褐色	"	"		33	
288		"	甕	口縁部	"	"	"	赤褐色	褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目, ナデ	褐色	"	"		"	
289		"	"	"	"	"	"	褐色	にぶい、橙色	ヨコナケ目	好ナケ目	にぶい、橙色	"	"		"	
290		"	"	頸部	"	"	"	褐色	にぶい、橙色	好ナケ目	好ナケ目	褐色	"	"		"	
291		"	"	"	"	"	"	赤褐色	黒褐色	好ナケ目	好ナケ目	褐色	"	"		"	
292		"	"	胴部	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ヨコナケ目	"	褐色	"	"		"	
293		"	"	"	"	"	"	灰色	灰色	好ナケ目	好ナケ目	灰色	"	"		"	
294		"	"	肩部	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ヨコナケ目	好ナケ目	にぶい、黄褐色	"	"		"	
295	6800	"	"	底部	口径	"	"	黒褐色	にぶい、赤褐色	ヨコナケ目	好ナケ目	にぶい、赤褐色	"	"		"	
296		"	"	"	"	"	"	浅黄褐色	褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	浅黄褐色	"	"		33	
297		"	"	脚部	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	にぶい、黄褐色	"	"		"	
298		"	"	底部	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	にぶい、黄褐色	"	"		"	
299		"	"	脚部	"	"	"	黄灰色	にぶい、黄色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	灰色	"	"		"	
300		"	"	"	"	"	"	にぶい、赤褐色	にぶい、赤褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	暗赤褐色	"	"		"	
301		"	"	"	"	"	"	黒褐色	"	ヨコナケ目	ヨコナケ目	赤黒色	"	"		"	
302		"	壺	口縁部	"	"	"	にぶい、暗赤褐色	にぶい、暗赤褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	にぶい、暗赤褐色	"	"		"	
303		"	"	胴部	"	"	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	黒褐色	細砂	"		"	
304		"	"	底部	"	"	"	にぶい、褐色	和-ブ黒色	ヨコナケ目	好ナケ目, 研磨	灰色	"	"		"	
305		"	高坏	坏部	"	"	"	黒褐色	黒色	ヨコナケ目, ナデ	ヨコナケ目, ナデ	にぶい、褐色	"	"		"	
306		"	"	脚部	脚径	"	"	褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	黄褐色	"	"		"	
307		"	"	"	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ヨコナケ目	好ナケ目	にぶい、褐色	"	"		"	
308		"	"	筒部	"	"	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナケ目	好ナケ目	灰色	"	"		"	
309		"	蓋	上部	"	"	"	褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	黒色	"	"		"	
310		"	甕	頸部	"	"	住10	灰褐色	赤褐色	ヨコナケ目(研磨きみ)	好ナケ目	赤褐色	"	"		浦鉾状突帯	
311		"	"	"	"	"	"	赤褐色	黒色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	"	"	"		刻み目突帯	
312		"	"	口縁部	口径	"	大土5	明赤褐色	明褐色	ヨコナケ目, 指押し	ヨコナケ目	黄褐色	細砂	"		"	
313		"	"	胴部	"	"	土27	黒褐色	にぶい、赤褐色	ハナナデ, 研磨, 指押し	好ナケ目	明赤褐色	"	"		"	
314		"	"	"	"	"	"	明褐色	黒褐色	好ナケ目	好ナケ目	黒褐色	"	"		"	
315		"	"	"	"	"	"	明褐色	黒褐色	好ナケ目	好ナケ目	褐色	"	"		"	
316		"	高坏	口縁部	"	"	住10	黄褐色	黄褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	灰色	"	"		"	
317		"	"	脚部	"	"	"	赤褐色	にぶい、赤褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	赤褐色	"	"		"	
318	7277	"	甕	底部	脚径	"	大土5	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナケ目, 指押し	好ナケ目	赤褐色	"	"		"	
319		"	高坏	脚部	"	"	住11	灰黄色	浅黄褐色	ヨコナケ目	ヨコナケ目	灰色	細粒子粘土	"		"	

第4表 古墳時代土器一覽(4)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴				
320		成川式土器	高环	筒部		A4	住11	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい黄橙色		良		32	
321		"	甕	胴部		"	土29	にぶい橙色	浅黄褐色	"	ナメ目	灰色		"		"	
322		"	"	"		"	"	褐色	暗褐色	ヨコナメ目	ナメ目	暗褐色		"		"	
323		"	"	肩部		A3	住12	灰褐色	赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐色		"	刻み目突帯		
324		"	"	口縁部		"	"	浅黄橙色	灰褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	"		"			
325		"	高环	胴部		"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい黄褐色		"			
326	7063	"	"	环部		"	"	褐色	明赤褐色	ヨコナメ目	ナメ目	明赤褐色		"			
327		"	甕	肩部		"	住13	"	暗褐色	ナメ目	"	黒色		"	刻み目突帯	34	
328	8045	"	"	頸部		"	"	赤褐色	黒褐色	ヨコナメ目	ナメ目	赤褐色		"		"	
329	8097	"	"	"		"	"	暗褐色	褐色	"	ヨコナメ目	暗褐色		"	三角突帯	"	
330		"	"	肩部		"	"	灰褐色	黒褐色	"	ナメ目	灰黒色		"	刻み目突帯	"	
331		"	"	"		"	"	暗褐色	黒色	"	ヨコナメ目	暗褐色		"		"	
332	8042	"	"	口縁部		"	"	褐色	暗褐色	"	ヨコナメ目	黄褐色		"		"	
333	8035	"	"	口縁部	口径	"	"	暗褐色	赤褐色	ナメ目, ヌナメ	ナメ目, ヌナメ	赤褐色		"		"	
334		"	"	口縁部	口径	"	"	褐色	暗褐色	横手なで	横手なで	暗褐色		"		"	
335		"	"	"		"	"	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	暗赤褐色		"		"	
336		"	"	"		"	"	暗褐色	黒色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	暗褐色		"		"	
337		"	"	"	口径	"	"	灰褐色	"	ヨコナメ目	ナメ目	暗褐色		"		"	
338		"	"	"		"	"	黄褐色	黄褐色	手ナメ	ナメ目	黄褐色	細粒子粘土	"		"	
339	8039	"	"	底部		"	"	黒色	赤褐色	ヨコナメ目	ナメ目	赤褐色		"		"	
340		"	"	脚部	脚径	"	"	赤褐色	"	"	"	"		"		"	
341		"	"	"	"	"	"	黄褐色	黄褐色	"	"	黄褐色		"		34	
342	8035	"	"	"	"	"	"	黒色	赤褐色	"	"	褐色		"		"	
343	8075	"	壺	頸部	"	"	"	褐色	褐色	"	"	"		"		"	
344	8095	"	"	口縁部		"	"	黒褐色	褐灰色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰黄褐色		"		"	
345	8094	"	"	肩~底部	底径	"	"	にぶい黄橙色	灰黄褐色	ナメ目	ナメ目	暗褐色		"	刻み目突帯	42	
346		"	"	肩部		"	"	褐色	暗褐色	ナメ目	ナメ目	暗褐色		"		40	
347	8080	"	"	底部		"	"	"	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐色		"		"	
348	8076	"	"	"		"	"	灰褐色	赤褐色	粗い調整	粗いナメ目	暗褐色		"		"	
349		"	"	"	底径	"	"	浅黄橙色	浅黄色	ヨコナメ目	ナメ目	灰白色		"		"	
350		"	高环	口縁部		"	"	黄褐色	黄褐色	研磨ぎみ	ナメ目	灰色	細粒子粘土	"	縦筋の暗文		
351	8054	"	"	环部		"	"	"	"	ヨコナメ目	ナメ目	黄褐色		"		40	
352		"	"	"		"	"	明黄褐色	にぶい橙色	丁寧なヨコナメ目	丁寧なヨコナメ目	黒色	細砂	"		"	
353	8093	"	"	胴部	脚径	"	"	灰褐色	灰褐色	軽いナメ目	ナメ目	灰白色	細粒子粘土	"		"	
354	8043	"	"	"		"	"	黄褐色	黄褐色	ヨコナメ目	ナメ目	黄褐色		"		"	
355	8034	"	"	"		"	"	赤褐色	赤褐色	ナメ目	ナメ目	赤褐色		"		"	
356	8035	"	壺	口縁部	口径	"	"	褐色	褐色	横手ナメ	ナメ目	褐色	細砂	"	三条の丹塗り帯	40	
357	8101	"	無頸壺	胴部	"	"	"	黄褐色	黄褐色	ナメ目	ナメ目	灰白色	細砂	"		"	
358		"	埴	口縁部		"	"	赤褐色	黄褐色	丁寧なヨコナメ目	ナメ目	褐色	細砂	"		"	
359	8036	"	鉢	口縁部		"	"	赤褐色	暗褐色	粗いナメ目	ナメ目	暗褐色	二重粘土	"	手づくね	40	
360	8065	"	蓋	上部		"	"	黒褐色	赤褐色	ハケ目	ナメ目	褐色		"	縦刻(細み部)	"	

第4表 古墳時代土器一覽(5)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴					
361	8063	成川式土器	蓋	下部	口径 23.8	A3	住13	黒褐色	暗褐色	ナメ目	ナメ目	丁葦なナメ目	黒褐色		良		40	
362	7373 7374	"	甕	胴部		"	大土11	灰色	黒褐色	ココナメ	ココナメ	ココナメ目, 研磨ぎみ	黒色		"	三角突帯		
363		"	"	頸部		"	"	赤褐色	赤褐色	"	ココナメ	ココナメ目	赤褐色		"	刻み目突帯		
364	7387	"	"	口縁~胴部	口径 31.6	"	"	にぶい橙色	"	"	ナメ目	ナメ目	褐色		"			
365		"	"	完形		"	"	褐色	褐色	ナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰褐色		"			
366	7415	"	"	口縁部	口径 24.0	"	"	暗赤色	暗赤色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色		"			
367	7428	"	"	口縁~胴部	" 26.4	"	"	にぶい褐色	灰黄褐色	ココナメ目, ナメ目	ココナメ目, ナメ目	ココナメ目, ナメ目	黒褐色		"			
368	7371 7372	"	"	"	" 23.6	"	"	にぶい黄褐色	暗褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目, ナメ目	"		"			
369	7386	"	"	"	" 23.4	"	"	褐色	赤褐色	ナメ目, ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰色		"			
370	7377	"	"	"	" 20.6	"	"	橙色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰白色		"			
371	7433	"	"	"	" 21.5	"	"	赤褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目, 研磨ぎみ	灰色		"			
372		"	"	口縁部	" 16.6	"	"	褐色	灰褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目, ナメ目	褐色		"			
373	7417	"	"	"		"	"	"	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目, ナメ目	"		"			
374		"	"	胴部		"	"	明褐色	赤褐色	ナメ目, ナメ目	ナメ目	ナメ目, ナメ目	にぶい黄褐色		"			
375		"	"	底部		"	"	黒色	にぶい赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	研磨	にぶい赤褐色		"			
376	7363	"	"	"	脚径 6.0	"	"	にぶい橙色	明赤褐色	"	"	ココナメ目, ナメ目	灰色		"	手づくね		
377	7382	"	"	脚部	" 9.7	"	"	赤褐色	"	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	明赤褐色		"			
378		"	"	"	" 9.5	"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	横手ナメ目, ナメ目	にぶい褐色		"			
379		"	"	"	" 9.0	"	"	灰褐色	灰褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色		"			
380		"	"	"	" 8.6	"	"	赤褐色	赤褐色	"	"	ココナメ目	"		"			
381		"	"	"	" 8.0	"	"	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	"	"	手ナメ目	にぶい赤褐色		"			
382		"	"	底部	" 12.0	"	"	黒褐色	黒褐色	"	"	ココナメ目	黒褐色		"			
383	7383	"	"	"	" 9.0	"	"	黒色	褐色	"	"	ココナメ目	褐色		"			
384		"	"	壺	口径 21.2	"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	"	"	ココナメ目	灰黄褐色		"			
385		"	"	口縁~頸部	" 14.0	"	"	黒色	褐色	"	"	ココナメ目	褐色		"			
386		"	"	胴部		"	"	褐色	"	"	"	ココナメ目	"		"	刻み目突帯		
387	7427	"	"	完形	口径 14.2	"	"	灰黄褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ナメ目	灰色		"		43	
388	7369	"	"	胴部		"	"	にぶい浅黄褐色	黒色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	にぶい浅黄褐色		"	スス付着		
389		"	"	"		"	"	褐色	赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色		"	三角突帯	39	
390	7364	"	"	高坏	口径 33.8	"	"	"	褐色	ココナメ目, ナメ目	ココナメ目, ナメ目	ココナメ目, ナメ目	"		"			
391	7413 7416	"	"	"	" 30.2	"	"	"	黄褐色	丁葦なナメ目	ナメ目	ナメ目	黄褐色		"	スス付着		
392	2435	"	"	"		"	"	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色		"	暗文		
393		"	"	口縁部	口径 27.2	"	"	橙色	褐色	"	"	ココナメ目	褐色		"	細粒子粘土		
394	2422	"	"	"		"	"	褐色	赤褐色	"	"	ココナメ目	黒色		"	"		
395	57	"	"	筒部		"	"	黒色	褐色	"	"	ナメ目	暗褐色		"			
396	57	"	"	脚部		"	"	灰褐色	浅黄褐色	粗いココナメ目	粗いココナメ目	丁葦なナメ目	浅黄褐色		"	凹孔透し		
397	7376	"	"	筒部		"	"	黒褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ナメ目	褐色		"	"		
398	7370	"	"	脚部		"	"	灰褐色	赤褐色	粗いココナメ目	粗いココナメ目	ナメ目	灰褐色		"	"		
399		"	"	"		"	"	浅黄褐色	灰褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	浅黄褐色		"	細砂	39	

第4表 古墳時代土器一覽(6)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴					
400	7392	成川式土器	蓋	上部	口径	A3	大土口	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰褐色	良		44	
401	7414	"	甕	完形	口径	"	"	にぶい赤褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目、△ナナ	ココナメ目	にぶい赤褐色	"	ミニチュア	43	
402	7032	"	壺	底部	底径	"	住14	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目、△ナナ	ココナメ目	褐色	"	手づくね		
403	7031	"	甕	口縁部		"	"	にぶい赤褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"		32	
404	7031	"	壺	胴部		"	"	赤褐色	暗赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	暗赤褐色	"	刻み目突帯	"	
405	7027	"	高坏	筒部		"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目、△ナナ	ココナメ目	褐色	"	凹孔透し4.5スス付着		
406		"	甕	頸部	口径	"	住15	灰黄褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色	"	刻み目突帯	32	
407		"	"	口縁部		"	"	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい赤褐色	"		"	
408		"	"	"		"	"	褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"		"	
409		"	"	"	口径	"	"	黄褐色	"	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"		"	
410		"	"	口縁~肩部	口径	"	"	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒褐色	"		42	
411		"	壺	底部	底径	"	"	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"		32	
412		"	高坏	坏部		"	"	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"		"	
413		"	"	完形	口径	"	"	黒褐色	にぶい赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目、研磨	ココナメ目	にぶい赤褐色	細砂		42	
414		"	"	坏部	"	"	"	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目、研磨	ココナメ目	褐色	"		"	
415		"	"	"	"	"	"	"	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"		32	
416		"	"	脚部	脚径	"	"	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"		"	
417		"	"	"	"	"	"	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい赤褐色	"		"	
418		"	"	口縁部	口径	B3	土33	褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"		"	
419	7715	"	甕	"	口径	"	住16	黄褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"		35	
420		"	"	"	"	"	"	褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黄褐色	"		"	
421		"	"	"	口径	"	"	褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰褐色	"		"	
422	7638	"	"	"	口径	"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰黄褐色	"		"	
423		"	"	"	"	"	"	"	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色	"		"	
424		"	"	"	"	"	"	褐色	にぶい赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰色	"		"	
425		"	"	脚部	脚径	"	"	灰褐色	灰褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"		"	
426	7109	"	"	"	"	"	"	黄褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黄褐色	"		"	
427	7640	"	壺	頸部	"	"	"	"	"	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目、△ナナ研磨	ココナメ目	"	"		"	
428	7713	"	"	胴部	"	"	"	褐色	黒色	△ナナ	△ナナ	△ナナ	△ナナ	灰褐色	"	刻み目突帯	"	
429	7644	"	高坏	坏部	"	"	"	黄褐色	灰褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"		"	
430		"	"	"	"	"	"	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒色	"		"	
431	7732	"	"	脚部	脚径	"	"	黄褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒色	細粒子粘土		"	
432	7697	"	"	"	口径	"	"	褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黄褐色	"		"	
433		"	甕	口縁~胴部	口径	"	住17	灰黄褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰色	"		36	
434		"	"	口縁部	"	"	"	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"		"	
435		"	"	"	"	"	"	"	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"		"	
436		"	"	"	"	"	"	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"		36	
437		"	壺	底部	底径	"	"	明赤褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"		"	
438		"	"	"	"	"	"	褐色	暗赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目、△ナナ	ココナメ目	灰色	"		36	
439		"	"	"	底径	"	"	暗褐色	暗褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	暗褐色	"		"	
440		"	高坏	口縁部	"	"	"	灰褐色	灰褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰色	"		"	

第4表 古墳時代土器一覽 (7)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整表			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴				
441		成川式土器	高坏	坏部	B3	住17	にぶい、橙色	にぶい、橙色	好ナナ目	好ナナ目	明黄褐色	良	内面に丹塗の有り	36			
442		"	"	"	"	"	浅黄褐色	浅黄褐色	好ナナ目	好ナナ目	黒色	"	"	"			
443		"	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	"	"	灰色	"	"	"			
444		"	"	"	"	"	褐色	褐色	好ヨコナ目	好ヨコナ目	黒色	"	"	"			
445		"	蓋	上部	"	"	黄褐色	黄褐色	好ナナ目	好ナナ目	黒褐色	"	"	"			
446		"	鉢	底部	"	"	明褐色	明褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	明褐色	"	手づくね	"			
447		"	"	"	"	"	赤褐色	赤褐色	好ナナ目	好ナナ目	赤褐色	"	"	"			
448		"	甕	口縁部	"	大土7	灰黄色	にぶい、橙色	ヨコナ目	ヨコナ目	にぶい、橙色	"	刻み目突帯	37			
449		"	"	"	"	"	にぶい、橙色	にぶい、橙色	ヨコナナ目	ナナ目	"	"	"	"			
450		"	壺	胴部	"	"	明褐色	明褐色	ヨコナナ目	ヨコナナ目	褐色	"	刻み目突帯	"			
451		"	"	底部	B3	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナナ目	ヨコナナ目	にぶい、黄褐色	"	手づくね	"			
452		"	甕	口縁部	A3	大土8・9	褐色	暗褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	暗褐色	"	"	"			
453	7964	"	"	"	B3	大土10	黄褐色	黄褐色	"	"	灰褐色	"	"	40			
454		"	"	"	A3	大土8・9	にぶい、橙色	灰黄褐色	ヨコナナ目	ヨコナナ目	灰色	"	"	"			
455	8024	"	"	"	"	大土8	褐色	黒褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	褐色	"	"	"			
456	7992	"	"	"	"	大土9	黒褐色	黄褐色	"	"	黒褐色	"	"	"			
457		"	"	"	"	大土8・9	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ヨコナナ目	ヨコナナ目	浅黄色	"	"	"			
458	8008	"	"	"	"	大土8	"	にぶい、褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	にぶい、黄褐色	"	"	"			
459	7966	"	"	頸部	B3	大土10	褐色	にぶい、黄褐色	"	好ナナ目	にぶい、黄褐色	"	"	"			
460		"	"	底部	"	大土9	にぶい、黄褐色	灰黄褐色	好ナナ目	好ナナ目	にぶい、黄褐色	"	"	"			
461	7995	"	"	脚部	"	"	にぶい、褐色	褐色	ヨコナナ目、研磨	ヨコナナ目、研磨	にぶい、褐色	"	突帯	"			
462	7973	"	壺	肩部	"	大土10	浅黄褐色	浅黄褐色	ナナ目	ナナ目	浅黄褐色	"	刻み目突帯	"			
463	7967	"	"	"	"	"	褐色	褐色	好ナナ目	好ナナ目	褐色	"	"	"			
464	7959	"	"	"	"	大土9	にぶい、赤褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	にぶい、赤褐色	"	"	"			
465		"	"	胴部	"	大土8	褐色	褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	褐色	"	"	"			
466		"	高坏	坏部	A3	大土8	褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	褐灰色	"	"	"			
467	8021	"	"	脚部	"	大土8・9	黄褐色	褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	灰褐色	"	"	"			
468		"	"	"	"	大土10	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	にぶい、黄褐色	細砂	"	"			
469	7963	"	"	"	B3	大土10	にぶい、赤褐色	赤褐色	好ナナ目	好ナナ目	赤褐色	"	"	"			
470	7752	"	甕	口縁部	"	住18	灰褐色	黒色	ヨコナ目	ヨコナ目	黒色	"	刻み目突帯	37			
471	7791	"	"	頸部	"	"	褐色	暗褐色	好ナナ目	好ナナ目	赤褐色	"	突帯	"			
472	7803	"	"	口縁部	"	"	にぶい、褐色	黒色	"	"	褐灰色	"	"	"			
473	7740	"	"	"	"	"	褐色	灰褐色	"	"	褐色	"	"	"			
474	7637	"	"	底部	"	"	黄褐色	黄褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	黄褐色	"	"	"			
475	7753	"	"	脚部	"	"	褐色	暗褐色	好ナナ目	好ナナ目	赤褐色	"	"	"			
476	7789	"	壺	底部	"	"	灰褐色	黒褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	暗褐色	"	"	37			
477	7788	"	"	"	"	"	灰色	褐色	好ナナ目	好ナナ目	褐色	"	"	"			
478	7770	"	高坏	坏部	"	"	褐色	"	"	"	"	"	"	"			
479		"	"	脚部	"	"	褐色	灰褐色	ヨコナ目	ヨコナ目	褐色	"	"	"			
480	7651	"	"	"	"	"	灰白色	灰白色	"	"	灰白色	細粒子粘土	"	"			
481	7758	"	"	"	"	"	褐色	赤褐色	ヨコナナ目	ヨコナナ目	灰褐色	"	"	"			

第4表 古墳時代土器一覽(8)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴				
482	7744	成川式土器	高坏	口縁部	口径 9.6	B3	住18	浅黄褐色	浅黄褐色	ヨコナリ目	ヨコナリ目	灰色	細粒子粘土	良			
483		"	鉢	口縁部	" 9.0	"	"	褐色	黒褐色	"	ナナリ目	褐色		"	手づくね	37	
484		"	甕	頸部	"	A4	P2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	"	ナナリ目	にぶい黄褐色		"		40	
485		"	"	胴部	"	"	"	"	"	"	"	灰色		"		"	
486		"	"	口縁部	口径 16.6	"	P7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナリ目	ヨコナリ目	にぶい黄褐色		"			
487		"	"	頸部	"	"	"	明褐色	明褐色	ナナリ目	ナナリ目	灰色		"	刻み目突帯	40	
488		"	"	底部	"	"	"	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヨコナリ目	ヨコナリ目	黒褐色		"		"	
489		"	"	底部	"	"	"	明赤褐色	暗褐色	ナナリ目	ナナリ目	"		"		"	
490		"	"	脚部	脚径 6.2	"	"	褐色	褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	明赤褐色		"		"	
491		"	"	"	"	"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	褐色		"		"	
492		"	壺	肩部	"	"	"	褐色	褐色	ヨコナリ目	ヨコナリ目	にぶい黄褐色		"	刻み目突帯	"	
493		"	"	"	"	"	"	にぶい褐色	"	"	ヨコナリ目	褐灰色		"	突帯	"	
494		"	"	底部	"	"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナナリ目	ナナリ目	褐色		"		"	
495		"	蓋	下部	口径 19.0	B4	土32	黄褐色	黄褐色	ナナリ目	ナナリ目	黄色		"		"	
496	8185	"	甕	頸部	"	B3	住19	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	黄褐色	細粒子粘土	"		"	
497	8200	"	"	底部	"	"	"	赤褐色	黒色	ヨコナリ目	ナナリ目	赤褐色		"		"	
498	8198	"	"	脚部	脚径 6.8	"	"	にぶい褐色	にぶい褐色	ナナリ目	ナナリ目	にぶい赤褐色		"		"	
499	8207	"	壺	底部	口径 4.0	"	"	にぶい黄褐色	黒色	ヨコナリ目	ナナリ目	褐灰色		"		"	
500		"	埴	口縁部	口径 8.2	"	"	褐色	褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	褐色	細砂	"		"	
501	8196 9618	"	高坏	坏部	" 19.0	"	"	"	"	"	ヨコナリ目	にぶい褐色		"		"	
502		"	"	脚部	脚径 13.6	"	"	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	褐色		"		"	
503		"	"	"	" 9.8	"	"	褐色	褐色	"	"	褐色		"		"	
504	6899	"	甕	口縁部	口径 16.8	"	住20	赤褐色	黒色	ヨコナリ目	ナナリ目	褐色		"		38	
505	8117	"	"	胴部	"	"	"	にぶい褐色	褐灰色	ヨコナリ目	ナナリ目	赤褐色		"	刻み目突帯	"	
506	6859	"	"	"	"	"	"	黒色	黄褐色	"	ナナリ目	"		"		"	
507	6881	"	"	底部	脚径 8.2	"	"	暗赤褐色	暗赤褐色	"	ヨコナリ目	"		"		"	
508	6861	"	"	脚部	" 9.0	"	"	"	にぶい赤褐色	"	"	"		"		38	
509	6872	"	壺	口縁部	" 14.2	"	"	褐色	褐色	"	"	黒色		"		"	
510		"	"	底部	口径 6.0	"	"	にぶい褐色	褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	褐色		"		"	
511	19	"	高坏	坏部	"	"	"	淡黄色	淡黄色	ナナリ目	ナナリ目	灰褐色	細粒子粘土	"		"	
512	6898	"	鉢	口縁部	口径 6.2	"	"	黒色	赤褐色	ナナリ目	ナナリ目	赤褐色		"	手づくね	"	
513		"	甕	口縁部	" 17.6	"	土35	にぶい褐色	黒褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	にぶい黄褐色		"		"	
514		"	"	"	"	"	"	"	にぶい褐色	"	"	にぶい黄褐色		"		"	
515		"	"	底部	"	"	"	黒褐色	明赤褐色	"	"	暗赤褐色		"		"	
516	8134	"	"	口縁部	口径 26.8	"	住21	褐色	褐色	"	ナナリ目	赤灰色		"		"	
517	8140	"	"	"	" 21.2	"	"	"	にぶい褐色	"	ヨコナリ目	褐色		"		"	
518	8134	"	"	"	" 12.5	"	"	明黄褐色	灰黄褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	にぶい黄褐色		"		"	
519		"	"	"	"	"	"	灰黄褐色	黒褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	褐灰色		"		"	
520	8134	"	"	"	口径 20.2	"	"	黒色	"	ナナリ目	ナナリ目	黒褐色		"		"	
521	19	"	"	"	"	"	"	灰白色	にぶい黄褐色	ヨコナリ目	ナナリ目	灰白色		"		"	

第4表 古墳時代土器一覽(9)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土	焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	外面	色調				
522	8131	成川式土器	甕	胴部	住21	B3	住21	褐灰色	にぶい黄褐色	ナナメ目	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰色	良	三角突帯	38	
523		"	"	頸~胴部	"	"	"	黄褐色	黒褐色	ヨコメ目	ナメ目	ナメ目	黄褐色	"	"	"	
524		"	"	口縁部	"	"	"	にぶい灰褐色	にぶい黄褐色	"	ヨコメ目	ヨコメ目	にぶい黄褐色	"	"	"	
525	8180	"	"	頸部	"	"	"	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	黒色	"	三角突帯	"	
526	8123	"	"	高坏	"	"	"	明褐色	明褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	ヨコナメ目	明褐色	"	"	"	
527	8150	"	"	脚部	"	"	"	灰色	黄褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	黄褐色	"	"	"	
528		"	"	下部	"	"	"	赤褐色	赤褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	赤褐色	"	皿形	"	
529	8181	"	"	"	"	"	"	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	"	ヨコナメ目, 研磨き目	ヨコナメ目	にぶい赤褐色	"	"	"	
530		"	"	卍	"	"	"	にぶい赤褐色	黒褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	ヨコナメ目	明褐色	"	手づくね	"	
531		"	"	口縁部	大上12	"	"	褐色	"	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	暗褐色	"	"	"	
532		"	"	"	"	"	"	褐色	"	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐色	"	"	"	
533		"	"	"	"	"	"	褐灰色	"	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐灰色	"	"	"	
534		"	"	脚部	"	"	"	黄色	黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	黄色	"	"	"	
535		"	"	"	"	"	"	黒褐色	褐色	ナメ目, 指押し	ナメ目, 指押し	ナメ目, 指押し	赤褐色	"	"	"	
536	8221	"	"	鉢	"	"	"	灰褐色	にぶい褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	灰色	"	"	"	
537	8211	"	"	高坏	"	"	"	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐灰色	"	"	"	
538	8216	"	"	坏部	"	"	"	浅黄褐色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	暗灰黄色	"	"	"	
539		"	"	口縁部	土36	"	"	明赤褐色	赤褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	褐色	"	"	"	
540		"	"	"	"	"	"	灰褐色	にぶい褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	暗赤~灰褐色	"	"	"	
541		"	"	壺	"	"	"	黒褐色	褐灰色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐灰色	"	手づくね	"	
542		"	"	高坏	"	"	"	褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目, ナメ目	ヨコナメ目, ナメ目	ヨコナメ目, ナメ目	灰色	"	"	"	
543	7955	"	"	坏部	住22	"	住22	赤褐色	赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	ヨコナメ目	明赤褐色	"	"	"	
544	7954	"	"	口縁~胴部	"	"	"	にぶい赤褐色	明赤褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰色	"	"	"	
545		"	"	胴部	"	"	"	褐色	黒褐色	ナメ目, ナメ目	ナメ目, ナメ目	ナメ目, ナメ目	褐色	"	"	"	
546		"	"	脚部	"	"	"	赤褐色	赤褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	黒褐色	"	"	"	
547	6936	"	"	口縁部	住23	"	住23	灰褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい褐色	"	三角突帯	41	
548		"	"	"	"	"	"	褐色	暗褐色	"	"	"	褐色	"	"	"	
549	6808	"	"	"	"	"	"	にぶい褐色	にぶい赤褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	にぶい褐色	"	"	"	
550	7941	"	"	完形	"	"	"	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	褐色	"	"	"	
551	6820	"	"	口縁~胴部	"	"	"	"	"	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐灰色	"	"	"	
552	7944	"	"	胴・底部	"	"	"	明褐色	黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	明褐色	"	"	"	
553		"	"	脚部	"	"	"	暗赤褐色	褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	にぶい黄褐色	"	"	"	
554	7887	"	"	"	"	"	"	明赤褐色	明赤褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	赤褐色	"	"	"	
555	7924	"	"	"	"	"	"	明赤褐色	明赤褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	明赤褐色	"	"	"	
556	7900	"	"	底部	"	"	"	黒褐色	褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	褐色	"	"	"	
557	6842	"	"	壺	"	"	"	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコメ目	ヨコメ目	ヨコメ目	暗赤褐色	"	刻み目突帯	41	
558		"	"	脚部	"	"	"	にぶい褐色	にぶい褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰褐色	"	"	"	
559	7897	"	"	肩部	"	"	"	にぶい褐色	にぶい赤褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	にぶい赤褐色	"	"	"	
560	7875	"	"	底部	"	"	"	褐灰色	にぶい黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	褐灰色	"	"	"	
561	7905	"	"	"	"	"	"	にぶい褐色	にぶい褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	にぶい褐色	"	手づくね	"	
562	7871	"	"	無頸壺	"	"	"	褐灰色	浅黄褐色	ナメ目	ナメ目	ナメ目	灰色	"	"	"	

第4表 古墳時代土器一覽 (10)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	外面	色調	特徴			
563	7928	成川式土器	長頸壺	口縁部	口径	B3	住23	褐色	にぶい褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	にぶい褐色	良		41	
564		"	土製品					黄褐色	灰黄褐色	ココヤ目			灰色	"		"	
565	8267	"	甕	口縁部	口径	B5	大土1	黄褐色	灰黄褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	暗灰黄色	"		"	
566		"	"	"	"	"	"	灰黄褐色	黒褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰色	"		"	
567	8241	"	"	胸・底部		"	土20	黄褐色	褐色	ハ目, 指押し			にぶい灰褐色	"		"	
568		"	"	底部		"	大土1	黒褐色	にぶい褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰黄褐色	"		"	
569		"	壺	肩部		"	"	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰色	"	刻み目突帯	"	
570		"	甕	口縁~胴部	口径	A5	溝4	黒色	黒褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	黒褐色	"	三角突帯	"	
571		"	"	"	"	"	"	赤褐色	"	"	ココヤ目	ココヤ目	にぶい赤褐色	"	"	"	
572	7533	"	"	頸部	"	"	"	にぶい褐色	黄褐色	ココヤ目, 手打			にぶい黄褐色	"	"	"	
573	7501	"	"	頸~胴部		"	"	にぶい赤褐色	黒褐色	ココヤ目, 指打	ココヤ目	ココヤ目	黒褐色	"	"	"	
574	7542	"	"	口縁~胴部	口径	"	"	褐色	にぶい褐色	ココヤ目			にぶい黄褐色	"	"	"	
575	7540	"	"	"	"	"	"	にぶい黄褐色	褐色	"	ココヤ目	ココヤ目	褐色	"	刻み目突帯	"	
576	7516	"	"	口縁~底部	"	"	"	黄褐色	赤~黄褐色	ハ目, ハ打			黄褐色	"	"	43	
577	7532	"	"	口縁~胴部	"	"	"	明赤褐色	黒褐色	ココヤ目			にぶい赤褐色	"	"	"	
578	7542	"	"	"	"	"	"	赤褐色	暗赤色	好ヤ目	好ヤ目	好ヤ目	黒褐色	"	"	"	
579	7503	"	"	完形	"	B5	"	"	赤褐色	ココヤ目	ココヤ目	好ヤ目	赤褐色	"	"	"	
580	7508	"	"	口縁~底部	"	"	"	黒色	褐色	ココヤ目	ココヤ目	好ヤ目	赤褐色	"	"	"	
581		"	"	口縁~胴部	"	A5	"	浅黄褐色	にぶい褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰褐色	"	"	"	
582	7527	"	"	口縁~胴部	"	"	"	黒色	黒褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰褐色	"	"	"	
583	7534	"	"	口縁~頸部	"	"	"	褐色	褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰色	"	"	"	
584		"	"	口縁~胴部	"	"	"	明褐色	にぶい黄褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰色	"	"	"	
585		"	"	口縁~肩部	"	"	"	にぶい褐色	黒褐色	"	"	ハ目	"	"	"	"	
586	7502	"	"	口縁~胴部	"	B5	"	褐色	赤褐色	"	ココヤ目	ココヤ目	褐色	"	"	43	
587	7502	"	"	口縁~底部	"	"	"	黄褐色	暗褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰色	"	"	"	
588	7503	"	"	口縁~胴部	"	"	"	灰黄褐色	暗褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	黄褐色	"	"	"	
589	7531	"	"	完形	"	A5	"	褐色	明赤褐色	ハ目	ハ目	ハ目	明赤褐色	"	"	"	
590		"	"	"	"	B5	"	明赤褐色	明赤褐色	ココヤ目, 指押し	ココヤ目	ココヤ目	褐色	"	"	"	
591	7312	"	"	口縁~肩部	"	A5	"	黄灰色	褐色	ココヤ目	ココヤ目	好ヤ目	褐色	"	"	"	
592		"	"	口縁~胴部	"	B5	"	にぶい赤褐色	灰黄褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	にぶい黄褐色	"	"	"	
593	7572	"	"	口縁~肩部	"	A5	"	黄褐色	黒褐色	"	ココヤ目	ココヤ目	褐色	"	"	"	
594	7513	"	"	"	"	"	"	にぶい褐色	"	"	ココヤ目	ココヤ目	灰色	"	"	"	
595	7523	"	"	"	"	"	"	黒色	"	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	灰黄褐色	"	"	"	
596	7523	"	"	"	"	"	"	灰黒色	"	"	ココヤ目	ココヤ目	明黄褐色	"	"	"	
597	7535	"	"	口縁~胴部	"	"	"	明褐色	"	ココヤ目	ココヤ目	ハ目	にぶい褐色	"	"	"	
598	7532	"	"	口縁~底部	"	"	"	"	赤褐色	ハ目	ハ目	ハ目	赤褐色	"	"	"	
599	7540	"	"	口縁~胴部	"	"	"	褐色	黒褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	褐色	"	"	"	
600	7540	"	"	口縁~胴部	"	"	"	にぶい褐色	にぶい褐色	ココヤ目	ココヤ目	ココヤ目	にぶい褐色	"	"	"	
601	7505	"	"	口縁~胴部	"	"	"	灰黄褐色	黒褐色	ハ目	ハ目	ココヤ目	にぶい褐色	"	"	"	

第4表 古墳時代土器一覽(11)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土	焼成	文様等	図版
				部位	法量(cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴				
602	7533	成川式土器	甕	口縁~肩部	口径	A5	溝4	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色	良			
603		"	"	口縁~胴部	"	"	"	にぶい赤褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"			
604		"	"	"	"	A5	"	黒褐色	灰黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒褐色	"			
605	7055	"	"	"	"	B5	"	にぶい赤褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい赤褐色	"			
606		"	"	口縁~肩部	"	A5	"	黒褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
607	7533	"	"	口縁~胴部	"	"	"	黒褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"			
608	7043	"	"	口縁~肩部	"	B5	"	赤褐色	赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"			
609	7047	"	"	口縁~胴部	"	"	"	黒褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黄褐色	"			
610	7525	"	"	完形	"	A5	"	黒色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
611	7503	"	"	口縁~肩部	"	B5	"	赤褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
612	7527	"	"	"	"	A5	"	にぶい黄褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色	"			
613		"	"	口縁部	"	"	"	にぶい褐色	"	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
614		"	"	"	"	"	"	にぶい黄褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色	"			
615	7518	"	"	口縁~胴部	"	A5	"	黄褐色	暗褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
616		"	"	"	"	"	"	褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黄褐色	"			
617	7526	"	"	口縁~肩部	"	"	"	"	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
618		"	"	"	"	"	"	"	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
619	7037	"	"	口縁~底部	"	B5	"	褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
620	7541	"	"	"	"	A5	"	にぶい赤褐色	暗赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"			
621	7533	"	"	口縁~肩部	"	"	"	明褐色	暗褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	明褐色	"			
622	7530	"	"	口縁~胴部	"	"	"	褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒色	"			
623		"	"	口縁~肩部	"	"	"	黒褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	浅黄色	"			
624		"	"	"	"	"	"	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒色	"			
625		"	"	口縁~胴部	"	A5	"	赤褐色	赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
626		"	"	口縁~肩部	"	"	"	黒色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	明黄褐色	"			
627		"	"	口縁~胴部	"	"	"	明褐色	"	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
628	7505	"	"	口縁~肩部	"	A5	"	暗赤褐色	にぶい赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい赤褐色	"			
629	7505	"	"	口縁~胴部	"	"	"	赤黒色	赤黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤黒色	"			
630	7512	"	"	"	"	"	"	にぶい黄褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黄灰色	"			
631	7538	"	"	口縁~肩部	"	"	"	黄褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"			
632		"	"	口縁~胴部	"	"	"	明赤褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色	"			
633		"	"	脚部	脚径	"	"	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"			
634	7519	"	"	"	"	A5	"	明黄褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"			
635	7522	"	"	胴~脚部	"	"	"	黒色	赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"			
636	7532	"	"	底部	"	"	"	灰色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰褐色	"			
637		"	"	"	"	"	"	灰褐色	灰色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰褐色	"			
638	7537	"	"	"	"	"	"	黒色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐灰色	"			
639		"	"	"	"	"	"	灰黄褐色	灰黄色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"			
640	7055	"	"	胴~脚部	"	B5	"	褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
641	7510	"	"	底部	"	A5	"	"	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
642	7539	"	"	"	"	"	"	黒色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"			

第4表 古墳時代土器一覽 (12)

遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕			焼成	文様等	図版
			部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	胎土			
643	成川式土器	甕	底部	口径 9.6	B5	溝4	赤褐色	橙色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	良		
644	"	"	"	"	"	"	黄褐色	"	ココナツ目	ナツ目	色調	"		
645	"	"	"	"	A5	"	浅黄褐色	"	ナツ目	ココナツ目	胎土	"		
646	"	"	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ココナツ目	ココナツ目、指ナツ	胎土	"		
647	7049	"	"	"	B5	"	にぶい、褐色	"	ナツ目	ナツ目	胎土	"		
648	"	"	脛~脚部	"	A5	"	褐色	にぶい、褐色	ココナツ目、指ナツ	ココナツ目、指ナツ	胎土	"		
649	7511	"	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	黄褐色	ナツ目	ナツ目	胎土	"		
650	7533	"	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	灰黒色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
651	7039	"	底部	"	B5	"	黒色	褐灰色	ココナツ目	ナツ目	胎土	"		
652	"	"	壺	口径 24.6	"	"	明赤褐色	暗赤褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
653	7510	"	"	"	A5	"	にぶい、褐色	赤褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
654	"	"	"	"	"	"	褐色	黒色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
655	"	"	"	"	"	"	褐色	褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
656	7515	"	"	"	A5	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
657	7503	"	肩部	"	B5	"	にぶい、褐色	灰黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	三角突帯	
658	7510	"	胴部	"	A5	"	黒褐色	にぶい、黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	"	
659	"	"	"	"	"	"	褐色	黒色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	"	
660	"	"	"	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ココナツ目	ナツ目、研磨	胎土	"	"	
661	7527	"	口縁~胴部	口径 10.4	A5	"	"	明赤褐色	ナツ目、指ナツ	ナツ目	胎土	"		
662	"	"	底部	口径 4.4	"	"	暗赤色	赤褐色	ナツ目、指ナツ	ナツ目	胎土	"		
663	7532	"	"	"	"	"	褐色	褐色	ココナツ目	手ナツ	胎土	"		
664	7054	"	"	"	B5	"	"	灰黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
665	7508	"	脛~底部	"	A5	"	にぶい、褐色	にぶい、黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
666	"	"	"	"	"	"	赤褐色	明赤褐色	ココナツ目	ココナツ目、ナツ	胎土	"		
667	7517	"	"	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"		
668	7519	"	胴部	"	A5	"	褐色	黒褐色	ココナツ目、指ナツ	ココナツ目、指ナツ	胎土	"	刻み目突帯	
670	"	"	"	"	"	"	"	黄褐色	ココナツ目、指ナツ	ココナツ目	胎土	"	"	
671	7508	"	"	"	A5	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	"	
672	7510	"	頸~胴部	"	"	"	明褐色	にぶい、褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	"	
673	7514	"	口縁部	口径 12.4	"	"	にぶい、黄褐色	黒褐色	ココナツ目、ナツ	ココナツ目、ナツ	胎土	"		
674	7510	"	胴部	"	"	"	赤褐色	黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	刻み目突帯	
675	7053	"	"	"	B5	"	黄褐色	黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	"	
676	7510	"	"	"	A5	"	にぶい、赤褐色	黒褐色	ココナツ目、指ナツ	ココナツ目、指ナツ	胎土	"	"	
677	7523	"	肩部	"	"	"	黄褐色	褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	"	
678	7519	"	頸~肩部	"	"	"	褐色	黄褐色	ココナツ目、指ナツ	ココナツ目	胎土	"		
679	7523	"	胴部	"	"	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	刻み目突帯	
680	7536	"	"	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	"	
681	7540	"	"	"	"	"	褐色	褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	三角突帯	
682	7507	"	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	黄灰色	ココナツ目、ナツ	ココナツ目	胎土	"	"	
683	7507	"	"	"	"	"	にぶい、褐色	にぶい、黄褐色	ココナツ目	ココナツ目	胎土	"	"	

第4表 古墳時代土器一覽 (13)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕		胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴			
684		成川式土器	壺	胴部		A5	溝4	灰褐色	灰褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰黄色		良		
685	7529	"	"	底部		"	"	黄褐色	黄褐色	ナメ目	ナメ目	褐色		"		
686	7044	"	"	"		B5	"	にぶい橙色	にぶい橙色	ナメ目	ナメ目	灰黄色		"		
687	7516	"	"	"	底径	A5	"	赤褐色	赤褐色	ナメ目	ナメ目	赤褐色		"		
688		"	"	"	"	"	"	黄褐色	黄褐色	ナメ目	ナメ目	褐色		"		
689	7512	"	"	頸~胴部	"	"	"	にぶい橙色	にぶい橙色	ヨコナメ目, 指押し	ナメ目	黒褐色		"		
690	7502	"	"	胴~底部	底径	B5	"	"	"	ナメ目	ナメ目	にぶい橙色		"		
691	7046	"	"	口縁~脚部	口径	A5	"	黒褐色	黄褐色	ナメ目, ムナズリ	ナメ目, ムナズリ	褐色		"		
692	7511	"	"	完形	"	"	"	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	褐色		"		43
693	7040	"	長頸壺	頸~底部	底径	B5	"	灰褐色	灰褐色	ナメ目	ナメ目	灰褐色		"		
694	7526	"	高環	環部	口径	A5	"	褐色	灰黄色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐色		"		
695		"	"	"	"	"	"	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	褐色		"		
696		"	"	"	"	"	"	にぶい橙色	にぶい橙色	ナメ目	ナメ目	黄灰色		"		
697		"	"	"	"	A5	"	"	"	ヨコナメ目	ナメ目	灰褐色		"		
698		"	"	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	"		"		
699		"	"	"	"	"	"	黒褐色	明赤褐色	ヨコナメ目, 研磨	ヨコナメ目	褐色		"		
700	7509	"	"	"	"	A5	"	黒色	褐色	ナメ目	ナメ目	"		"		
701		"	"	"	"	"	"	にぶい、橙色	"	ナメ目, ムナズリ	ナメ目	にぶい、橙色		"		
702	7532	"	"	"	"	A5	"	浅黄色	黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰白色		"		
703		"	"	"	"	"	"	黄褐色	黄褐色	ヨコナメ目	ナメ目	黄褐色		"		
704		"	"	"	"	"	"	褐色	褐色	ヨコナメ目	ナメ目	にぶい、褐色		"		
705		"	"	"	"	"	"	"	"	ナメ目	ナメ目	褐色		"		
706	7540	"	"	筒部	脚径	"	"	赤褐色	赤褐色	ヨコナメ目	ナメ目	黒色		"		
707		"	"	脚部	"	"	"	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナメ目	ナメ目	明赤褐色		"		
708	7056	"	"	"	"	B5	"	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい、褐色		"		
709		"	"	"	"	"	"	明赤褐色	黒褐色	ナメ目	ナメ目	黒褐色		"		
710		"	"	"	"	B5	"	"	黒色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	黒褐色		"		
711	7061	"	"	"	"	"	"	赤褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	暗褐色		"		
712	7519	"	"	"	"	A5	"	赤褐色	赤褐色	ヨコナメ目	ナメ目	赤褐色		"		
713		"	"	"	脚径	"	"	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	褐色		"		
714		"	"	"	"	B5	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ヨコナメ目	ナメ目	にぶい、褐色		"		
715	7513	"	"	"	"	A5	"	黒褐色	黄褐色	ナメ目	ナメ目	黒色		"		
716	7048	"	"	"	"	B5	"	黄褐色	黄褐色	ヨコナメ目	ナメ目	褐色		"		
717		"	"	"	"	"	"	褐色	褐色	ヨコナメ目	ナメ目	褐色		"		
718		"	"	"	"	"	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ナメ目	ナメ目	褐色		"		
719		"	"	"	"	"	"	黄褐色	黒褐色	ナメ目	ナメ目	にぶい、黄褐色		"		
720		"	蓋	上部	"	"	"	にぶい、黄褐色	にぶい、黄褐色	ナメ目	ナメ目	灰黄色		"		
721	7503	"	"	完形	口径	B5	"	明黄褐色	明黄褐色	ナメ目	ナメ目	明黄褐色		"		
722		"	"	下部	"	"	"	褐色	褐色	ナメ目	ナメ目	灰褐色		"		
723		"	甕	完形	"	A5	"	にぶい、褐色	にぶい、褐色	ヨコナメ目, 研磨, 指押し	ナメ目	褐色		"		手づくね

第4表 古墳時代土器一覽(14)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量(cm)			内面	外面	内面	外面	外面	色調	特徴				
724		成川式土器	甕	底部	底径	A2	溝5	にぶい橙色	明赤褐色	ハク目	指ナゲ	ハク目	黒色	良	手づくね			
725								黒色	灰黄褐色	ココナメ目	ハカズリ	ハク目	灰黒色					
726			壺	頸~底部		A5	溝4	明赤褐色	明赤褐色	手ナゲ	手ナゲ	ハク目	明赤褐色					
727				底部		A2	溝5		にぶい褐色	手ナゲ	手ナゲ	ハク目						
728	7532		鉢	口縁部	口径	A5	溝4	黄褐色	灰褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色					
729			ふいご	羽口		A2	溝5	赤褐色	灰白色赤褐色	ハク目	ハク目	ハク目	灰白色赤褐色		手づくね	三角突起有り		
730	452		甕	口縁~胴部	口径	B5	III	暗赤褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ハク目	にぶい黄色					
731	3070					A5	III	にぶい橙色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒褐色					
732	1786					A5	III	にぶい褐色	にぶい褐色	ハク目	ハク目	ココナメ目	にぶい褐色					
733	5824						V	黒褐色	にぶい褐色	ハク目	ハク目	ハク目	にぶい褐色		刻み目突帯			
734	207					B5	III	黄褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色					
735	5824					A5	V	黄褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色					
736	4870			口縁~頸部		A4	V	暗赤褐色	極暗赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	暗赤褐色					
737	5269					B3	III	明黄褐色	浅黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	浅黄褐色					
738	310			口縁~胴部		B5	III	にぶい赤褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい赤褐色					
739	4435				口径	A3	IV	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒褐色					
740	571					A5	III	暗赤褐色	暗赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	暗赤褐色					
741	4350					A3	IV	褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色					
742	5796			口縁~底部		A4	V	にぶい黄褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰黄褐色					
743	5161			口縁~胴部		A3	V	褐色	黒色	ハク目	ハク目	ハク目	褐色					
744	11					B5	III	にぶい赤褐色	黒褐色	ハク目	ハク目	ハク目	褐色					
745	14						III	にぶい赤褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色					
746	7110			口縁部		A3	IV	褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色					
747				口縁~胴部		A5	IV	褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい褐色					
748	8574					B4	V	褐色	灰褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい赤褐色					
749	2033					A5	III	にぶい褐色	褐色	ハク目	ハク目	ハク目	灰褐色					
750						A3	V	褐色	明褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	浅黄褐色					
751	5251					B3	III	明褐色	赤褐色	ハク目	ハク目	ハク目	明褐色					
752	11			底部	脚径	B5	III	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色					
753	5313					A4	IV	明赤褐色	明褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色					
754	4406					A3	IV	明黄褐色	明赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	明赤褐色					
755	3964					B5	III	褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒褐色					
756	2115					A3	III	赤褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色					
757	2208		壺	口縁部	口径		III	褐色	明褐色	ハク目	ハク目	ハク目	褐色					
758	2722			胴部		B3	III	黒褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい赤褐色		三角突帯			
759	523					B5	III	にぶい黄褐色	暗褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐色					
760	6158					B3	IV	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰褐色		台形突帯			
761	4451					A2	IV	赤褐色	赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい赤褐色		刻み目突帯			
762	8714					A3	III	にぶい赤褐色	明褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰白色					
763				口縁~胴部	口径	A3		浅黄褐色	にぶい黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色					
764	3602					A5	IV	褐色	黒色	ハク目	ハク目	ハク目	褐色					

第4表 古墳時代土器一覽 (15)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	内面	外面	色調	特徴			
765	3227	成川式土器	壺	口縁~胴部	口径	20.4	A4	III	黒褐色	にぶい橙色	ココナメ目, ヲナズリ	ココナメ目, ヲナズリ	ココナメ目, ヲナズリ	淡橙色	良			
766	5259	"	"	胴~底部	"	"	B3	III	褐色	黒褐色	"	ココナメ目, ヲナズリ	ココナメ目, ヲナズリ	浅黄色	"			
767	1487	"	"	"	"	"	A5	III	褐色	"	"	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色	"			
768	4705	"	"	底部	底径	2.0	"	III	褐灰色	明赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい褐色	"			
769	6680	"	高环	筒部	"	"	B3	IV	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目, ヲナズリ	ココナメ目, 研磨	ココナメ目	にぶい褐色	"			
770	2280	"	"	底部	"	"	A4	III	赤褐色	暗褐色	"	ココナメ目	ココナメ目	褐色	"			
771	5266	"	"	"	"	"	B3	III	明褐色	赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目, ヲナズリ	明褐色	"	円孔透し		
772	6202	"	"	"	"	"	"	IV	褐色	褐色	"	"	ココナメ目	褐色	"	"		
773	34	"	"	"	"	"	B5	III	にぶい褐色	にぶい褐色	"	"	"	にぶい褐色	"	細砂		
774	7088	"	"	环部	口径	14.2	A3	IV	黄色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"	"		
775	7298	"	"	底部	脚径	12.5	A4	V	浅黄色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黄褐色	"	"		
776	6748	"	"	"	"	"	B4	V	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰色	"	"		
777	4288	"	"	"	"	"	B3	IV	"	にぶい黄褐色	"	"	ココナメ目	灰褐色	"	細砂		
778	3969	"	"	"	脚径	7.4	B5	III	にぶい褐色	浅黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐灰色	"	"		
779		"	"	底部	底径	4.0	A1	III	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰色	"	"		
780	23	"	鉢	完形	口径	10.4	B5	III	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい褐色	"	"		
781	5265	"	"	"	"	"	B3	IV	褐色	明褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	"	"	"		
782	5008	"	"	底部	口径	8.4	A3	V	にぶい黄褐色	灰白色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰色	"	"		
783	49	"	"	完形	口径	8.4	B5	III	赤褐色	赤褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒色	"	"		
784	4214	"	"	底部	"	"	B3	IV	灰褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	明赤褐色	"	"		
785	3024	"	埴	胴~底部	底径	4.2	A5	III	褐色	明褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰褐色	"	"		
786	713	"	"	"	"	"	"	III	明褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい褐色	"	"		
787	2795	"	蓋	上部	"	"	B3	III	褐色	褐色	ココナメ目, 指押し	ココナメ目, 指押し	ココナメ目	暗赤褐色	"	"		
788	5125	"	"	下部	口径	17.0	A3	V	黄褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黄褐色	"	"		
789	5507	"	"	"	"	"	B3	V	"	暗褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい黄褐色	"	"		
790	4153	"	"	完形	"	"	"	IV	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐灰色	"	細砂		
791	5937	"	"	上部	"	"	"	IV	褐灰色	灰黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	暗灰黄色	"	"		
792	7300	"	長頸壺	頸~底部	底径	4.0	B4	V	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	灰色	"	"		
793	3976	"	"	頸~胴部	"	"	B5	III	赤褐色	黒褐色	ココナメ目, 指押し	ココナメ目, 指押し	ココナメ目	褐色	"	刻み目突帯		
794	7316	"	"	"	"	"	B3	V	黒色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒色	"	免田式, 重弧文	44	
795	916	"	鉢	口縁部	口径	29.6	A5	III	にぶい赤褐色	黄褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	淡赤褐色	"	"		
796	2406	"	"	胴~底部	底径	7.2	B3	III	赤褐色	暗褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	赤褐色	"	"		
797		"	甕	口縁部	口径	23.0	A1	III	黄褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐灰色	"	"		
798	8883	"	"	口縁~胴部	"	"	A2	IIIb	灰黄褐色	灰黄褐色	"	"	ココナメ目	灰色	"	"		
799		"	"	"	"	"	A1-2	"	にぶい赤褐色	褐灰色	"	"	ココナメ目	褐灰色	"	"		
800		"	"	"	"	"	A1	III	褐灰色	灰黄褐色	"	"	ココナメ目	黒褐色	"	"		
801		"	"	"	"	"	A1-2	III	褐色	黒褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	にぶい褐色	"	"		
802		"	"	"	"	"	A1	III	にぶい褐色	にぶい褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐灰色	"	"		
803	8876	"	"	"	"	"	A2	IIIb	褐色	黒褐色	ココナメ目, ヲナズリ	ココナメ目	ココナメ目	"	"	"		
804	8881	"	"	"	"	"	"	IIIb	黒褐色	黒色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	黒褐色	"	"		
805		"	"	"	"	"	A1	III	にぶい褐色	褐色	ココナメ目	ココナメ目	ココナメ目	褐灰色	"	"		

第4表 古墳時代土器一覽 (16)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調		調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	色調	特徴				
806		成川式土器	甕	口縁~肩部	口径 20.2	A1-2	Ⅲ	にぶい黄褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	黒色	良				
807	8281	"	"	胴~底部	"	B1-2	Ⅲ	褐色	灰黄褐色	ヨコナメ目	"	にぶい黄褐色	"				
808		"	"	"	"	A1-2	"	暗灰黄色	にぶい褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	浅黄色	"				
809		"	"	底部	口径 9.8	A2	シ〇コ	黄褐色	黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐色	"				
810		"	"	"	"	A1	"	灰黄色	にぶい赤褐色	ヨコナメ目	"	黒色	"				
811	8841	"	"	"	"	A2	Ⅲ	褐色	灰褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰褐色	"				
812		"	"	"	"	A2	Ⅲ	黒褐色	黒褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	暗褐色	"				
813	8860	"	"	"	"	A2	Ⅲ	黄灰色	黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	黄灰色	"				
814	8352	"	"	"	"	A2	Ⅲb	暗褐色	暗褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	暗褐色	"				
815		"	"	"	口径 6.4	A1	Ⅲ	黒褐色	褐灰色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい赤褐色	"				
816	8875	"	壺	口縁部	口径 16.8	A2	Ⅲb	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐灰色	"				
817		"	"	"	"	A1	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰黄褐色	"				
818		"	"	"	"	A1	Ⅲ	黄褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰褐色	"				
819		"	"	"	"	A1-2	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい黄褐色	"				
820		"	"	頸~胴部	"	"	"	褐灰色	灰褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰色	"				
821		"	"	胴部	"	A1	Ⅲ	にぶい褐色	黒褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐灰色	"				
822		"	"	"	"	"	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰色	"				
823		"	"	"	"	"	Ⅲ	にぶい黄褐色	黄灰色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	黒褐色	"				
824		"	"	"	"	"	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい黄褐色	"				
825		"	"	"	"	A1-2	Ⅲ	灰色	黒色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰褐色	"				
826	8855	"	"	"	口径 5.2	A2	Ⅲ	黒褐色	暗赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	黒褐色	"				
827	8871	"	"	底部	"	"	Ⅲb	"	黒褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	黒褐色	"				
828	8648	"	"	"	"	"	Ⅲb	褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐色	"				
829		"	"	"	"	"	Ⅲb	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい褐色	"				
830		"	"	"	"	A1	Ⅲ	黄灰色	リ-7 褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	黄灰色	"				
831		"	"	"	"	A2	Ⅲ	明褐灰色	黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰褐色	"				
832		"	"	"	口径 3.0	A1	Ⅲ	にぶい赤褐色	暗赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい赤褐色	"				
833		"	"	"	"	A1	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい褐色	"				
834		"	"	"	"	A1-2	Ⅲ	灰赤色	青灰色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	青灰色	"				
835	8816	"	"	"	口径 6.2	A2	Ⅲb	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい黄褐色	"				
836		"	"	"	"	A1	Ⅲ	にぶい赤褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰色	"				
837		"	"	"	"	"	Ⅲ	赤褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	赤褐色	"				
838		"	"	"	"	"	Ⅲ	にぶい黄褐色	黒色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい黄褐色	"				
839		"	"	"	"	A1-2	Ⅲ	黒褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい赤褐色	"				
840	8877	"	"	"	"	A2	Ⅲb	"	褐灰色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	赤褐色	"				
841		"	"	"	"	A1	Ⅲ	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	赤褐色	"				
842	8427	"	"	胴~底部	"	B1-2	Ⅲb	赤褐色	赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	赤褐色	"				
843		"	"	底部	口径 2.4	A1	Ⅲ	褐色	褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	褐灰色	"				
844		"	"	"	"	"	Ⅲ	暗褐色	にぶい赤褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	灰黄褐色	"				
845		"	"	口縁~肩部	口径 16.8	"	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナメ目	ヨコナメ目	にぶい黄褐色	"				
846	8425	"	埴	頸~胴部	"	B1-2	Ⅲb	"	"	指指	指指	"	"				手づくね

第4表 古墳時代土器一覽 (17)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	内面	外面	色調	特徴			
847		成川式土器	埴	口縁~胴部	口径 3.0	A1	Ⅲ	褐色	暗褐色	ヨコナゲ目, 手ナデ	ヨコナゲ目, 手ナデ	ヨコナゲ目, 手ナデ	黄褐色		良	手づくね		
848	8483		長頸壺	胴部		B1-2	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい橙褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	灰色			重弧文, 免田式		
849	95		無頸壺	口縁~肩部	口径 5.8	A1-2		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	にぶい黄褐色			手づくね		
850	8860		鉢	完形	口径 5.0	A2	Ⅲb	灰褐色	にぶい黄褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	黒色					
851					口径 8.0	A1		にぶい褐色	褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	黒色					
852	8667			口縁~胴部	口径 5.5	A2	Ⅲb	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	にぶい赤褐色					
853	8880				口径 12.0	A1	Ⅲ	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	にぶい褐色					
854			高坏	坏部	口径 37.4	A1	Ⅲ	赤褐色	赤褐色	ヨコナゲ目, 研磨	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	黒色					
855	8706			脚部		A2	Ⅲ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	赤灰色			円孔透し		
856						A1	Ⅲ	黒褐色	灰黄褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	灰褐色					
857					脚径 15.0	A2	Ⅲb	灰白色	灰白色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	灰白色			円孔透し2段		
858	8719					A1	Ⅲ	褐灰色	にぶい黄褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	褐灰色					
859						A1	Ⅲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	灰色	細砂				
860	8879			底部	脚径 11.0	A2	Ⅲb	褐色	灰褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	褐色			円孔透し		

第5表 平安時代土器一覽 (1)

番号	遺物番号	種類	器種	器部		出土区	層	色調			調整痕			胎土		焼成	文様等	図版
				部位	法量 (cm)			内面	外面	内面	外面	内面	外面	色調	特徴			
861		成川式土器	甕	口縁~肩部	口径 27.2	A2	溝5	浅黄褐色	にぶい橙褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	灰色		良	古墳時代		
862					口径 30.0			灰黄褐色	褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	にぶい橙褐色					
863				口縁部	口径 28.0			褐色	褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	褐色					
864				口縁~胴部	口径 19.4			にぶい褐色	にぶい褐色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	褐色					
865				底部	脚径 8.6			浅黄色	浅黄色	手ナデ	手ナデ	手ナデ	黄灰色					
866					口径 12.0			にぶい黄褐色	褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目, ハナズリ	褐色	細粒子粘土				
867		土師器		口縁~胴部	口径 31.0			にぶい黄褐色	褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	にぶい黄褐色					
868				口縁部	口径 28.0			明褐色	明褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	褐色			古墳時代		
869		成川式土器	壺	頸~肩部	口径 14.8			明褐色	明褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	褐色					
870				胴部				褐灰色	黒褐色	ハナズリ	ハナズリ	ハナズリ	褐灰色			突帯		
871								灰褐色	にぶい橙褐色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	褐色			刻み日突帯		
872								にぶい黄褐色	明褐色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	灰色					
873				底部	底径 3.8			褐色	明褐色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	褐色					
874					口径 3.4			にぶい褐色	にぶい黄褐色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	浅黄褐色					
875								褐色	にぶい褐色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	褐色					
876			高坏	坏部				暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナゲ目, 研磨	ヨコナゲ目, 研磨	ヨコナゲ目, 研磨	暗褐色					
877					口径 14.2			にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	灰白色	細粒子粘土				
878				脚部	脚径 21.8			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	にぶい黄褐色					
879								灰白色	灰白色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	灰白色			円孔透し		
880								褐色	褐灰色	手ナゲ目, ハナズリ	手ナゲ目, ハナズリ	手ナゲ目, ハナズリ	褐灰色			変則		
881								灰白色	灰白色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	灰白色					
882				底部				浅黄褐色	にぶい褐色	手ナゲ目	手ナゲ目	手ナゲ目	黄褐色					
883			るつぼ	口縁~底部	口径 12.4			浅黄色	灰黄色	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	ヨコナゲ目	黒褐色	細粒子粘土				
884		土師器	碗	底部	脚径 8.0			浅黄褐色	にぶい褐色	横引き	横引き	横引き	灰色			内赤土師器		
885			坏		底径 6.4			浅黄褐色	灰白色	横引き	横引き	横引き	浅黄褐色					
886					口径 6.2			褐色	灰白色	横引き	横引き	横引き	灰白色					

第5表 平安時代土器一覽(2)

番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層	分類	色調		調整		法量 (cm)			焼成	備考	図版
							内面	外面	内面	外面	口径	底径	器高			
887	8637	碗	碗	A2	Ⅲ		浅黄褐色	浅黄褐色	横引き	14.9	9.0	5.6	良			
888	8856	碗	碗	〃	Ⅲb		赤色	灰白色	〃	〃	8.4	〃	〃	内黒		
890	6756	碗	碗	A4	Ⅲ		浅黄褐色	浅黄褐色	〃	13.0	7.1	6.9	〃			
891	8796	碗	碗	A2	Ⅲb		白黄色	白黄色	〃	15.0	〃	〃	〃			
892	6755	碗	碗	A4	Ⅳ		黄褐色	黄褐色	〃	〃	7.0	〃	〃			
893	8618	碗	碗	A2	Ⅲ		黒色	灰黄褐色	研磨	13.4	7.0	6.7	〃	墨書		
894	8799	碗	碗	〃	Ⅲa		〃	浅黄褐色	横引き	〃	8.7	〃	〃			
895	8647	碗	碗	A3	Ⅲa		〃	〃	研磨	〃	7.2	〃	〃	内黒		
896	8765	碗	碗	A2	Ⅲb		〃	にぶい黄褐色	〃	〃	7.2	〃	〃	〃		
897	8650	碗	碗	〃	Ⅲb		浅黄褐色	浅黄褐色	横引き, 布痕	〃	7.3	〃	〃	布痕土器		
898	8629	碗	碗	〃	Ⅲa		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	〃	〃	7.4	〃	〃	〃		
899	8699	碗	碗	〃	Ⅲb		灰白色	灰白色	横引き	〃	6.8	〃	〃	〃		
900	8651	碗	碗	〃	Ⅲ		浅黄褐色	浅黄褐色	〃	〃	6.6	〃	〃	〃		
901	8801	碗	碗	〃	Ⅲa		〃	にぶい褐色	〃	〃	8.8	〃	〃	〃		
902	7035	碗	碗	A3	Ⅲ		橙色	橙色	〃	14.6	8.6	6.2	〃	〃		
903	7034	碗	碗	〃	Ⅲ		〃	〃	〃	16.2	8.7	6.2	〃	〃	45	
904	7036	碗	碗	〃	Ⅲ		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	〃	14.6	8.2	6.0	〃	布痕土器		
905	8720	碗	碗	A2	Ⅲ		白灰色	浅黄褐色	〃	〃	9.6	〃	〃	〃		
906	4064	碗	碗	A1・2	Ⅲ		にぶい褐色	灰白色	〃	〃	10.2	〃	〃	〃		
907	4064	碗	碗	A4	Ⅲ		浅黄褐色	浅黄褐色	〃	〃	8.6	〃	〃	内黒		
908	〃	碗	碗	A1	Ⅲ		〃	褐灰色	〃	11.6	6.8	4.4	〃	墨書		
909	〃	碗	碗	A1・2	Ⅲ		〃	〃	〃	12.6	〃	〃	〃	〃		
910	8654	碗	碗	A2	Ⅲb		浅黄褐色	淡黄色	〃	12.2	5.6	3.9	〃	〃	45	
911	〃	碗	碗	A1・2	Ⅲ		褐色	にぶい黄褐色	〃	11.6	〃	〃	〃	〃		
912	8781	碗	碗	A2	Ⅲb		にぶい黄褐色	〃	〃	11.4	6.0	3.5	〃	〃		
913	8674	碗	碗	〃	Ⅲb		〃	〃	〃	11.5	5.5	3.2	〃	〃		
914	8815	碗	碗	〃	Ⅲ		〃	〃	〃	〃	6.4	〃	〃	〃		
915	152	碗	碗	B2	Ⅱ		褐灰色	にぶい褐色	〃	〃	6.8	〃	〃	〃		
916	8652	碗	碗	A2	Ⅳa		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	〃	〃	6.6	〃	〃	〃		
917	〃	碗	碗	B3	表		黄褐色	褐色	〃	〃	6.2	〃	〃	〃		
918	〃	碗	碗	A1・2	Ⅲ		灰白色	灰白色	〃	〃	6.8	〃	〃	〃		
919	2718	碗	Ⅲ	B3	Ⅲ		〃	〃	〃	10.0	〃	2.8	〃	〃		
920	〃	碗	碗	A4	住9		浅黄褐色	浅黄褐色	〃	9.6	4.5	2.7	〃	〃		
921	〃	碗	碗	A1・2	Ⅲ		にぶい褐色	にぶい褐色	〃	10.0	6.0	2.8	〃	〃		
922	〃	碗	台付Ⅲ	B5	土19		にぶい黄褐色	灰白色	〃	13.3	8.0	3.2	〃	〃	45	
923	157	碗	碗	A4	住9		灰白色	にぶい黄褐色	〃	12.8	7.6	2.9	〃	高台		
924	98	碗	碗	B1・2	Ⅲ		浅黄褐色	灰白色	〃	13.0	6.4	2.7	〃	〃	45	
925	172	碗	甕	A4	Ⅲ		にぶい褐色	にぶい褐色	〃	25.0	〃	〃	〃	〃		
926	8626	碗	碗	A2	Ⅲ		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
927	〃	碗	甕	A1・2	Ⅱ		浅黄褐色	浅黄褐色	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
928	〃	碗	紡錘車	A2	Ⅱ		灰黄褐色	にぶい黄褐色	〃	〃	〃	〃	〃	〃		

第5表 平安時代土器一覽 (3)

番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層	分類	色調		調整		法量 (cm)			焼成	備考	図版
							内面	外面	内面	外面	口径	底径	器高			
929		須恵器	壺	A1	Ⅲ		黄褐色	黄褐色	横引き	横引き	11.0		良		45	
930	8885	"	碗	"	Ⅲb		暗灰色	青黒色	"	"	13.1	4.6	"	いびつ		
931	8798	"	"	A2	Ⅲb		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	"	"	8.8		"			
932	8619	"	蓋	"	Ⅲ		にぶい橙色	"	"	"	16.0		"		45	
933	8804	"	甗	"	Ⅲb		暗褐色	暗褐色	敲き目	敲き目			"		"	
934	8615	"	"	"	Ⅲa		灰色	灰白色	"	"			"		"	
935	5283	"	壺	B3	Ⅲ		にぶい黄色	褐灰色	横引き	横引き			"			

第6表 近世遺物一覽

番号	遺物番号	種別	器種	出土区	層	分類	色調		調整		法量 (cm)			焼成	備考	図版
							内面	外面	内面	外面	口径	底径	器高			
936		近世	甗	水路4	Ⅲ		灰色	灰色	鉄釉	鉄釉			良	苗代川焼, 口縁部		
937		"	"	B3	水田溝		暗赤-ブ 褐色	黒色	"	"	17.4		"	苗代川焼, 底部		
938		"	合子蓋	"	"			赤色	"	"			"	琉球焼赤絵 (黄, 青, 緑)	46	
939		"	茶家	B4	"		黄色	黄色	青色釉	青色釉	7.2		"	琉球焼, 沈線の上に青色釉	"	
940		"	"	"	"		灰白色	灰白色, 黄色	"	"			"	琉球焼, 差し口	"	
941		"	蓋	"	"		黄色	黄色	"	"	6.0	3.0	"	"	"	
942		"	台付猪口	"	"		灰色	灰色	そば釉	そば釉	4.2		"	薩摩焼		
943		"	皿	B6	Ⅱ		褐色	褐色	鉄釉	鉄釉	4.6		"	龍門寺焼		
944		"	茶碗	B4	水田溝		灰白色	灰白色	"	"	3.0		"	「一丁」の染付	46	
945		"	"	"	"		"	"	"	"	4.0		"	"	"	
946		"	"	"	"		"	"	"	"	3.6		"	"	"	
947		"	茶家	"	水路溝		白色	白色	"	"			"	白磁, 差し口	"	
948		"	"	B3	水田溝		褐色	褐色	鉄釉	鉄釉			"	苗代川焼, 山茶家, 差し口	"	

第7表 縄文時代石器一覧

番号	遺物番号	出土区	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	図版
137	3759	A5	石鏃	1.0	1.1	0.3	0.3	黒曜石	25
138	6562	〃	〃	2.2	1.7	0.5	1.6	〃	〃
139	4433	A3	〃	2.1	1.4	0.5	1.0	〃	〃
140	8166	B3	〃	1.6	1.2	0.4	0.7	〃	〃
141		住20	〃	1.9	1.2	0.3	0.6	〃	〃
142		A5	〃	1.8	1.6	0.3	0.8	鉄石英	〃
143		A3	錐	2.8	1.3	0.7	2.5	頁岩	〃
144	7701	B3	石鏃未製品	2.4	1.7	0.6	2.9	黒曜石	〃
145	6579	A5	石匙	2.8	2.2	0.9	5.9	〃	〃
146		A3	〃	2.3	4.5	0.5	5.1	玉髓	〃
147	7652	B3	〃	2.2	4.0	0.6	5.2	淡白石	〃
148	6249	〃	スクレイパー	3.2	3.1	0.8	9.1	黒曜石	〃
149		A3	ピエス	3.8	3.1	1.2	13.4	〃	〃
150	7244	A4	スクレイパー	5.2	3.3	1.7	27.4	〃	〃
151		A6	〃	2.8	3.2	1.3	11.9	〃	〃
152	4909	A4	〃	2.1	2.0	0.9	4.1	〃	〃
153		A5	〃	2.7	1.4	0.9	2.6	〃	〃
154	7213	A4	〃	3.1	2.9	1.0	7.4	〃	〃
155	4127	A3	UF	4.3	3.3	0.9	13.9	〃	〃
156	4620	A5	スクレイパー	2.7	1.9	0.9	3.8	〃	〃
157	3504	〃	ピエス	3.5	2.2	1.1	9.1	〃	〃
158	6177	B3	コアの割れ	1.8	2.2	1.3	5.5	〃	〃
159		B5	磨製石斧	10.0	6.0	1.7	193	安山岩	26
160		A2	〃	8.8	5.1	3.1	187	頁岩	〃
161	5149	A3	〃	8.0	4.9	1.4	59.3	〃	〃
162	1684	〃	打製石斧	6.3	4.6	1.3	64.6	〃	〃
163	7003	A5	スクレイパー	10.0	3.0	1.1	28.9	安山岩	〃
164	6771	A4	敲石	13.8	7.7	7.2	1150	〃	〃
165	8794	A2	凹石	8.0	8.2	5.3	550	〃	〃
166	8111	住20	石皿	23.5	21.0	5.0	3900	〃	27
167	8082	住13	凹石	13.0	9.5	7.5	1370	〃	〃
168	8007	住9	〃	11.5	8.2	5.0	780	〃	〃
169	6240	B3	凹石,磨石	10.0	9.5	6.0	950	〃	〃
170		土坑30	〃	9.5	9.0	7.2	840	〃	〃
171		A4	大珠	3.5	2.0	1.3	9.6	蛇紋岩	26

第8表 弥生時代石器一覽

番号	遺物番号	出土区	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	図版
195		溝4	石包丁	5.5	3.0	0.5	11.5	頁岩	30
196	8886	A1	〃	6.3	3.5	0.5	12.8	〃	〃
197	4024	B5	砥石	8.8	4.5	1.1	48.4	〃	〃
198	7957	B3	〃	6.0	4.0	0.9	22.5	〃	〃

版 圖



武遺跡調査前遠景



武遺跡調査開始

図版2



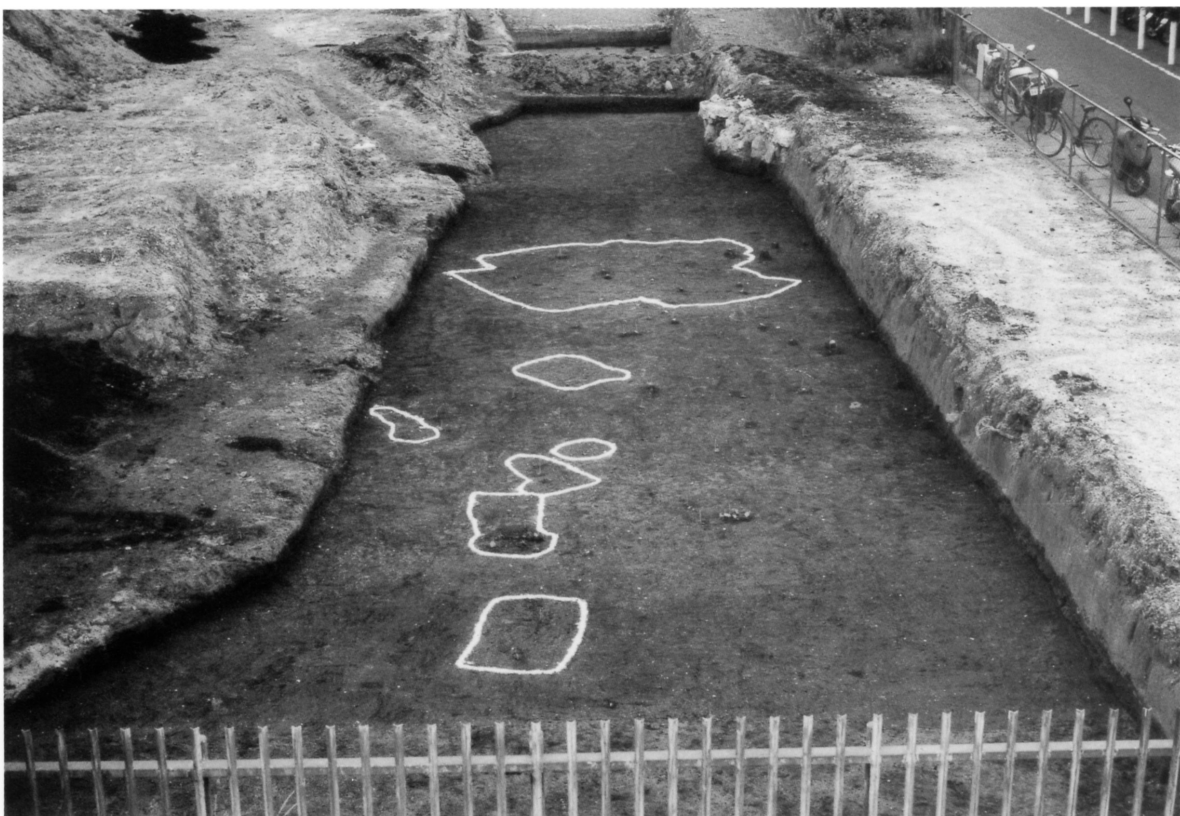
武 A 遺跡の遺物出土状況



武 A 遺跡の遺物出土状況



武A遺跡の層位



武A遺跡の遺構検出状況

図版4



第1号竪穴住居跡の検出状況



第2号竪穴住居跡の検出状況



井戸跡検出状況



井戸跡検出状況

図版6



武B遺跡の遺物出土状況



武B遺跡の遺物出土状況



武C遺跡の近世溝検出状況



武C遺跡の近世溝検出状況

図版8



武C遺跡の遺物出土状況



武C遺跡の遺物出土状況



武C遺跡の遺物出土状況



武C遺跡の遺物出土状況

図版10



第5号竪穴住居跡の検出状況



第13号竪穴住居跡の検出状況



第9号竪穴住居跡の検出状況



第15号竪穴住居跡の検出状況

図版12



溝4 検出状況



溝5 検出状況



武C遺跡の層位



武B・C遺跡全景

图版14



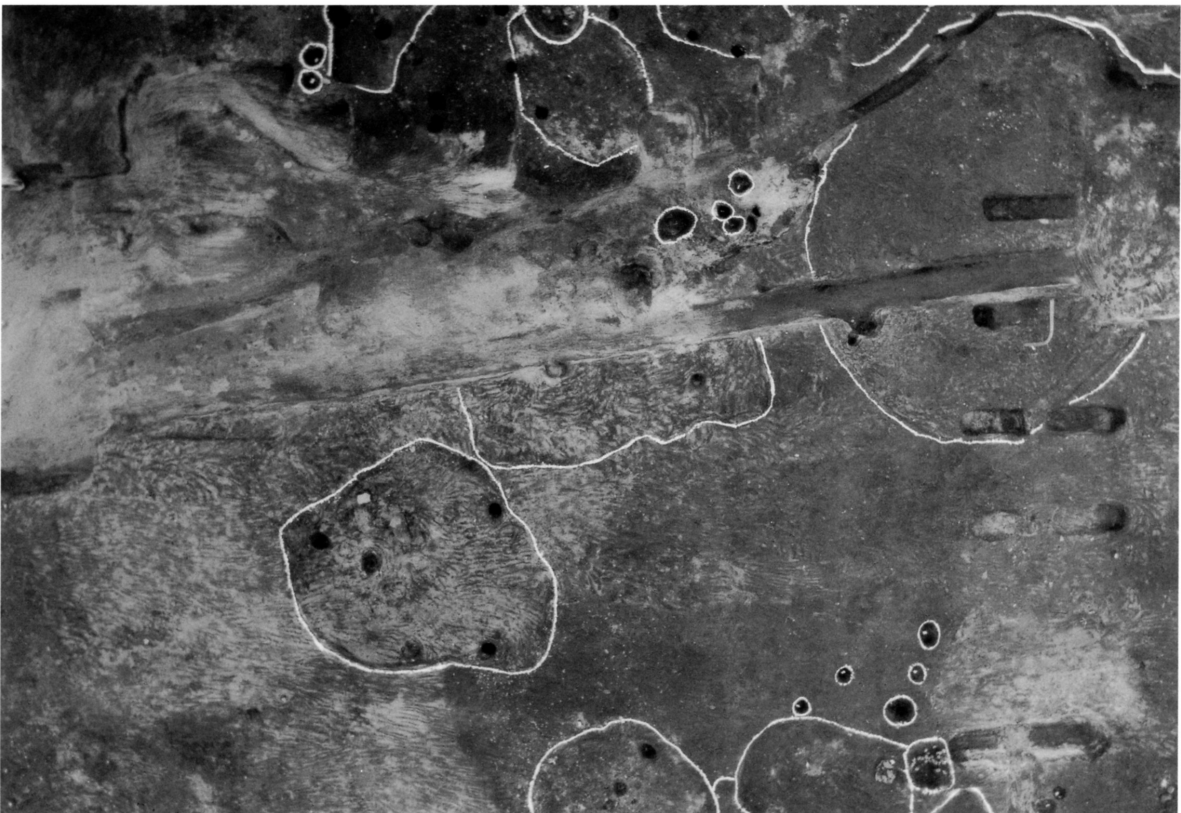
全体遺構空中写真



部分遺構空中写真



部分遺構空中写真



部分遺構空中写真

图版16



部分遺構空中写真



部分遺構空中写真



発掘体験



溝2の断面



第2号竪穴住居跡の甕型土器



第13号竪穴住居跡の壺型土器



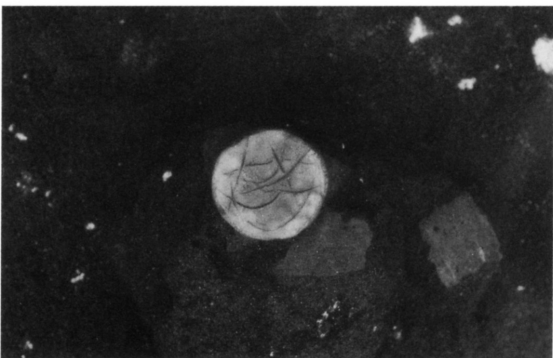
溝4の出土状況



溝4の出土状況



溝4の出土状況



線刻土器の出土状況

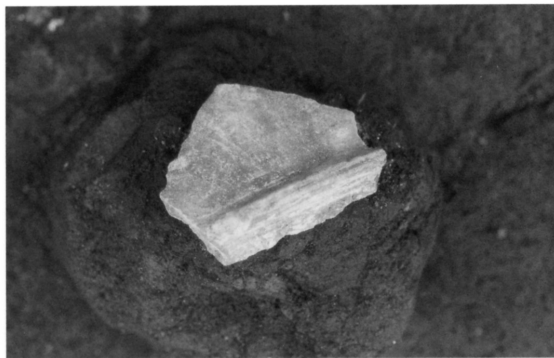
图版18



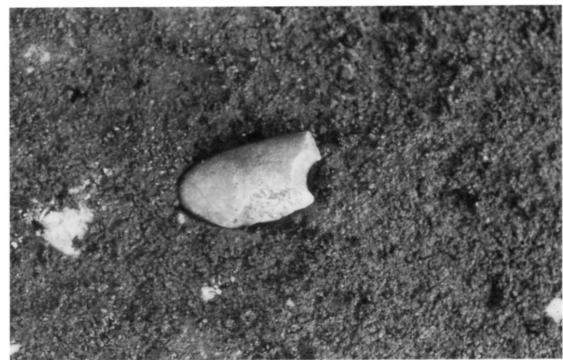
兔田式土器出土状况



高杯出土状况



弥生土器出土状况



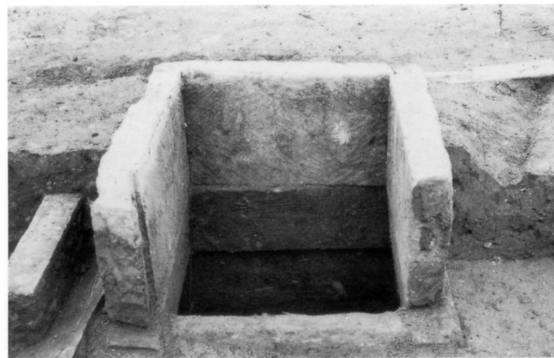
大珠出土状况



縄文土器出土状况



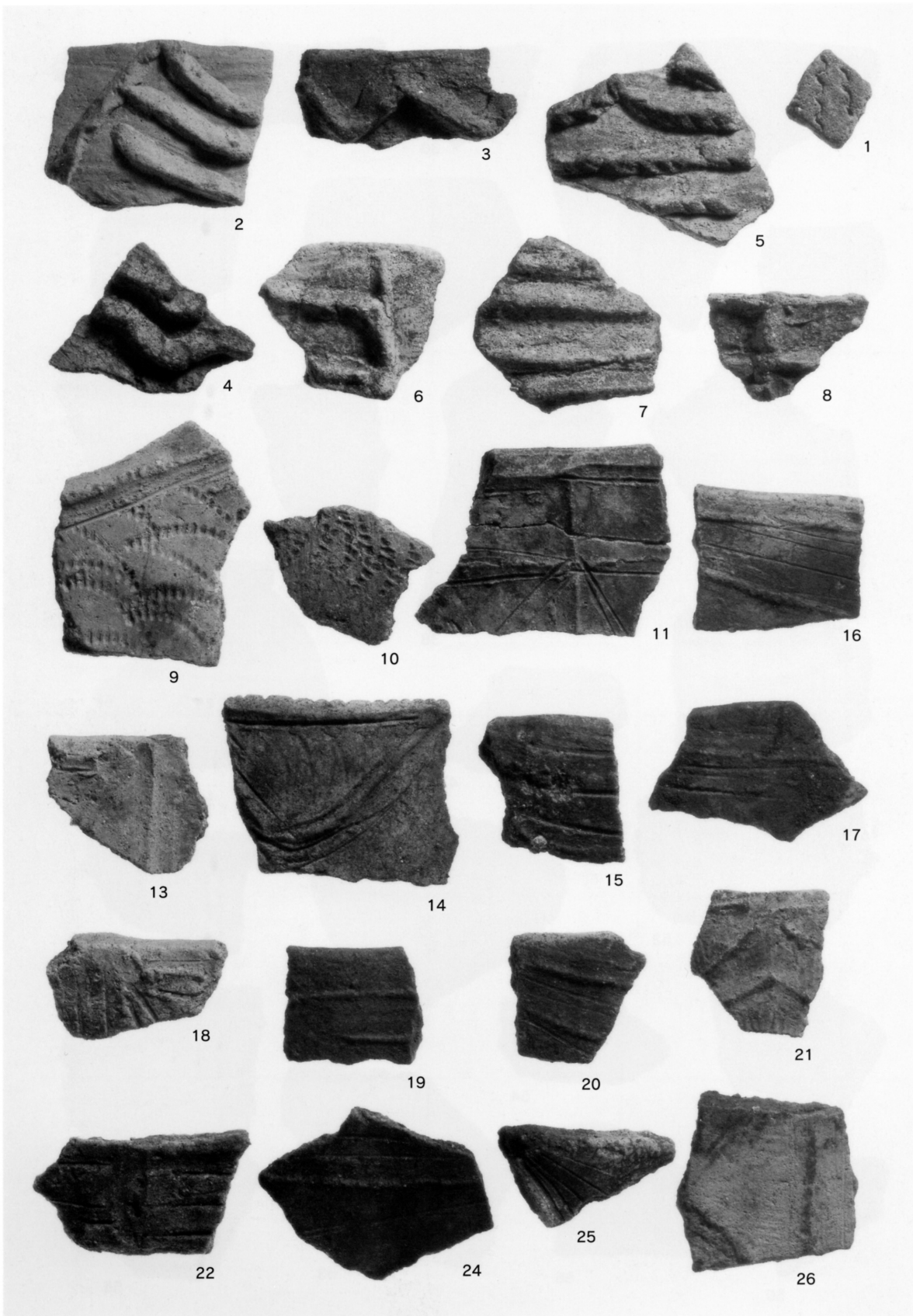
縄文土器出土状况



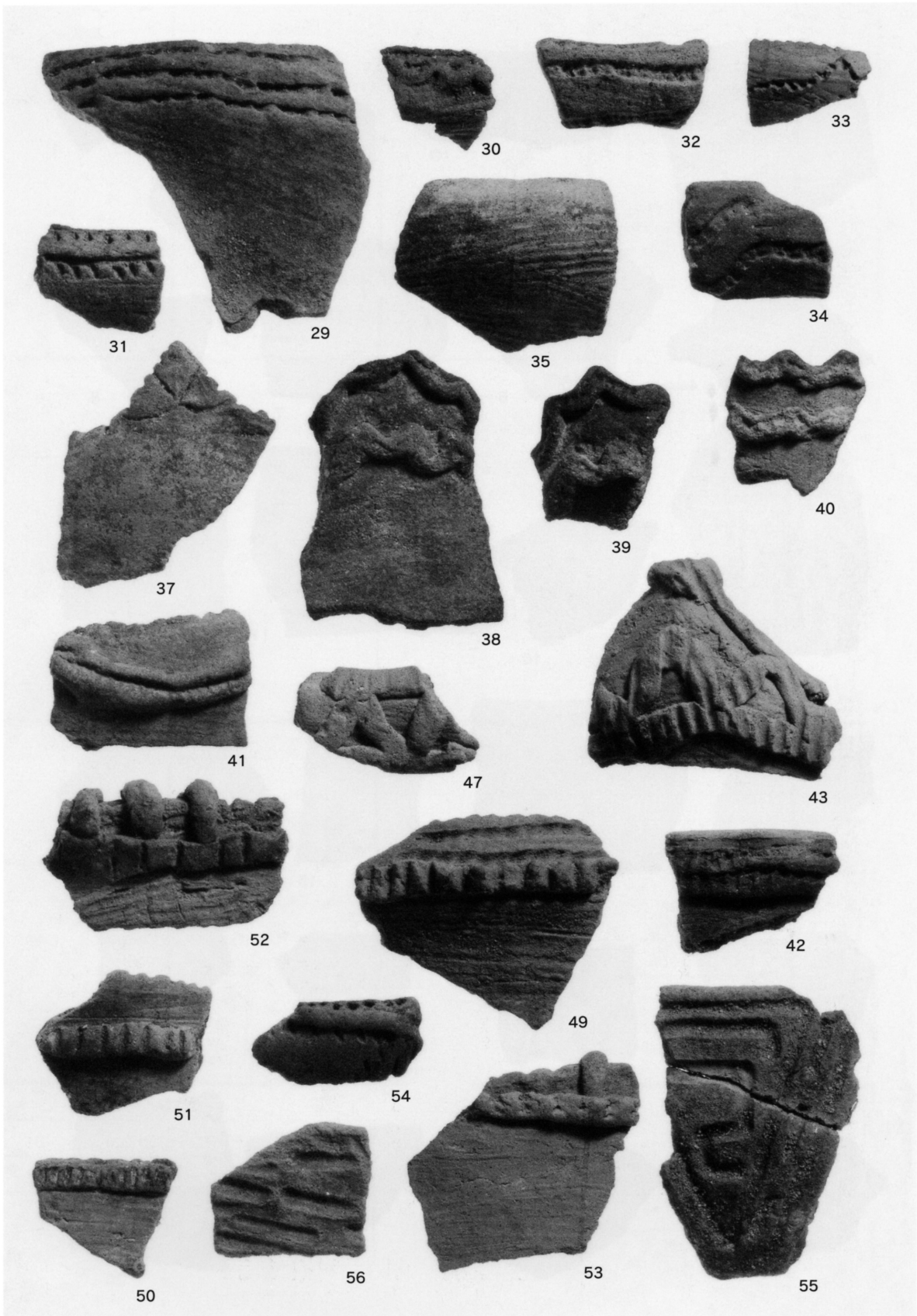
井戸跡上部



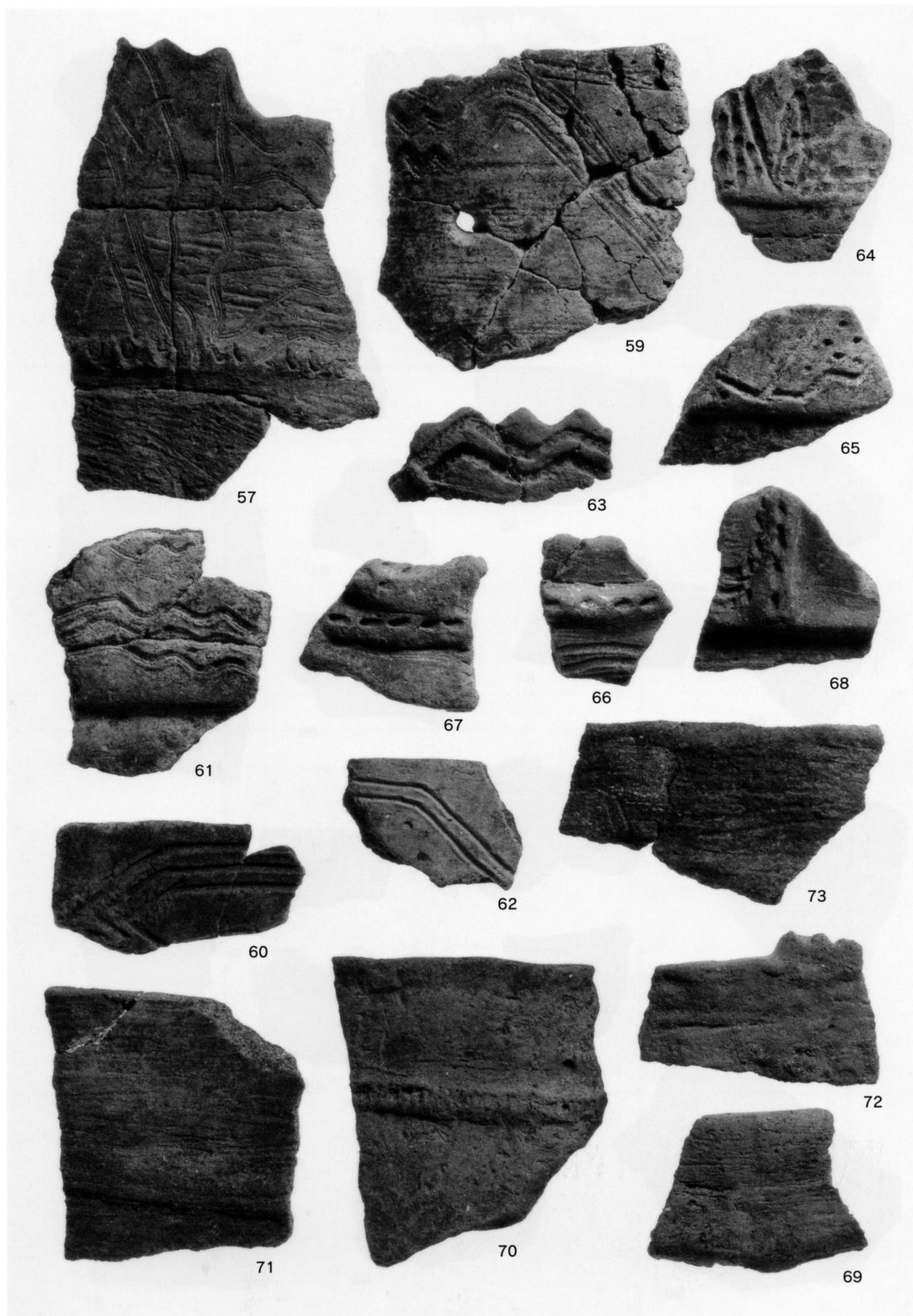
井戸跡床面



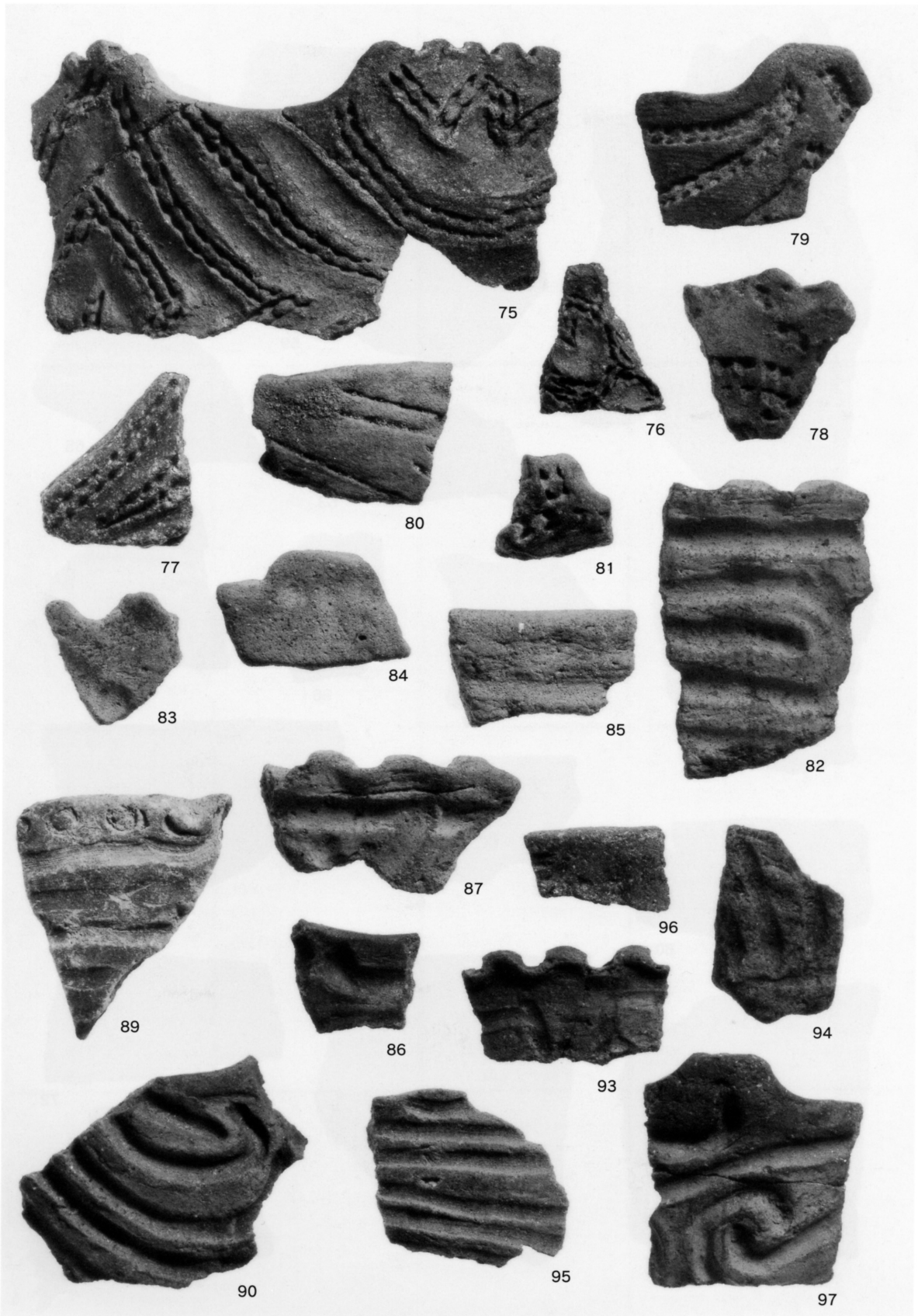
縄文土器第1～4類



繩文土器第6・7類



繩文土器第8類

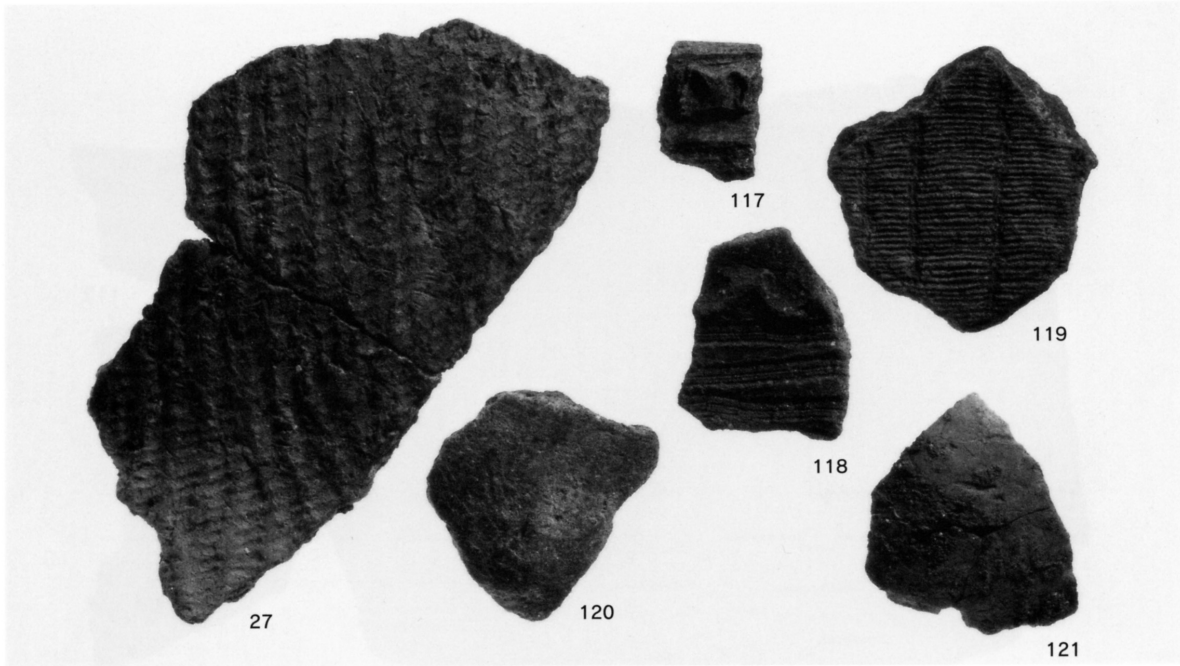


繩文土器第9・10類

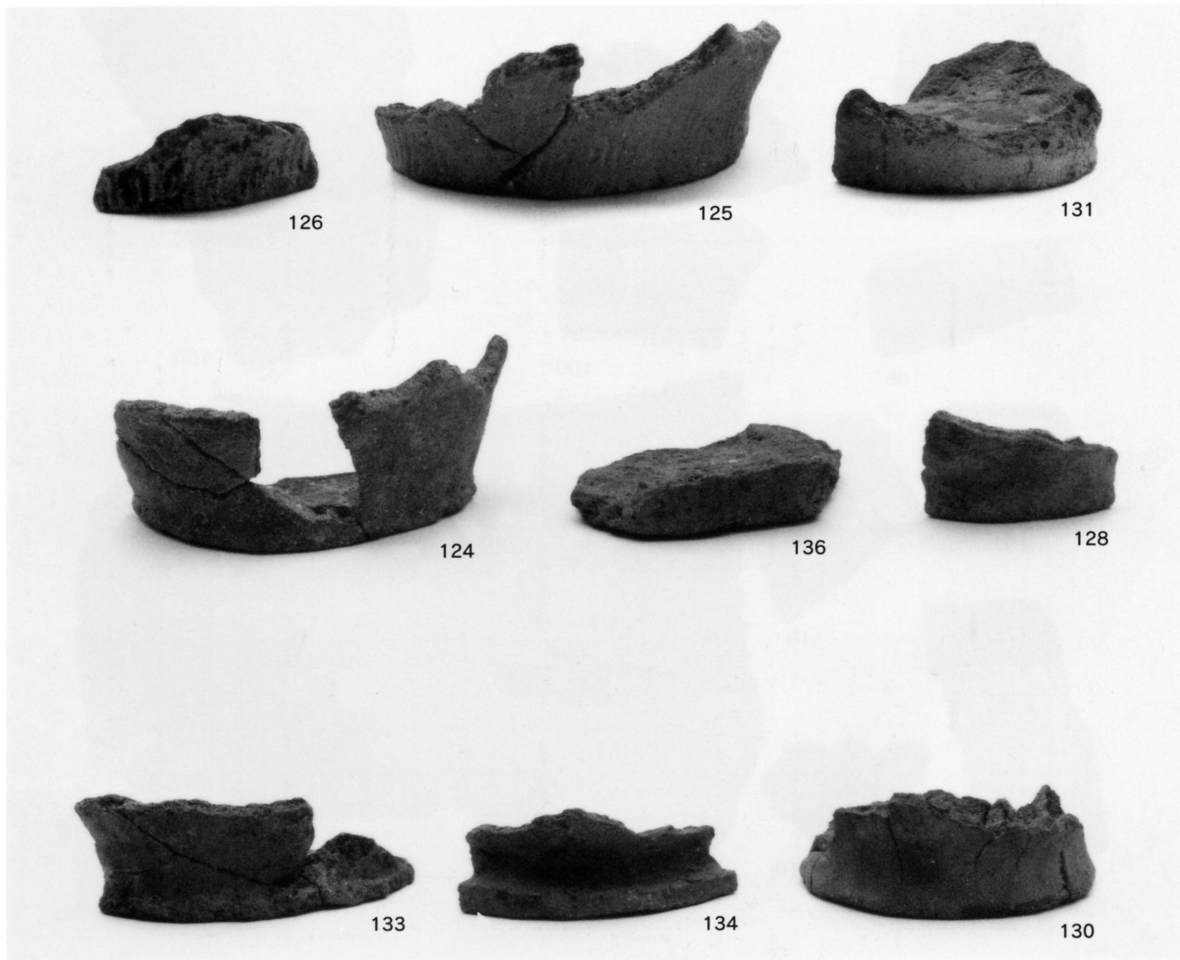


縄文土器第11～14類

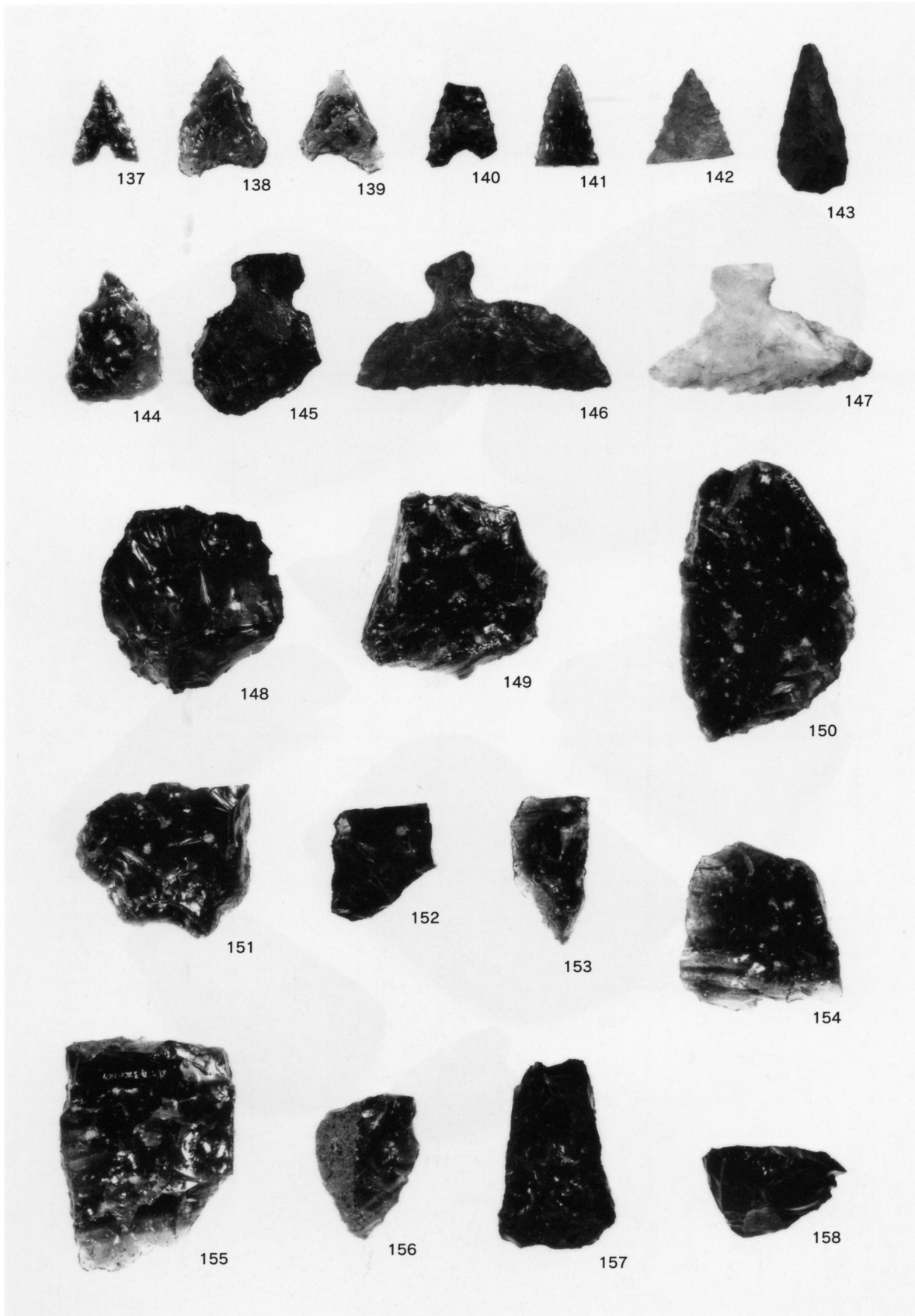
圖版24



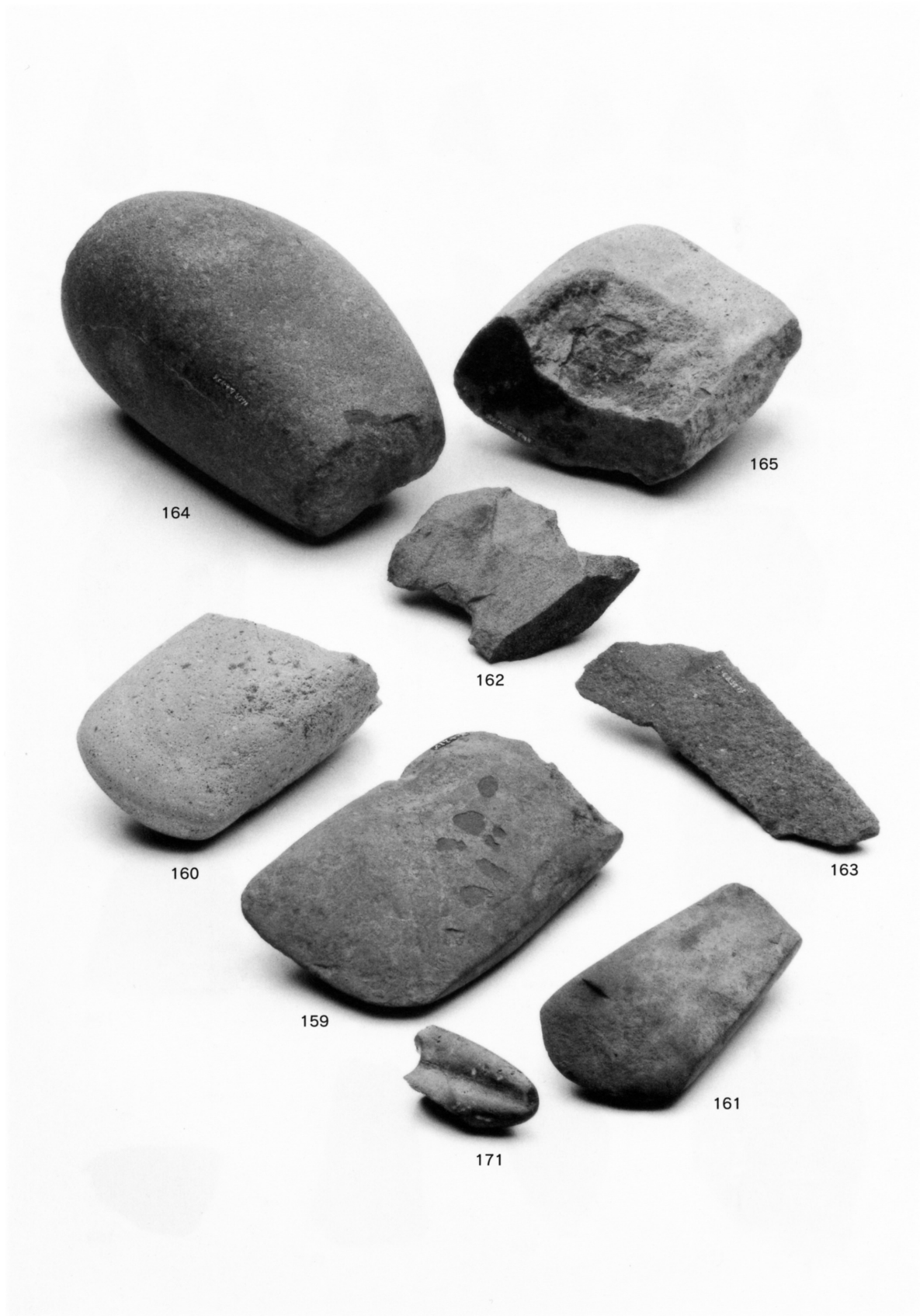
繩文土器 第5・15類, 底部



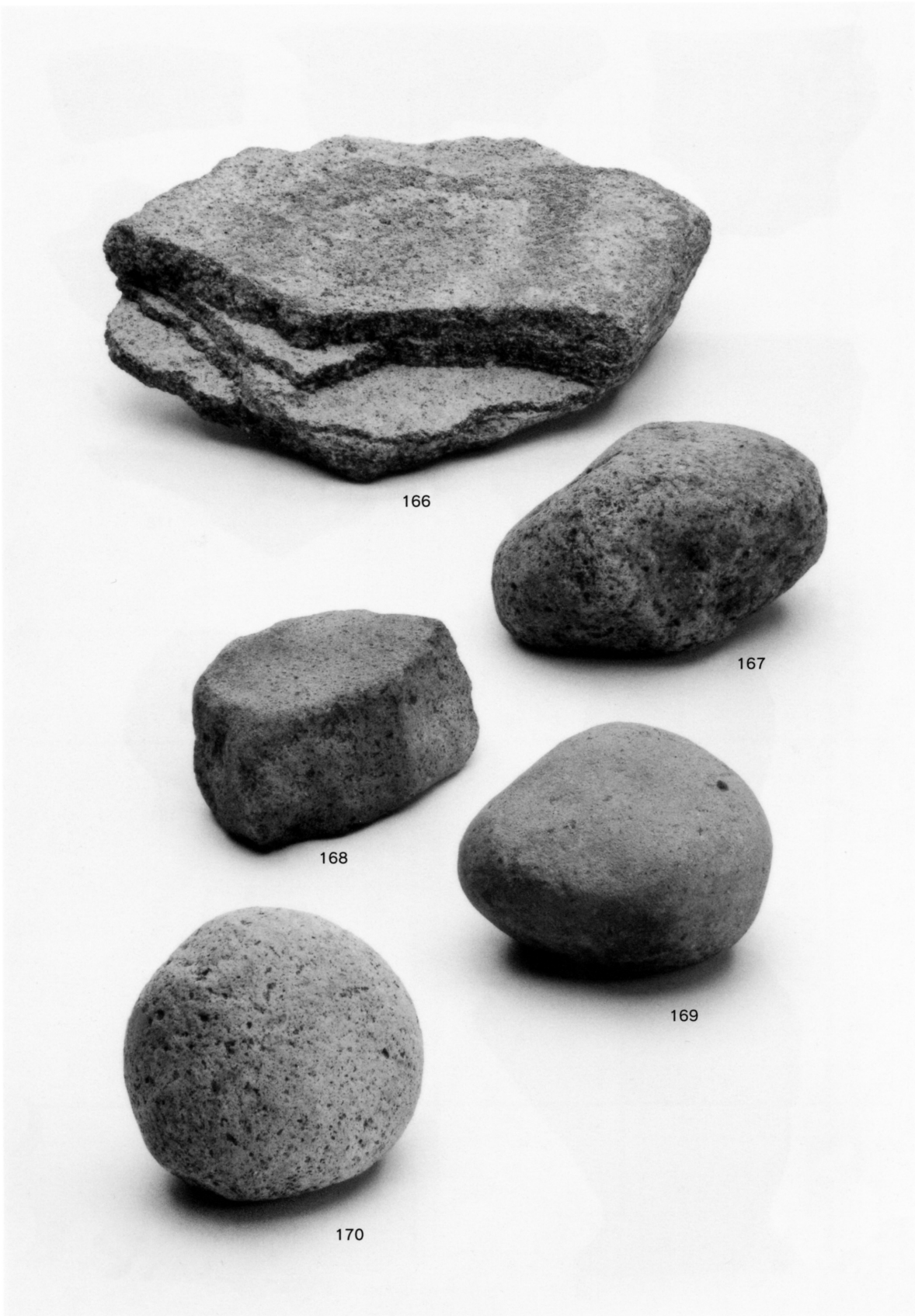
底部



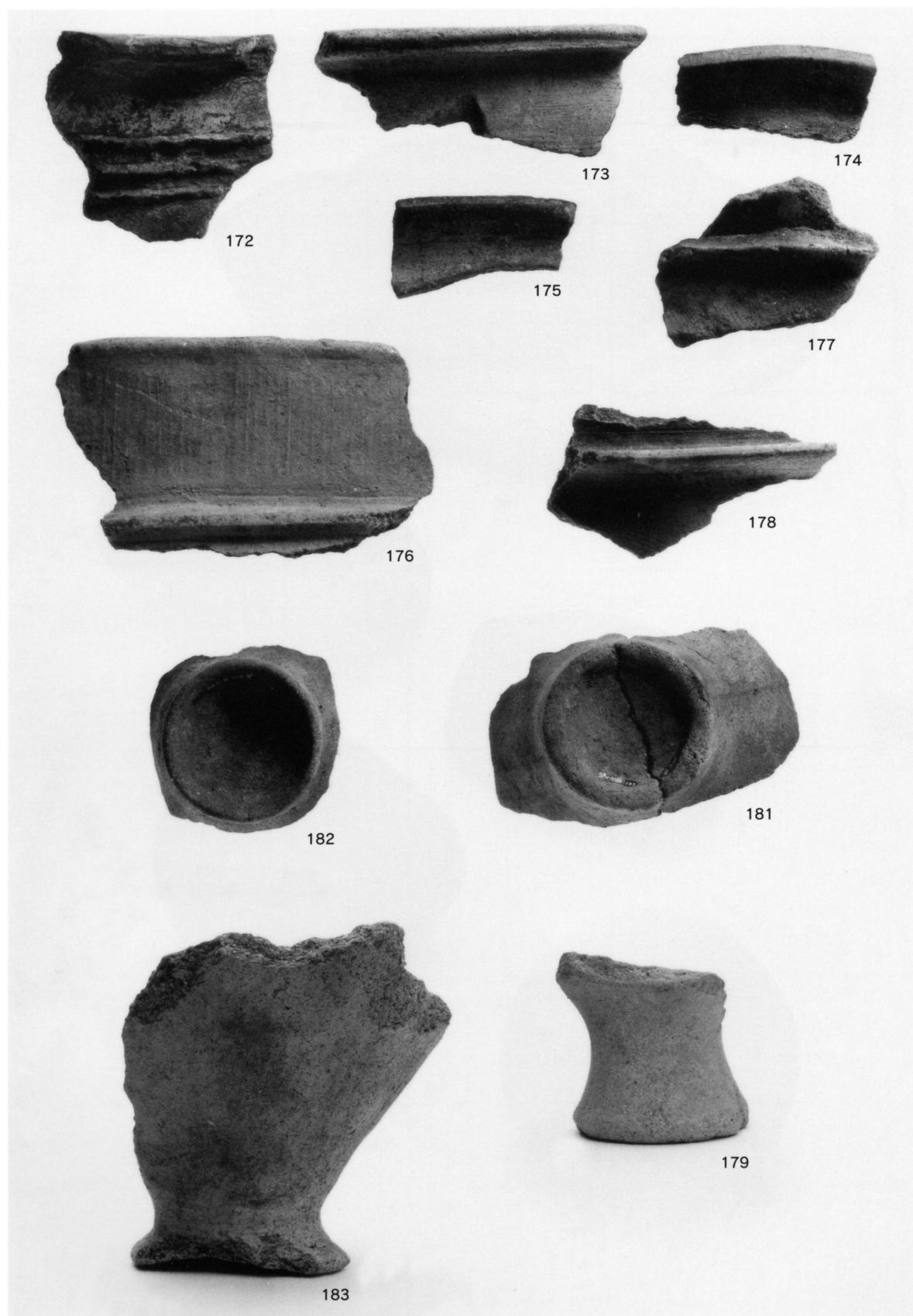
縄文時代の石器（1）



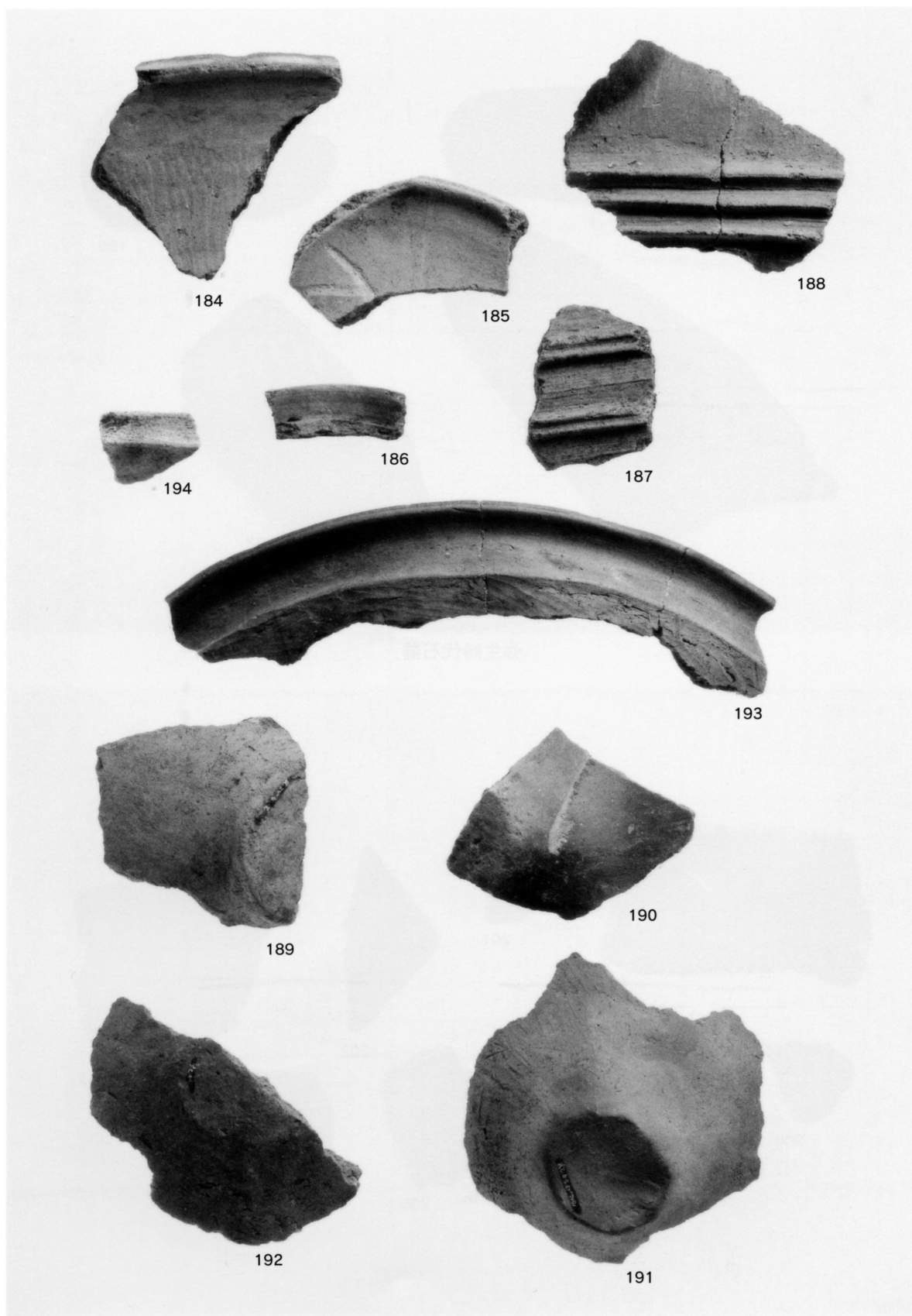
縄文時代の石器（2）



縄文時代の石器（3）

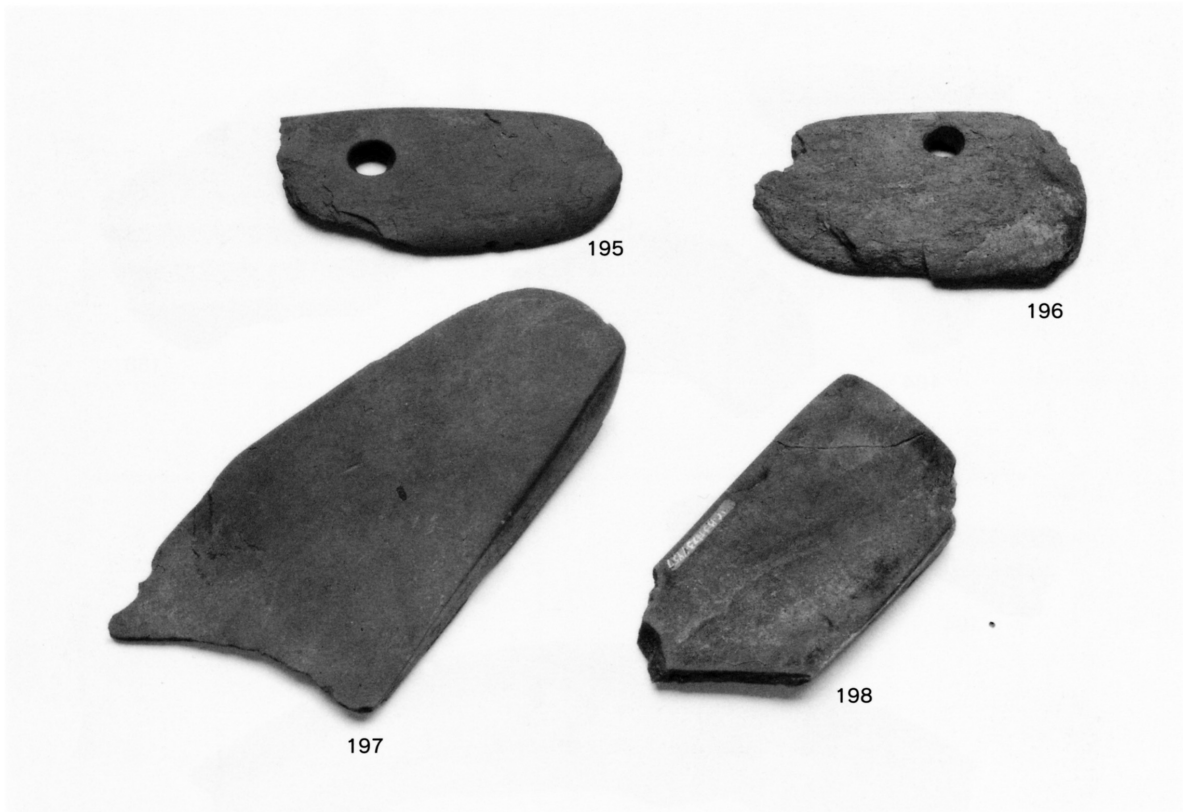


弥生土器 (1)

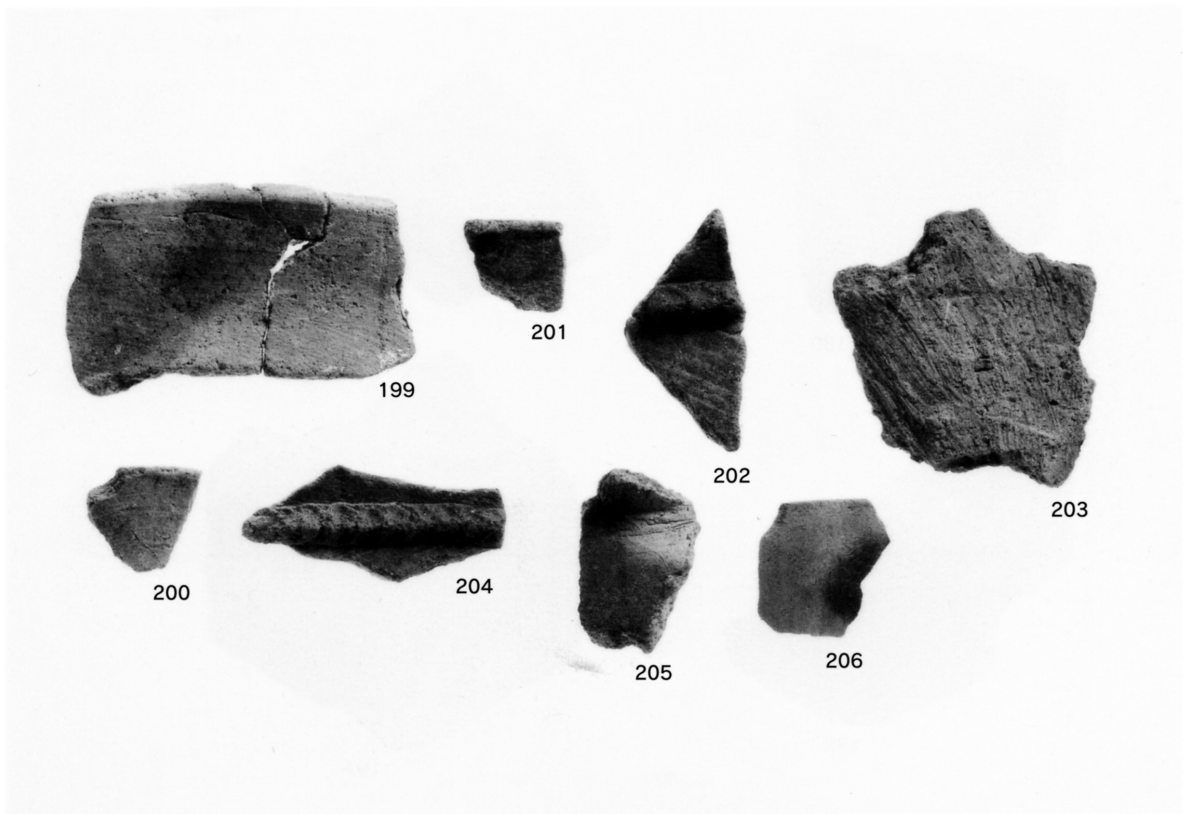


弥生土器 (2)

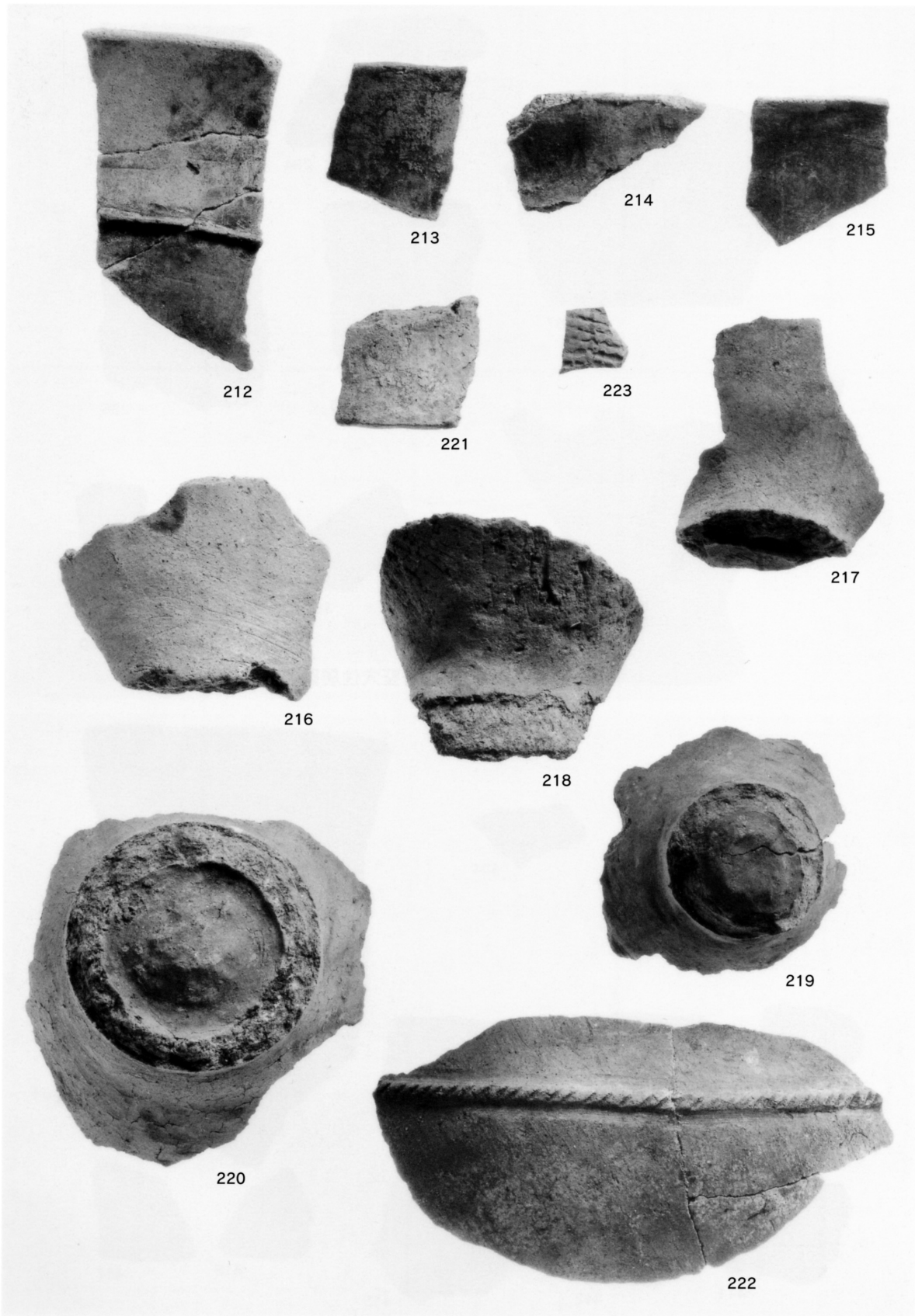
図版30



弥生時代石器

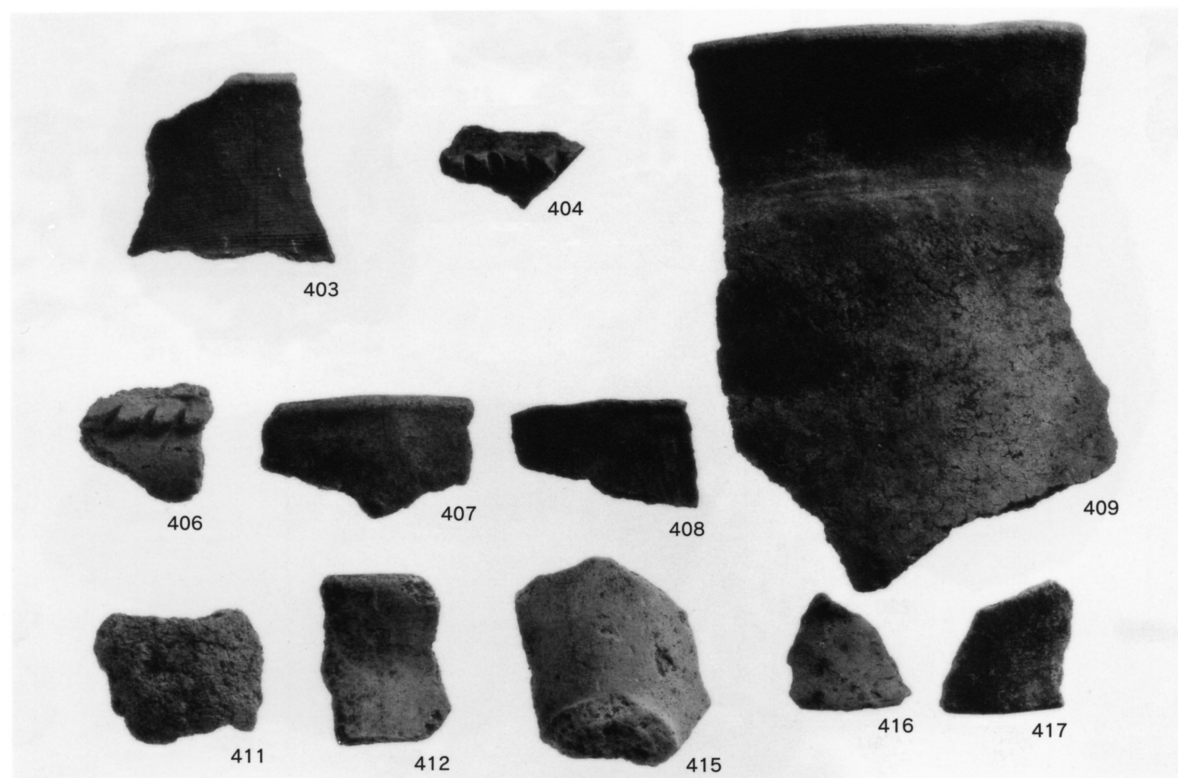


第1号竪穴住居跡の出土遺物

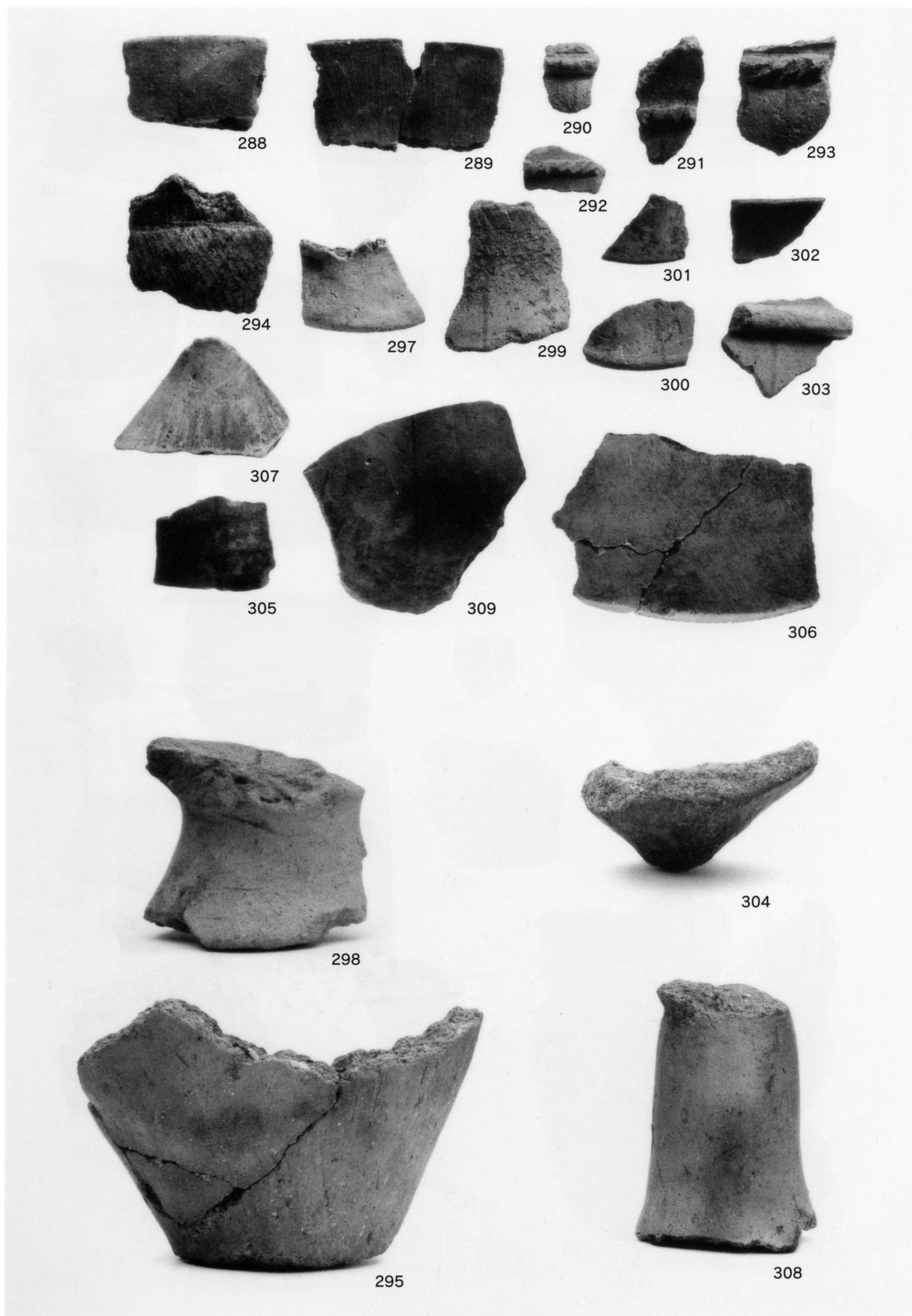


第2号竖穴住居跡の出土遺物

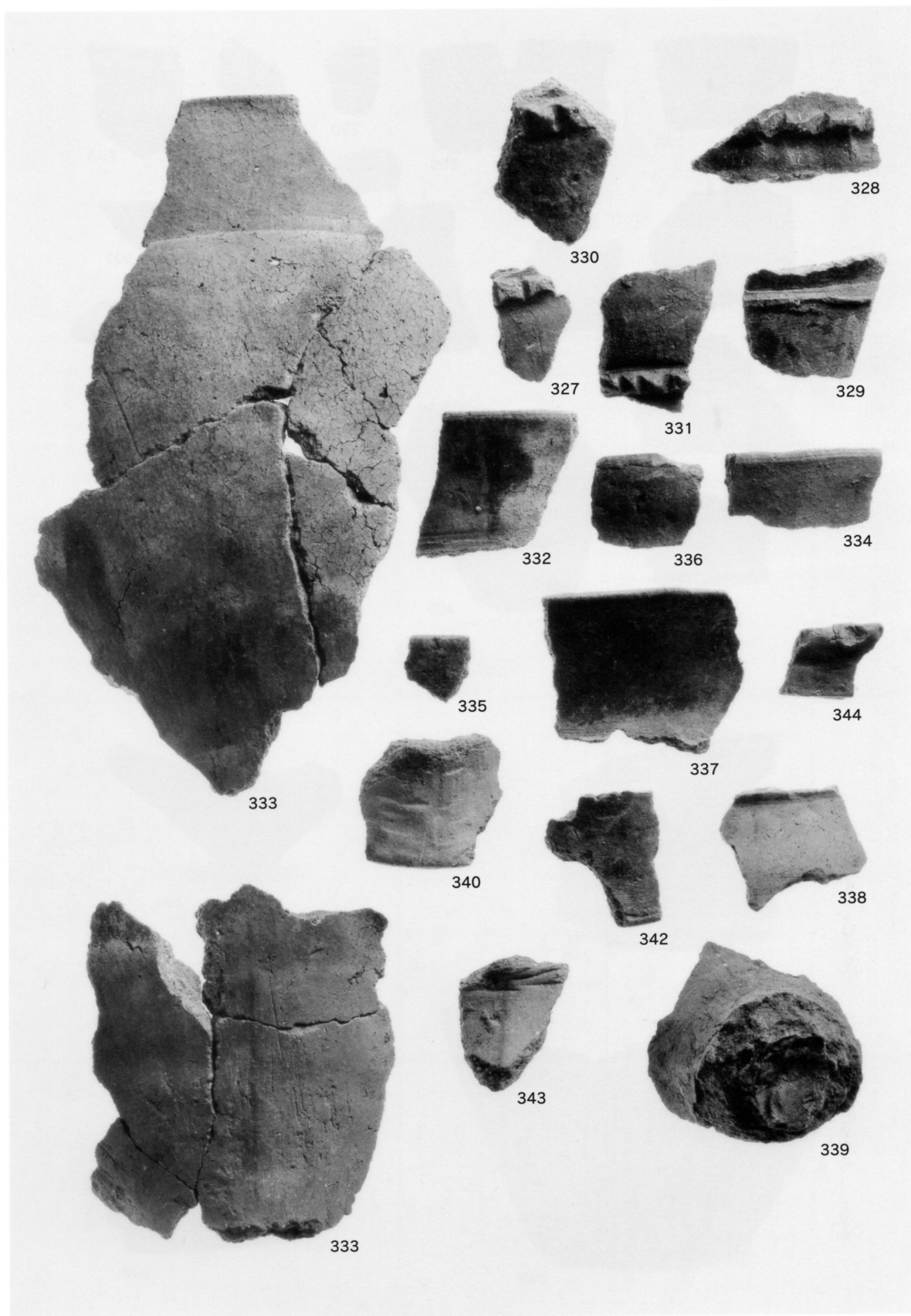
図版32



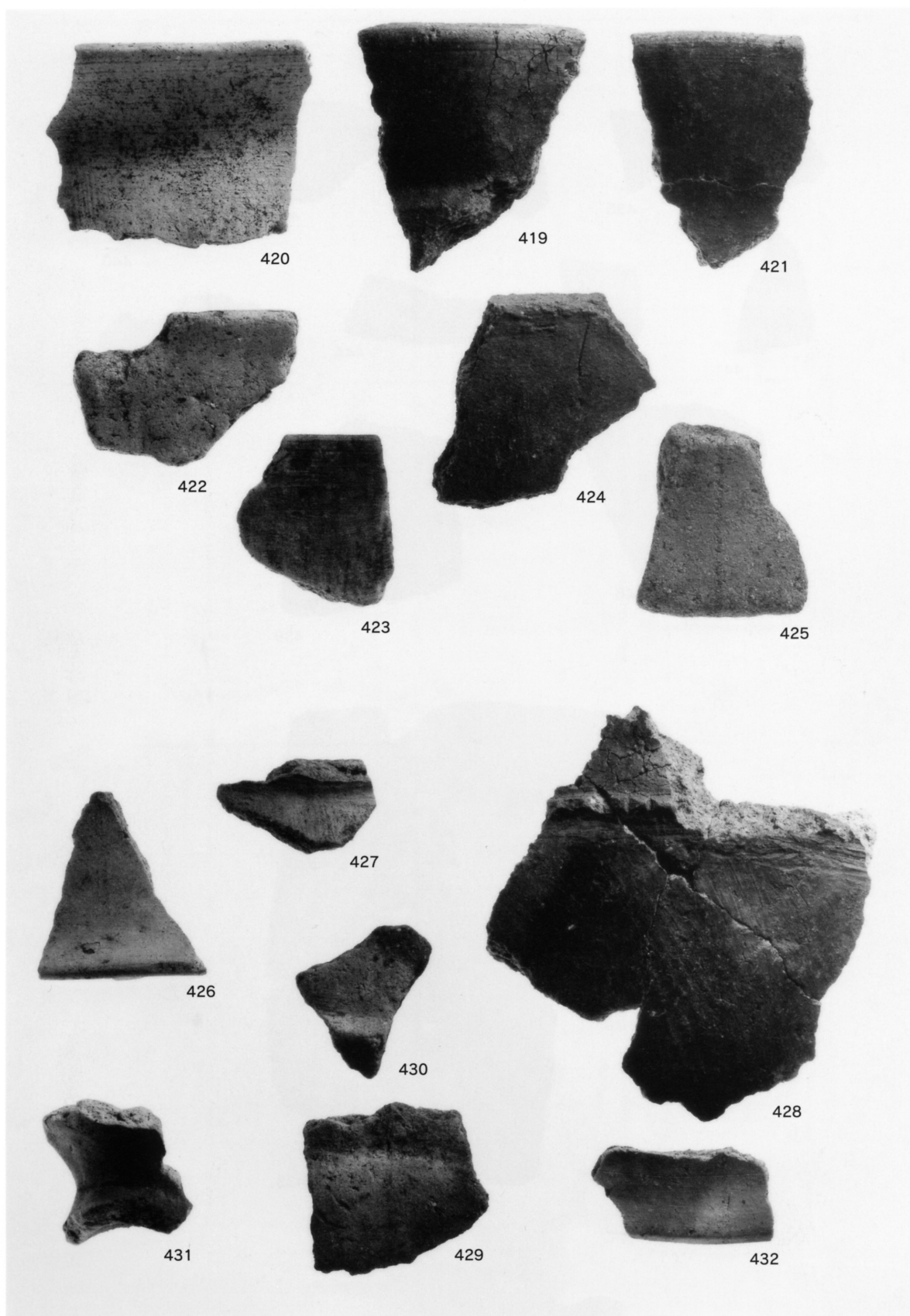
第15号竪穴住居跡の出土遺物



第9号竖穴住居跡の出土遺物

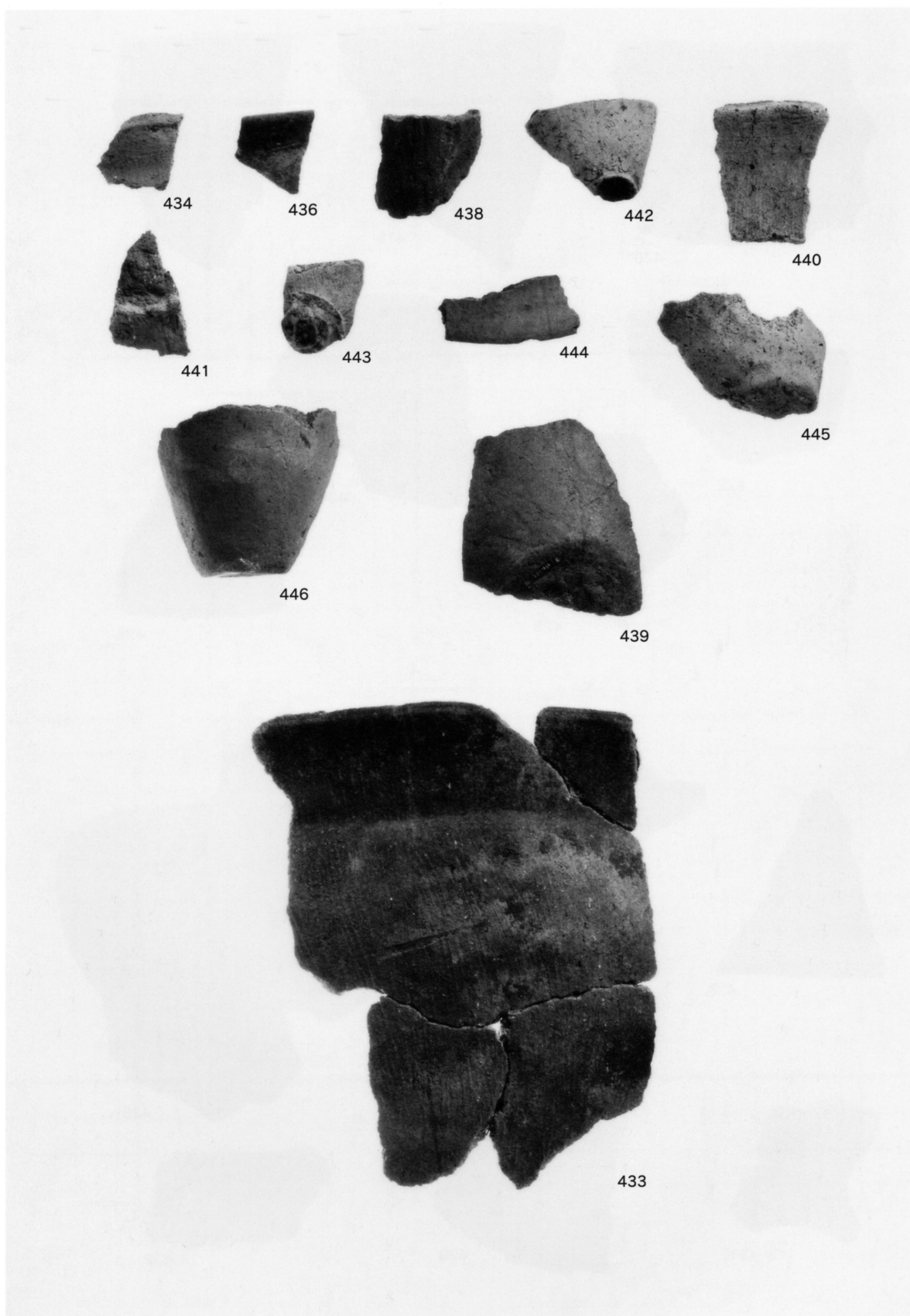


第13号竪穴住居跡の出土遺物

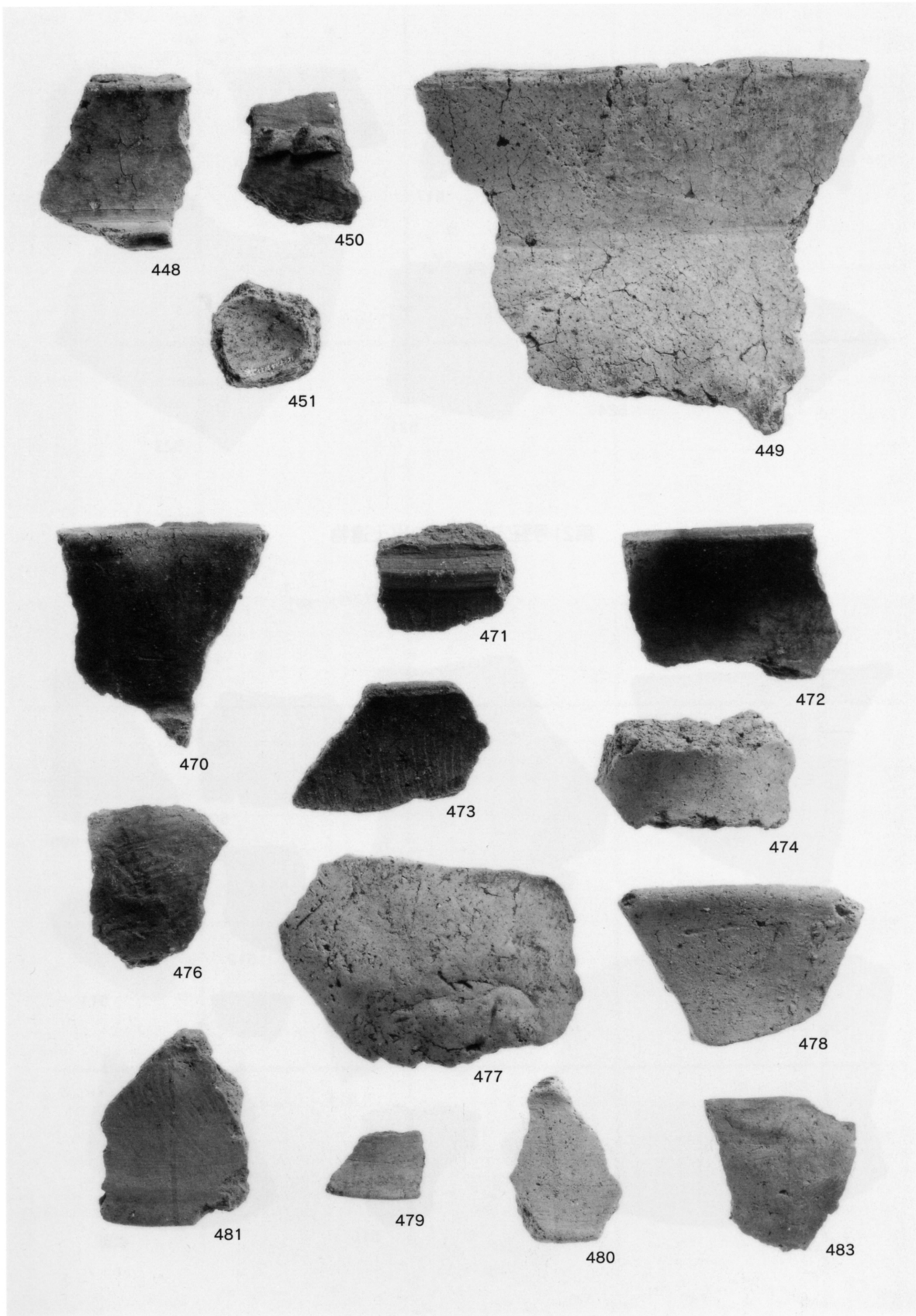


第16号竖穴住居跡の出土遺物

図版36

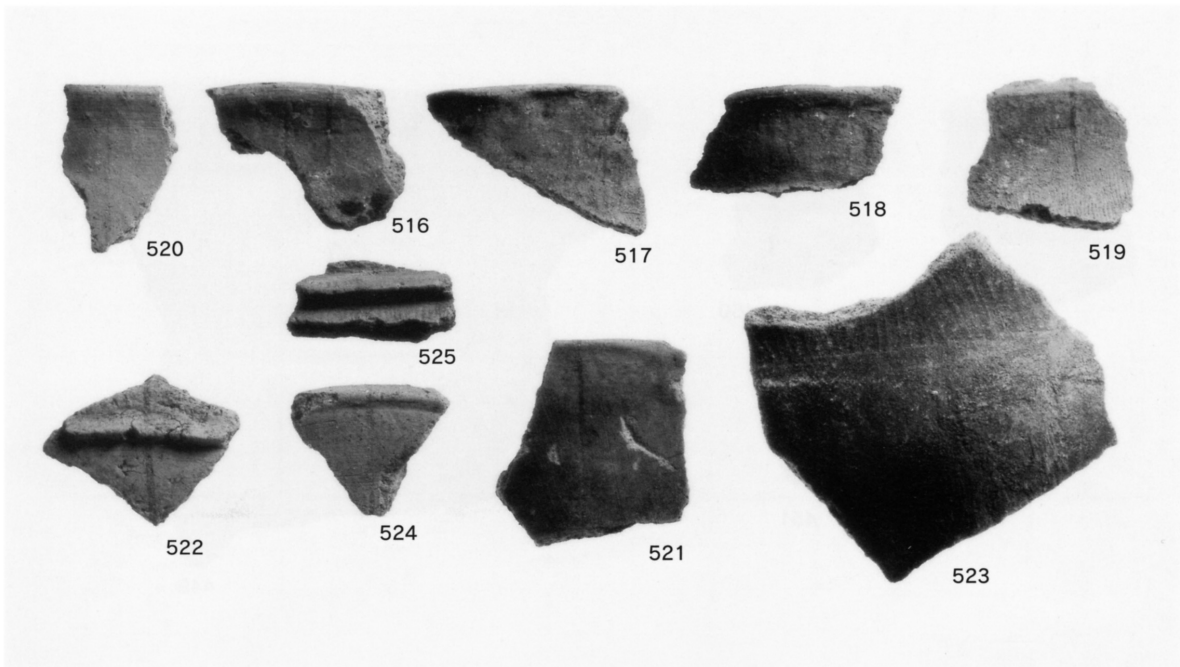


第17号竪穴住居跡の出土遺物

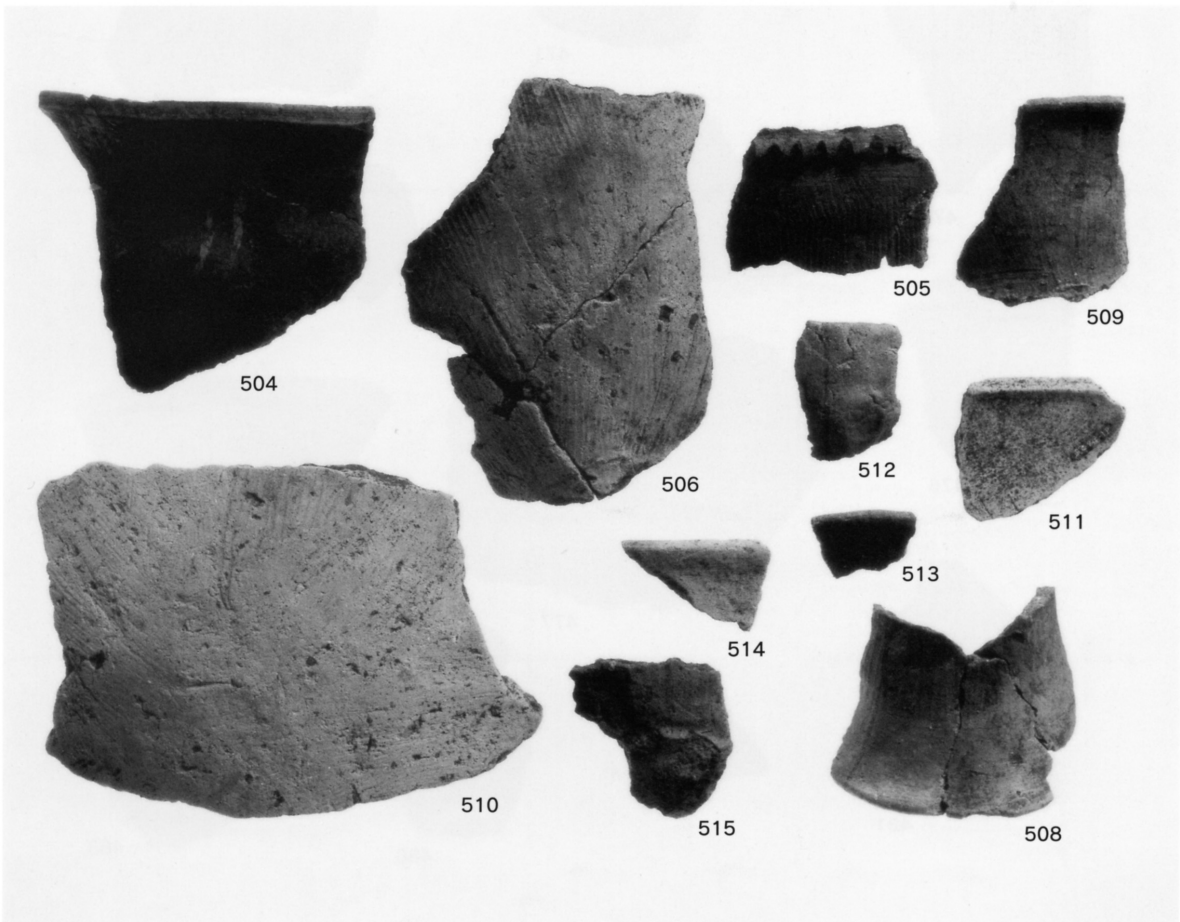


第18号竪穴住居跡の出土遺物

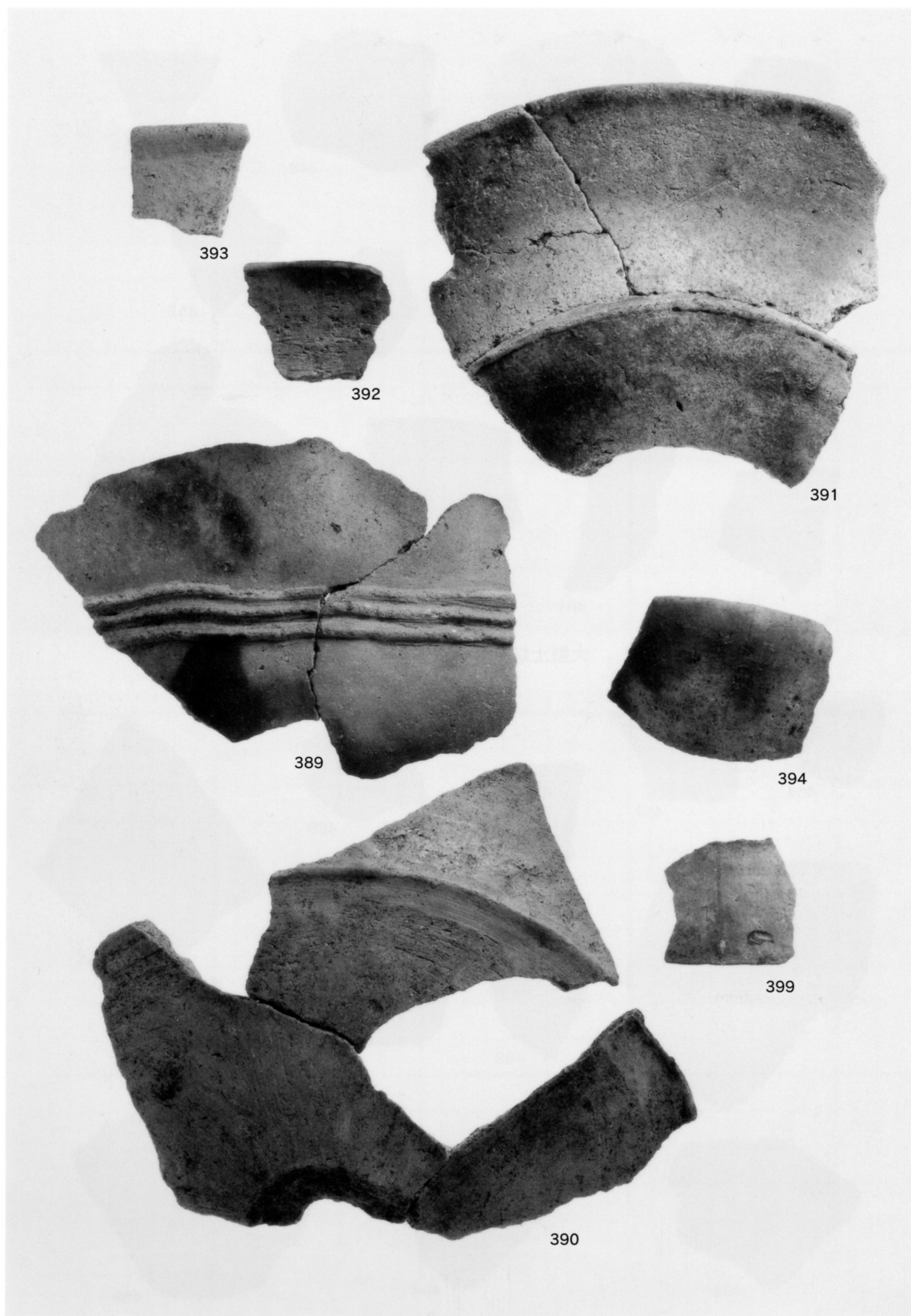
図版38



第21号竖穴住居跡の出土遺物

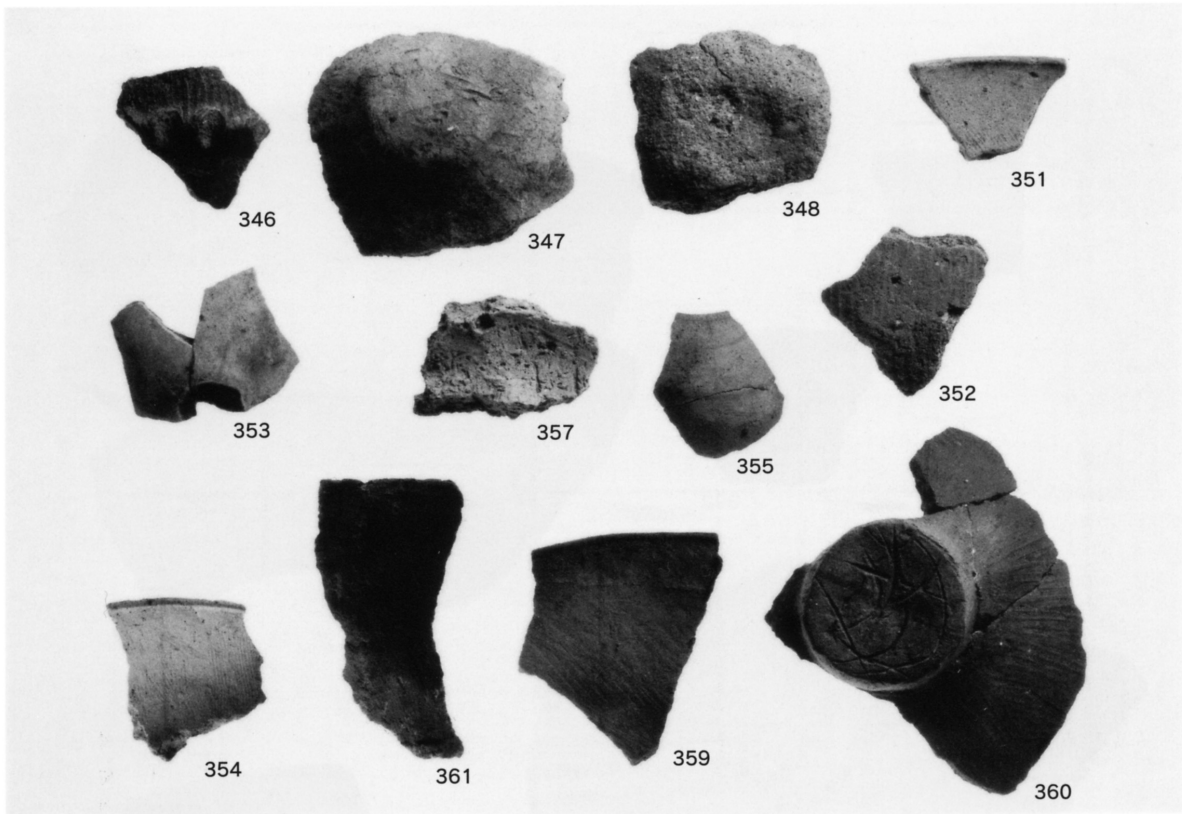


大型土坑12・土坑36の出土遺物

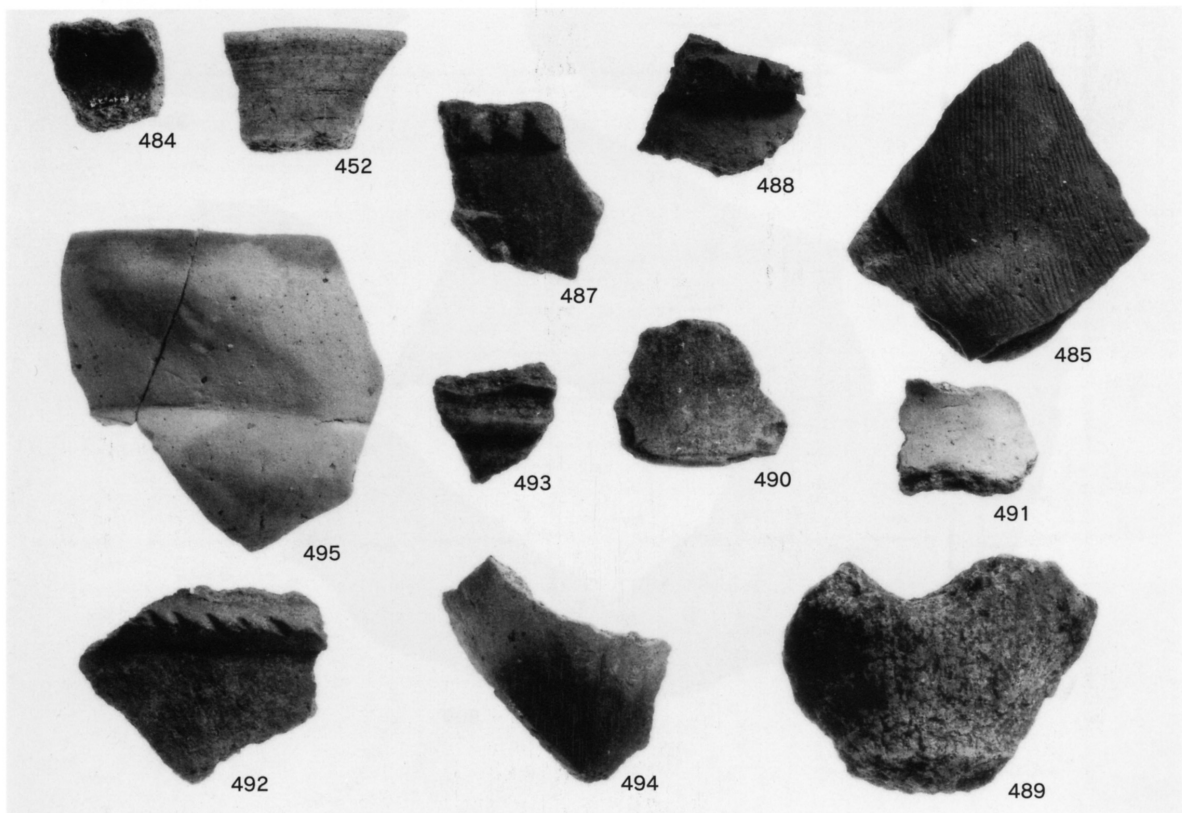


大型土坑11の出土遺物(1)

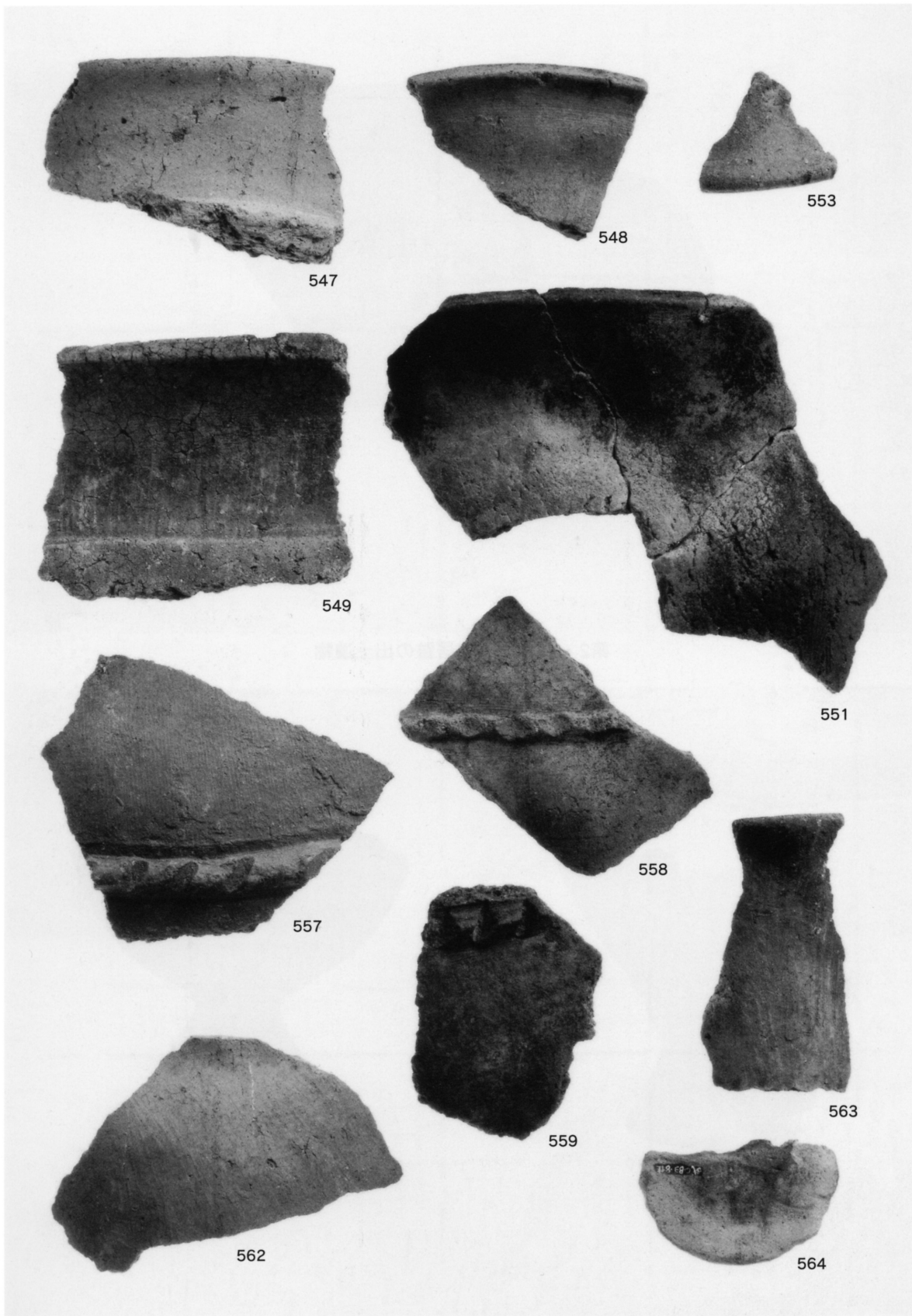
図版40



大型土坑11の出土遺物（2）



土坑32、ピットの出土遺物



第23号竖穴住居跡の出土遺物

図版42



第2・13号竪穴住居跡の出土遺物



溝4の出土遺物

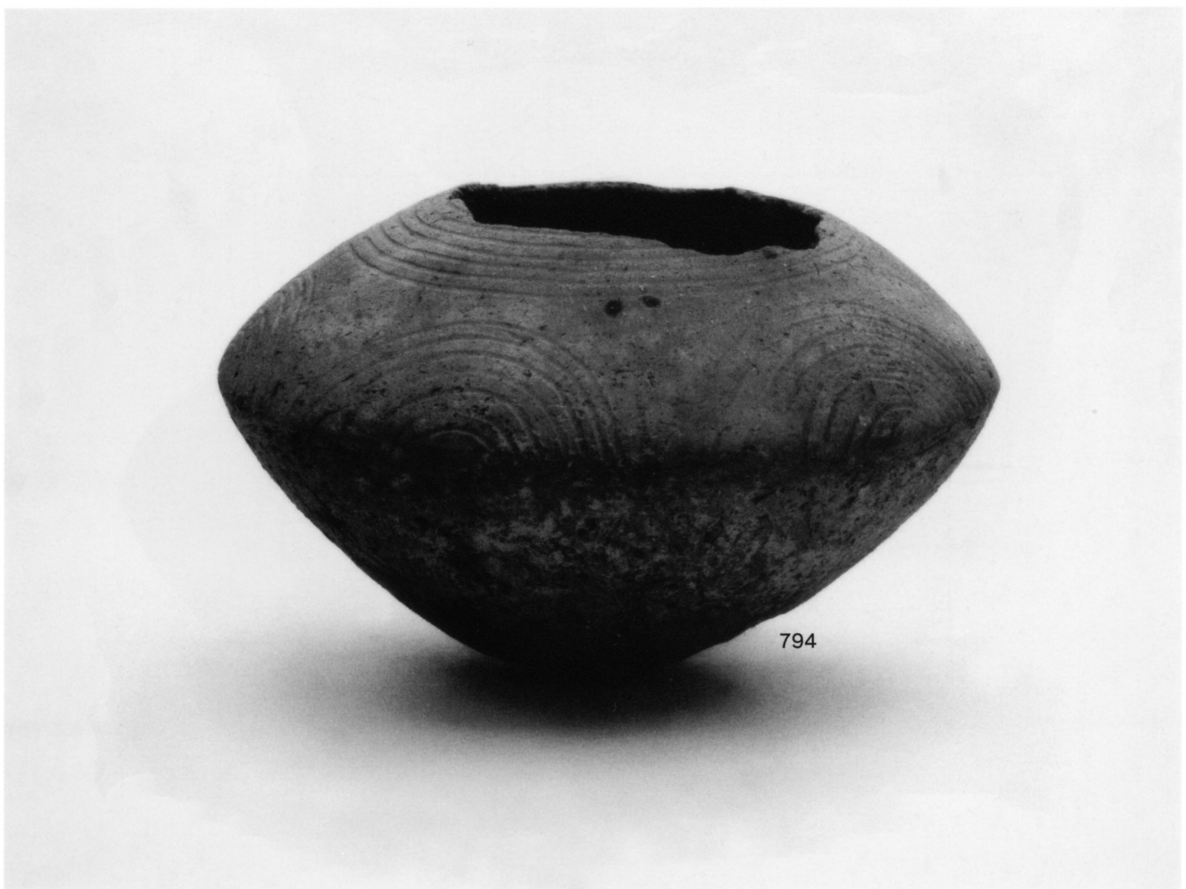


溝4の出土遺物

图版44



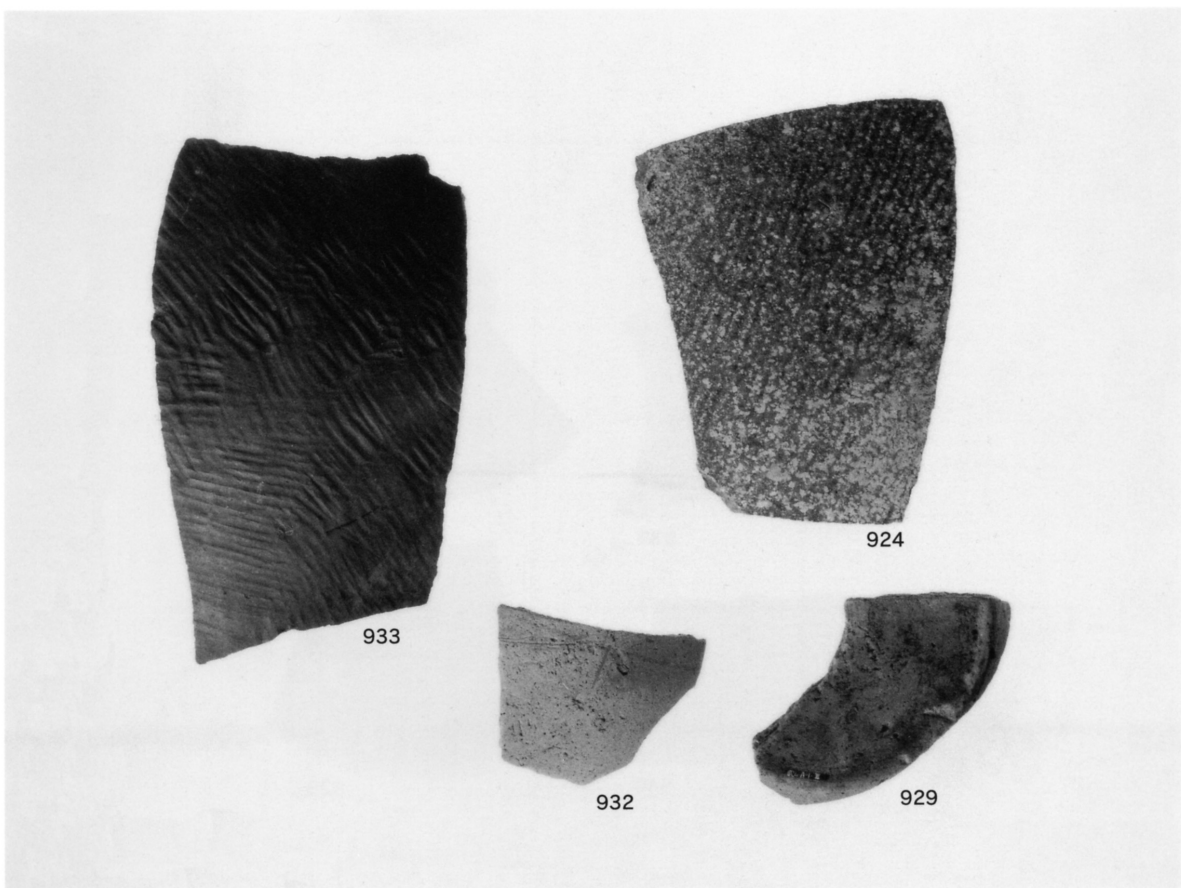
盖



兔田式土器

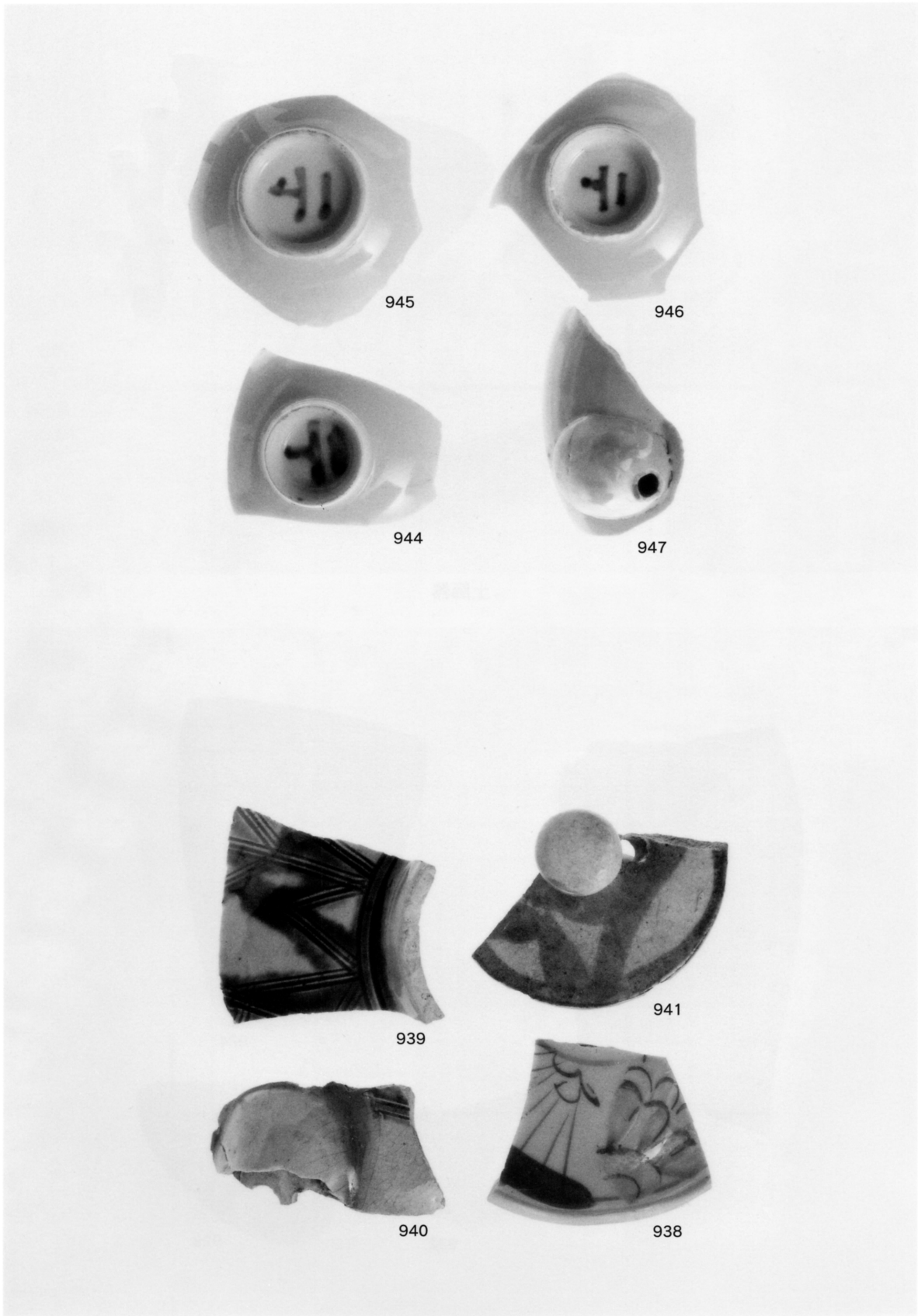


土師器



須恵器

図版46



近世の出土遺物

武 A・B・C 遺跡正誤表

頁	行	誤	正
150	5	深浦祖木土器	深浦式土器
150	9	大根占町の轟木ヶ迫遺跡でもみられる。	削除
153	10	指宿市の成川遺跡	揖宿郡山川町の成川遺跡

とり ごえ びら
鳥越平遺跡

所在地 出水市境町(旧前田)字鳥越平

まつ が さこ
松ヶ迫遺跡

所在地 出水市武本字松ヶ迫

ふりがな	とりごえびらいせき・まつがさこいせき							
書名	鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡							
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	59							
編著者名	彌 榮 久 志							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	鹿児島県国分市上之段1175番地1 TEL0995-48-5811							
発行年月日	2003年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査 面積 m ²	調 査 原 因
とりごえひらいせき 鳥越平遺跡	かごしまけんいずみし 鹿児島県出水市 さかいちやう 境町(旧前田)	462080	8-128	130° 22' 21"	32° 09' 03"	H8 8. 5	55	九州新 幹線
まつがさこいせき 松ヶ迫遺跡	かごしまけんいずみし 鹿児島県出水市 たけもと 武本	462080	8-48	130° 21' 59"	32° 4' 8"	H8 8. 6	12.5	
所収遺跡名	種別	主時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥越平遺跡	散布地					今回は発見されず。		
松ヶ迫遺跡	散布地					今回は発見されず。		



鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡の位置

鳥越平遺跡・松ヶ迫遺跡

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（当時、平成8年4月以降文化財課）に照会した。平成4年12月、建設地内の分布調査が実施され、出水市前田地区内に於いて鳥越平遺跡、出水市武本地区に於いて松ヶ迫遺跡の所在が確認された。

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局、県教育委員会文化課は、鳥越平遺跡の取り扱いについて協議を行い、平成8年度に緊急調査を実施することにした。また、松ヶ迫遺跡についても用地買収が完了したため、鳥越平遺跡の調査と併行して確認調査を実施した。

第 2 節 調査の組織

事業主体者	日本鉄道建設公団九州新幹線建設局		
調査主体者	鹿児島県教育委員会		
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
平成8年度			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉元 正幸
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
〃	〃	調査課長	戸崎 勝洋
〃	〃	調査課課長補佐	新東 晃一
調査企画者・担当者	〃	主任文化財主事兼 第三調査係長	池畑 耕一
調査担当者	〃	文化財研究員	中原 一成
調査事務担当	〃	主 査	成尾 雅明
	〃	〃	前屋敷裕徳
	〃	〃	追立ひとみ
平成14年度			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	田中 文雄
〃	〃	調査課長	新東 晃一
〃	〃	調査課長補佐	立神 次郎
調査企画者・担当者	〃	主任文化財主事兼 第二調査係長	彌榮 久志
調査事務担当者	〃	総務課総務係長	前田 昭信
〃	〃	主 査	脇田 清幸
〃	〃	主 事	池 珠美

第II章 鳥越平遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

遺跡は、熊本県境に近い鹿児島県出水市境町（旧前田）鳥越平に位置する。遺跡の立地する地形は、鹿児島県と熊本県境にある標高687mの矢筈岳から西に傾斜する山麓で、開墾してみかん団地を造成している。遺跡は、そのみかん団地の標高36～26mの傾斜地に立地している。

第2節 周辺遺跡

この遺跡の周りは、3遺跡がみられる。

第1表 鳥越平遺跡と周辺遺跡一覧

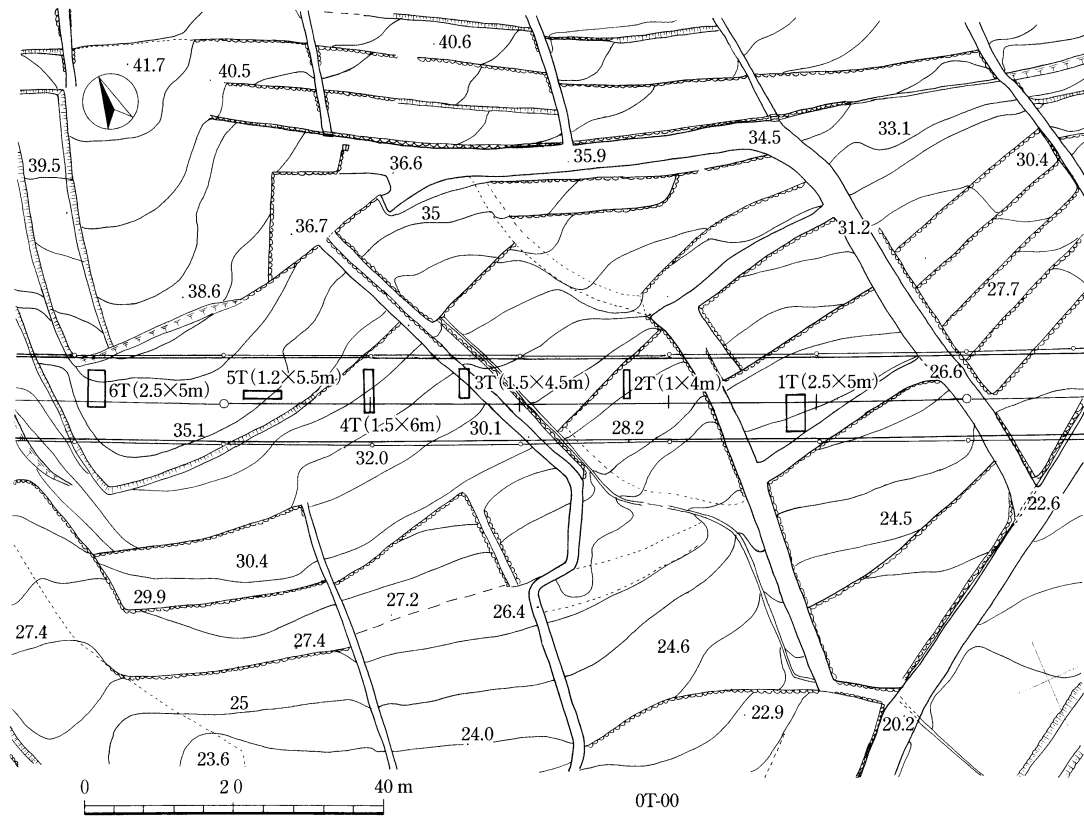
No.	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物など	備考
1	鳥越平	出水市境町	山地	不明		
2	茶屋ノ元	出水市境町	山地	縄文早期・前期	塞ノ神式・轟式土器 磨製石斧・黒曜石	新幹線建設で平成10年に発掘調査をし、平成13年に報告書刊行
3	大通寺跡	出水市境町	台地	中世	島津義虎菩提寺	

第3節 調査の概要

調査対象地区は八代起点より47k600m～800m間で約2000㎡であった。トレンチ設定は標高の低い鹿児島側からはじめ標高の高い八代側まで6本入れた。

第2表 鳥越平遺跡のトレンチ調査

番号	位置	標高	規模	概要
1	47k778m (建設位置)	27m	2.5×3m	地層は茶褐色の粘質土が表土にあり、下部は基盤の安山岩の転石が多く、最下層は安山岩の基盤層である。 遺物・遺構は確認できなかった。
2	47k755m	28m	1×4m	地層は茶褐色の表土の下に転石があり、遺物・遺構は確認できなかった。
3	47k735m	30m	1.5×4.5m	同上
4	47k720m	31m	1.5×6m	同上
5	47k10m	35m	1.2×5.5m	同上
6	46k820m	36m	2.5×5m	台地の先端部で表土は薄い。地層は同上で、遺物・遺構は確認できなかった。



第2図 鳥越平遺跡のトレンチ配置

第4節 まとめ

今回この範囲での本遺跡は、みかん団地の造成で表土が攪乱されており正常な地層が確認されなかったため遺物包含層は確認できなかった。また、遺構も確認できなかった。

第Ⅲ章 松ヶ迫遺跡の調査

第1節 遺跡の位置と環境

松ヶ迫遺跡は出水市武本松ヶ迫に所在する。

武本地区は江戸時代の麓集落の南約250mで、標高約45mのシラス台地にある。シラス台地は部分的に浸食され、中に湿地帯を形成している。

遺跡は、西側へ開く谷頭部に立地しており西の端を小川が流れている。後背台地上には土師器が散布している。

第2節 周辺遺跡

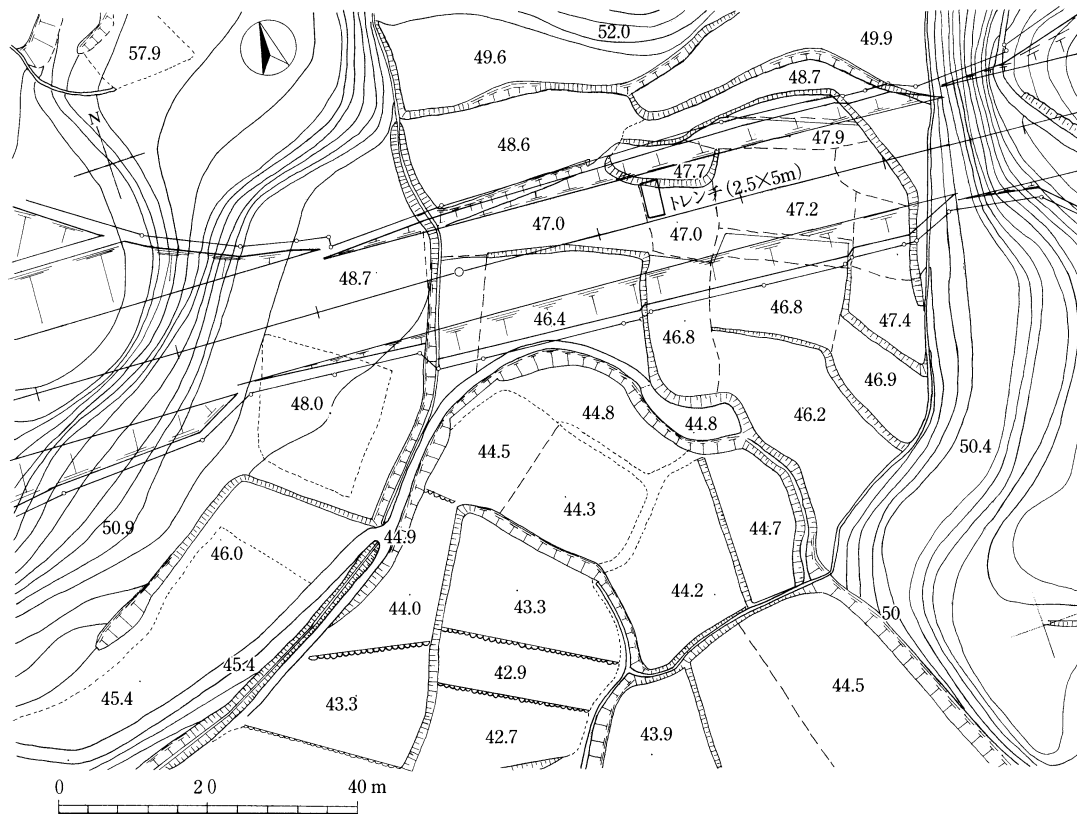
周辺の遺跡は第49図・第3表で示したとおり市街地周辺に多い。

第3表 松ヶ迫遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物など	備考
1	尾崎城跡	中央町尾崎	舌状台地	中世	水の手、掘立柱建物跡	知識氏・島津氏居城知識城
2	出水貝塚	中央町尾崎	舌状台地	縄文早中後	押型文・阿高式・南福寺式・出水式・貝輪・人骨	大正9年、昭和28・29、平成8～10年学術調査
3	八幡	上知識町八幡	台地	古墳、中世	土器	H9分布調査
4	一町樋	中央町八坊	河岸段丘	古墳	土器	H9分布調査
5	成願寺	中央町八坊	河岸段丘	弥生～古墳	箱式石棺、土師器・須恵器	発掘記録なし
6	田中	中央町八坊	河岸段丘	弥生	弥生土器、須恵器・土師器	
7	内城跡	中央町八坊	河岸段丘	切岸・土塁	平城氏居城	
8	専修寺跡	向江町平良馬場(中村医院)	河岸段丘	室町～明治	寺院	島津5代実久建立
9	成願寺跡	中央町八坊	台地	安土桃山～江戸	寺院	1633年焼失
10	並松	中央町表郷東	台地	古墳・古代	土器	H9分布調査
11	塚込	中央町西町	台地	古墳	土器	H9分布調査
12	山王西	五万石町石坂	台地	古墳	土器・土師器	H9分布調査
13	政所	西出水町政所	台地	古墳	土器	H9分布調査
14	西牟田	西出水町政所	台地	縄文	土器、黒曜石	H9分布調査
15	並木下	大野原町上大野原	台地	古墳・中世	土器・青磁	平成9年北薩分布調査
16	出水麓	麓町堅馬場	台地	中世～江戸	地頭館跡・ピット・陶磁器	平6・9年緊急調査
17	水天上	麓町山崎	台地	縄文・古代・近世	土器・黒曜石・土師器	平成9年北薩分布調査
18	井手ノ原	上鯖淵渡瀬口	河岸段丘	縄文・古墳	土器	H9分布調査
19	井ノ上城跡	上鯖淵井之上	山地	中世	主郭・曲輪・空堀・腰曲輪	和泉氏・井口氏居城、別称井口城
20	御所園原	上鯖淵井之上	台地	縄文	土器・黒曜石	H9分布調査
21	鯖淵	上鯖淵井之上	河岸段丘	縄文・中世	押型文・黒曜石・青磁	平成9年度北薩分布調査
22	上ノ原	武本鍋野	丘陵	縄文・古代	土器・黒曜石・土師器	遺物採集地
23	松ヶ迫	武本鍋野	丘陵	旧石器・縄文	石器	H8確認調査
24	小松	武本小松	丘陵	縄文	黒曜石	H10確認調査
25	見性庵跡	麓町上堅馬場	丘陵	室町	島津氏墓・碑	出水風土記
26	出水城跡	麓7,325	丘陵	中世	主郭・曲輪・腰曲輪・空堀・大手・搦め手	肝属和泉氏・島津和泉氏・薩州家亀ヶ城・花見ヶ城
27	龍光寺跡	武本西ノロ	丘陵	室町～明治	寺跡	1459年建立
28	武本大坪	武本下中	河岸段丘	古墳	土器	H9分布調査
29	老神	武本上中	河岸段丘	縄文～平安	竪穴住居跡	H4緊急調査
30	市来	武本上中	扇状地	縄文～平安	弥生土器・土師器・須恵器	平成4年緊急調査
31	平山城跡	武本小原下	山麓傾斜面	中世		伴和泉氏一族居城



第3図 松ヶ迫遺跡の位置及び周辺遺跡



第4図 松ヶ迫遺跡の地形とトレンチ配置

第3節 調査の概要

遺跡の対象面積は2000㎡で、調査地点は八代起点より55k200m地点を中心にトレンチを設置して実施した。

トレンチは2.5×5mで、表土の下は褐色の砂質土が2.5mの深さまで続いており、本来は湿地であった場所に上から流れ込んだものと考えられる。出土遺物はなく、分布調査で採集された黒曜石剥片は台地の上から流れ込みだろうと思われる。

第4節 まとめ

遺物の包含層及び遺構は確認できなかった。

台地上が遺跡と判断し、追加トレンチは設定しなかった。

あ と が き

新幹線誘致は鹿児島県民悲願のプロジェクトである。

その九州新幹線鹿児島ルートが発掘調査は平成5年4月に武遺跡から始まった。そして、現在、10年の年月が経ちここに武遺跡の報告書として刊行できた。

その間、鹿児島市から川内市・出水市まで22遺跡を新幹線対応の職員で期限内に発掘調査を終了させた。

発掘調査は、鹿児島・伊集院、川内、出水に拠点を置き、用地買収が進まない中、九州新幹線建設の用地買収担当職員や地元の用地買収職員と協力・調整をしてきた。その苦労は大変なものであった。その各拠点に当たった職員の頑張りに敬意を表したい。

そして、平成15年の今年、西鹿児島、新八代間の建設工事が終了する予定と聞き、秋には車両が運び込まれ試運転をするニュースが流れる時代になっている。

加えて、武遺跡が所在した西鹿児島駅は平成16年3月の新幹線開通で「鹿児島中央駅」と改称され名実ともに鹿児島の「陸の玄関口」になる。

報告書の刊行を終えて感ずることは、調査地域が縄文時代から古代の武遺跡、近世期の武集落と、いにしへの足跡が存在した所であった。そこに未来への展望を大きく開く拠点として建設された鹿児島中央駅が座ったことは、まさに、文化財保護マークの「過去・現在・未来」を象徴していると言えよう。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (59)
九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

武 A・B・C 遺 跡 鳥 越 平 遺 跡 松 ケ 迫 遺 跡

発行日 平成15年3月24日
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
☎0995-48-5811(代)

印 刷 淵上印刷株式会社
〒892-0845 鹿児島市樋之口町6-6
☎099-225-2727